

比恵遺跡13

— 比恵遺跡群第40・42・44・48次調査の報告 —

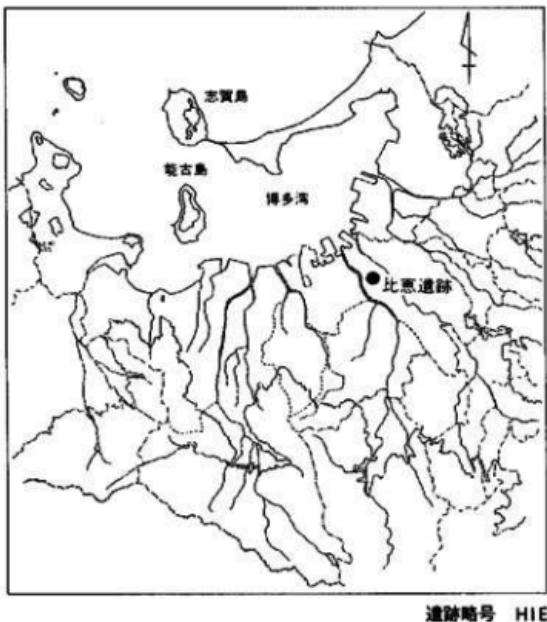
福岡市埋蔵文化財調査報告書第368集

1994

福岡市教育委員会

比恵遺跡群(13)

— 比恵遺跡群第40・42・44・48次調査の報告 —



遺跡略号 HIE

1994

福岡市教育委員会



(1) 第40次・42次調査出土鉄造関係遺物



(2) 第42次井戸SE74出土土器



(3) 第42次SC324出土広形銅矛鋳型



(1) 第42次調査区遺構分布全景（南東から）



(2) 壁穴住居SC324鋳型出土状況（北から）

序

現在、「海と歴史を抱いた文化の都市」、「活力あるアジアの拠点都市」として都市づくりを進めている福岡市には古くから大陸との交流を物語る遺跡が数多く存在します。本市では、特に文化財の保護、活用に努めており、失われていく遺跡については、記録保存のための発掘調査を実施しています。

今回報告する比恵遺跡群は、魏志倭人伝にみえる「奴国」に推定される地域に相当しており、これまでにも重要な遺構、遺物が発見されています。

本書は、1992年に実施しました比恵遺跡群の第40, 42, 44, 48次調査の報告書であります。調査の結果、弥生時代～古墳時代の遺構、遺物が数多く発見され、比恵遺跡群の性格を考えるうえで多大な成果を得ることが出来ました。

本書が、市民の皆様の文化財に対する認識と理解の一助となり、また学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、株式会社玉屋製作、玉屋リネンサービス株式会社を始めとする関係各位の深いご理解とご協力に対して厚く感謝の意を表します。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が社屋建設などの開発事業の事前調査として、1992年度に実施した比恵遺跡群の発掘調査のうち、第40、42、44、48次調査地点の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、田中馨夫・山元正典・西山めぐみ・桐田八千葉・宮園登美枝・高瀬信夫・森山恭助・熊本義徳があつた。
3. 本書に使用した地図は、Fig. 1 に国土地理院発行の 1/25000 の地形図「福岡」・「福岡南部」を、Fig. 2 に福岡市都市計画図「博多駅36」・「東光寺37」(1/5000) を原図とした。
4. 本書に使用した方位はすべて磁北である。真北に対して西偏 $5^{\circ} 40'$ を測る。
5. 掲載した遺物には、調査次数、種類、材質、出土遺構の別を問わず掲載順に通し番号を付した。
6. 実測図と写真図版中の遺物番号は同一である。
7. 遺物実測は田中が主として行ない、筑崎記・佐藤信の補助を受けた。
8. 遺物の写真撮影は力武卓治による。
9. 本書使用の図面の監修は、渡石正子・有吉久美子・杉山富雄・宮園、田中が行なった。
10. 本書の撮影・執筆は田中が行なった。
11. 本報告に関する出土遺物・記録類はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理される。
12. なお第40次調査出土上土製取底の自然科学的分析を東京国立文化財研究所平尾良光氏にお願いし、分析結果について玉藻をいただき、付録として掲載した。

調査番号	遺跡名	次数	略号	調査原因	種類	所在地	調査面積	調査期間
9207	比恵遺跡群	40	HIE40	工場新築	民間受託	博多区博多駅南4丁目72	540m ²	920413~920624
9221	比恵遺跡群	42	HIE42	社屋新築	民間受託	博多区博多駅南4丁目6	756m ²	920706~921113
9231	比恵遺跡群	44	HIE44	工場改築	民間受託	博多区博多駅南4丁目6	60m ²	920827~920905
9255	比恵遺跡群	48	HIE48	工場新築	民間受託	博多区博多駅南4丁目9-8	850m ²	930106~930331

本文目次

第1章 序 説	1
1、調査にいたる経過	1
2、調査の組織	1
3、調査経過	2
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	3
1、遺跡の立地	3
2、周辺の遺跡	3
3、比恵遺跡群のこれまでの調査	5
第3章 調査の記録	8
1、調査概要	8
2、第40次調査	11
3、第42次調査	44
4、第44次調査	96
5、第48次調査	100
第4章 結 語	135
1、集落の推移(付図)	135
2、第40次調査溝SD01出土の取瓶	136
3、第42次調査竪穴住居SC324 出土の広形銅矛鋤型	139

付 論

福岡市比恵遺跡から出土した

土製取瓶付着物の自然科学的研究	142
1、はじめに	142
2、資料	142
3、調査法	142
4、測定結果	144
5、考察	146

挿図目次

Fig. 1 第40次調査作業風景	2	Fig. 40 塗穴住居跡SC419・453平面 および断面図(1/60)	76
Fig. 2 第42次調査作業風景	2	Fig. 41 塗穴住居跡SC692・693平面 および断面図(1/60)	77
Fig. 3 第44次調査作業風景	2	Fig. 42 井戸SE15・16・30・47・74・123・162・168 平面および断面図(1/50)	78
Fig. 4 第48次調査作業風景	2	Fig. 43 井戸SE202・230・260・315・378・448・449 平面および断面図(1/50)	79
Fig. 5 比喩遺跡と周辺の遺跡分布図(1/40000)	4	Fig. 44 井戸SE489・500・506・625・土壙SX629平面 および断面図(1/50・1/30)	80
Fig. 6 比喩遺跡周辺地点位置図(1/7000)	7	Fig. 45 柱穴出土遺物実測図(1/4)	81
Fig. 7 第40次・42次・44次・48次 調査地点位置図(1/1250)	8	Fig. 46 塗穴住居跡SC231・324・366・419・453 出土遺物実測図(1/4)	82
Fig. 8 第40次調査(遺構分布全体図(1/125)…折込1		Fig. 47 井戸SE15・16出土遺物実測図(1/4)	83
Fig. 9 掘立柱建物SB01～03平面 および断面図(1/80)	24	Fig. 48 井戸SE30・47出土遺物実測図(1/4)	84
Fig. 10 溝SD01・48土壙断面図(1/50)	25	Fig. 49 井戸SE47・74 出土遺物実測図(1/4・1/6)	85
Fig. 11 土壙SX31・119・122平面 および断面図(1/40)	25	Fig. 50 井戸SE74出土遺物実測図(1/4)	86
Fig. 12 井戸SE23・53・111・113・118・120平面 および断面図(1/40)	26	Fig. 51 井戸SE74出土遺物実測図(1/4)	87
Fig. 13 溝SD01上層出土遺物実測図(1/4)	27	Fig. 52 井戸SE74出土遺物実測図(1/4)	88
Fig. 14 溝SD01上・中層出土遺物実測図(1/4)	28	Fig. 53 井戸SE123・152・202・230・260 出土遺物実測図(1/4)	89
Fig. 15 溝SD01上層出土遺物実測図(1/4)	29	Fig. 54 井戸SE315・378・448 出土遺物実測図(1/4)	90
Fig. 16 溝SD01上層出土遺物実測図(1/4)	30	Fig. 55 井戸SE448・449・459・柱穴SP470 出土遺物実測図(1/4)	91
Fig. 17 溝SD01上・中層出土遺物実測図(1/4)	31	Fig. 56 井戸SE500出土遺物実測図(1/4)	92
Fig. 18 溝SD01上・中層出土遺物実測図(1/4)	32	Fig. 57 井戸SE506・625・土壙SX618 出土遺物実測図(1/4)	93
Fig. 19 溝SD01上・中層出土遺物実測図(1/4)	33	Fig. 58 柱穴・井戸・土壙・混合層出土遺物 実測図(1/1・1/2・1/4)	94
Fig. 20 溝SD01上・中層出土遺物実測図(1/4)	34	Fig. 59 塗穴住居跡SC324出土石製広形銅矛 鉄型実測図(1/2.5)	95
Fig. 21 溝SD01中・下層出土遺物実測図(1/4)	35	Fig. 60 井戸SE74出土遺物実測図(1/5)	95
Fig. 22 溝SD48出土遺物実測図(1/4・1/6)	36	Fig. 61 第44次調査区遺構分布全体図(1/100)	97
Fig. 23 井戸SE23・111・112・113 出土遺物実測図(1/4)	37	Fig. 62 柱穴SP153内出土状況実測図(1/20)	97
Fig. 24 土壙SX31・溝SD01・SD48・包含層 出土遺物実測図(1/2・1/4)	38	Fig. 63 井戸SE134・138・143平面 および断面図(1/40)	97
Fig. 25 溝SD01出土土塗取扱元実測図(1/4)	39	Fig. 64 井戸SE134・138・柱穴SP153・155 出土遺物実測図(1/4)	98
Fig. 26 溝SD01・48 出土遺物実測図(1/1・1/4)	40	Fig. 65 第48次調査区遺構分布全体図(1/125)…折込4	98
Fig. 27 溝SD01出土遺物実測図(1/2)	41	Fig. 66 掘立柱建物SB01～05平面 および断面図(1/100)	118
Fig. 28 溝SD01出土遺物実測図(1/2)	42	Fig. 67 掘立柱建物SB06～11平面 および断面図(1/100)	119
Fig. 29 溝SD01・48・包含層 出土遺物実測図(1/2・1/5)	43	Fig. 68 掘立柱建物SB12～17平面 および断面図(1/100)	120
Fig. 30 第42次調査区遺構分布全体図(1/125)…折込2		Fig. 69 掘立柱建物SB18～22平面 および断面図(1/100)	121
Fig. 31 掘立柱建物SB01～06平面 および断面図(1/100)	68	Fig. 70 掘立柱建物SB23～28平面 および断面図(1/100)	122
Fig. 32 掘立柱建物SB12～20平面 および断面図(1/100)	69	Fig. 71 溝SD04土壙断面図(1/20)	123
Fig. 33 掘立柱建物SB13～18平面 および断面図(1/100)	70	Fig. 72 井戸SE09・10・20・103・105・116・205・231・ 232平面および断面図(1/50)	123
Fig. 34 掘立柱建物SB19～22平面 および断面図(1/100)	71	Fig. 73 井戸SE233・236・244・245・252・253・254・ 255・306平面および断面図(1/50)	124
Fig. 35 柱穴SP294・361内 遺物出土状況実測図(1/20)	71		
Fig. 36 塗穴住居跡SC63・207平面 および断面図(1/60)	72		
Fig. 37 塗穴住居跡SC231・259・266およびUSC231内土壙 SX322平面および断面図(1/20・1/60)	73		
Fig. 38 塗穴住居跡SC200・517・324平面 および断面図(1/60)	74		
Fig. 39 塗穴住居跡SC364・366平面 および断面図(1/60)	75		

- Fig. 74 井戸SE263・264・269・279・299・309・325・337・
340・358・372平面および断面図(1/50) 125
- Fig. 75 桂穴SP69・207・273、溝SD01・SD04
出土遺物実測図(1/4) 126
- Fig. 76 井戸SE09出土遺物実測図(1/4) 127
- Fig. 77 井戸SE09・10・20・103・116
出土遺物実測図(1/4) 128
- Fig. 78 井戸SE201・231・232・233・236
出土遺物実測図(1/4) 129

- Fig. 79 井戸SE236出土遺物実測図(1/4) 130
- Fig. 80 井戸SE244・245・254出土遺物実測図
(1/4) 131
- Fig. 81 井戸SE255・263・264出土遺物実測図
(1/4) 132
- Fig. 82 井戸SE269出土遺物実測図(1/4) 133
- Fig. 83 井戸SE299・325・337・340
出土遺物実測図(1/4) 134

付 図 目 次

付図 比恵遺跡群第40・42・44・48次調査区および周辺遺構分布全体図(1/400)

図 版 目 次

地図版団

- 図版1 (1) 第40次・42次調査出土鉄器関係遺物
(2) 第42次井戸SE74出土土器
(3) 第42次SC324出土広形鋼矛頭型
- 図版2 (1) 第42次調査区遺構分布全景(南東から)
(2) 墓穴住居跡SC324広形鋼矛頭型出土状況
(北から)
- PL. 1 (1) 第40次調査区調査終了全景(北西から)
(2) 調査区北東部遺構分布状況(北西から)
(3) 調査区南西部包含層および溝SD01上部遺物出土状況(北から)
- PL. 2 (1) 溝SD01出土状況(北から)
(2) 溝SD01上部掘り下げ作業風景(北から)
(3) 溝SD01南端部上層遺物出土状況(西から)
- PL. 3 (1) 溝SD01北側中層(黒色粘質土)遺物出土状況(南から)
(2) 溝SD01土層断面(北から)
(3) 溝SD01中層(黒色粘質土)獸骨(下顎骨)出土状況(西から)
- PL. 4 (1) 溝SD01中層(黒色粘質土)遺物出土状況
(西から)
(2) 溝SD01下部掘り下げ作業風景(北から)
(3) 溝SD01黒色粘質土除去後床面状況
(北から)
- PL. 5 (1) 溝SD48完掘状況(北から)
(2) 溝SD48中央部土層断面(北から)
(3) 墓室区北東部井戸群および溝分布状況
(北から)
- PL. 6 (1) 土壌SX31完掘状況(南東から)
(2) 井戸SE23遺物出土状況(西から)
(3) 井戸SE23完掘状況(西から)
- PL. 7 (1) 井戸SE118遺物出土状況(北東から)
(2) 井戸SE118・112・113完掘状況
(北東から)
(3) 井戸SE111完掘状況(南東から)
- PL. 8 (1) 井戸SE120完掘状況(北東から)
(2) 桂穴SP32壁板出土状況(東から)
(3) 桂穴SP102壁板出土状況(東から)
(4) 桂穴SP101壁板出土状況(南から)
(5) 桂穴SP124壁板出土状況(東から)
- PL. 9~11 第40次調査出土遺物(1/6)

- PL. 12 (1) 第42次調査区調査前現況造景(北から)
(2) 調査終了全景(南東から)
(3) 調査区北側遺構分布状況(南東から)
- PL. 13 (1) 調査区中央部遺構分布状況(南東から)
(2) 調査区南側遺構分布状況(北から)
(3) 調査区中央部～東側遺構分布状況(南から)
- PL. 14 (1) 調査区中央部～西側遺構分布状況(東から)
(2) 墓穴住居跡SC63および周辺遺構分布状況
(北東から)
(3) 墓穴住居跡SC324掘り下げ状況(北から)
- PL. 15 (1) 桂穴SP361遺物出土状況(北西から)
(2) 墓穴住居跡SC311付近土壌SX324遺物出土
状況(北東から)
(3) 墓穴住居跡SC324床面上出土広形鋼矛頭型出
土状況(西から)
(4) 墓穴住居跡SC169・207・231完掘状況
(西から)
(5) 墓穴住居跡SC169完掘状況(南西から)
- PL. 16 (1) 墓穴住居跡SC364・231・324完掘状況
(東から)
(2) 墓穴住居跡SC280・453・土壌SX487・617
検出状況(西から)
(3) 墓穴住居跡SC280完掘状況(西から)
- PL. 17 (1) 墓穴住居跡SC453完掘状況(西から)
(2) 墓穴住居跡SC259・266完掘状況
(南西から)
(3) 調査区南西部作業風景(北から)
- PL. 18 (1) 井戸SE15完掘状況(南東から)
(2) 井戸SE16完掘状況(北から)
(3) 井戸SE47下部遺物出土状況(北から)
(4) 井戸SE47完掘状況(西から)
(5) 井戸SE74下部遺物出土状況(東から)
(6) 井戸SE74完掘状況(西から)
(7) 井戸SE123完掘状況(西から)
(8) 井戸SE162完掘状況、桂穴SP294遺物出土
状況(南から)
- PL. 19 (1) 井戸SE202完掘状況(東から)
(2) 井戸SE315下部遺物出土状況(北から)
(3) 井戸SE230・315完掘状況(北西から)
(4) 井戸SE378完掘状況(北から)
(5) 井戸SE448完掘状況(東から)
(6) 井戸SE449完掘状況(東から)

PL. 20	(7) 井戸SE500下部遺物出土状況(南西から) (8) 井戸SE500完掘状況(西から) (1) 井戸SE489完掘状況(北から) (2) 井戸SE506屋土中位遺物出土状況 (南東から) (3) 井戸SE506井筒出土状況(南東から) (4) 井戸SE506完掘状況(南東から) (5) 土器SX420完掘状況(西南から) (6) 土器SX629完掘状況(南から) (7) 磁器SD441完掘状況(西から)	(5) 柱穴SP147(54)柱根痕跡検出状況(南から) (6) 柱穴SP146(51)柱根痕跡検出状況 (南西から) (7) 柱穴SP134(27)縦板出土状況(北から) (8) 柱穴SP122(103)縦板出土状況(北から)	
PL. 21~24	第42次調査出土遺物(1/6)	PL. 31	(1) 柱穴SP78縦板出土状況(南から) (2) 柱穴SP144縦板出土状況(南から) (3) 柱穴SP323縦板出土状況(北東から) (4) 井戸SE309、柱穴SP308完掘状況 (南東から) (5) 柱穴SP336縦板出土状況(南東から) (6) 柱穴SP273・274遺物出土状況(南西から) (7) 井戸SE126(160)遺物出土状況(北から) (8) 井戸SE103遺物出土状況(北西から)
PL. 25	(1) 第44次調査区調査終了全景(南東から) (2) 井戸SE134完掘状況(南から) (3) 井戸SE138完掘状況(西から) (4) 井戸SE143完掘状況(東から) (5) 柱穴SP153縦板出土状況(東から)	PL. 32	(1) 井戸SE09(5)部遺物出土状況(南東から) (2) 井戸SE10完掘状況(南から) (3) 井戸SE20遺物出土状況(北東から) (4) 井戸SE103底部遺物出土状況(南東から) (5) 井戸SE105完掘状況(北東から) (6) 井戸SE255・269遺物出土状況(西から) (7) 井戸SE116上部遺物出土状況(南西から) (8) 井戸SE116完掘状況(南東から)
PL. 26	(1) 第48次調査区調査終了全景(南東から) (2) 振立柱建物SB01完掘状況(南から) (3) 振立柱建物SB01住痕掘り下げ状況 (西から)	PL. 33	(1) 井戸SE233完掘状況(北から) (2) 井戸SE236中～下部遺物出土状況(南から) (3) 井戸SE244遺物出土状況(南西から) (4) 井戸SE244・245完掘状況(東から) (5) 井戸SE253完掘状況(北から) (6) 井戸SE255・269完掘状況(東から) (7) 井戸SE269周辺作業風景(北から) (8) 井戸SE325完掘状況(南西から)
PL. 27	(1) 調査区中央部完掘状況(南西から) (2) 振立柱建物SB02完掘状況(西から) (3) 調査区北側完掘状況(南西から)	PL. 34	(1) 井戸SE337完掘状況(南西から) (2) 井戸SE340下部遺物出土状況(南西から) (3) 井戸SE340完掘状況(南西から) (4) 第48次調査作業風景(西から)
PL. 28	(1) 振立柱建物SB04、柱穴SP414・300・321 完掘状況(南から) (2) 磁器SD04、振立柱建物SB03完掘状況 (西から) (3) 磁器SD04遺物出土状況(北から)	PL. 35~37	第44・48次調査出土遺物(1/6)
PL. 29	(1) 磁器SD03西端部十箇所(東から) (2) 磁器SD03南側中央部土器断面(西から)。下部 には井戸SE101 (3) 磁器SD04完掘状況(南西から)	PL. 37	第48次調査作業風景
PL. 30	(1) 柱穴SP06縦板出土状況(東から) (2) 柱穴SP111縦板出土状況(西から) (3) 柱穴SP133縦板出土状況(北西から) (4) 柱穴SP145(55)柱根痕跡検出状況(南から)		

表 目 次

(本文)

Tab. 1	此忠遺跡群調査一覧	6
Tab. 2	第40次調査振立柱建物一覧表	11
Tab. 3	第40次調査井戸一覧表	16
Tab. 4	第40次調査揚載土器所見一覧	16
Tab. 5	第40次調査出土土器品・その他の遺物所見一覧	21
Tab. 6	第40次調査出土石器・石製品所見一覧	22
Tab. 7	第42次調査振立柱建物一覧表	47
Tab. 8	第42次調査堅穴住居跡一覧表	51
Tab. 9	第42次調査井戸一覧表	57
Tab. 10	第42次調査揚載土器所見一覧	59
Tab. 11	第42次調査揚載石器・土製品、 その他の遺物観察所見一覧	67
Tab. 12	第44次調査井戸一覧表	99
Tab. 13	第44次調査揚載土器所見一覧	99
Tab. 14	第48次調査振立柱建物一覧表	104
Tab. 15	第48次調査井戸一覧表	113
Tab. 16	第48次調査揚載土器所見一覧	114
Tab. 17	広形銅矛頭型(出土地)一覧表	141

(付論)

表 1	土製取扱付着物の蛍光X線分析法で 測定された元素のX線強度比	149
表 2	土製取扱付着物の測定された 鉛同位体比値	149
表 3	龍野市北山道路および春日市須玖坂本造跡・ 五反田遺跡・須玖平田遺跡から出土した 土器付着物などの鉛同位体比	149
図 1	土製取扱S-1(脚部分)付着物の 蛍光X線スペクトル図	150
図 2	土製取扱S-2(口縁注口部)付着物の 蛍光X線スペクトル図	150
図 3	土製取扱付着物が示す鉛同位体比(A式図)	151
図 4	土製取扱付着物が示す鉛同位体比(B式図)	151
図 5	土器付着物などの鉛同位体比 (その1全体図)	152
図 6	土器付着物などの鉛同位体比 (その2拡大図)	152

第1章 序 説

1、調査にいたる経過

平成3年11月1日付で、当該地における埋蔵文化財事前審査願が出された。申請地は福岡市文化財分布地図「中南部」1980において「A-1比恵遺跡群」として周知化された遺跡内に位置していることから、書類審査の上、同年11月21日に試掘調査を実施した。その結果、工事計画地には弥生時代中期後半以降の遺構と遺物が良好に遺存していることがわかり、工事に先立って何らかの保存措置を講じる必要があると判断された。

試掘調査の結果を受けて、教育委員会と申請者株式会社玉屋装工、および玉屋リネンサービス株式会社間で文化財の保存問題も含めて本調査と工事の日程調整等について協議を重ねた結果、緊急を要している工場改築部分の発掘調査を平成4年4月13日から着手する旨の合意に達し、下記の調査組織と体制で発掘調査を実施することとなった。

2、調査の組織

調査委託	玉屋リネンサービス株式会社、株式会社玉屋装工
調査主体	福岡市教育委員会
調査担当	文化財部埋蔵文化財課
調査総括	埋蔵文化財課長 折尾 学
調査庶務	埋蔵文化財第二係長 横山邦継、吉田麻由美
試掘調査	埋蔵文化財第二係 宮井善朗、荒牧宏行
発掘調査	埋蔵文化財第二係 田中壽夫
調査作業	石田和彦、江越初代、王野貞子、大庭洋子、小原康義、勝田香英、金沢春雄、金子国雄、龜井好明、桐田八千柔、熊本文伸、熊本義徳、小島勇一、佐々木しづ、柴田 博、渋谷博之、瀬戸啓治、関 義種、関加代子、曾根崎昭子、大長正弘、高崎秀己、高田勘四郎、高浪信夫、中川敏夫、西山めぐみ、野中辰雄、橋本 浩、長谷川知加子、広田熊雄、藤野保夫、藤野信子、別府俊美、松藤ナツエ、三浦義隆、森垣隆視、森山恭助、森山タツエ、山元正典、吉住作美、脇田 栄
整理補助	宮園登美枝
整理作業	安部国恵、石田和彦、江崎木綿、大石江里子、金石邦子、木本ゆかり、酒井香代子、佐保明子、末次山紀恵、寺村チカ子、古野さおり、堀 一忠、真鍋晶子、山口英子、山中けい子、藤戸紀子

3、調査経過

発掘調査は、玉屋リネンサービス株式会社および株式会社玉屋装工の工場と事務所建築工事計画に合わせ、下記の4地点について順次実施し、各地点を第40～48次調査区と呼ぶこととした(Fig. 7)。

第40次調査区

工場新築に伴うもので、博多区博多駅南4丁目72に所在する。調査面積は540m²を対象に平成4年4月13日から着手し6月24日に終了した。

第42次調査区

社屋新築に伴うもので、同区博多駅南4丁目6に所在する。調査面積756m²を対象として平成4年7月6日～11月13日まで実施した。

第44次調査区

工場改築に伴うもので同区博多駅南4丁目6に所在する。第40次調査地点と北東壁で接している。調査面積は60m²を対象にし、平成4年8月27日～9月5日まで実施した。

第48次調査区

工場新築に伴うもので、同区博多駅南4丁目9～8に所在する。調査面積は850m²で、平成5年1月6日～3月30日にかけて調査を行い、ほぼ1年間におよんだ4地点の調査を終了した。



Fig. 1 第40次調査作業風景



Fig. 2 第42次調査作業風景



Fig. 3 第44次調査作業風景



Fig. 4 第48次調査作業風景

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川と、中央部を貫流する那珂川によって形成された沖積平野である。比恵遺跡群は、この福岡平野のほぼ中央に位置する洪積台地上に立地する。現在この地域は、標高6m前後の平坦な市街地となっているが、これは1930年代の区画整理によるもので、古くは小規模の開拓谷が複雑に入り組んだ低丘陵であったと推定される。比恵遺跡の立地する那珂台地は地質学的には須玖火山灰層-AS04火砕流堆積物を構成層とする須玖面とされ、中位段丘下位面に相当する。今回調査した第40・42・44・48次調査地点はこの那珂台地のほぼ中央を南北に延びる尾根筋の東側緩斜面上に位置している。

2. 周辺の遺跡 (Fig. 5)

比恵遺跡群1の周辺には弥生時代～古墳時代を中心とする遺跡が高い密度で分布している。特に那珂川右岸と御笠川左岸間に展開している台地上には大規模な集落跡が弥生時代以降連續と営まれていた。ここでは比恵遺跡周辺の主要な弥生時代から古墳時代の遺跡を概観する。

弥生時代の遺跡では、当該地点から東南へ約2.5～3kmの位置に板付遺跡(国指定史跡)17、諸岡遺跡16がある。板付遺跡では東西150m、南北600mの独立した丘陵上に前期から後期の環濠を伴う集落跡や、壺棺を主体とする墓地、縄文時代末期に遡る水田跡およびこれに伴う水利施設が確認されている。特徴的な遺物としては、前期末の壺棺から細形銅劍、銅矛の他、埋納されたと思われる後期の小鋼鐸が出土している。北部九州における稻作受容の初期段階の様相を知る上で重要な遺跡である。諸岡遺跡では前期末から中期の集落跡の一部、前期～後期前半の壺棺および土壙墓で構成された墓地が見つかっている。特に朝鮮系無文土器と前期末の弥生上器とが共伴する出土のあり方は、弥生時代前期における朝鮮半島からの文化波及と受容のあり方を知る上で注目される。

当該地と同じ那珂台地上に立地する那珂遺跡群7では、これまでの41次におよぶ調査で弥生時代前期から後期までの集落の形成と展開の過程が徐々に明かになっている。特に青銅器生産に関しては銅戈・銅劍の鋳型が第1次・第20次・第21次で、鋳型中子が第8次で出土している。那珂台地からはややはざれるが、妙楽寺遺跡からは銅劍鋳型が出土している。遺跡の分布はやや散漫ではあるが当該地域周辺が青銅製品生産の一拠点であったといえよう。

古墳時代初頭に築造されたとされる那珂八幡古墳10は、当該地から南東へ約1.5km離れている。福岡平野で最初の首長墓と考えられている。この時期においては比恵・那珂・博多の各遺跡群において畿内系を初めてとする外来系十器群の出土例が多く、その社会的な背景が注意される。東光寺銅鏡古墳8は福岡平野最後の首長墓と考えられる6世紀後半の前方後円墳である。

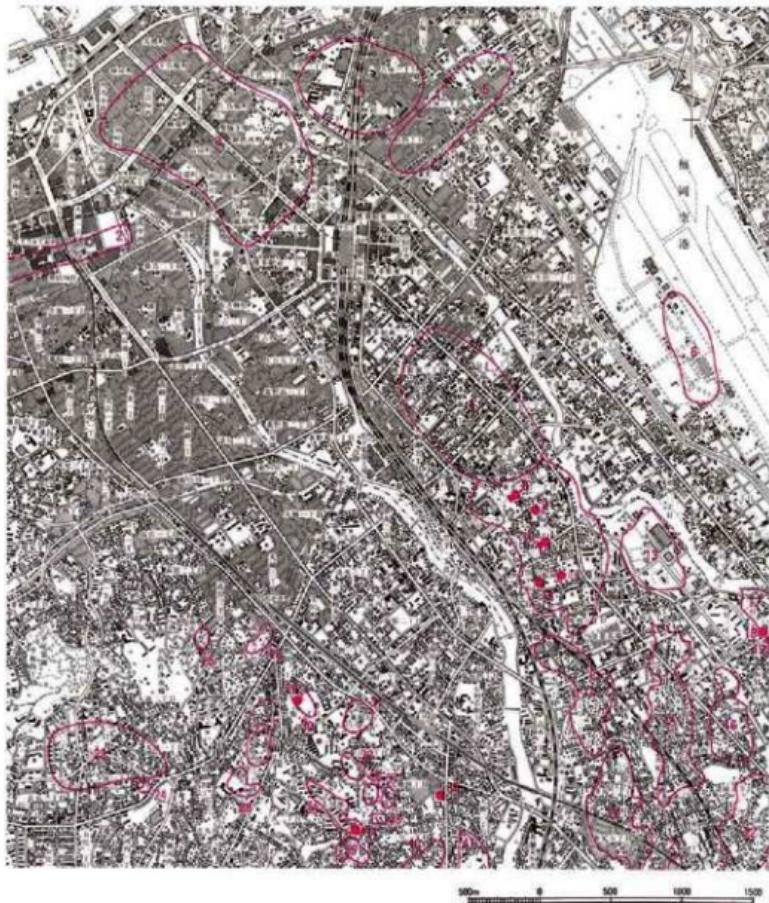


Fig. 5 比叡遺跡群と周辺の遺跡分布図(1/40000)

- | | | | | | |
|---------------------|-------------|---------------------|------------|-----------------------|-----------------------|
| 1. 比叡遺跡群 | 2. 猿岡城跡 | 3. 博多遺跡群 | 4. 豊前遺跡群 | 5. 吉原遺跡群 | 6. 雀居遺跡 |
| 7. 那珂遺跡群 | 8. 刻塚古墳 | 9. 那珂遺跡群第8次調査(鉄型出土) | 10. 那珂八幡古墳 | 11. 那珂遺跡群第20次調査(鉄型出土) | 12. 那珂遺跡群第23次調査(鉄型出土) |
| 13. 五十川遺跡群 | 14. 鹿島A遺跡群 | 15. 鹿島B遺跡群 | 16. 諏訪B遺跡群 | 17. 板付遺跡 | 18. 板付遺跡(1972年鉄型出土) |
| 19. 板付遺跡(1978年鉄型出土) | 20. 井尻B遺跡群 | 21. 井尻C遺跡群 | 22. 笹原遺跡群 | 23. 寺塚A古墳群 | |
| 24. 寺塚B古墳群 | 25. 高宮A遺跡 | 26. 高宮B遺跡 | 27. 中村町遺跡 | 28. 若久A遺跡 | 33. 大橋D遺跡 |
| 29. 野間門の浦(鉄型銅矛出土) | 30. 野間A遺跡 | 31. 野間B遺跡 | 32. 大橋C遺跡 | 37. 大橋E遺跡 | 38. 三宅廃寺 |
| 34. 三宅岩野(鉄型銅矛出土) | 35. 和田田藏治遺跡 | 36. 大橋C遺跡 | | | |
| 39. 大橋E遺跡(鉄型出土) | 40. 三宅B遺跡群 | 41. 三宅C遺跡群 | | | |

3、比恵遺跡群のこれまでの調査 (Fig. 6、Tab. 1)

那珂台地北部(比恵遺跡群)における発掘調査は、昭和13年に始まる区画整理事業にともなって行われた調査を第1次調査として、1992年度まで48次を数える。ここではこれまでの調査で得られた成果を時代毎に概観する。

旧地形の復原 比恵遺跡群が占地する台地は小規模な開析谷が入り組んでいる低丘陵である。台地北縁部に位置する第4次、第24~26次調査等において台地先端に谷が湾入していることが明かとなり、また第23次調査地点と第8次調査地点間に浅い谷が存在していたことがわかった。これらから比恵遺跡群は、北台地部、北西台地部および中央台地部の3地区に細分できそうである。

旧石器時代 遺物包含層は現在までのところ未確認であるが、第17次調査で当該期と思われるフレイクが、第19次調査でナイフ形石器が出土している。周辺遺跡である諸岡B遺跡第2次・3次、那珂遺跡群第41次調査の調査例を参考にすると台地縁辺部において当該期の包含層を検出できる可能性がある。

縄文時代 縄文時代末期から弥生時代初頭の遺構と遺物が北西台地部に位置する第3次調査地点で検出されている。これまでのところ晩期より古い遺構と遺物は明確ではない。

弥生時代 前期の遺構は那珂台地北縁から西縁部に分布が偏っている。北縁部に位置する第30次・31次・37次調査では前期半ば~末の貯蔵穴33基が検出され、中期の井戸も検出された。また比恵遺跡では初例の中綱鉄鋤型片が出土した。弥生時代中期における比恵遺跡の中心部は中央台地の第6次調査地点から第42次調査地点を結んだ尾根筋の西側一帯と考えられ、第6次調査では中期の墳丘墓、甕棺墓、木棺墓、中期から後期の井戸群および掘立柱建物群が検出された。遺物では最古期の絹布が付着した細形鉄剣やガラス浮出物が出土している。また南側に隣接する第2次調査区(県指定地)は環溝集落を論ずるにあたって学的に重要な地点である。中期末から後期になると那珂遺跡群も含んで那珂台地全域において遺跡が拡大し、環濠集落が営まれていることがわかりつつあり、住居跡や井戸等の生活関連遺構が検出されている。第25次調査では中期の各種の木製品と未製品が多量に出土している。

古墳時代以降 各調査地点では古墳時代前期初頭の畿内系をはじめとする外来系の土器の出土例が増える。第1次・2次・9次・10次調査では方形周溝墓の一部が確認されている。この時期に那珂台地南中央台地部には那珂八幡古墳が福岡平野最初の首長墓として築造される。比恵遺跡では古墳の築造状況や分布については明確になっていないが、第6次・17次調査では墳丘周溝の一部(比恵1号墳)が確認されている。北西台地に位置する第8次調査と第23次調査で古墳時代後半から末期においては、日本書記宣化元年条にみえる「那津官家」の可能性が高い建物群が確認されている。その実態解明については今後の周辺調査に期待される。

Tab.1 比東遺跡群調査一覧

大数	番号	略号	調査地所在地	面積(m ²)	調査期間	文献
1	3801	HIE-1	博多区博多駅南4丁目	—	38.39	1
2	5201	HIE-2	博多区博多駅南4丁目	800	52	4
3	6604	HIE-3	博多区博多駅南5丁目	—	66.67.68	2
4	7908	HIE-4	博多区博多駅南1丁目	1,300	791113~800420	3
5	8141	HIE-5	博多区博多駅南4丁目	1,600	810415~810731	
6	8228	HIE-6	博多区博多駅南4丁目405-1	2,644	820506~820905	4~5
7	8329	HIE-7	博多区博多駅南4丁目10	2,100	830720~831130	6
8	8330	HIE-8	博多区博多駅南5丁目12	2,240	840117~840418	7
9	8503	HIE-9	博多区博多駅南6丁目6~5	1,863	850719~851022	8
10	8504	HIE-10	博多区博多駅南6丁目39	555	850916~851001	8
11	8540	HIE-11	博多区博多駅南6丁目18~9	580	860220~860331	9
12	8616	HIE-12	博多区博多駅南4丁目11~35	279	860712~860730	10
13	8617	HIE-13	博多区博多駅南4丁目159~3	496	860714~860917	10
14	8635	HIE-14	博多区博多駅南6丁目9~7	284	860807~860828	10
15	8636	HIE-15	博多区博多駅南6丁目9~6	278	860805~860927	10
16	8637	HIE-16	博多区博多駅南4丁目8~15	202	860916~861011	10
17	8717	HIE-17	博多区博多駅南4丁目117~24	405	870529~870728	10~12
18	8820	HIE-18	博多区博多駅南6丁目10~36	410	880618~880831	12
19	8828	HIE-19	博多区博多駅南4丁目88	788	880803~881008	13
20	8859	HIE-20	博多区博多駅南4丁目19~2	252	890206~890228	12
21	8863	HIE-21	博多区博多駅南6丁目9~6	168	890308~890329	
22	8902	HIE-22	博多区博多駅南4丁目19~2	215	890411~890422	
23	8909	HIE-23	博多区博多駅南5丁目40~1	88	890418~890423	12
24	8917	HIE-24	博多区博多駅南3丁目317	340	890523~890619	13
25	8924	HIE-25	博多区博多駅南3丁目1~1	400	890619~890904	13
26	8939	HIE-26	博多区博多駅南3丁目58	482	890807~890923	13
27	8971	HIE-27	博多区博多駅南4丁目10~18	165	900208~900228	13
28	8981	HIE-28	博多区博多駅南3丁目426	405	900314~900407	13
29	9004	HIE-29	博多区博多駅南3丁目29	120	900410~900428	14
30	9012	HIE-30	博多区博多駅南4丁目221	570	900519~900620	14
31	9016	HIE-31	博多区博多駅南4丁目201	530	900621~900713	14
32	9037	HIE-32	博多区博多駅南3丁目46~1	159	900925~901113	14
33	9039	HIE-33	博多区博多駅南4丁目150~3	965	901004~900208	
34	9043	HIE-34	博多区博多駅南4丁目15~17	80	901105~901116	14
35	9061	HIE-35	博多区博多駅南4丁目109~1	432	910218~910323	14
36	9064	HIE-36	博多区博多駅南6丁目30~2	820	910308~910331	14
37	9104	HIE-37	博多区博多駅南4丁目13~41	170	910422~910523	15
38	9109	HIE-38	博多区博多駅南3丁目2~22	70	910515~910517	
39	9134	HIE-39	博多区博多駅南4丁目162~5	210	911029~911213	15
40	9207	HIE-40	博多区博多駅南4丁目72	540	920413~920624	16
41	9211	HIE-41	博多区博多駅南6丁目34~2	1,037	920516~921130	
42	9221	HIE-42	博多区博多駅南4丁目6~23	756	920706~921113	16
43	9229	HIE-43	博多区博多駅南4丁目154~3他	614	920820~921130	
44	9231	HIE-44	博多区博多駅南4丁目	60	920827~920905	16
45	9237	HIE-45	博多区博多駅南5丁目24~1	344	920926~921031	
46	9240	HIE-46	博多区博多駅南6丁目13~2	388	921022~921212	
47	9245	HIE-47	博多区博多駅南5丁目11	182	921104~921130	17
48	9255	HIE-48	博多区博多駅南4丁目9~8	850	930106~930331	16

(文献番号は下記の文献一覧の番号と同一)

《文献一覧》

- 1 銀山 雄
2 筑紫野古代史研究会
3 吉岡 実祐
4 横山邦雄・横石哲也
5 横山邦雄・横石哲也
6 小林義彦
7 鴨沢一男
8 杉山富雄
9 山崎龍雄・米倉秀紀
10 吉留秀敏
11 吉留秀敏
12 山上謙治
13 吉留秀敏
14 菅波正人
15 菅波正人
16 田中真夫
17 佐藤一郎
- [環溝住居小塗一一四]
「発見された春住遺跡」
『福岡市堀川文化財調査報告書』第1集
「比東遺跡-第6次調査(遺構編)」-1
「比東遺跡-第6次調査(遺物編)」-1
「比東遺跡-第7次調査」-1
「比東遺跡-第8次調査概要」-1
「比東遺跡-第9、10次調査報告」-1
中部地区埋蔵文化財調査報告書
「比東遺跡群の発生時代墳丘墓」
「比東遺跡群(8)」
「比東遺跡群(9)」
「比東遺跡群(10)」
「比東遺跡群(11)」
「比東遺跡群(12)」
「比東遺跡群(13)」
「比東遺跡群(14)」
- 【史跡67, 68, 74, 78】九州大学
筑紫野史学研究会会報 第2集
日本住宅公團
福岡市堀川文化財調査報告書第94集
福岡市堀川文化財調査報告書第130集
福岡市堀川文化財調査報告書第117集
福岡市堀川文化財調査報告書第116集
福岡市堀川文化財調査報告書第145集
福岡市堀川文化財調査報告書第146集
福岡市堀川文化財調査報告書第174集
九州考古学第63号 九州考古学会
福岡市埋蔵文化財調査報告書第227集
福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集
福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集
福岡市埋蔵文化財調査報告書第325集
福岡市埋蔵文化財調査報告書第368集
福岡市埋蔵文化財調査報告書第369集
- 1956~59
1972
1980
1981
1986
1986
1985
1986
1987
1988
1989
1990
1991
1992
1993
1994

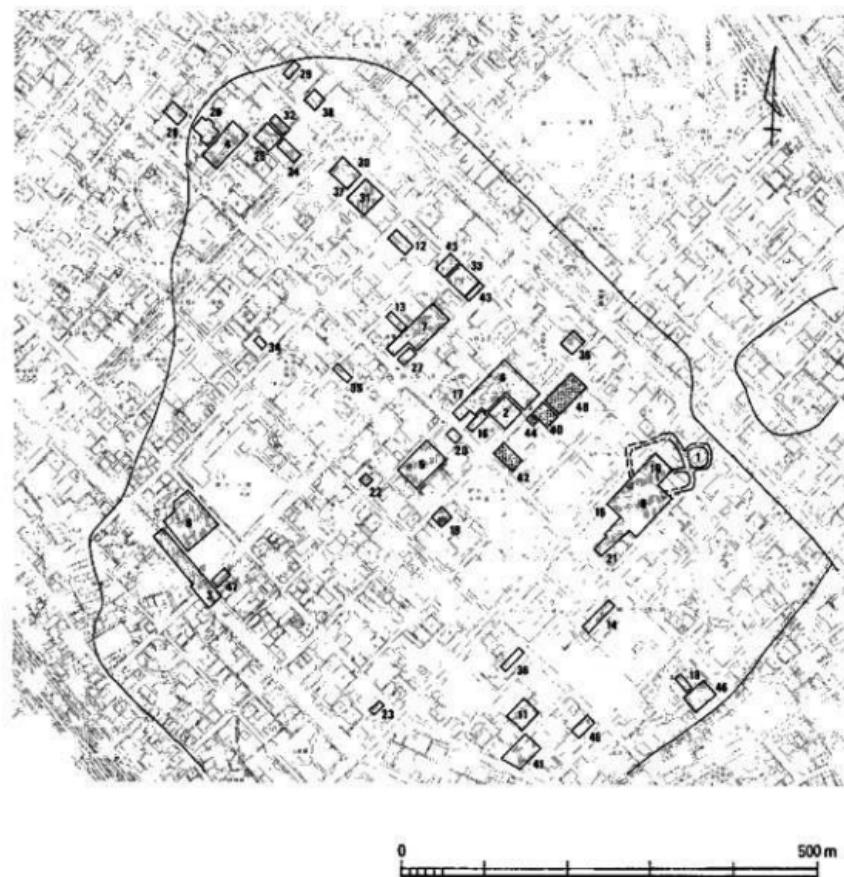


Fig. 6 比恵遺跡群調査地点位置図 (1/7000)

図中の1～48はTab. 1の調査次数と同一。

第3章 調査の記録

1、調査概要

(1) 調査地点の位置

今回調査した4地点は、比恵遺跡が占地する中央台地の北に延びる尾根筋の東側緩斜面上に位置している。最も尾根に近いのは第42次調査区である。第48次調査区は低丘陵東側裾部に位置している。周辺の調査は、第2・6・17次調査区が道路を挟んで北西側に位置し、第35次調査区が北側に隣接している。

(2) 各調査区における土層堆積状況

各調査区は、いずれも後世の営田・畑作、戦後の区画整理等による削平が顕著である。各調査区における遺構検出面は、第42次調査区が黄褐色粘質ローム、第40・44・48次調査区が、黄白色から淡灰白色ローム面である。いずれも那珂から比恵に連続して分布する八女ローム層に相当する。後世の削平のため遺構の遺存状況は全般的にあまり良くない。

第42次調査区では、約50cm厚で現地表土(盛土)が水平に堆積している。下部の旧耕作土は昭和初期から戰後まもない時期の頃のものであり、盛土は現工場の建設に伴うものである。調査区の中央部から南側にかけては旧耕作土直下が遺構検出面である。南端部から西側にかけては遺物包含層(黒褐色粘質土)が分布している。茶褐色土を覆土とする江戸時代以降の遺構はこの包含層を掘りこんでいる。基盤の八女ローム層は中央部から北側では褐色がかり土壤化が進んでいる。南側では黄白色～白色を呈する。第40・42・48次調査区では、約80～100cmの厚さ

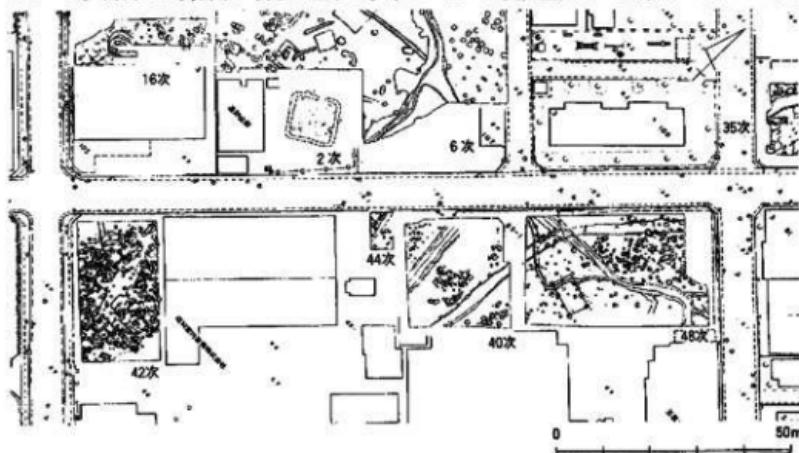


Fig. 7 第40次・42次・44次・48次調査地点位置図(1/1250)



で表土(盛土)があり、その下部に旧耕作土が約20cm厚でみられる。盛土は、第42次調査区と同様に工場建設によるものである。旧耕作土の下部には、弥生土器、土師器を含む黒～黒褐色土が20～30cm厚で堆積している。この遺物包含層は尾根に近い第42次調査区南端部に分布している遺物包含層と同一で、第44次調査区の北東部、第48次調査区の西側半分に断続的に分布しており、第6次調査区でも確認されている。この黒色包含層は第40次調査区SD01を覆っていることから、古墳時代以降のものと考えられる。なお第42次調査区と第48次調査区の遺構検出面の比高差は約1.2mである。東側(第48次調査区側)へ緩やかに傾斜している。

(3) 各調査区の概要

1) 第40次調査

本調査区では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかかる遺構と遺物を確認した。検出した遺構は、井戸7基、溝3条、土壙3基、柱穴76で、掘立柱建物を3棟推定復元した。

井戸は、弥生時代後期から古墳時代にかかるもので直径が約1m、深さが1m～1.5m前後の素掘りである。調査区東隅にまとまって分布している。溝は、弥生中期末から後期のもの(SD01)、弥生時代終末～古墳時代初頭のもの(SD48)、中世以降のもの(SD17)がある。前二者はいずれも直線的に南北に延びており、ほぼ並行している。上塙はいずれも平面形が不定形で、断面形は浅い皿状のものが多い。柱穴の一部には礎板を持つものがある。掘立柱建物3棟を推定復元した。

出土遺物は、弥生土器、須恵器、陶質土器、土師器、石器(太形蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁、石鎌、砥石、石錐、紡錘車、磨石、石鎌、黒曜石片)、土製品(紡錘車、投弾、取瓶)、木製品(動、鍵、櫛、板材)、自然遺物(鹿頭骨、山桃等)が出土している。遺物の出土量は、弥生時代中期から後期のものが主体を占める。特に溝SD01からはコンテナボックスタイプ約220箱分の弥生土器が投棄された状況で出土している。

2) 第42次調査

本調査区においては、弥生時代後期から古墳時代後期までの遺構と遺物を確認した。検出した遺構は、井戸20基、竪穴住居跡15基、柱穴554、溝2条、土壙37基、方形周溝墓1基である。また掘立柱建物を22棟推定復元した。

井戸は、弥生時代後期前半から半ばのものと、弥生時代終末から古墳時代初頭のものがある。規模は、検出面での直径が80cm前後で、深さが1mほどのものと、直径が1mを超し、深さが2～2.5mほどの大型のものとがある。また、埋め戻す際に大量の土器を投棄しているものと、まったく遺物を含んでいないものがある。竪穴住居跡は、弥生時代中期末から後期にかかるものと古墳時代前期および後期のものがある。竪穴の平面形は円形および長方形である。規模は一辺約4～5mの小規模のものが多い。溝は江戸時代の灌漑用溝と、弥生時代後期の溝を検出した。また古墳時代の方形周溝墓の周溝の一部と考えられる溝状遺構がある。土壙は、平面形がいずれも不定形で、断面形が浅皿状のものが多く明確な握方を持ったものは少ない。

出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、石器(太形蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁、砥石、石錘、紡錘車、磨石、石鐵、黒曜石片)、土製品(紡錘車、投弾)、石製品(広形銅矛鎌型)、木製品(柶、板材)、自然遺物(山桃等)などが出土している。

3) 第44次調査

調査面積が狭いために遺構、遺物ともに少ない。弥生時代後期の井戸1基、古墳時代前期の井戸2基、不定形土塁6基を検出した。井戸はいずれも規模が小さく、検出面での直径80cm、深さ1.3m前後である。古墳時代のものは井戸基底面から80cmほどの面に甕が1点投棄された状況で出土している。

出土遺物は、弥生土器、土師器、石器(蛤刃石斧、柱状片刃石斧、石包丁、砥石、石錘、紡錘車、磨石、石鐵、黒曜石片)、土製品(投弾)、木製品(板材)が出土している。

4) 第48次調査

第48次調査区は、第40次調査区の北東部に隣接している。調査区においては、弥生時代後期から古墳時代前期にかかる遺構と遺物、また江戸期から近代まで利用されていた灌漑用水路を検出した。検出した遺構は、井戸29基、溝3条、土塙47基、柱穴198である。なお掘立柱建物は28棟を推定復元した。余般的にみて遺構の遺存状況はこの地点ではさらに悪い。遺構の分布は調査区中央を境にして北側と南側に偏っている。第42次調査区と比べ遺構の時期はやや新しい傾向が窺える。井戸は、弥生時代後期半ば～古墳時代前期のものがある。規模は検出面での直径が80cm前後で、深さが1mほどのものと、直径が1mを超し、深さが2.5～3mほどの大型のものとがある。溝は、弥生時代終末から古墳時代初頭のもの(SD04)、中世のもの(SD03)、近世から現代のもの(SD01)を検出した。SD04は第40次調査のSD48の延長部である。

出土した遺物は、弥生土器、須恵器、陶質土器、土師器、陶器、石器(石包丁、石錘、砥石、石錘、紡錘車、磨石、石鐵、黒曜石片)、土製品(紡錘車、投弾)、木製品(柶、板材)、銅鏡がある。遺物の出土量からみると、弥生時代後期のものがこの地点でも主体を占める。

なお各調査区における調査記録のうち出土遺物の個別所見については、調査区ごとにまとめた一覧表を参照されたい。また、第40次調査区出土の土製取瓶147～152と、第42次調査区出土の石製広形銅矛鎌型については第4章に一括して記述した。

2、第40次調査

(1)概要

本調査区は、昭和20年代の工場建設による掘削によって中央部北西側が大きく掘り下げられている。また、北側から北東部にかけては旧耕作土の盛取りによって南西部中央にみられた黒褐色粘質土包含層は残っていない。遺構検出面は黄白色～明灰白色の八女ローム層面である。遺構検出面の標高は5.3～5.55mを測り、北東方向に向けて低くなっている。

本調査区において検出された遺構は、掘立柱建物(SB)3棟、溝(SD)3条、井戸(SE)7基、土壌(SX)3基である。遺構の遺存状況は全般的に悪い。中世以降の溝SD117の埋土は褐色～茶褐色粘質土であるがその他の遺構の埋土はいずれも暗褐色～黒褐色粘質土である。

(2)掘立柱建物(SB)

調査区の南西部、中央部東側、北東部に柱穴が検出された。おおよそ直径が20cmで、平面形は円形のものが多いなかで、隅丸の方形をなすものがあり、それらの中には礎板が残るものがある。図面操作で以下の3棟の建物について推定復元した。

掘立柱建物は弥生時代後期以降と考えられる。調査区の中央に重複しながら分布する。

SB01 (Fig. 9, PL. 1, Tab. 2)

梁行2間、桁行3間の東西棟である。南側柱の中央間がやや広くなっている。柱根痕跡は四隅の柱穴で確認された。柱の直径は20～24cmを測る。柱穴SP89では礎板の痕跡がみられた。

SB02 (Fig. 9, PL. 1, Tab. 2)

梁行、桁行とも1間もしくは桁行が2間の東西棟である。柱穴はやや不整な矩形で、一辺約60～70cmを測る。いずれにも礎板が置かれている。礎板の現存厚は約4～6cmである。柱痕跡からみて、柱直径は20cm前後と考えられる。柱穴内埋土は黒色粘質土である。

SB03 (Fig. 9, PL. 1, Tab. 2)

梁行1間、桁行2間の東西棟である。柱間が広いことからみて、各柱間の中央に補助的な柱があった可能性がある。柱根痕跡から柱の直径は15～20cmほどと考えられる。

Tab. 2 第40次調査 掘立柱建物一覧表

Fig.	PL	遺構 (SB)	規模 (間)	規模(m)		株 方向	床面積 (m ²)	柱穴番号 (SP)	礎板有無	先後関係 (先→後)
				桁 行	梁 行					
9	1	01	2×3	5.97	2.98	N-74° 30' E	17.79	46, 72, 81, 89, 97, 132, 136, 137, 139	○	SP131-140-SB01 SB01-SP04
9	1	02	1×2	4.14	2.51	N-85° 40' E	10.39	101, 102, 124	○	
9	1	03	1×2	6.00	3.30	N-89° -E	19.80	43, 63, 74, 134, 135, 138	?	

* 矾板の有無は調査によって確認されたもの

(3) 溝状遺構 (SD)

SD01 (Fig. 10・13~21、PL. 2~4・9・10、Tab. 4)

弥生時代中期末から後期にかかる大溝で、後期末には完全に埋没している。ほぼ直線的に南北に延びている。断面形は逆台形で、現存の溝上端幅は3.5~3.8m、基底部幅は1.0~1.2m、深さは1.1~1.3mを測る。溝の壁は、左右両壁の傾斜角は東壁が45°~46°、西壁が36°~39°である。溝内の埋土は、大きく3層に分かれ上層(第1層~4層)に弥生後期の土器が投棄された状態で大量に出土している。土器片はまんべんなく広がって分布しており、ある一定個所に集中するといった傾向は示していないが、細かくみると4~5群にまとまっている。また溝の中央軸線を基準にすると中央から西側にかけて出土量が多い。これらから、土器の廃棄行為については、弥生時代後期後半頃に当該溝が半分程度埋まっている状況下で西側から溝中央に向けて廃棄されたと思われる。

溝の基底部には非常に粘性のある黒色~黒褐色粘質土(下層: 第10~15層)が堆積している。基底部は本来平坦であったと思われるが、水の流路が何回か変化し、凹凸が筋状に走っている。黒色粘質土からは流木片に加え獸骨頭骨片(鹿頭骨か)が出上している。

出土遺物 遺物はコンテナケースで220箱分が出土している。検出面~上面にかけては弥生時代中期から古墳時代初頭、古墳時代、中世の遺物が混入している。最も出土量が多かったのは上層下部から中層(第6層~9層)上面までで、先述したように投棄された状況で4~5群に分かれて分布している。破片がほとんどであるが、完形品が比較的目立つ。含まれる遺物は弥生時代中期から弥生時代後期後半の遺物が主体を占めており、土器、土製品、石器、石製品などがある。中層以下になると出土量は激減し、弥生中期と後期の遺物がほぼ等しい割合で出土している。完形品はなくすべて破片である。下層では主として弥生時代中期末から後期初頭の遺物が出土している。

図示した弥生上器1~47・50~59・61・62、69~78・80~89は上層から、48・49・60~63・65~68・79~90~100は中層から、101~106は下層から出土したものうちの一部である。いずれも弥生時代中期から後期のものである。器種は壺・瓶(短頸・長頸・袋状口縁・二重口縁等)・鉢・器台・支脚・高杯・蓋・ミニチュア土器等がある。土製品135~139・147・148~152、石器153~156、ガラス製小玉157~160はいずれも上層からの出土である。土製品には匙135・136、投彈137~139、取瓶片147~152がある。石器には砥石153・154・162、石錘155・156、石包丁162~165・167~169、紡錘車170、鐵171、石劍175・176、叩石173・174・179~181がある。

SD48 (Fig. 10・22、PL. 5・11、Tab. 4)

SD48は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかかるもので、本調査区においてはSD01とはほぼ並行しながら直線的に南北に延びている。上半部分が削平を受けており、本来の形状は不明であるが、断面形は基底部幅が広い逆台形をなす。現存の溝上端幅は3.1~3.3m、基底部幅は1.8~2.0m、深さは0.6mを測る。埋土は基底部直上に堆積するもので、堅く締まった黒褐色~暗褐色粘質土である。

出土遺物 遺物は底面近くからまとまって弥生時代後期から終末にかけての土器・石器片が出士している。弥生土器107~109・111~113・115~119は埋土中位~下部にかけて出土、110・114は底面で出土したものである。いずれも二次的な混入の状況で出土したものである。土製品は投彈109・110がある。石器は石斧182、石包丁183、鎌184、石剣185・187、砥石186、有溝石錐188がある。

SD117 (Fig. 8、PL. 1)

SD117は中世のもので、水田畦溝の可能性がある。断面形は「U」字形である。幅は0.4~0.6m、深さは0.2~0.4mを測る。当該溝の北側延長部分にあたる第48次調査区においては弥生時代後期の井戸SE10、掘立柱建物SB01を切っている。溝の埋土は茶褐色粘質土である。

出土遺物 図示していないが、弥生土器片、龍泉窯系青磁碗片が出土している。

(4) 井戸(SE)

調査区の北西隅に1基、中央部に1基、北東隅で5基を検出した。いずれも弥生時代後期半ば~終末の頃のものである。

SE23 (Fig. 12・23、PL. 6・11、Tab. 3・4)

調査区東隅に位置する。井戸最下層には粗砂が薄く堆積している。中位から上部の埋土は黄褐色粘土小塊を含む暗褐色粘質土で、単一層であることから一気に埋め戻されたものと思われる。湧水面は標高4.2m前後である。井戸の廃絶時期は弥生時代後期半ば以降である。

出土遺物 弥生土器片のほか、黒曜石片が数点出土している。埋土中位には弥生土器120~122が投棄された状態で出土した。弥生土器には手捏土器120、壺121、壺122がある。

SE53 (Fig. 12、PL. 5、Tab. 3)

調査区中央に位置する。黒褐色粘質土を埋土とする。遺物は埋土中に弥生土器の小破片が二次的に混入している。その他の井戸群と比べ基底面が浅く規模も小さい。弥生時代終末以降のものと思われる。

出土遺物 弥生土器小片、玄武岩石片等が出土しているが図示し得るものはない。

SE111 (Fig. 12・23、PL. 7・11、Tab. 3・4)

調査区南東隅にわずかにかかるて検出された。本調査区では最も深い井戸である。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。埋土は大きく4層に分かれ。いずれも木炭片や黄褐色粘土小塊を多く含む暗褐色~黒褐色粘質土である。壁面は中位部分がわずかに膨らんでいる。埋土中位から下部にかけて弥生時代後期半ばから後半の上器片が投棄された状態で出土した。最下部には粗砂層がみられた。湧水面は標高4.15mのレベルである。

出土遺物 弥生土器片が出土している。壺123、器台124、壺125は底面から投棄された状態で出土した。

SE112 (Fig. 12・23, PL. 7, Tab. 3)

調査区北東部に位置する。平面形は円形である。掘方は円筒形状をなす。上部は溝SD117によって切られている。埋土は大きく7層に分かれる。上層(第1～3層)は暗褐色～黒褐色粘質土である。中層(第4～5層)は黒灰色粘質土で黄白色粘土小塊を多く含む。下層(第6・7層)は黒色粘質土である。弥生時代後期後半の井戸である。

出土遺物 上～中層にかけては弥生土器小片が多く出土している。弥生土器甕126は第7層から出土した。

SE113 (Fig. 12・23, PL. 7・11, Tab. 3)

調査区北東部に位置する。平面形は比較的大きいが、掘方は浅い。SE112同様に上部はSD117によって切られている。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土ではほぼ單一層である。最下層は黒灰色粘質土でかなり粘性に富む。弥生時代後期半ば前後のものと思われる。

出土遺物 弥生中期末から後期後半の土器片が埋土中に多く含まれている。弥生土器127～131は最下層から出土した。

SE118 (Fig. 12, PL. 7, Tab. 3)

調査区北東部に位置する。平面形は本調査区では最も大きい。埋土は大きく4層に分かれる。第1層は黒色粘質土で、木炭片や細かな土器片を多く含む。下部に板材が混入していた。第2層はほぼ中位にレンズ状に薄く堆積した黒灰色粘質土。第3層は黒灰色粘質土中に黄褐色粘土小塊を多く含む層。第4層は黒色粘質土で、底部に堆積している。弥生時代後期半ばから後半のものと思われる。

出土遺物 底面から10cm浮いて弥生時代後期半ば～後半の土器片が出土している。小片のため図示しえるものはない。

SE120 (Fig. 12, PL. 8, Tab. 3)

調査区北東隅部に位置する。埋土は大きく3層に分かれる。第1層は黒褐色～黒色粘質土で木炭片や弥生土器小片を多く含む。第2層は黒灰色粘質土で黄褐色粘土小塊を含む。最下層は黒色粘質土。時期を比定する遺物はないが、弥生時代後期終末以降の廃絶時期が考えられる。

(5) 土壙(SK・SX)

本調査区では井戸の分布と重複して南西部と中央部、北東隅部に土壤が点在している。形状はほとんどが不整形の深い窪みである。人為的な掘込みによると思われるものは3基ある。

SX31 (Fig. 11・24, PL. 6)

調査区西南隅に位置している。東半分について調査した。平面形は不整な梢円形になるものと思われる。底面は不整な円形で平坦である。埋土は暗褐色～黒灰色粘質土で黄白色粘土小塊を多く含む。一時的に埋め戻されたものと思われる。長軸1.8m、短軸推定1.5m、深さ0.8mを測る。

出土遺物 埋土中からは弥生時代後期初頭から後半の土器片が出土している。弥生土器高杯

脚部132と器台133、壺134は底部から出土した。古墳時代以降のものと思われる。

SX119(Fig. 11, PL. 1)

調査区北東隅に位置する。平面形は不整な椭円形で、黒褐色粘質土を埋土とする。長軸1.05m、短軸0.78m、深さ0.3mを測る。

出土遺物 弥生土器小片が二次混入の状況で出土しているが図示し得るものはない。

SX122 (Fig. 8, PL. 1)

調査区北側に位置する。平面形は不整椭円形で、黒褐色粘質土を覆土とする。長軸1.48m、短軸1.2m、深さ0.25~0.3mを測る。

出土遺物 弥生土器小片が二次混入の状況で出土している。図示し得るものはない。

(6) その他の遺構および出土遺物

包含層SX126・127 (Fig. 8・24, PL. 1)

包含層は暗褐色~黒褐色の粘質土で、溝SD01・48を覆って調査区の中央~西半分に分布している。その範囲は第44次調査区で確認されたSX152と一連のもので(97・99頁)、溝SD01・48の走向と同じくしながら、南北に帯状にみられた。SD48の西側では畦状の低い高まりが認められたが、SD01埋没後にSD48の西側に展開した水田の基底部が残ったものとも考えられる。出土遺物からみると弥生時代終末から古墳時代の可能性がある。

出土遺物 弥生土器・古墳時代前期の土師器片の他、投擲141、紡錘車142、銅鏡143がある。

(7) 小結

本調査区では、弥生時代後期の掘立柱建物、井戸、溝、土壙、水田跡の一部が検出された。本調査区の位置は低丘陵の傾斜面の変換点となっている地点にあたっており、SD01はこの丘陵縁辺部に設けられた溝で、おそらく弥生時代中期後半頃から後期前半頃まで機能し、後半以降に埋没している。掘立柱建物は後期後半以降のものと考えられることから、第6次・第17次・第42次の調査成果を踏まえると、集落の中心部分を台地尾根周辺の西側におきながら、SD01埋没後に集落の範囲が東側台地縁辺部に拡大したことがわかる。なお、SD48は後期後半~末以降にSD01の東側に沿って設けられたと思われるが、早い時期に埋没し、古墳時代前期には集落内に取り込まれ、溝として機能していなかった可能性がある。

井戸は本調査区では大きく3群に分かれるが、第6次・第17次・第40次・第44次調査での分布状況とあわせると約10群ほどの小群に分かれて分布している。

SD01から出土した取瓶147~152は、第42次調査で出土した広形銅矛鋳型369と共に、比恵遺跡において明らかに青銅製品の鋳造製作が行われたことを物語るものである。SD01上層からの共伴遺物からみて、弥生時代後期後半~終末の時期が想定でき、広形銅矛鋳型とほぼ同時期のものと考えられる。

Tab. 3 第40次調査 井戸一覧表

a : 長軸、b : 短軸、c : 深さ * 深さは検出面からのマイナス値

Fig.	PL	遺構 (SE)	平面形	断面形	計測値 (m)			底面 標高 (m)	先後関係 (先→後)	出土遺物概要
					a	b	c			
12	6	23	円形	円筒形	0.81	0.75	1.38	3.90	—	弥生土器片 黒曜石片120~122
12	—	53	*	*	0.75	0.63	0.78	4.43	—	弥生土器小片 玄武岩片・木炭
12	7	111	*	*	1.00	0.98	1.69	3.92	—	弥生土器小片 123~125
12	7	112	*	*	0.97	0.95	1.30	4.16	SE112→SD117	弥生土器小片 126
12	7	113	*	*	1.06	1.05	1.10	4.32	SE113→SD117	弥生土器小片 127~131
12	7	118	*	*	1.20	1.16	1.47	3.94	—	弥生土器小片
12	8	120	*	*	0.90	0.81	1.30	3.96	—	弥生土器小片

Tab. 4 第40次調査掲載土器所見一覧

: 法京の口径は外径、器台は台上部径。() は後元値

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	器種	注量 (cm)			形態的特徴			出土遺構		
					口径	高さ	底径	測量部	成形上の手法	色調			
13	—	1	295	甌	33.0	—	—	—	口縁~側面部。多色用料生後火テミギキ。	赤褐色	良	良	SD01上層
13	—	2	211	甌	33.4	—	—	—	口縁~側面部。内面ナガ。口沿肥厚。	明褐色	やや悪い	良	SD01上層
13	—	3	214	甌	23.4	—	—	—	口縁部~内外部ハサ目彫刻。側面部は内削し。口付部は「く」字形に外削。	褐色	やや悪い	やや不良	SD01上層
13	—	4	304	小型甌	10.4	12.0	5.0	11.2	口縁部~側面部。外腹テナガ。内面カキトリ痕ナガ。口縁は火炎外削。	明褐色	良	良	SD01上層
13	9	5	277	甌	20.6	19.0	8.0	19.3	口縁部~側面部。外腹丁寧なナガ。外腹は丁寧なテナガ。側面部はナガ内削。	褐色	良(軟)	良	SD01上層
13	9	6	251	甌	21.0	21.8	8.5	23.2	口縁部~側面部。内面はコリナガ。内腹は火炎ナガ。	明褐色	良	良	SD01上層
13	—	7	205	甌	18.4	—	—	16.2	側面部から内腹部。内面は火炎ナガ。外腹はハサ目。口縁は内腹とモルダ。	褐色	やや良	不良	SD01上層
13	—	8	212	甌	(15.4)	—	—	17.8	側~口縁部。内面はコリハサ目彫刻後ナガ。外腹はハサ目横巻くナガ上往。	淡灰褐色	やや良	不良	SD01上層
13	9	9	207	甌	16.3	19.3	7.3	17.8	1812年製品。内面はコリナガ。外腹は火炎ナガ。内面はテナガハサ目。内腹は「く」字形に外削。底部は完全なナガ。	暗褐色	やや悪い	やや不良	SD01上層
13	—	10	305	大型甌	51.0	—	—	—	側~口縁部。外腹テナガ。内面ナガ。	明褐色	悪い	良	SD01上層
14	—	11	249	甌	16.8	15.1	7.1	14.9	口縁~側面部。内腹ハクハク目彫刻ナガ。外腹:テナガのハサ目後上手モルダ消し。	淡灰褐色	悪い	不良	SD01上層
14	—	12	311	甌	13.6	15.6	6.6	13.3	ほぼ完形品。外腹はテナガハケ。内腹~口縁はナガ。底部は平底。	明褐色	やや良	良(軟)	SD01上層
14	—	13	270	甌	24.8	32.0	9.0	27.0	口縁部~側面部。内腹はナガ。下部には斜削痕。外腹は丁寧なテナガハケ。	褐色	悪い	不良	SD01(中~上層)
14	9	14	247	甌	13.9	15.0	5.1	14.7	1812年製品。内腹はコリナガ。外腹はハサ目上往外削。ハサ目横巻後丁寧なナガ。平底であるがわざかに丸みある。	淡灰褐色	やや良	良	SD01上層
14	—	15	248	甌	15.3	14.8	7.7	16.7	口縁部(火炎外削品)。内腹ナガ上往。口縁部はわざかに外反する。	明褐色	やや悪い	良	SD01(中~上層)
14	—	16	301	甌	13.0	16.3	7.0	16.2	完形品。内腹はキリ地ナガ。底部には直削痕。小口部を残す。外腹はテナガハケ。	褐色	悪い	良	SD01(中~上層)
14	—	17	276	甌	18.7	22.9	6.9	20.0	口縁部(火炎外削品)。内腹内側ハケ。底部は「く」字形に外削。底部はわずかに丸みがある。	灰褐色	悪い	良	SD01上層

：法量の口径は外径、器台は土上部径、（ ）は復元値

Fig.	PL	掲載 物番号	登録 番号	器種	法量(cm)			形態的特徴	出土遺構
					口径	器高	底径		
14	-	18	232	壺	(6.8)	18.2	5.9	16.0 口縁部久留品。内面にカキトリ後軽くナゲシ。 外者はテテハケ。	褐灰～褐褐色 やや粗い 良 SD01上層
14	9	19	250	壺	19.2	19.8	5.2	19.1 完形品。内外面とも丁寧なハケ目調整。底部は はざみから丸みある。	褐灰褐色 良 やや良 SD01上層
15	10	20	217	壺	21.1	15.3	7.0	18.0 1/2大形品。外面部ともハケ目。口縁部はオ コナゲ。底部ははざみから丸みある。	褐灰褐色 粗い 不良 SD01上層
15	9	21	265	壺	16.1	5.8	15.1	15.1 口縁部はハケ目調査品。内面にはハケ目調整後 ナゲシ。外者はハケ目。底部ははざみから 丸みある。ハケ目調査。	褐灰褐色 粗い 不良 SD01上層
15	-	22	204	壺	-	18.8	6.7	19.9 口縁部大形品。内面はカキトリ後軽くナゲシ。 外者はタハケ。	褐灰褐色 やや粗い やや不良 SD01上層
15	9	23	246	壺	13.9	15.3	6.3	15.2 ほぼ完形品。内面はカキトリ後軽くナゲシ。 底部ははざみから丸み。	褐灰褐色 やや粗い やや良 SD01上層
15	9	24	312	壺	15.8	15.3	7.2	16.6 ほぼ完形品。外者はハケ目調査後軽くナゲシ シ。底部は丸みある。	褐～灰白色 やや粗い 不良 SD01上層
15	9	25	266	短瀬壺	11.7	22.2	6.8	15.8 先端部はハケ目調査品。内面はハケ目調査後 ナゲシ。外者はハケ目。底部ははざみから丸 みある。外表面には木炭焼が残る。	褐灰褐色 粗い 良 SD01上層
15	-	26	269	短瀬壺	11.3	11.2	6.0	8.3 口縁部大形品。内面はハケ目調査後ナゲシ。外 面は赤色加彩を施すヘラミヨ。	褐～灰褐色 粗い やや良 SD01上層
15	-	27	208	壺	14.6	14.2	5.1	15.2 口縁部1/2欠損品。内面にはナゲシ。内面に の字が押出されている。外者はタハ ケ目と云ふ。	褐灰褐色 良 不良 SD01上層
15	-	28	216	壺	(12.5)	16.3	6.8	15.5 口縁部大形品。内面にナゲシ。外者はハ ケ目と云ふ。最大径部は底部下部にある。	褐～褐褐色 粗い 不良 SD01上層
15	9	29	260	壺	17.0	16.7	8.2	19.2 口縁部一端欠損品。内面はナゲシ。外面は ナゲシハケ目調査。口縁部に凹み。	褐灰褐色 やや良 不良 SD01上層
15	9	30	206	鉢	12.7	15.4	6.3	- 1/3部欠損品。内面は丁寧なナゲシ。外面 はタハケ後赤色加彩を施す。	褐灰褐色 良 やや不良 SD01上層
16	-	31	296	壺	13.6	-	-	- 口縁部ノリ付。原部は日本文を施す。原部に 「M」字模様。本器斜削後はラミヨ。	褐灰褐色 良 良 SD01上層
16	-	32	253	壺	(21.2)	-	-	- 口縁部ノリ付。内面と底も丁寧なナゲシ。頭部 に「M」字模様。片側をヘラミヨ。	褐灰褐色 粗い やや良 SD01上層
16	-	33	272	壺	(25.0)	-	-	- 肩～口縁部。口縁部はナゲシハケ目。内面 はハケ目ナゲシ。外面はタハケ。	褐灰褐色 粗い 不良 SD01上層
16	-	34	299	壺	25.4	-	-	- 口縁～瓶底部。外面はタハケ後軽いナゲシ シ。	褐灰褐色 粗い 良 SD01上層
16	9	35	273	壺	17.6	33.9	4.5	27.6 口縁部1/2欠損品。内面は腹紅斑。ナゲ シ。外者はナゴナゲ。外面はハケ目。底部外側 にセミモチ。腹紅斑。	褐～灰褐色 粗い 不良 SD01上層
16	9	36	267	壺	11.2	22.3	5.9	17.1 完形品。頭部内部は1/2部外側はセミモチ ナゴナゲ。外面はハケ目。底部外側 にセミモチ。腹紅斑。	赤褐色 粗い やや良 SD01上層
16	-	37	252	壺	(25.8)	-	-	30.8 口縁部～瓶底部。口縁部はナゴナゲ。外面 はナゲシ。頭部は軽くナゲシ。	褐～灰褐色 粗い 不良 SD01上層
17	-	38	237	器台	8.4	12.1	11.9	- 完形品。外者はナゲシ。上台部一部断出し。	褐～褐褐色 粗い やや不良 SD01上層
17	-	39	218	器台	5.3	9.9	12.0	- 完形品。内面はナゲシ上げ。上台部有孔。 外面はハケ目調査後ナゲシ。	褐～褐褐色 粗い 不良 SD01上層
17	10	40	238	器台	7.1	15.7	7.9	- 完形品。内面にシボリ痕。外者は指印痕。	褐～褐褐色 粗い 不良 SD01上層
17	-	41	235	器台	7.9	13.0	8.8	- 完形品。内面にシボリ痕。外者はナゲシ。 底部斜面はナゲシ。他はハケ目調査。	赤褐色 粗い やや不良 SD01上層
17	10	42	263	器台	9.5	15.2	10.7	- 完形品。外者はナゲシ。脚底痕が全面残る。	褐～褐褐色 粗い やや不良 SD01上層
17	10	43	258	器台	14.8	15.1	17.8	- 完形品。上台部裏部に対孔痕。	褐～褐褐色 やや粗い やや良好 SD01上層
17	10	44	257	器台	13.9	24.2	20.0	- 内面はカキトリ。外面はハケ目。調査後ナゲシ。 口縁～瓶底部。	赤褐色 粗い やや不良 SD01上層
17	-	45	292	高杯	33.0	-	-	- 新規品。口縁部等に内面突起跡。赤色釉料 内面裏部有孔後ヘラミヨ。	赤褐色 良好 やや良 SD01上層
17	-	46	291	高杯	28.0	-	-	- 新規品。赤色釉料内外表面を後ヘラミヨ。	赤褐色 良 壓成 SD01上層
17	9	47	313	高杯	24.7	19.0	14.2	- 口縁～脚部一部欠損品。赤色釉料を赤泥封締。 杯内面のみラミヨ。	赤褐色 良好 やや良 SD01上層

：法量の口径は外径、器台は台上部径、() は復元値

Fig.	PL	器物番号	登録番号	器種	法量 (cm)			成形上の手法	形態的特徴	出土層構		
					口径	器高	底径					
17	-	48	290	蓋	-	-	-	-	口縁部欠損品。外曲天子型はナダ。	明褐色白色 暗かい 良好	SD01中層	
17	-	49	294	蓋	(15.0): 3.0	-	-	-	天井部欠損品。赤色胎土蓋後ヘタリガタ。	赤褐色 やや良	良	SD01中層
18	9	50	261	器台	14.2	20.3	17.0	-	完形品。上台部は破壊。内面にシボリ痕。口縁部内側はハゲたね。	明褐色白色 やや粗い やや良	SD01上層	
18	10	51	242	器台	11.7	17.2	14.0	-	ほぼ完形品。内面にはコロナデ、シボリ痕。外曲天子型はナダ。	明褐色白色 やや粗い やや良	SD01上層	
18	-	52	245	器台	11.2	18.3	12.6	-	底部一部欠損品。内面は上部に削れ痕。外曲天子型はナダ。	明褐色白色 粗い	良	SD01上層
18	10	53	264	器台	12.6	18.1	15.6	-	口縁一部欠損品。口縁部内面はカキトリ。外曲天子型はナダ。	明褐色白色 粗い	やや不良	SD01上層
18	10	54	239	器台	11.0	17.3	12.7	-	完形品。内面にシボリ痕。上部はハケ日調査。外曲天子型はナダ。	明褐色白色 粗い	不良	SD01上層
18	-	55	244	器台	12.1	17.2	13.2	-	底都一部欠損。内性地ともハケ日調査。	明褐色 やや粗い やや良	SD01上層	
18	-	56	243	器台	9.5	14.8	13.0	-	完形品。内面は番ナダツケ、外側はハケ目。	明褐色 粗い	小良	SD01上層
18	-	57	236	器台	9.4	13.6	9.9	-	完形品。上部ナダ。外側ハケ目調査。	淡褐色 淡褐色 粗い	やや不良	SD01上層
18	10	58	241	器台	8.7	16.1	12.9	-	完形品。内面に削れ痕。外曲天子型はナダ。底部はわざかに外端する。	淡褐色 褐色 粗い	やや良	SD01上層
18	-	59	262	器台	11.2	12.5	12.3	-	完形品。上台部外側はヨコナダ。地は丁字谷ハケ目調査。	褐色 褐色 粗い	やや良	SD01上層
18	-	60	240	器台	9.6	12.3	11.4	-	底都一部欠損品。内面ヨコナダ、シボリ痕。外側はナダ。	褐色 褐色 粗い	やや小良	SD01中層
18	10	61	219	器台	8.9	9.8	10.4	-	ほぼ完形品。底都部内側に削れ痕。外側はナダ。	淡褐色 褐色 粗い	良	SD01上層
18	10	62	230	器台	8.8	10.4	9.9	-	ほぼ完形品。内面はエビテナデ、シボリ。外側はハケ目調査。上台部は平底。	淡褐色白色 やや粗い 良	SD01上層	
19	-	63	287	壺	13.4	-	-	-	底都一部欠損品。上台部は焼く所。赤色磨き。外側はハケ目調査。	赤褐色 褐色 粗い	良	SD01上層
19	9	64	274	壺	12.2	14.9	6.2	17.8	口縁部一部欠損品。内面はハケ目調査。外側はハケ目調査。底都部はわざかに外端する。内面はハケ目付ナダ。口縁部は丸。	淡褐色 褐色 粗い	不良	SD01上層
19	-	65	303	壺	24.4	-	-	-	口縁部一部欠損品。内面はハケ目調査。外側はハケ目調査。底都部はハムミズキ。	褐色 褐色 粗い	良	SD01中層
19	-	66	300	壺	27.0	-	-	29.4	口縁部一部欠損品。内面はハケ目調査。外側はハケ目調査。底都部はハムミズキ。	褐色 褐色 粗い	やや良	SD01中～上層
19	-	67	302	壺	(39.3): 8.0	26.2	26.2	-	口縁部欠損品。内外部丁寧なナダ。	明褐色 褐色 粗い	やや不良	SD01中～上層
19	-	68	278	壺	27.6	-	-	-	肩～口縁部削。全面ナダ。外側赤色磨き。外側は(ハケ目)。	褐色 褐色 粗い	良	SD01中～上層
20	10	69	298	鉢	8.2	6.5	3.3	-	完形品。外側断ナダ。(ミニチュア)	褐色 褐色 粗い	やや不良	SD01中～上層
20	-	70	210	鉢	7.5	7.5	4.0	7.3	口縁部一部欠損品。内外部丁寧なナダ。(ミニチュア)	淡褐色白色 褐色 良	不良	SD01上層
20	-	71	201	鉢	8.1	6.5	4.0	7.8	口縁部一部欠損品。外側削に削れ痕。ナダ。	明褐色 褐色 良	良	SD01上層
20	10	72	314	鉢	7.0	7.0	4.4	7.4	完形品。内面～口縁部ナダ。外側ナダ。	褐色 褐色 良	不良	SD01上層
20	-	73	224	鉢	7.6	5.5	-	-	1/3欠損品。内外面ともナダ。(ミニチュア)	明褐色白色 褐色 粗い	やや不良	SD01上層
20	-	74	222	鉢	6.7	5.7	4.5	-	口縁部一部欠損品。内面削に削れ痕。ナダ。外側はわざかに外端。空窓部。(ミニチュア)	明褐色白色 褐色 良	良	SD01上層
20	-	75	203	鉢	8.6	5.4	4.0	-	ほぼ完形品。内面は削れ痕。ナダ。外側は底部から上方へハケ目。	明褐色白色 褐色 粗い	やや不良	SD01上層
20	-	76	202	鉢	9.0	6.4	5.0	-	口縁部一部欠損品。内外面ともナダ。底部外側は削れ痕。(ミニチュア)	明褐色白色 褐色 良	不良	SD01上層
20	-	77	221	鉢	9.5	7.7	4.5	-	口縁部一部欠損品。内外面ともナダ。底部外側は削れ痕。(ミニチュア)	明褐色白色 褐色 粗い	やや良	SD01上層

法量の口径は外径、器台は台上部径、() は復元値

Fig.	PL	掲載遺物番号	登録番号	器種	法量(cm)				形態的特徴	出土構			
					口径	器高	底径	側壁					
20	-	78	293	鉢	14.0	5.4	-	-	底部欠損品。赤色陶土生有及ヘラミガキ。	褐褐色	やや悪い	不良	SD01上層
20	10	79	297	鉢	8.8	8.7	5.8	-	完形品。内外面丁寧なナデ仕上げ。	淡白色	粗い	やや不良	SD01中層
20	10	80	229	鉢	13.2	9.2	6.0	-	ほぼ完形品。作りは厚手。内面はココナチ。外面はハケ目後ナデ仕上げ。	褐~灰褐色	粗い	不良	SD01上層
20	-	81	230	鉢	14.3	9.3	6.0	-	口縁部1/2欠損品。外面はナデハケ。内面はナデテナシ。底部はすこし丸みある。	褐褐色	やや悪い	やや不良	SD01上層
20	10	82	228	鉢	9.1	10.4	6.2	11.6	完形品。内面は磨削痕。外面はハケ目後ナデ仕上げ。	褐灰~淡褐色	良	良	SD01上層
20	-	83	226	鉢	12.4	12.0	6.0	14.0	ほぼ完形品。剥落のため調査不明。	茶褐色	粗い	不良	SD01上層
20	10	84	231	鉢	12.6	12.0	6.6	12.6	1/3欠損品。全表面ハケ目後ナデケシ。外面はハケ目後ナデ仕上げ。	淡灰褐色	粗い	不良	SD01上層
20	-	85	209	鉢	14.0	12.6	6.5	-	口縁部一部欠損品。内面はナデ仕上げ。外面はナデハケ後ナデケシ。1枚荷葉基は外れ。	褐褐色	良	良	SD01上層
20	-	86	227	鉢	14.1	10.8	6.9	15.0	ほぼ完形品。内面はナデ仕上げ。外面はナデ仕上げ。底部は丸みあり。内面は茶褐色で外側は茶褐色。	褐褐色	やや悪い	不良	SD01上層
20	-	87	215	壺	13.0	-	-	-	肩~口縁部試片。内面はリムはココナチ。腰部下端に内突起を有する。(ミニチュア)	褐褐色	やや悪い	やや不良	SD01上層
20	-	88	225	壺	-	-	4.5	9.8	肩~口縁部試片。内面はリムナシ。外面はハケ目調査。(ミニチュア)	褐褐色	良	良	SD01上層
20	-	89	233	壺	-	-	6.1	12.6	肩~口縁部試片。内面はリムナシ。腰部後成る。外面はナデハケ。中盤ナデケシ。	褐褐色	粗かい	やや良	SD01上層
20	-	90	268	鉢	7.6	5.8	5.2	-	5/6欠損品。全面に磨削痕。(ミニチュア)	褐褐色	やや悪い	やや不良	SD01中層
20	-	91	306	壺	13.1	14.1	8.2	15.6	1/2欠損品。内面ナデナシ。脚部下部ハラナデ。	淡褐色	粗かい	良好	SD01中層
21	-	92	288	壺	35.0	-	-	-	口縁~肩部試片。口縁部に鋸刃、赤色剥離。	褐褐色	良	やや良	SD01中層
21	-	93	282	壺	31.8	-	-	-	口縁~肩部試片。外面は丁寧ナデハケ。口縁部はやや肥厚化。	褐褐色	良	良	SD01中層
21	-	94	279	壺	26.0	-	-	-	口縁~肩部試片。ハケ目調査後ナデ。	褐褐色	やや悪い	不良	SD01中層
21	-	95	234	壺	15.3	18.6	7.0	15.4	口縁部1/4欠損品。内外面ともハケ目。底部はリムココナチ。丸みあり。	褐褐色	やや悪い	やや不良	SD01中層
21	-	96	283	壺	18.6	-	-	17.4	口縁~肩部試片。外面に火候付行者。	褐褐色	粗い	やや不良	SD01中層
21	-	97	284	壺	18.0	-	-	-	口縁~肩部試片。内面オキトリ。外面ナデハケ。	褐~灰褐色	やや悪い	不良	SD01中層
21	-	98	285	壺	21.1	-	-	-	口縁~肩部試片。外面ナデハケ後軽くナデケシ。	褐褐色	粗かい	良	SD01中層
21	-	99	286	壺	20.0	-	-	-	口縁~肩部試片。内面ナデハケ。外面ナデハケ。	褐褐色	粗い	不良	SD01中層
21	-	100	289	大型壺	42.4	-	-	-	口縁~肩部試片。内外面ともナデ調査。	褐褐色	やや悪い	良好	SD01中層
21	-	101	307	壺	26.1	-	-	-	口縁部試片。外面ナデハケ。内面ナデ。	褐褐色	やや悪い	やや良	SD01下層
21	-	102	280	壺	33.6	-	-	-	口縁部試片。内面はハケ目後ナデ。	褐~褐褐色	やや良	やや良	SD01下層
21	-	103	308	壺	30.1	-	-	-	口縁部試片。外面ナデハケ。内面ナデ。	褐褐色	やや良	良	SD01下層
21	-	104	281	壺	31.7	-	-	-	口縁部試片。内面はハケ度ココナチ。外面はナデハケ。	褐~褐褐色	粗い	やや良	SD01下層
21	-	105	309	壺	21.6	-	-	-	口縁部試片。内面はヘラミガキ。外面ナデ。	褐褐色	良	良	SD01下層
21	-	106	275	壺	21.0	-	-	-	肩~口縁部試片。口縁部に堅厚化後成る。内面はココナチ。外面はナデケシ。内面はナデハケ。	褐褐色	良	やや不良	SD01下層
22	-	107	331	鉢	4.3	3.1	1.8	-	1/2欠損品。手平土質。全表面ナデ。	褐褐色	不良	不良	SD48

：法量の口徑は外径、器台は台上部径、() は復元値

Fig.	PL 標載 遺物 番号	登録 番号	器種	法量(cm)				形態的特徴				出土遺構	
				口徑:器高:底径:測定値	成形上の手法	色	調:胎	土:燒	成				
22	-	108	332	鉢	5.1	3.55	-	-	1/2火照品。手摩土器。	灰白色	不良	不良	SD48
22	-	109	328	壺	11.4	-	10.6	15.6	素~口縁削竹。器の強度は弱い。	黃褐色	不良	不良	SD48
22	-	110	223	鉢	13.0	6.6	4.7	-	ほぼ完形品。外底無理上打底。外側はハケ目	褐色	やや悪い	やや不良	SD48下層
22	-	111	329	壺	27.8	12.2	-	-	素~口縁削竹。底部上に残存して神社切目を施した。内側底ともナマ仕上げ。	黃褐色	やや不良	やや軟質	SD48
22	-	112	325	器台	16.5	-	-	-	脚部欠損品。脚部印き張。上台部側面に削付を施す。	淡黃褐色	やや不良	不良	SD48
22	-	113	326	器台	17.2	17.2	-	-	脚部欠損品。内部器ナマハケ。	外: 黄褐色	やや不良	やや不良	SD48
22	-	114	322	器台	16.8	23.2	22.6	-	真跡1/2火照品。内面リコハケ、外因ナマハケ、上台部内側に、状況とする。	淡赤褐色	極端悪い	やや良好	SD48下層
22	11	115	321	器台	11.5	19.0	16.0	-	完形品。内面リコハケ、外因ナマハケ、右脚は状況に応じて、底部平底。	淡赤褐色	極端悪い	やや良好	SD48
22	-	116	330	大型壺	79.0	-	-	-	口縁削竹。底部上に竹子目北緯突起。	黄褐色	やや不良	良	SD48
22	-	117	323	壺	64.2	-	-	-	脚~口縁削竹。底部上に竹子目北緯突起を施す。内外面ハケ。	暗黃褐色	やや不良	良	SD48
22	-	118	327	器台	16.6	13.6	11.7	-	脚部欠損品。古部は充実に強く内溝。	暗褐色	やや不良	やや不良	SD48
22	-	119	324	壺	57.6	-	-	-	口縁削竹。口縁削竹に別口火照貼付。	黄褐色	やや不良	良	SD48
23	11	120	320	壺	3.6	5.0	1.9	-	完形品。手摩土器。全周面ナマ。	淡灰白色	悪い	やや良好	SE23
23	11	121	319	壺	15.0	16.3	4.5	13.6	完形。内面はカキトリ剥離くナマ。外面はナマハケ。	淡~深褐色	悪い	良好	SE23
23	11	122	318	壺	25.3	37.0	6.8	27.9	ほぼ完形品。底部にサル。充實はえみあり。底部下部の孔は塵埃附着なものか。	灰~深褐色	悪い	不良	SE23
23	-	123	334	微	13.8	-	-	-	頭~口縁削。運管は上に引き出される。	淡赤褐色	良	良	SE111
23	11	124	335	器台	-	13.5	12.2	-	1/2火照品。器台は輪状に張り出す。	淡褐色	やや悪い	良	SE111
23	11	125	333	壺	15.4	30.2	8.3	25.4	完形品。口縁削部は上へ張り出される。底部はわざりに丸み台。内面はナマ。	褐~暗褐色	良	良好	SE111
23	-	126	336	壺	18.1	20.0	6.2	17.3	口縁削の火照品。口縁部の削面は削い。底部下部はカキトリ。充實はややもみあり。	淡~黒褐色	悪い	やや良好	SE112
23	-	127	338	壺	35.2	-	-	-	口内底面。外面:ハケ目。口縁下に突舌。	暗褐色	やや悪い	不良	SE113
23	-	128	340	壺	10.3	-	-	-	頭部左。内外面ハケ目ナマ削。	明褐色	良	良	SE113
23	-	129	337	壺	46.6	-	-	-	口縁削部。外面:ハケ目。口縁下に突舌。	褐褐色	良	良	SE113
23	-	130	339	壺	-	-	7.8	-	底堅片。	暗褐色	やや悪い	不良	SE113
23	11	131	341	器台	6.3	10.8	11.1	-	台部は乳を有し盛り出す。	褐色	やや悪い	不良	SE113
24	-	132	316	高杯	-	13.8	-	-	脚部削。脚には、径5mmの穿孔あり。	褐色	やや良	やや良	SX31
24	-	133	317	器台	-	-	16.8	-	上台部欠損品。外因ナマハケ。	淡褐色	やや不良	良	SX31
24	-	134	315	壺	30.9	-	-	-	頭~口縁削部。頭部外面はハケ目。	淡褐色	悪い	不良	SX31

Tab. 5 第40次調査 出土土製品・その他遺物所見一覧

* () 内の数字は復元推定値

Fig.	PL	標識番号	登録番号	名 称	法 量				形態的または製作技術的特徴	出土遺構
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
24	-	135	124	匙	8.8	2.1	1.6	-	匙の柄部分。石英砂粒を多く含む。 焼成良好。	SD01上層
24	-	136	108	匙	9.25 (9.60)	4.4	柄径 1.8cm		手握上器風に一個の粘土塊から成形したものか。焼成良好。石英砂粒を若干含む。	SD01上層
24	-	137	102	投弾	4.5	2.3	2.3	25.0	焼成良好、明褐色白色。指ナデ成形。	SD01上層
24	-	138	103	投弾	4.4	2.3	2.2	26.5	石英砂粒を若干含む。焼成良好、明褐色白色。指ナデ成形。	SD01上層
24	-	139	104	投弾	3.8	2.3	2.4	23.4	石英砂粒を多く含む。焼成良好、黒灰色。指ナデ成形。	SD01上層
24	-	140	133	投弾	3.9	2.2	2.1	25.0	ほぼ完形品。石英砂粒を含む。よく焼き締まる。褐色。	SP35
24	-	141	115	投弾	2.7	1.5	1.6	12.6	石英砂粒を若干含む。焼成やや不良、淡赤褐色。指ナデ成形。	包含層
24	-	142	116	紡錘車	直徑 4.0cm	0.5	19.7 (23.0)		石英砂粒を多く含む。焼成やや不良、淡褐色。穿孔は両面から。	包含層
24	-	143	123	青銅製鍤	3.5	1.1	0.4	-	表面は風化が進んでいる。青灰色、鏽は不明瞭。	包含層
24	-	144	132	匙	8.6 (11.0)	1.8 (2.1)	3.2	-	匙の柄部分。石英細砂を若干含む。 焼成良好。	SD48
24	-	145	109	投弾	4.8	2.5	2.4	26.4	石英細砂粒を多く含む。焼成良好、黒褐色。指ナデ成形。	SD48
24	-	146	110	投弾	4.6	2.9	2.9	27.5	石英細砂粒を若干含む。焼成良好、褐色~赤褐色。指ナデ成形。	SD48
25	10 11	147	348	取瓶	復元口径 器 高 注口部径 (24.8cm) (>14cm) (1.7cm)				体部~注口部片。木子に対し15度の両角。内面はかなり焼け赤色。表面は部分的に黒変。内面に非常にきめ細かい真土を施す。	SD01上層
26	11	148	344	取瓶	器壁厚 3.3cm				口縁部片。きめ粗く焼き締まっていない。内面は赤色に焼け、残滓が付着。	SD01上層
26	11	149	346	取瓶	注口部径 (1.5~1.8cm)				注口部片。水平に対して35度の仰角。内面には非常にきめ細かい真土を施す。	SD01上層
26	11	150	345	取瓶	底部径 (14.0cm)				底部片。きめ粗く焼成不良平面形は多角形か、円柱状の一部が直線的形狀をなす。	SD01上層
26	11	151	343	取瓶	底部高 8.4cm	底部径 12.2cm			底部破片。きめ細かい砂粒を含む。焼成良。内底部は5mm厚で赤く焼け残滓付着。	SD01上層
26	-	152	347	取瓶	復元口径 器 高 注口部径 (21.8cm) (>15cm) (1.6cm)				体部~注口部片。水平に対し33度の仰角。内面はかなり焼け赤色。焼成不良。	SD01上層
26	-	157	117	ガラス玉	直径 0.45cm	孔径 0.1cm	透明な青色。			SD01上層
26	-	158	118	ガラス玉	直径 0.40cm	孔径 0.1cm	透明な青色。			SD01上層
26	-	159	119	ガラス玉	直径 0.45cm	孔径 0.1cm	透明な青緑色。			SD01上層

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	名 称	法 量				形態的または製作技術的特徴	出土遺構
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
26	-	160	121	ガラス玉	直径 0.43cm	孔径 0.12cm			透明な青色。	SD01上層
26	-	161	122	ガラス玉	直径 0.51cm	孔径 0.21cm			透明な青色。	SD48
29	-	195	131	作業台	42.0	22.4	10.0	-	中央部分は若干窪み、擦痕・打痕等の使用痕跡。隅丸方形で四隅は面とり。器の未完成の可能性有。	SD01

Tab. 6 第40次調査 出土石器・石製品所見一覧

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	名 称	石 材	法 量				形態的または製作技術的特徴	出土遺構
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
26	-	153	096	砥石	砂岩	7.5	8.9	6.3	-	中弧、きめ細かな基底部質の砂岩で重複成石として使用。背面に上面は滑らかである。	SD01上層
26	-	154	126	砥石	砂岩	10.7	13.1	4.9	-	豊弧。上下面を武面として使用。きめはかなり粗い。	SD01上層
26	-	155	001	石錐	滑石	13.2	11.5	8.2	1,590	中央部に上下面からの穿孔(方形)。側面に1箇所同様に穿孔(円形)。刃打抜が側面に残る。	SD01上層
26	-	156	002	石錐	滑石	12.1	11.9	9.6	1,824	中央部に上下面からの穿孔(方形)。側面に1箇所同様に穿孔(円形)。刃打抜が側面に残る。	SD01上層
27	-	162	004	石包丁	砂質頁岩	12.7	5.7	0.7	-	未完成。皮形中のもので。側縁の二次調整を行っている。	SD01中位
27	-	163	009	石包丁	輝緑凝灰岩	12.7	3.8	0.8	孔間(cm) 長 2.3 裏 3.0	完品。全面研磨。裏面は正立石質。穿孔を有するようした直跡あり。かなり刃部は研ぎ込まれている。	SD01上層
27	-	164	011	石包丁	頁岩	8.8 (12.5)	4.7	0.65	孔 間 2.1cm	欠損品。全面研磨。両面から穿孔。刃部は両面から丁寧な研磨。	SD01上層
27	-	165	013	石包丁	頁岩	12.2 (13.0)	4.6	0.7	孔 間 2.2cm	一部欠損品。全面丁寧な研磨。左右両対称で、団右側の刃部が研ぎ込まれている。	SD01上層
27	-	166	029	砥石	粘板岩	13.4	1.2	0.8	-	仕上げ済。一部欠損品。先端に金属器の削痕残る。	SD01上層
27	-	167	005	石包丁	砂質頁岩	8.5	5.9	0.6	-	未完成。皮形中のもので。側縁の二次調整を行っている。二次調整の初期のもの。	SD01上層
27	-	168	012	石包丁	頁岩	5.3 (13.0)	4.9	0.5	-	欠損品。片面は未研磨。両面から穿孔。刃部は両面から研磨、片面に近い。	SD01上層
27	-	169	006	石包丁	硬質頁岩	4.2	5.3	0.4	-	欠損品。全面丁寧な研磨。刃部は両面から研磨。穿孔は見えない。	SD01上層
27	-	170	030	紛糾車	片麻岩	直径 5.1cm 孔径 0.8cm		1.0	28.5 (30.0)	一部欠損品。全面的に丁寧な研磨。孔部は両面から研磨。穿孔は見えない。	SD01上層
27	-	171	031	鉗	黒曜石	2.6	1.7	0.5	-	かえり基部が若干欠損。大分野基底の手荒明治白色の黒曜石。二次調整は丁寧。	SD01中層

* () 内の数字は復元推定値

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	名 称	石 材	法 量				形態的または製作技術的特徴	出土遺構
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
27	-	172	003	石錐	頁岩	17.3	6.4	0.7	-	完形成。基部上縁に抉り。刃部は上端半分を背面から研磨。基部は研磨していない。	SD01上層
28	-	173	020	叩石	花崗岩	6.9	5.9	3.4	226	完形成。角部を素材とする。使用痕は経過の角部に集中してみられる。	SD01中層
28	-	174	022	叩石	石英岩	5.8	5.7	3.7	188	完形成。角部を素材とする。使用痕は経過の角部に集中してみられる。両面に凹み。	SD01中層
28	-	175	023	石剣	泥質頁岩	5.3	3.9	0.95	-	身欠損品。刃部は直交して丁寧に研ぎ出している。柄は譲者ではなく、嵌打妻が残る。	SD01中～下層
28	-	176	024	石剣	泥質頁岩	8.4	4.0	1.25	-	身欠損品。全体的に丁寧な研削を施す。端を明確に研ぎ出す。断面形は菱形。	SD01上層
28	-	177	027	砥石	粘板岩	16.2	3.6	2.6	-	仕上げ砥。欠損品。	SD01中～下層
28	-	178	025	砥石	粘板岩	8.3	4.0	0.5	-	仕上げ砥。欠損品。	SD01中～下層
28	-	179	016	叩石	安山岩	10.1	8.5	6.4	768	完形成。表面側に直打による凹みあり。側面には使用者が差別的に残る。	SD01中層
28	-	180	017	叩石	砂岩	8.1	7.0	8.0	572	完形成。表面側に直打による凹みあり。全部で使用痕が残り、部分的に集中して使用。	SD01中層
28	-	181	018	叩石	花崗岩	7.7	7.4	7.2	554	完形成。全面的に使用痕が残る。側面が特に嚴重な使用者は直打形。	SD01上層
29	-	182	063	石斧	玄武岩	15.2	7.5	5.3	-	基部、刃部が欠損。今山型。表面には直打痕が残る。直打具として利用されたもの。	SD48
29	-	183	054	石包丁	輝緑凝灰岩	7.5	4.1	0.5	2.6cm	孔 間 欠損品。素材は玄武岩。刃部中央にかなり使用され研ぎ減っている。	SD48
29	-	184	065	鐵	黒曜石	1.5	1.3	0.2	2.5	完形成。玄武岩質玄武岩。二次調整は玄土とも丁寧。	SD48
29	-	185	056	石剣	頁岩	3.4	2.5	0.8	-	切先、欠損品。表面はかなり風化。端は明確。	SD48
29	-	186	057	砥石	粘板岩	8.0	1.5	1.0	-	仕上げ砥。4面とも研ぎ面として使用。刃部等の細部研磨に使われたものか。	SD48
29	-	187	055	石剣	粘板岩	8.1	4.3	1.4	-	身、欠損品。全面に丁寧に研磨刃部はほぼ直交して研ぎ出している。端は明確。	SD48
29	-	188	064	有溝石錐	滑石	6.1	3.1	1.4	45	ほぼ完形成。断面V字形の溝が表面に十字状に彫られる。溝幅は3.5mm。	SD48
29	-	189	078	石剣	頁岩	5.0	3.15	0.5	-	切先、欠損品。端は不明瞭で、身は平坦に研がれている。	包含層 黒褐色粘質土
29	-	190	083	紡錘車	滑石	直径 4.4cm 孔径 0.7cm	0.5	22.5	-	斜状の灰色滑石を素材とする。全面丁寧な研磨。	包含層 黒褐色粘質土
29	-	191	082	紡錘車	滑石	直径 5.10cm 孔径 0.75cm	1.2	30.5	-	やや硬質の黒褐色滑石を素材とする。全面丁寧な研磨。側縁には削り跡が一部残る。	包含層 黒褐色粘質土
29	-	192	074	石包丁	輝緑凝灰岩	9.2	3.7	0.6	孔 間 2.3cm	丁寧な研磨。	包含層 黒褐色粘質土
29	-	193	073	石包丁	砂質頁岩	10.0 (14.5)	5.1	0.6	孔 間 2.3cm	欠損品。表裏には一端研磨打ちを残す。刃部は丁寧な研磨。方舟表裏には付着部分が付着し光沢。	包含層 黒褐色粘質土
29	-	194	076	石包丁	泥質片岩	8.9	4.8	0.8	孔 間 2.3cm	ほぼ完形成。左右側縁に抉り。基部は自然倒壊のまます。刃部には付着部分が付着し光沢有り。	包含層 黒褐色粘質土

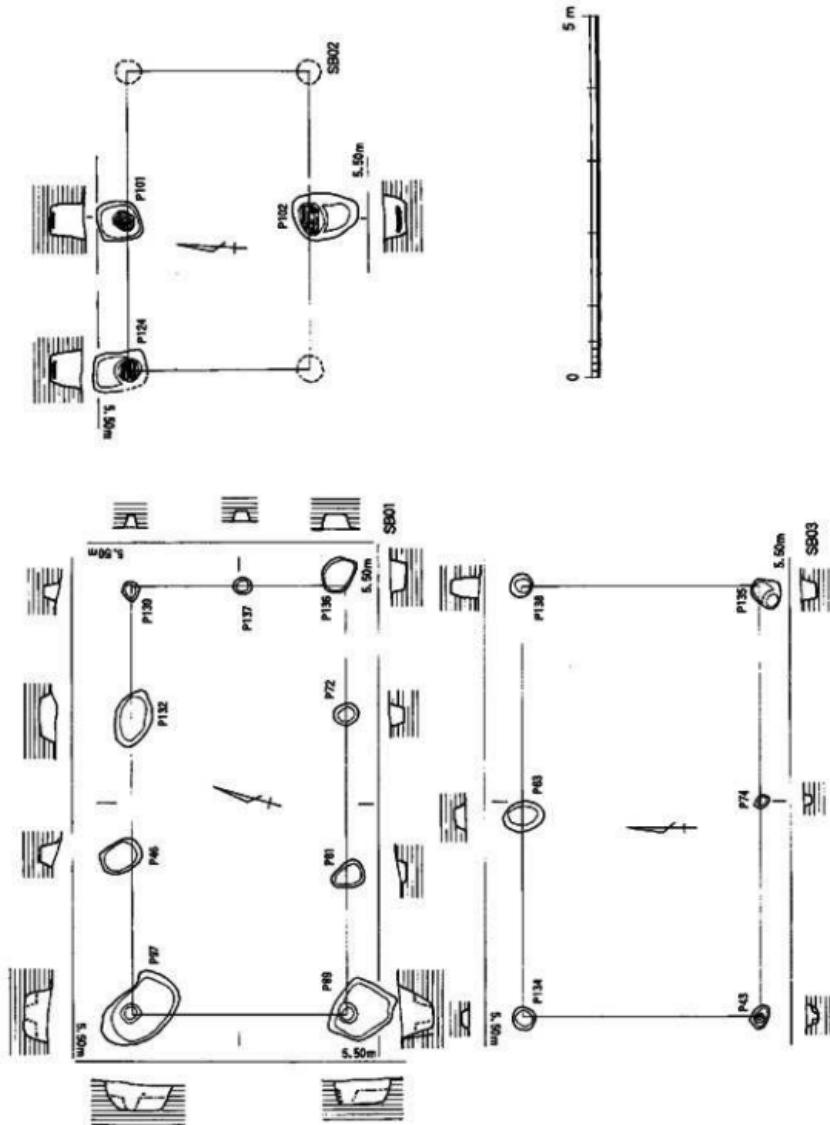


Fig. 9 据立柱建物SB01~03平面および断面図 (1/80)

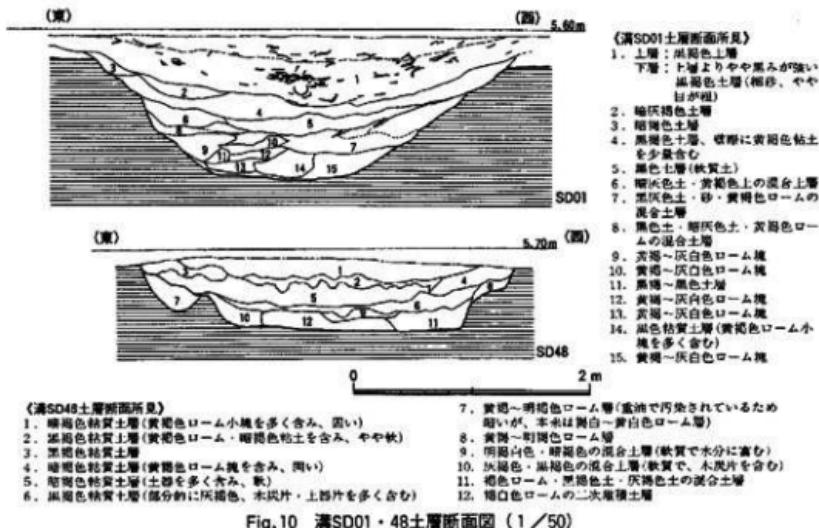


Fig.10 溝SD01・48土層断面図 (1/50)

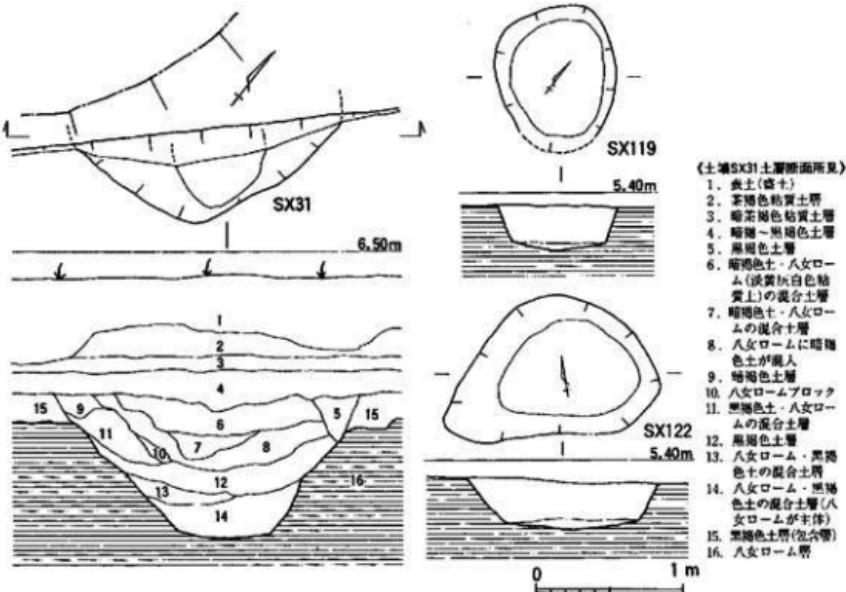


Fig.11 土壤SX31・119・122平面および断面図 (1/40)

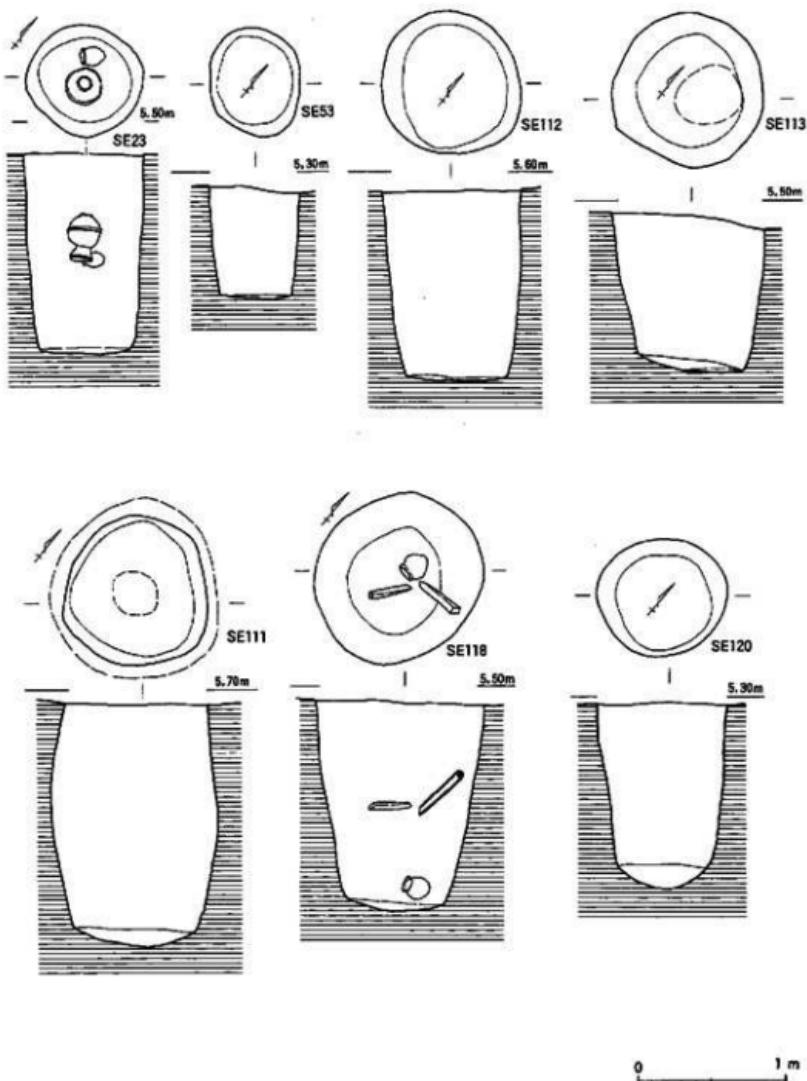


Fig.12 井戸SE23・53・111~113・118・120平面および断面図 (1/40)

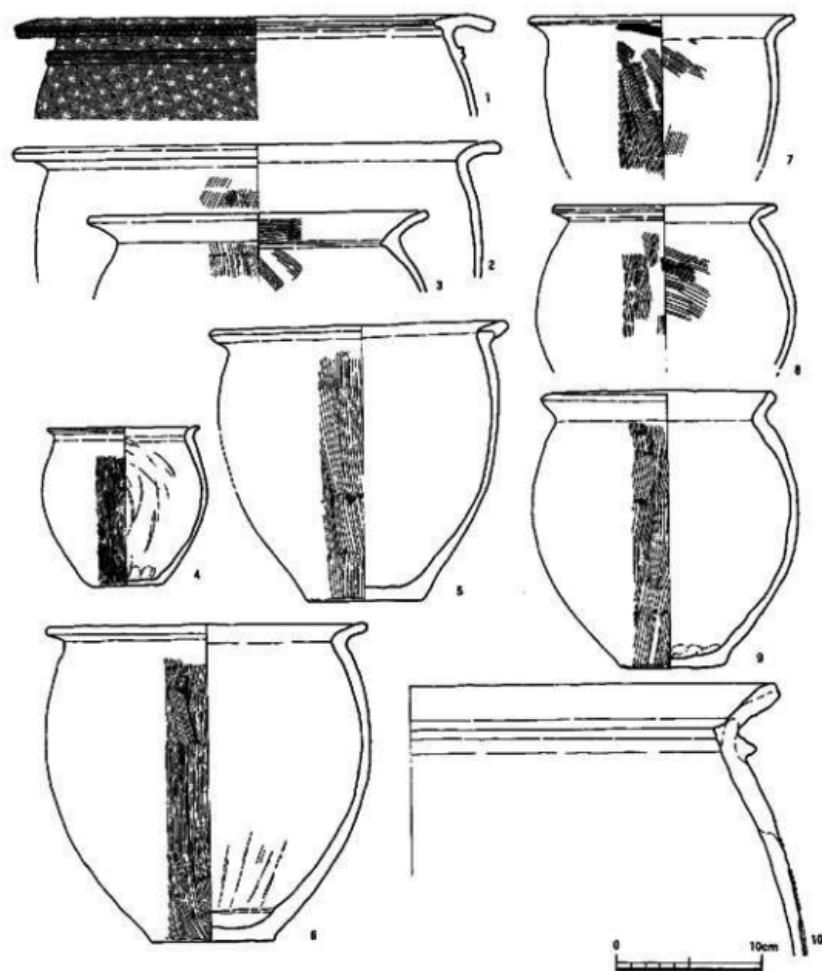


Fig.13 溝SD01上層出土遺物実測図（1／4）

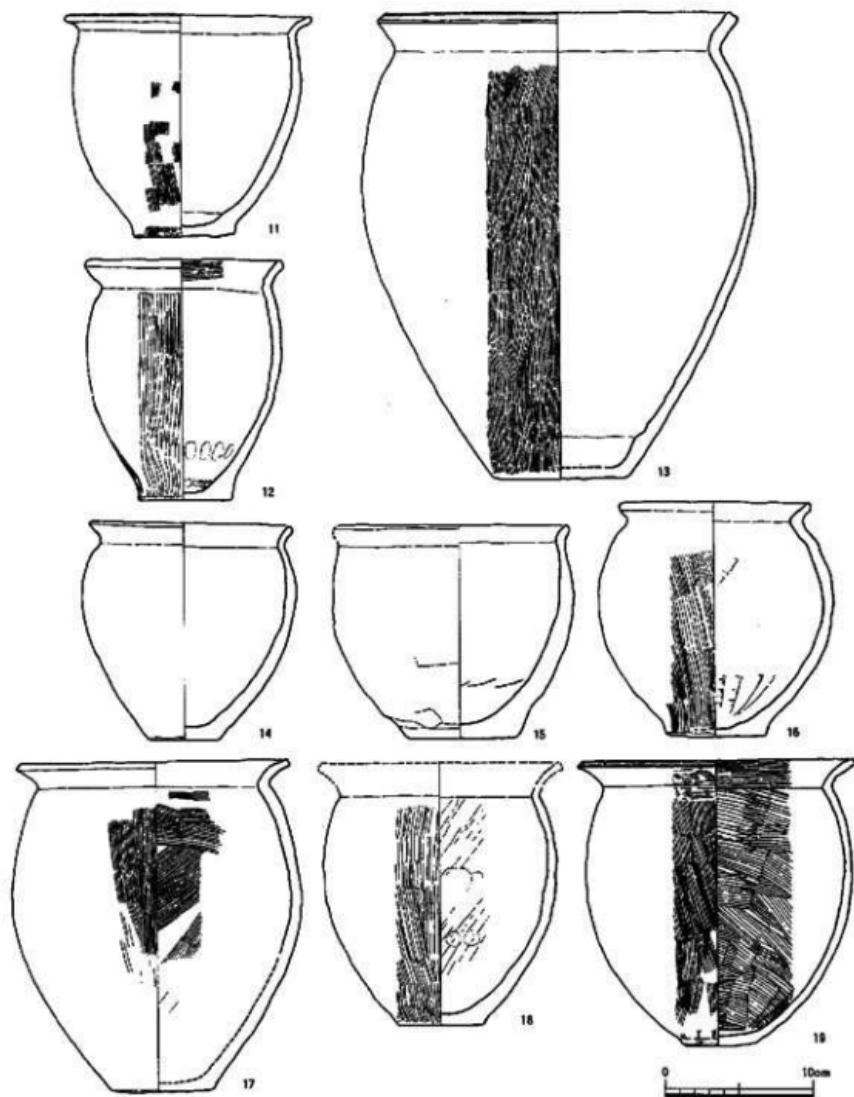


Fig.14 溝SD01上・中層出土遺物実測図（1／4）

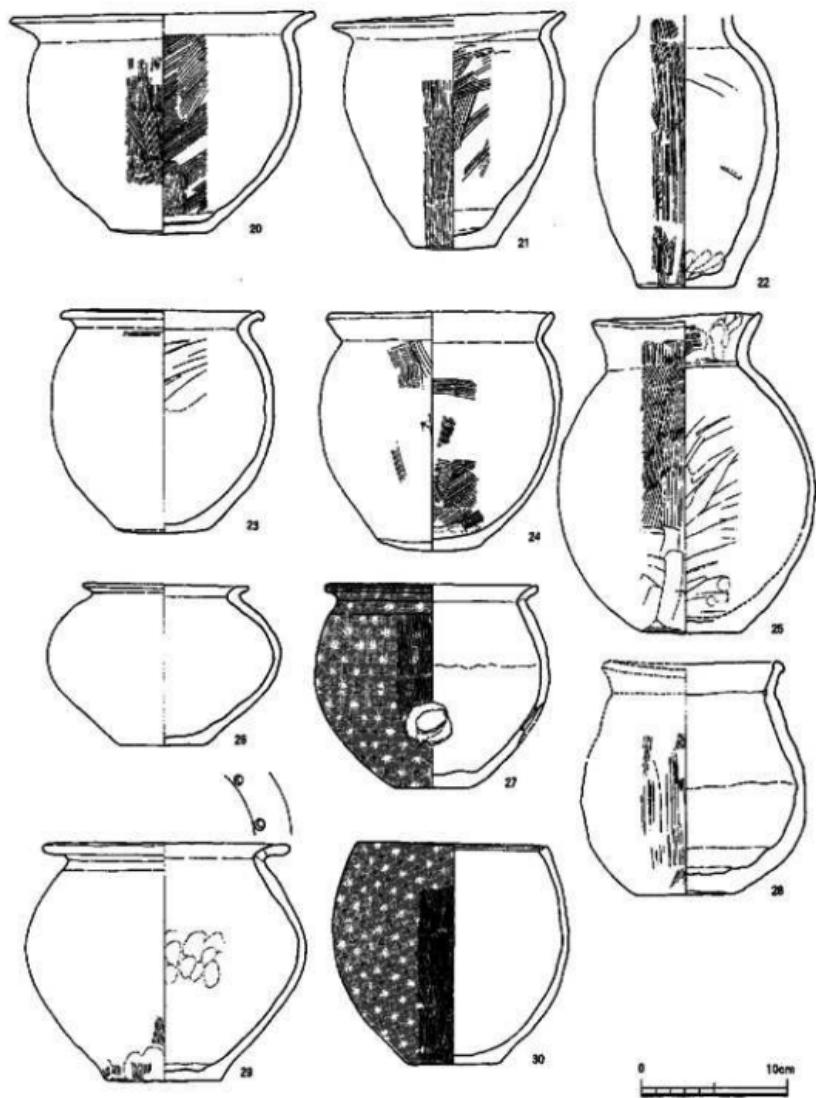


Fig. 15 満SD01上層出土遺物実測図 (1/4)

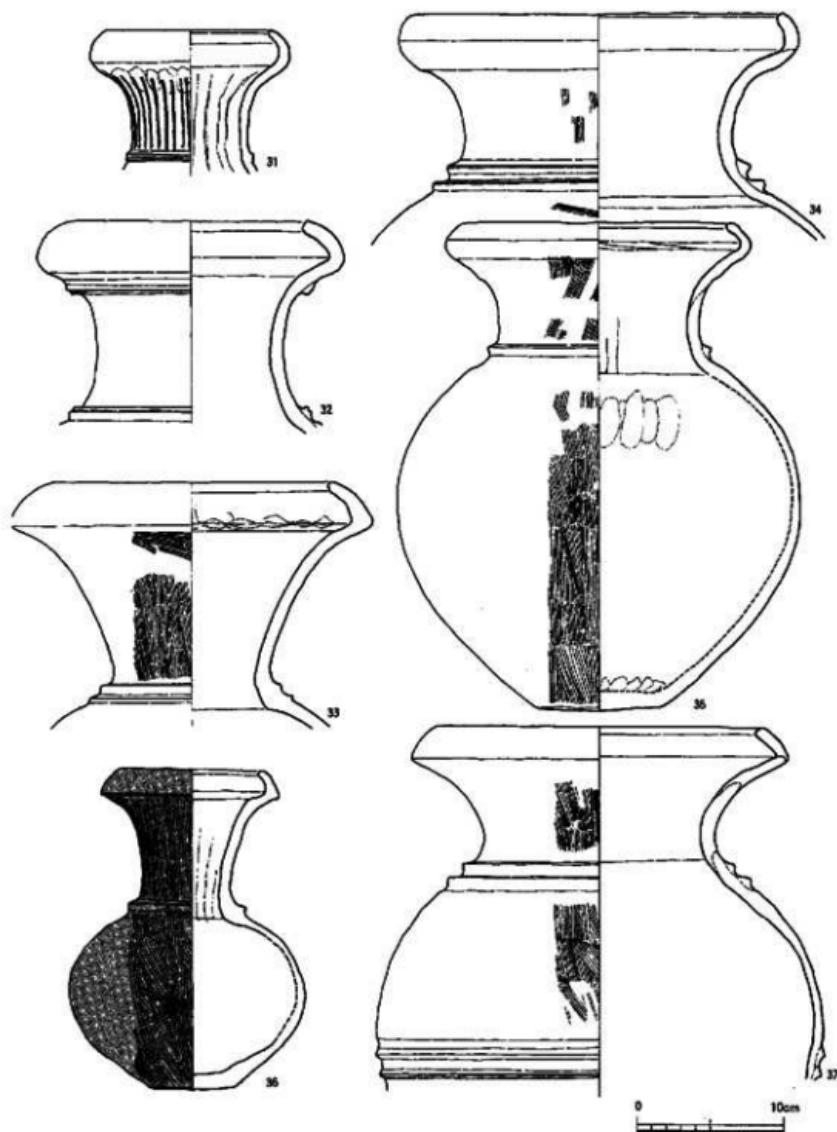


Fig.16 满SD01上層出土遺物実測図 (1/4)



Fig.17 満SD01上・中層出土遺物実測図（1／4）

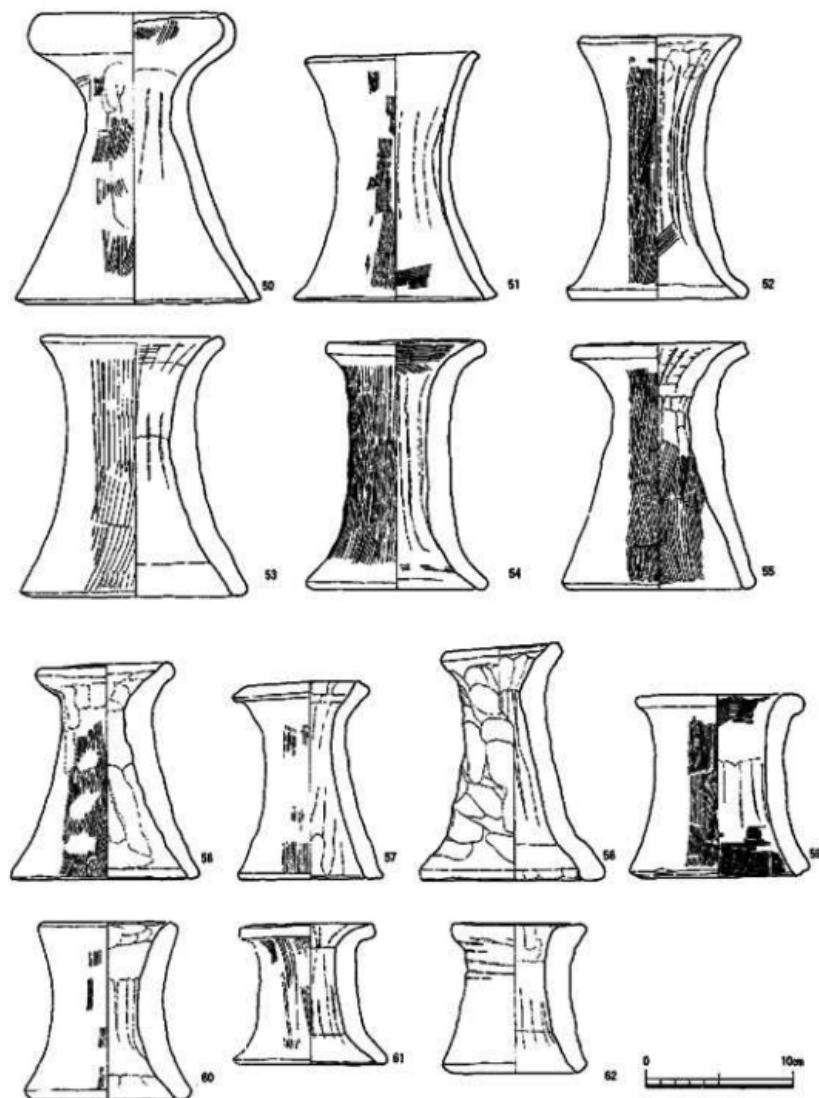


Fig. 18 溝SD01上・中層出土遺物実測図 (1/4)

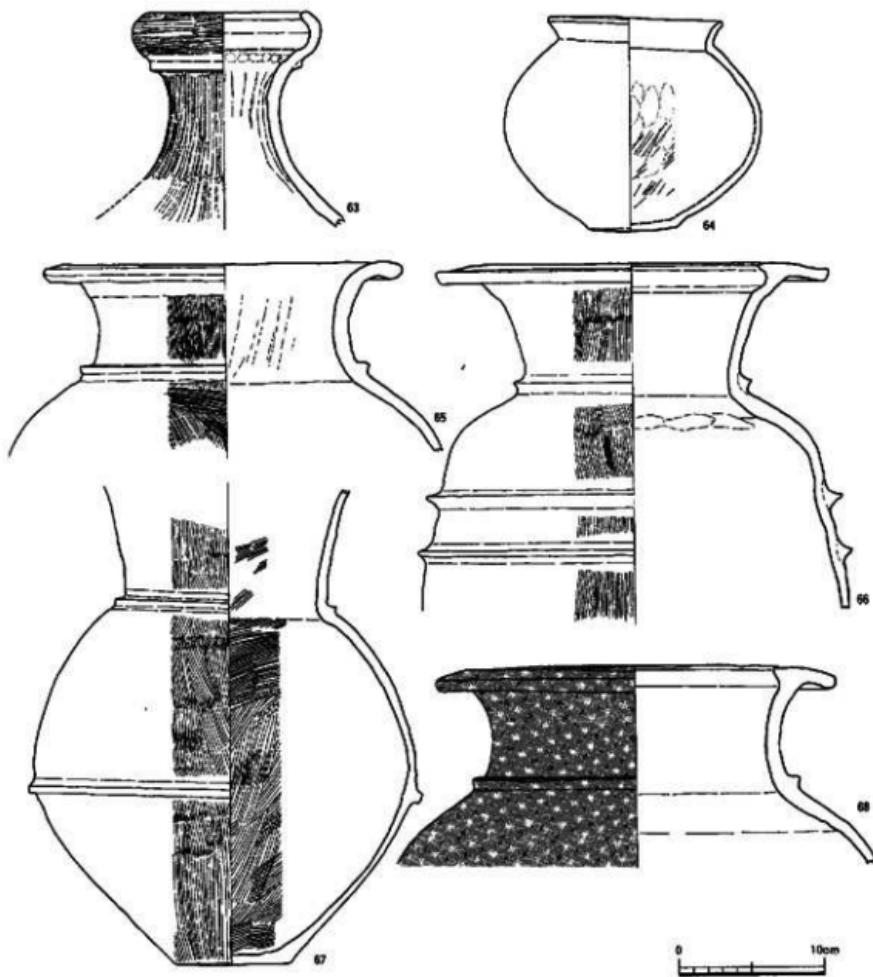


Fig.19 满SD01上・中層出土遺物実測図 (1/4)

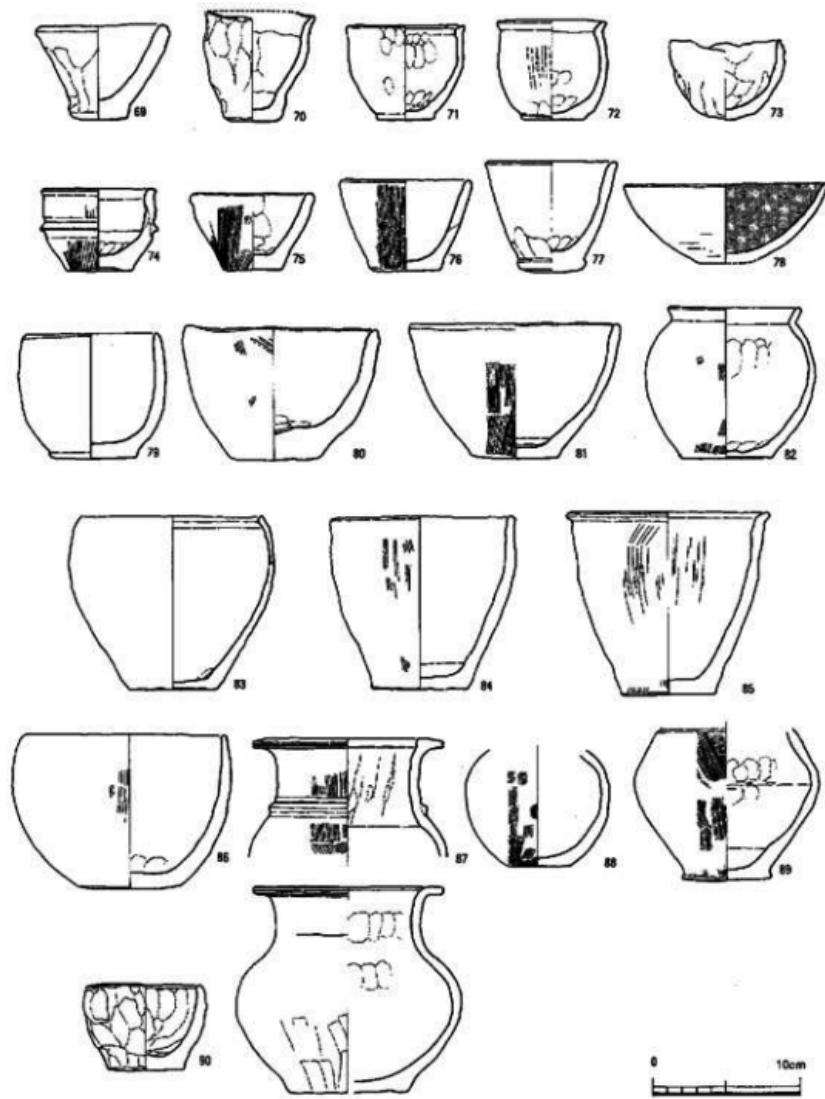


Fig.20 溝SD01上・中層出土遺物実測図 (1/4)

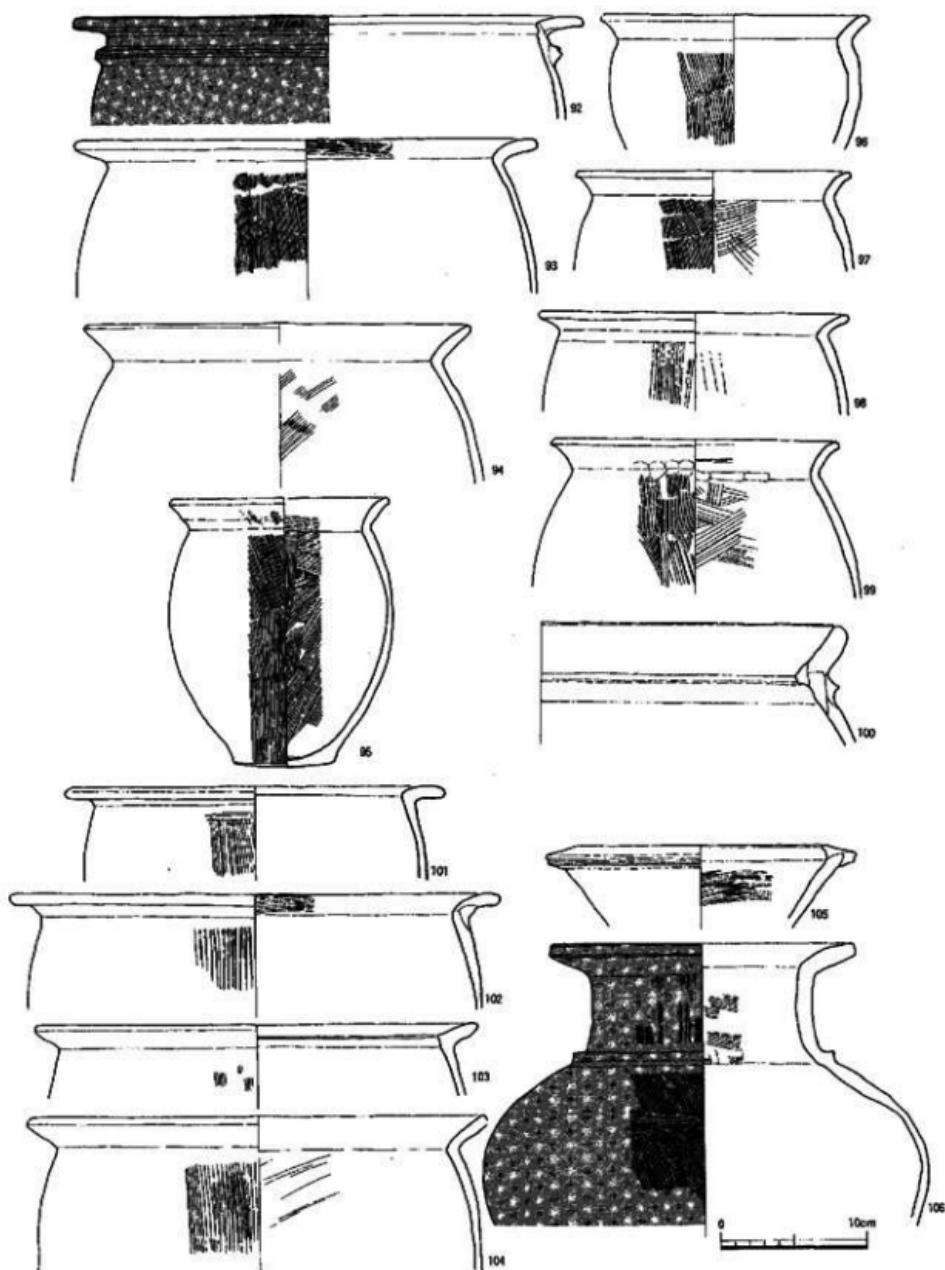


Fig.21 満SD01中・下層出土遺物実測図（1／4）

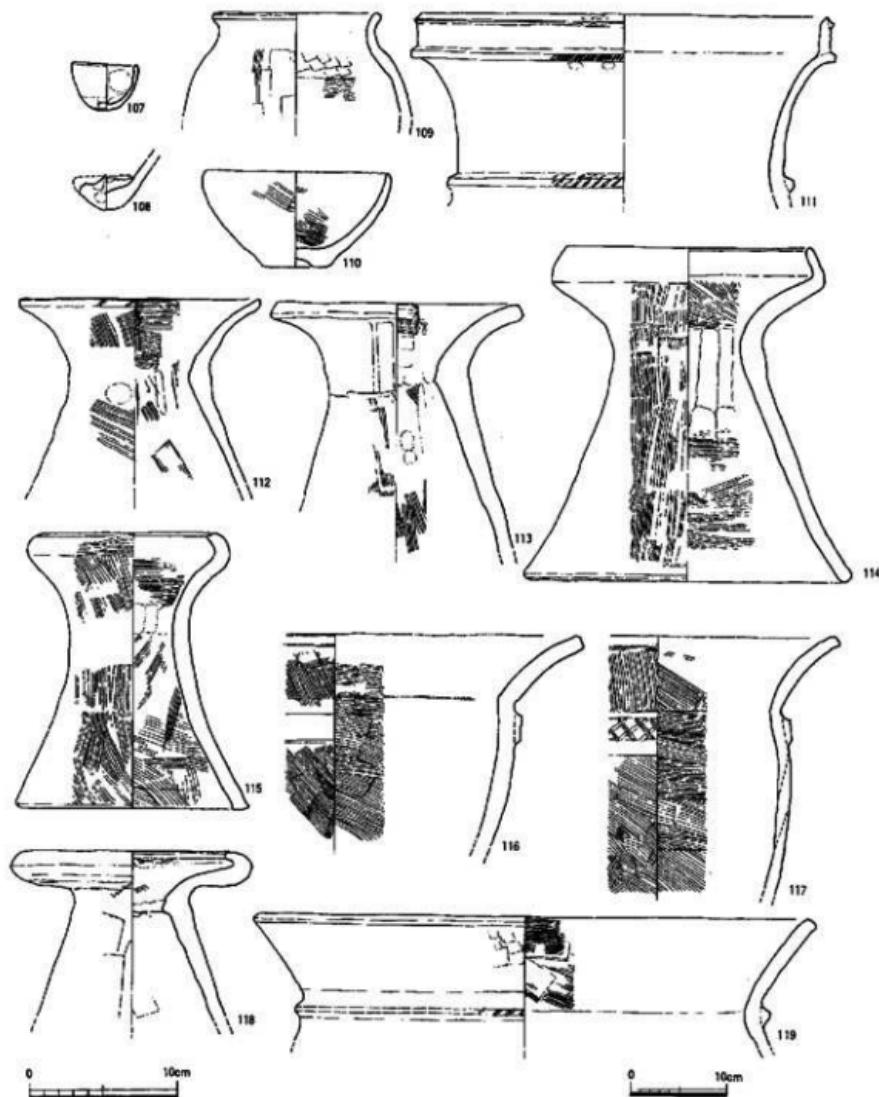


Fig.22 溝SD48出土遺物実測図 (1/4・1/6)

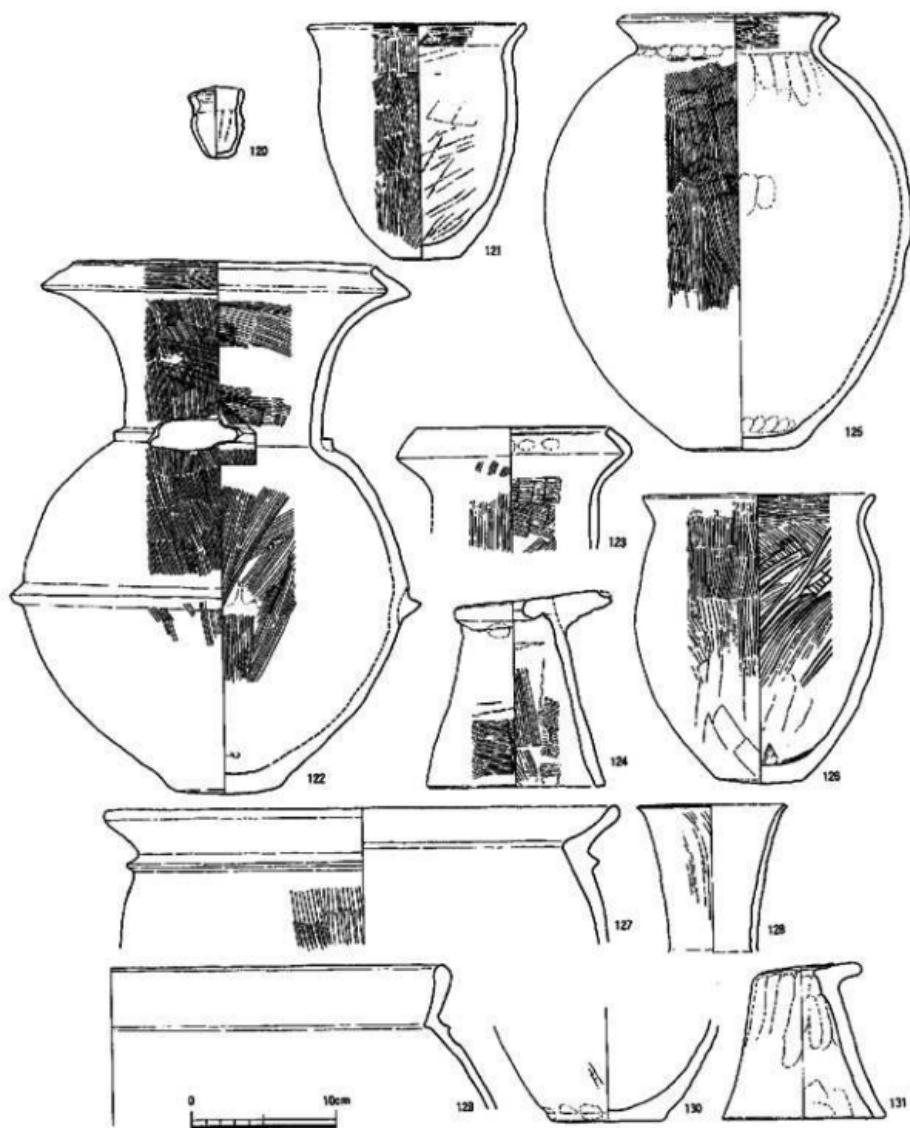


Fig. 23 井戸SE23・111・112・113出土遺物実測図 (1/4)

(120~123: SE23, 125~126: SE111, 129: SE112, 127~131: SE113, 124: SE118)

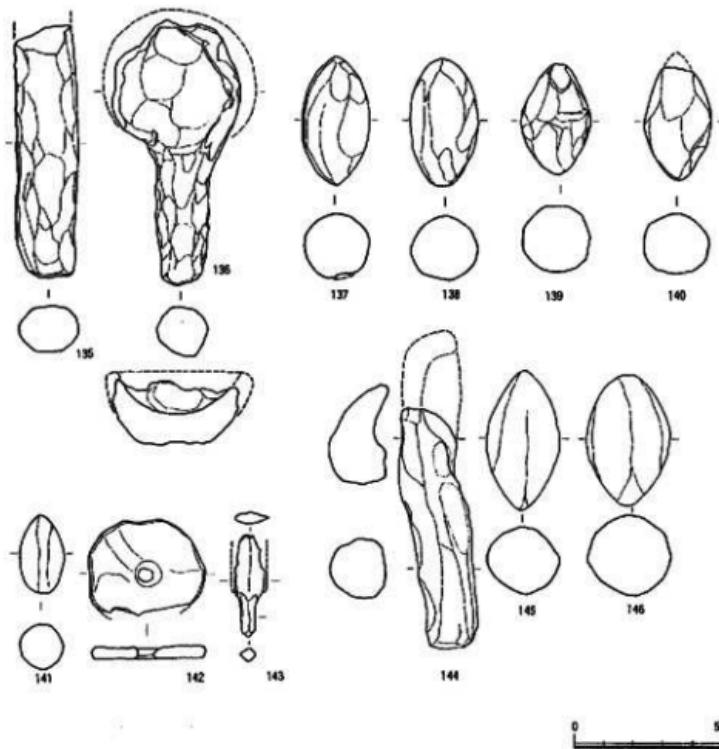
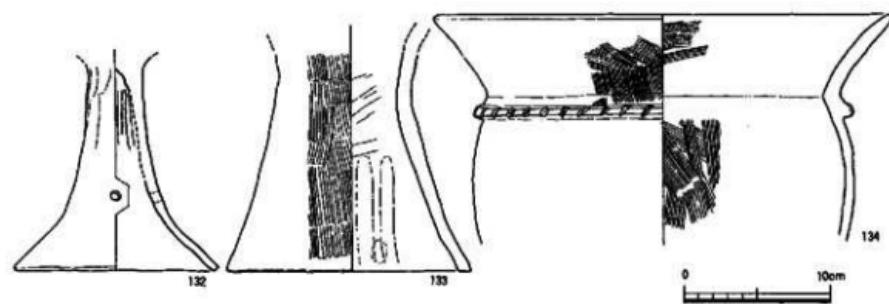


Fig. 24 土壌SX31・溝SD01・SD48、包含層出土遺物実測図(1/2・1/4)

(132-134: SX31, 135-139: SD01, 140-143: 包含層, 144-146: SD48)

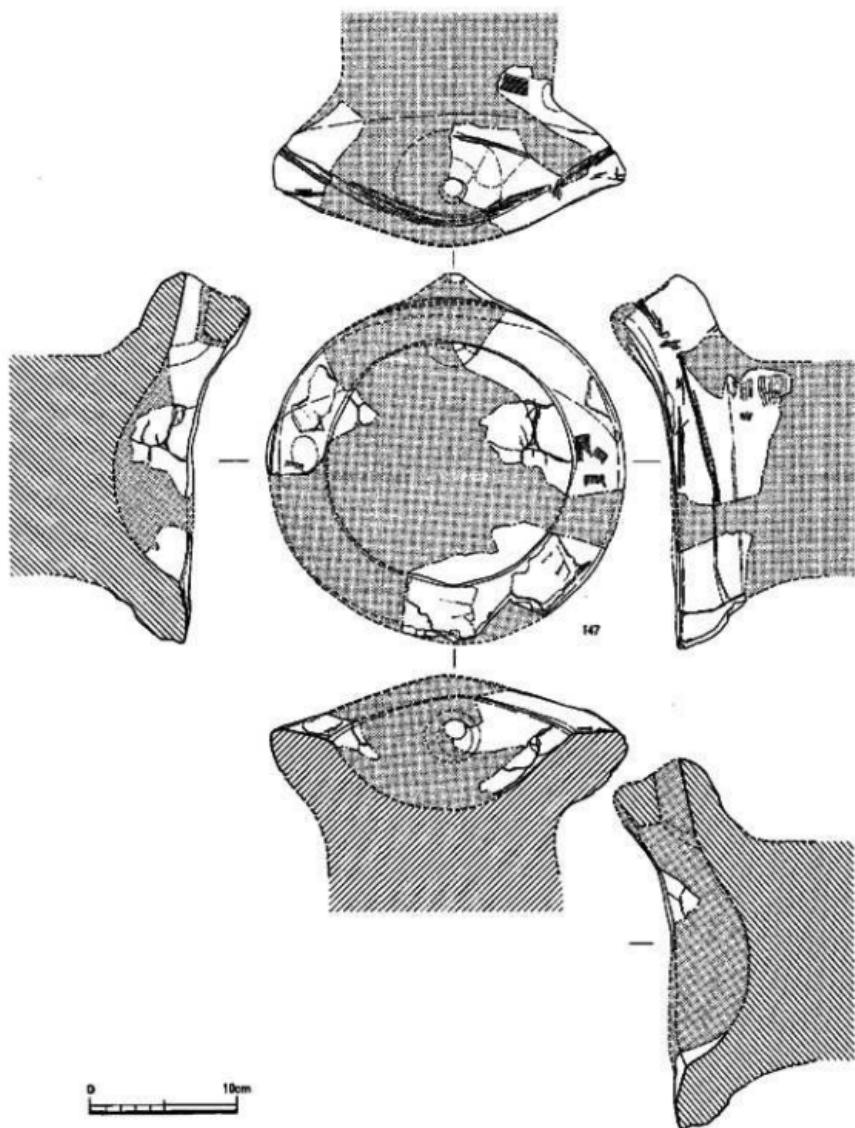


Fig. 25 溝SD01出土土製取瓶復元実測図（1／4）

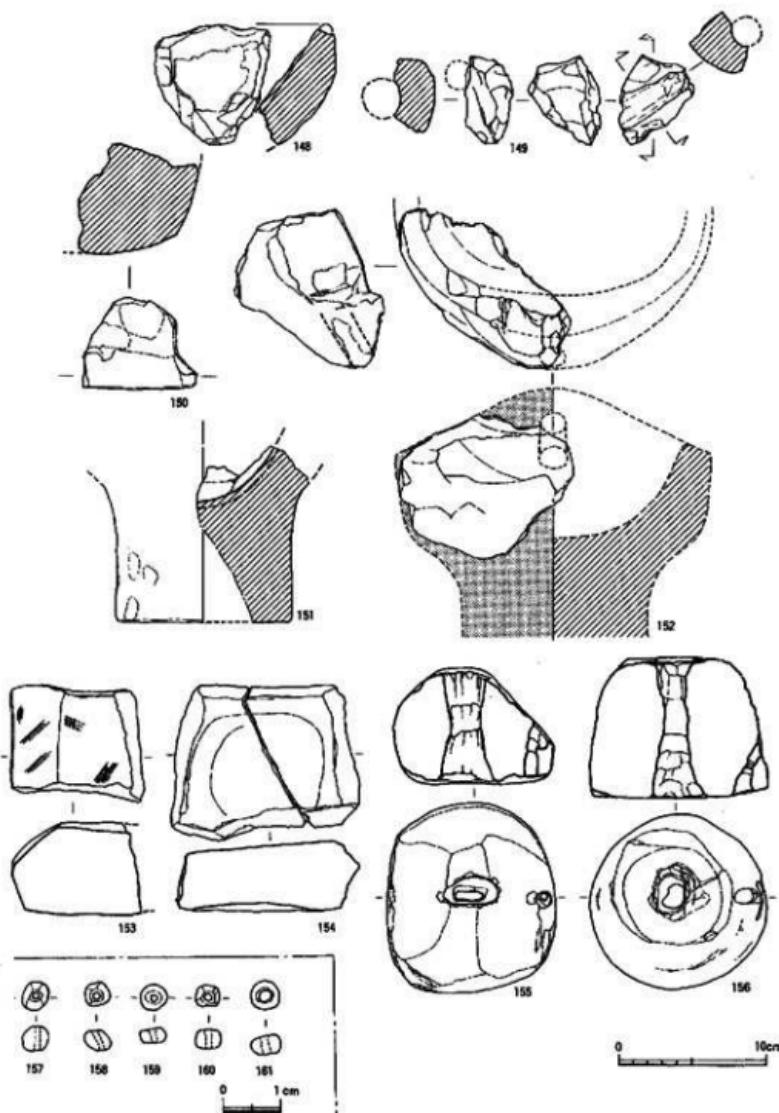


Fig. 26 溝SD01・48出土遺物実測図 (1/1・1/4)

(148-161: SD01, 152: SD48)

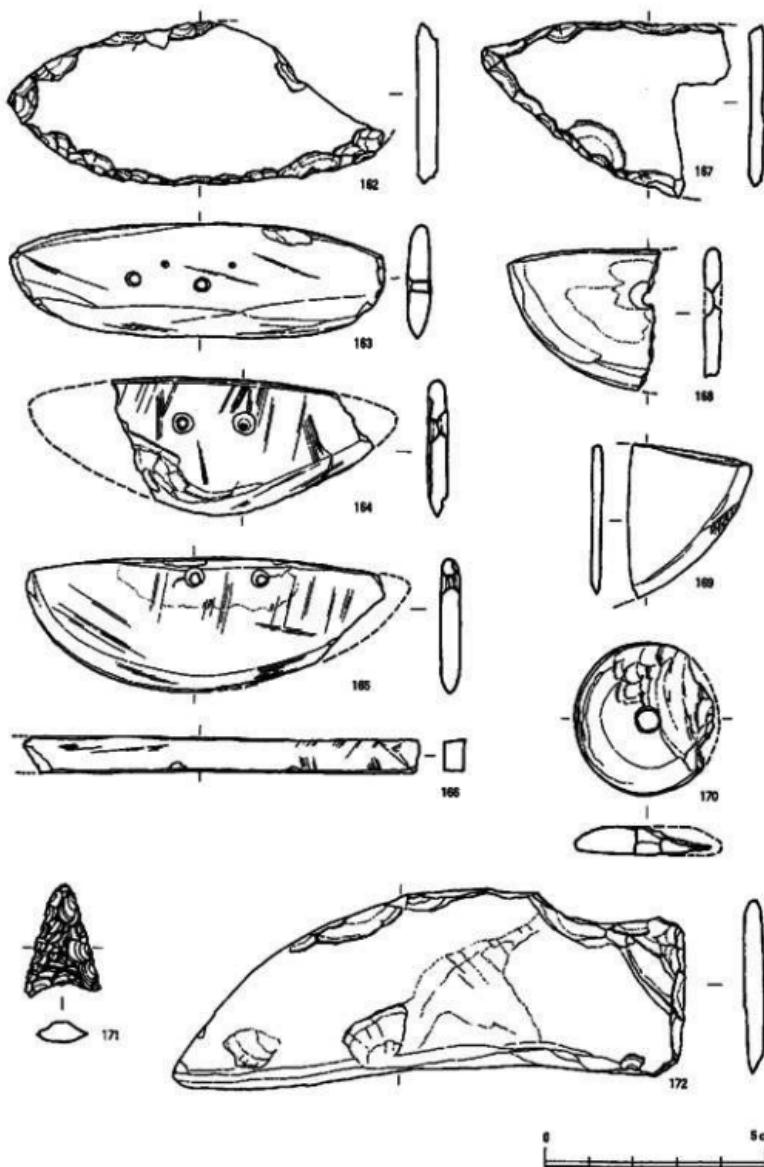


Fig.27 満SD01出土遺物実測図 (1/2)

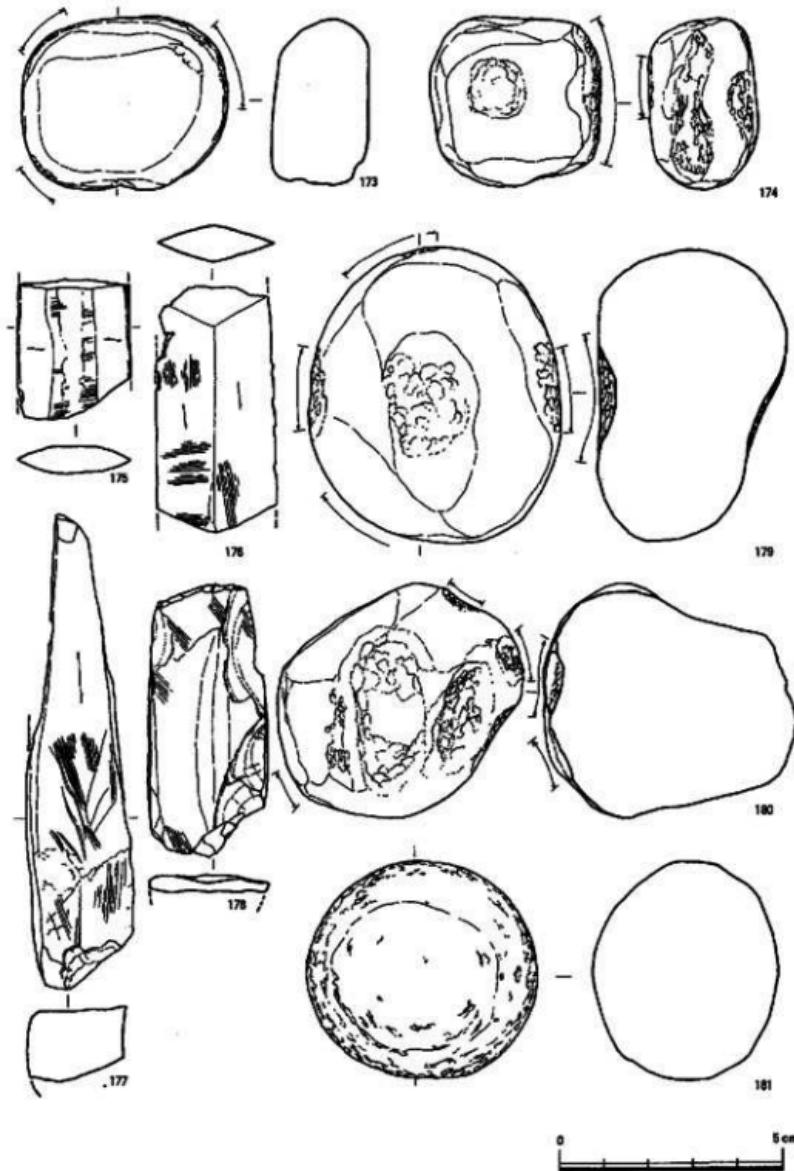


Fig.28 漢SD01出土遺物実測図 (1/2)

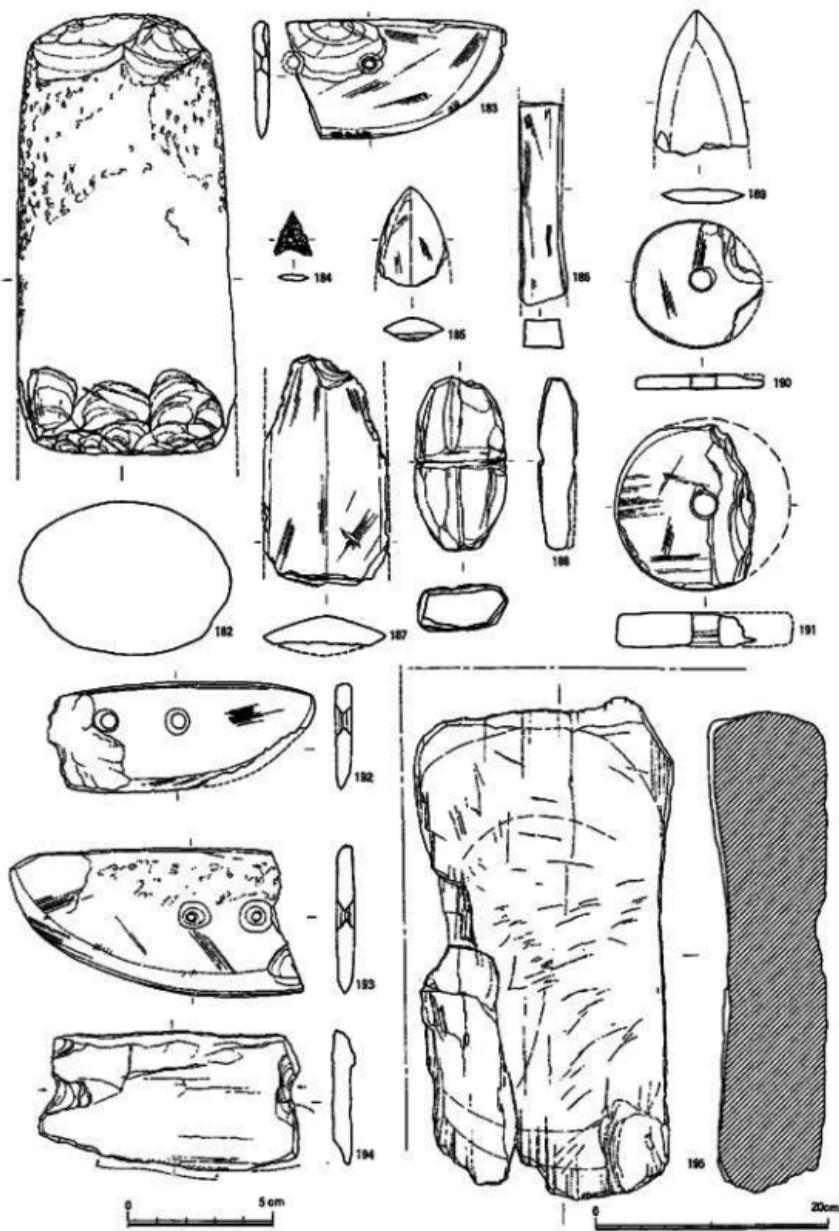


Fig. 29 漢SD01 · 48、包含層出土遺物実測図 (1/2 · 1/5)

(182~186 : SD48, 189~194 : 雜食器, 195 : SD01)

3、第42次調査

(1)概要

本調査区においては、弥生時代中期から古墳時代後期までの遺構と遺物を確認した。

検出した遺構は、柱穴554、掘立柱建物22棟、堅穴住居跡15基、溝2条、井戸20基、土壙37基、方形周溝墓？1基である。遺構の重複と後世の削平によって遺存状況は全般的に悪い。

掘立柱建物は調査区中央から南東側にかけて分布している。弥生時代後期から古墳時代にかけてのものである。堅穴住居跡は、弥生時代中期から後期のものと古墳時代前期のものがある。平面形は円形および長方形である。規模は一辺約4~5mの小規模のものが多い。溝は江戸時代の灌漑用溝と、中世のものがある。井戸は、弥生時代後期前半から半ばと、弥生時代終末から古墳時代初頭のものがある。くり貫きの井筒を持つSE506以外はすべて素掘りの井戸である。規模は、検出面での直径が80cm前後で、深さが1mほどのものと、直径が1mを超し、深さが2~2.5mの大型のものがある。また、埋め戻す際に大量の上器を投棄しているものと、まったく遺物を含んでいないものがある。土壙は、平面形がいずれも不定形で、断面形は浅皿状のものが多い。

出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、石器、土製品、石製品、木製品などが出土している。遺物の出土量は、弥生時代中期から後期のものが主体を占め、古墳時代初頭、中世にかかるものがわずかに出土している。なお石製広形銅矛鋤型369は、第40次調査で出土した土製取瓶147~152(39・40頁)とともに、比恵遺跡群における弥生時代後期後半~末の青銅品生産の実態を知る貴重な資料である。

(2)掘立柱建物 (SB)

調査区全体において554の柱穴を検出した。埋土は暗褐色~黒褐色粘質土で、平面形は円形や隅丸方形のものなどがある。これらは弥生~古墳時代を主とするが、一部中世にかかるものがある。また掘立柱建物だけでなく、堅穴住居の柱穴も含まれている。柱穴の形態と配列、埋土等の共通性からみて22棟の建物を推定復元した。

SB01 (Fig. 31, Tab. 7)

調査区中央東壁側に位置する間取り 2×3 間の東西棟である。梁行4.2m、桁行約5.94mの規模である。東西の両妻には中柱が南壁寄りにある。SE30に切られている。弥生時代後期。

SB02 (Fig. 31, Tab. 7)

調査区中央東壁にかかっている。間取りは 1×2 間もしくは 2×2 間が考えられる。梁行2.46m以上、桁行4.5mの規模である。堅穴住居跡SC169から切られている。古墳時代のものか。

SB03 (Fig. 31, Tab. 7)

調査区中央東壁寄りに位置し、SB02と重複している。先後関係は不明。間取りは 2×3 間か。梁行は約4m前後、桁行は5.97mの規模の東西棟である。弥生時代後期と考えられる。

SB04 (Fig.31、Tab. 7)

調査区中央東壁寄りに位置する。堅穴住居跡SC231を切り、SC207から切られている。間取りは 1×2 間で、梁行2.9m、桁行約4.3mの規模の東西棟である。弥生時代後期。

SB05 (Fig.31、Tab. 7)

調査区中央やや北側に位置する。間取りが 2×2 間の南北棟である。梁行3.3m、桁行約4.2mの規模である。SE162を切っている。古墳時代か。

SB06 (Fig.31、Tab. 7)

調査区中央北側に位置する。間取りが 2×2 間の東西棟である。西側妻の中柱は未確認。梁行3.2m、桁行3.5mの規模である。SC63を切っている。古墳時代か。

SB07 (Fig.32、Tab. 7)

調査区中央南西部に位置する。間取りが 1×2 間の細長い東西棟である。梁行1.94m、桁行4.09mの規模である。SC692から切られている。弥生時代中期か。

SB08 (Fig.32、Tab. 7)

調査区北壁中央にかかる。間取りが 1×2 間もしくは 2×2 間の建物である。SB22から切られている。古墳時代か。

SB09 (Fig.32、Tab. 7)

調査区中央南西部に位置する。間取りが 2×2 間の東西棟である。南側中柱は未確認である。梁行4m、桁行4.3mの規模である。古墳時代のものか。

SB10 (Fig.32、Tab. 7)

調査区南壁中央にかかる。間取りが 2×2 間の建物である。一辺3.55m前後の規模である。古墳時代の住居跡SC324を切っている。出土遺物・柱間取りからみて、古墳時代後期以降のものと思われる。

SB11 (Fig.32、Tab. 7)

調査区南東壁にかかる。間取りが 2×2 間の建物である。一辺約5mの正方形となる。SC324を切り、SB10から切られている。建物中央東柱は未確認である。東側柱には柱根痕が残っている。古墳時代後期か。

SB12 (Fig.32、Tab. 7)

調査区中央南側に位置する。間取りが 1×2 間の南北棟である。梁行約2.9m、桁行約4.4mの規模で、SX629、SC324から切られている。弥生時代中期または後期か。

SB13 (Fig.33、Tab. 7)

調査区中央東側に位置する。間取りが 2×2 間の東西棟である。梁行は約4mあり東側辺にも中柱があった可能性がある。弥生時代後期の住居跡SC364、古墳時代のSC366から切られている。古墳時代後期のものか。

SB14 (Fig.33、Tab. 7)

調査区北側に位置する。 1×2 間の間取りが考えられる。柱間は3.4m前後ある。柱掘方は

平面形が矩形で、底面の形状と埋土(黒色粘質土)の堆積状況から礎板があった可能性がある。

SB15 (Fig.33, Tab. 7)

調査区南側に位置する。2×2間の間取りで束柱がある。東西にやや長い建物である。梁行約4m、桁行4.4mの規模である。SC366から切られている。古墳時代のものである。

SB16 (Fig.33, Tab. 7)

調査区南壁中央東側にかかる。間取りが1×2間の南北棟である。梁行約2.6m、桁行約4.3mの南北棟である。SC692よりは古い可能性がある。弥生時代中期か。

SB17 (Fig.33, Tab. 7)

調査区南東隅に位置する。間取りが2×2間の東西棟である。一辺が約3.3mほどの規模である。古墳時代のSC280を切っている。

SB18 (Fig.33, Tab. 7)

調査区南東隅に位置する。間取りが2×2間で、東西にやや長い建物である。梁行は約3.3m、桁行は約4.4mの規模である。井戸SE448を切っている。

SB19 (Fig.34, Tab. 7)

調査区南隅に位置する。間取りが1×2間の細長い東西棟である。梁行は約2.6m、桁行約4.8mの規模である。古墳時代初頭以降の井戸SE506から切られている。

SB20 (Fig.34, Tab. 7)

調査区南西隅に位置する。2×2間の間取りの建物である。一辺は約3.4mの規模である。SE506を切っている。古墳時代初頭～前期か。

SB21 (Fig.34, Tab. 7)

調査区中央東側に位置する。間取りが2×2間の南北軸がやや長い建物である。梁行は約4m、桁行約4.4mほどの規模である。SC231を切り、SE230から切られている。弥生時代後期前半以降のものか。

SB22 (Fig.34, Tab. 7)

調査区北壁中央にかかる。2×2間の間取りか。SB08、SB21を切っている。古墳時代か。

出土遺物 復元した掘立柱建物の各柱穴埋土からは弥生時代～古墳時代の遺物が出土しているが、ほとんどが小片で、図示できるものは少ない。

SB01(SP 36)弥生時代中期末の壺口縁片196が出土している。

SB07(SP402)弥生時代後期の支脚207、中期壺底部片210・211が出土している。

SB10(SP361)古墳時代前期上師器壺209が柱抜き跡からほぼ完形で出土している。

SB13(SP451)弥生時代後期半ばの壺底部212が出土している。

以上の他に柱穴からは、弥生時代中期後半の壺口縁部片197(SP94)、中期末の壺口縁部片198(SP119)、後期の支脚199～201(SP294)、後期初頭の壺205、丹塗磨研上器器台脚部208(SP308)、中期後半～末のミニチュア鉢202、小型鉢203(SP323)、丹塗壺201(SP376)、後期大型壺206(SP400)、後期後半～末の器台310(SP470)、また土製筋鉢車352(SP156)、投弾353(SP451)、竹包

Tab. 7 第42次調査 据立柱建物一覧表

(先→後、・切合関係不明)

Fig.	PL	造構 (SB)	規模 (間)	基模(m) 桁行 素行	棟方向	床面積 m ²	柱穴番号 (SP)	先後関係
31	-	01	2×3	5.93	N- 96° -E	24.90	29, 36, 45, 178, 179, 199, 204, 281, 694	SX190 → SX177 → SB01 SB01 → SB05 → SB14 → SC30 → SE202 SP44 → SB06 → SB01
31	-	02	2×?	4.50	-	-	176, 195, 283, 385	SB02 → SB01 → SB04 → SC169 → SP190, SP198
31	-	03	?×3	-	N- 23° 50'-E	-	173, 183, 196, 218, 221	SB03 → SP174, SX182 → SB03 SP219 → SB03 → SB02 SP222 → SP224 → SB03
31	-	04	1×2	4.26	2.89	N-120° -E	12.34	203, 282, 290, 293, 318, 687
31	-	05	2×2	4.22	3.34	N- 36° -E	14.13	46, 133, 141, 194, 289, 292, 329, 667
31	-	06	2×2	3.56	3.28	N- 89° -E	11.74	43, 58, 62, 112, 130, 140
32	-	07	1×2	4.09	1.92	N- 70° 50'-E	7.85	106, 143, 148, 166, 402, 656
32	-	08	?×2	-	4.46	N- 25° -E	-	217, 233, 256
32	-	09	2×2	4.28	4.12	N-133° 50'-E	17.67	93, 108, 122, 159, 299, 599, 695
32	-	10	2×2	3.93	3.56	N-158° -E	13.95	325, 332, 341, 361, 696
32	-	11	2×2	5.21	5.01	N- 8° -E	26.05	354, 369, 377, 423, 642, 356, 362, 371
32	-	12	2×2	4.33	2.88	N-152° -E	12.61	387, 392, 628
33	-	13	2×2	5.18	4.02	N- 77° -E	21.00	365, 383, 451, 454, 602, 613
33	-	14	1×2	6.68	3.48	N-158° -E	23.24	03, 11, 61, 635
33	-	15	2×2	4.40	4.01	N- 83° 50'-E	17.64	452, 467, 509, 547, 646, 697
33	-	16	1×2	4.25	2.64	N-170° 50'-E	11.27	104, 116, 160, 335, 349
33	-	17	2×?	3.30	-	N- 45° -E	-	279, 536, 545, 645
33	-	18	2×2	4.45	3.41	N- 66° 50'-E	14.72	443, 464, 512, 577, 665
34	-	19	1×2	4.82	2.69	N- 95° -E	12.96	439, 445, 502, 526
34	-	20	2×2	3.37	3.28	N-170° -E	11.12	438, 527, 573, 655, 663
34	-	21	2×2	4.81	4.01	N- 26° 50'-E	19.28	236, 252, 290, 313, 376, 530, 535, 683
34	-	22	?×2	4.40	-	N- 24° -E	-	255, 289, 291
								SB08 → SB22 → SP254

丁360(SP370)・361(SP377)等が出土している。

(3) 壺穴住居跡 (SC)

壺穴住居跡は15基検出した。弥生時代中期末から古墳時代後期の時期のもので全般的に残りは悪い。住居跡は北へ向かって延びる尾根筋に平行して並んでおり、部分的には重複関係が顯著な地点がある。平面形は円形のものが1基のほかはいずれも隅丸長方形もしくは長方形で、比較的規模は小さい。調査区外の東側と西側にさらに広がっているものと思われる。

SC 63 (Fig. 36・58, PL. 14, Tab. 8)

調査区北西部に位置する。暗茶褐色土を埋土とする。平面形はやや不整な長方形である。床面は平坦で、床面中央では幅0.8~1.4mの溝状に地山を掘り込み、東西両壁に一段高くなつたベット状の平坦面を平行して作り出している。主柱は明確でない。古墳時代のものと思われる。

出土遺物 出土土器は細片のために図示し得るものはないが、内面にケズリ痕のある薄手の上師器甕片がみられる。また滑石製有溝石鍤357が床面の北東隅から出土している。

SC169 (Fig. 30, PL. 15)

調査区北壁中央部で検出。壺穴住居の北西隅部と考えられる。遺存状況は良好。遺存している壁高は28cmである。平面形は矩形であるが、規模等については不明である。SB02を切っており古墳時代のものと思われる。

SC207 (Fig. 36, PL. 15, Tab. 8)

調査区中央東側に位置する。暗茶褐色粘質土を埋土とする。規模の小さな方形の壺穴である。壁面高は西壁で6~10cmほどで、東壁は削平されている。井戸SE202から切られていることから本住居跡は、弥生時代終末前後のものと思われる。

なお本住居跡の北側に、平面形が南北幅3.3m、東西長さ4.3mの隅丸の長方形に暗褐色土が薄く分布している範囲が認められた。壁面は確認できなかつたが住居跡の可能性がある。

出土遺物 細片のために図示し得るものはないが、弥生時代後期の甕片が若干出土している。

SC231 (Fig. 37・46・58, PL. 15・16, Tab. 8)

調査区中央東側に位置する。SC207の南側に隣接している。SC207同様遺存状況は良くなく、壁面は高さ5~10cmほどしか残っていない。平面形は不整な隅丸の長方形である。床面は平坦で、床面中央に地床炉がある。平面形は椭円形で長径約50cm、短径約40cm。断面形は浅皿状で、深さ約8cmである。南壁中央に接して椭円形の土壤が掘られている。床面上で確認された柱穴は東南隅と東北隅に位置する2穴のみである。弥生時代中期後半~末の時期のものである。

出土遺物 住居跡内の埋土からは弥生時代中期後半~末の壺213、甕214・216、高杯215、磨製石鍤358などが出土している。

SC259 (Fig. 37, PL. 17, Tab. 8)

調査区北壁際で検出した。壺穴住居の南東隅部と考えられる。遺存状況は比較的良好で、壁

面高は約25~30cmである。平面形は矩形であるが、規模は不明である。掘立柱建物SB21より古く、弥生時代後期の井戸SE260よりも新しい。

出土遺物 細片のため図示し得るものはない。

SC266 (Fig. 37, PL. 17, Tab. 8)

調査区北壁際で検出した。SC259と同様に竪穴住居の南東隅部と考えられる。遺存状況は比較的良好で、壁面高は約25~30cmである。平面形は矩形であるが、規模は不明である。時期についても出土遺物がなく不明である。

SC280 (Fig. 38, PL. 16, Tab. 8)

調査区東側で検出した。SC517から切られている。残りはあまり良くなく壁高は約10~15cmである。平面形は隅丸の長方形である。床面中央に平面形が梢円形の地床炉がある。床面で検出した柱穴は4穴である。いずれも壁面四隅近くに位置している。北壁には平面形が梢円形をなす深さ14cmの土壌を付設している。弥生時代中期末から後期初頭の時期と思われる。

出土遺物 細片のため図示し得るものはない。弥生時代中期末~後期の甕口縁部片が出土した。

SC324 (Fig. 38・46・58・59, PL. 14・15, Tab. 8・11)

調査区西南部中央で検出した。古墳時代後期の竪穴住居跡である。暗褐色粘質土を埋土とする。平面形は不整な長方形である。東壁に灰白色粘土で造り付けた竈を有している。竈は下部のみが遺存していた。煙出し用の穴が北壁際にみられる。竈内には焼土および木炭片がみられた。床面は粗掘りした後に平坦に盛土整地している。盛土の厚さは約5~8cmである。西南隅に位置する土壌SX377から広形銅矛の石製鋤型369が出土している。SX377はSC324に伴うもので、先述の盛土層を切っている。

出土遺物 住居跡埋土から弥生時代中期~後期甕217・218・220、古墳時代前期甕219の他、須恵器杯蓋の小片が出土している。形態からみて6世紀後半のものである。なお、広形銅矛鋤型369については第4章(139~141頁)で説明する。

SC364 (Fig. 39, PL. 16, Tab. 8)

調査区の中央に位置する。遺存状況は悪く、東側半分は削平され消滅している。最も残りの良い部分で、壁の高さは約10cmである。西壁には約1.2mの幅でベッド状遺構が残っている。本来は東西両壁に平行するベッド状遺構を有する住居跡であったと思われる。推定平面形の中央に木炭片が集中して分布する箇所があり、それを挟んで直径が約40cmの柱穴が検出できた。弥生時代後期後半の竪穴住居跡と思われる。

出土遺物 細片のため図示し得るものはない。

SC366 (Fig. 39・46・58, PL. 21, Tab. 8)

調査区南側で検出した。古墳時代後期の竪穴住居跡である。SC419・453, SE378・625等の弥生時代の遺構を切っている。平面形は東西軸がやや長い長方形である。残りは比較的良好で、壁高は約20cmである。床面中央には地山面に幅が約80cmの溝を掘っており、溝を境として東

西床面を一段高く作り出している。南壁にSC324と同様に灰白色粘土による竈を有している。また竈と対面する北壁際には不定形の土壇がある。深さは約50cmである。主柱は4本柱と思われ、隅部からやや離れた位置に柱穴が検出された。

出土遺物 住居跡埋土から手捏土器221、弥生時代中期～後期の甕222・223・226・227、古墳時代前期の高杯224、叩き痕の残る器台225、砥石359が出土しているほか、須恵器小片が出土。

SC419 (Fig. 40・46, Tab. 8)

調査区南壁側に位置している。柱穴、土壇等が多数重複しているため平面形状は不明確であるが、隅丸長方形と思われる。規模は小さく、一辺が約4mほどの大きさである。東隅部をSC366によって切られている。床面は平坦で、SC324でみられた盛土整地はみられない。主柱は4本柱と思われる。竈もしくは地床炉跡は確認できていない。古墳時代の住居跡か。

出土遺物 住居跡埋土から弥生時代中期後半の甕229、後期の甕228が出土している。

SC453 (Fig. 40・46, PL. 16・17, Tab. 8)

調査区東側に位置している。北壁をSC517から、南隅部をSC366から切られている。SC207、SC419とはほぼ同規模の小竪穴である。平面形は隅丸の方形である。壁面の残りは約13cmほどで残りは良くない。床面は平坦である。埋土上には木炭片、焼土(赤褐色土)小塊を多く含んでいる。柱穴は床面では確認できなかった。弥生時代後期半ば以降のものか。

出土遺物 住居跡埋土から弥生時代中期の甕230、後期前半の甕片231が出土している。

SC517 (Fig. 38, Tab. 8)

調査区の東側に位置する。SC280・453を切っている。暗褐色～黒褐色粘質土を埋土とする。中央部分から東北隅部までのほぼ半分については削平を受けており残っていない。平面形は不整な隅丸長方形である。壁高は最も残りの良い西壁で10cmである。主柱については不明。

出土遺物 細片のため図示し得るものはない。

SC692 (Fig. 41, Tab. 8)

調査区西北部で検出した。竪穴は残っていない。この地点ではかなりの数の柱穴が重複して遺存している。図面上で復元し、平面形が円形の竪穴住居跡と考えた。主柱は4本柱ではなく円形に側柱が巡っている。柱穴の数からみると、竪穴住居跡は2基または3基が重複していたことが考えられる。平面規模は直径が5～6mほどと考えられる。弥生時代中期後半ころのものか。

出土遺物 細片のため図示し得るものはない。

SC693 (Fig. 41, Tab. 8)

調査区西壁中央部で検出した。非常に残りが悪く、北側壁～南東壁に沿って壁溝がかろうじて残っているのみである。平面形は不整な隅丸長方形である。SC324によって東側壁は消滅している。また、SX659・SX629によって東南壁が削平されている。弥生時代中期末～後期の住居跡の可能性がある。

出土遺物 細片のため図示し得るものはない。

Tab. 8 第42次調査 壁穴住居跡一覧表

(先→後、・切合関係不明)

Fig.	PL	遺構 (SC)	平面形	長軸 (m)	短軸 (m)	方 向	先 後 関 係
36	14	63	不整隅丸長方形	4.30	3.45	N- 40°50'-E	SX71 → SP395 → SC63 → SB06 · SP59 · SP60
30	-	169	長方形か	-	-	—	SB02 → SC169
36	15	207	正方形	2.83	2.52	N- 71°-E	SB01 → SB04 → SC207 → SE202
37	15 16	231	不整隅丸長方形	4.37	3.15	N- 72°50'-E	SB21 → SB04 → SC231 → SP238 · SE230 · SE315
37	17	259	方形	-	-	—	SE260 → SC259 → SB21
37	17	266	方形	-	-	—	—
38	16	280	隅丸方形	3.50	3.23	N- 40°50'-E	SX487 → SC280 → SB13 SC693 → SB12 → SX629 → SC324 → SB11
38	14 15	324	隅丸長方形	4.33	3.29	N- 157°-E	SB12 → SC324 → SB11 → SB10 ↓ → SC366 ↓
39	16	364	長方形	4.31	3.77	N- 78°-E	SC364 → SB13
39	-	366	長方形	4.15	3.68	N- 86°-E	SB13 · SE378 · SC453 · SE625 · SE651 → SC366 SB15 ↑
40	-	419	不整隅丸正方形	3.88	3.82	N- 122°-E	SB11 → SE378 → ↑ SB13 → SC366 SC419 → SE651
40	16 17	453	不整隅丸正方形	3.22	3.12	N- 80°50'-E	SC453 → SB15 → SC366 · SC517
38	-	517	不整隅丸長方形	4.27	3.28	N- 79°50'-E	SC280 → SC517 → SB13(?)
41	-	692	円形	-	-	N-131°-E	SX84 → SE123, SX84 → SB16
41	-	693	隅丸方形	-	-	—	SX659 → SC693 → SB10 → SC324

(4) 溝状遺構 (SD)

SD441 (Fig. 30)

調査区南側に位置する。幅1.0~1.2m、深さ0.3mの溝である。断面形は「U」字形で、埋土は暗褐色~暗灰褐色粘質土である。

SD608 (Fig. 30)

調査区東側に位置している。南北方向に延びる溝で、中世以降のものである。幅28cm、深さ25cmで、断面形は「U」字形である。埋土は暗茶褐色粘質土である。水田に伴う畦溝か。

(5) 井戸 (SE)

本調査区では20基の井戸が検出された。いずれも弥生時代後期の井戸である。分布は大きく3群に分かれる。遺物の出土状況は、底部もしくは埋土中位で完形の壺ないし壺形土器が単独もしくは複数投棄された状態で出土するものと、破片のみで完形品が出土しないものに大きく分かれる。

SE15 (Fig. 42・47, PL. 18・21, Tab. 9)

調査区北側に位置する。SE74を切っている。平面形はやや不整な楕円形。井戸掘方は上部がやや開く円筒状で2.10mの深さを測る。底部はやすらぎまっている。埋土は大きく4層に分かれるが、一時に埋め戻されたと考えられる。第1層は暗褐色粘質土で弥生土器小片を多く含む。第2層は暗褐色～黒褐色粘質土である。第3層はかなり粘性の高い黒褐色粘質土で黄褐色粘土塊を含む。第4層は底部から約70cm厚で堆積している。現在の湧水面は標高4.5mの面である。

出土遺物 完形の弥生時代後期半ばの土器が投棄された状況で出土している。また、長頸壺232・235、壺234・236が最下層から一括投棄の状況で出土している。壺233は上面からの出土で、混入の可能性がある。

SE16 (Fig. 42・47, PL. 18・21, Tab. 9)

調査区北側に位置する。平面形はやや不整な円形である。掘方は円筒状で底部がやすらぎまっている。埋土は大きく5層に分かれるがSE15と同様に一時に埋め戻されたと思われる。現在の湧水面は標高4.5mの面である。

出土遺物 最下層の黒褐色粘土層から弥生時代後期半ば～後半の完形の壺が投棄された状況で出土している。また、弥生土器小片が中層に比較的多く出土している他、最下層から小型の長頸壺237、二重口縁壺238・239がほぼ完形で出土している。

SE30 (Fig. 42・48, PL. 21, Tab. 9)

SE15の南側近くに位置する。SB01を切っている。平面形はやや不整な楕円形で、掘方は円筒状である。SE74・230・489とともに最も規模の大きいグループに属する。深さは2.72mを測る。埋土は3層に分かれる。第1層は暗褐色～黒褐色粘質土で黄褐色粘土小塊、木炭片、弥生土器片を含みよくしまっている。第2層は黒褐色粘質土で黄褐色粘土塊を含む。第3層は黒褐色～黒色粘土で非常に粘性が高く自然木等の植物遺体を多く含む。

出土遺物 最下層の第3層上部から中位（底部から+40～50cm）の面で弥生時代後期後半の完形土器が、第2層から上層においては後期半ば以降の土器片が出土している。長頸壺240、壺241・243～246・248・249、鉢250は最下層からの出土である。古墳時代前期の壺242は上面からの出土である。混入の可能性がある。

SE47 (Fig. 42・48・49, PL. 18・21, Tab. 9)

調査区北側で検出した。SE16の南側に位置する。東半分をSX163から切られている。平面

形はやや不整な円形で、掘方は円筒状である。掘方中位から底部へはやすぼまっている。深さは2.52mを測る。埋土は大きく6層に分かれる。第1層から4層までは暗褐色粘質土を主体として、黄褐色粘質土小塊の混入量が異なっており、一時的に埋め戻された可能性が高い。第5層および第6層は黒色粘質土で特に第6層は粘性が高く、また白色粘土ブロックを多く含んでいる。この6層からは弥生時代中期末～後期初頭に比定できる丹塗壺研土器がまとめて出土している。

出土遺物 上層から中層にかけては弥生時代中期から後期の土器片が多数出土している。最下層からは、小型の壺251、袋口縁壺252・254、小型壺253、有孔壺255・大型壺口縁片256が出土している。251・256以外はいずれも赤色顔料を塗布している。

SE74 (Fig. 42・49-52・60, PL. 18・21-23, Tab. 9)

調査区北側に位置しており、SE15から上部北側を切られている。SE30・489とともに最も規模の大きなグループに属する。深さは2.73mを測る。埋土は大きく3層に分かれる。第1層は暗褐色粘質土で井戸掘方のほぼ半分までを占めている。第2層は黒褐色～黒色粘質土で白色粘土塊を含み軟質である。最下層の第3層は黒灰色粘質土である。

出土遺物 第3層からは植物遺体、板片、弥生時代後期半ばから後半の壺257～259・261～270・274～278、壺260・273、手捏土器271、鉢272、高杯279、器台280・281がまとめて出土している。また杵370、横槌372、平面形が隅丸方形の容器371、中央に方形の穴が開けられた板材(鼠返しか)373等の木製品が出土している。

SE123 (Fig. 42・53, PL. 18, Tab. 9)

調査区北西部に位置する。SX84、SB16を切っている。平面形はやや不整な円形で掘方は円筒状である。規模は小さく浅い。深さは2.08mを測る。埋土は5層に分かれる。第1層は褐色～暗褐色粘質土で、黄褐色粘土小塊をわずかに含む。第2～4層は暗褐色粘質土で粗砂、小砾を含む。第5層は黒褐色粘土層で植物遺体の他板材片を含んでいる。土器は弥生時代後期後半から終末の土器片、壺の完形品が出土している。

出土遺物 弥生時代後期初頭～後半の壺片282・285、弥生時代終末から古墳時代初頭の壺284、壺片283が埋土下層から出土している。

SE162 (Fig. 42・53, PL. 18・23, Tab. 9)

調査区中央に位置している。SB05を切っている。平面形は円形で掘方は円筒状である。中位から下部はやすぼまりながら底部へ続いている。深さは2.40mを測り規模は大きい。埋土は7層に分かれる。第1層は暗褐色粘質土、第2層から第4層は井戸中位にレンズ状に堆積する暗褐色～黒褐色粘質土である。黄褐色粘土小塊をいずれも含んでいる。第5層は黒褐色粘質土で白色粘土塊を含み軟質である。第6・7層は黒灰色粘土層で7層は粘性が高く黄白色・白色粘土塊を多く含んでいる。

出土遺物 第6層と7層の境(底面から+45cm)あたりに弥生時代後期半ばの壺・壺がまとまって出土している。弥生時代後期後半の壺286、短頸壺287は井戸底部から出土している。

SE168 (Fig. 42, Tab. 9)

調査区東壁に半分かかって出土した。崩落の危険性があったため完掘はしていない。平面形は円形である。掘方は円筒状で深さは推定2.20mほどと思われる。埋土は5層以上に分かれる。第1層は暗褐色粘質土で粗砂・小礫・弥生土器小片を多く含む。第2層から第4層は掘方中位までレンズ状に堆積している暗褐色粘質土である。第5層は黒褐色～黒灰色粘質土である。底部まで掘り下げていないので明確ではないが、施範された時期は弥生時代後期半ばから後半頃と思われる。

出土遺物 細片のため図示し得るものはない。

SE202 (Fig. 43・53, PL. 19, Tab. 9)

調査区北東部に位置する。SC207, SB01を切っている。平面形は円形で掘方は円筒状である。規模は他と比較して小さい。深さは1.37mを測る。埋土は5層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土で砂礫を含む。第2～4層は暗褐色～黒褐色粘質土で黄白色粘土小塊を多く含む。第5層は黒灰色粘質土である。

出土遺物 第4層からの出土遺物を図示した。弥生時代中期末～後期前半の壺288、壺289・290・291がある。

SE230 (Fig. 43・53・58, PL. 19・23, Tab. 9)

調査区東壁中央部に位置する。SB21, SC231を切っている。平面形は不整な円形で、掘方は円筒状である。底部に向かってすぼまっている。本調査区で検出された中では最も規模が大きい井戸である。東側壁中位は一部が崩落している。埋土は大きく3層に分かれる。第1層は暗褐色～黒褐色粘質土で細分は可能であるがほぼ掘方中位まで単純層である。第2層は黒褐色粘質土で、中位から約46cmの層厚でレンズ状に堆積。第3層は黒灰色粘土で白色粘土塊を多く含む。

出土遺物 第2層と第3層の境に弥生時代後期半ば前後の土器の大小の破片がまとまって出土している。図示したのは弥生時代後期後半の器台292、壺293・294である。いずれも投棄された状況で出土。また投弾354が第1層から出土している。

SE260 (Fig. 43・53, Tab. 9)

調査区東壁南側に位置する。SC259から東側半分を切られている。平面形は円形で、東壁は二段掘りとなっており、幅約45cmの平坦面を作り出している。掘方は浅く、深さは1.54mを測る。埋土は暗茶褐色粘質土の單一層で、弥生土器小片が出土している。弥生時代終末頃の井戸か。

出土遺物 ほとんどが小片である。図示したものは弥生時代後期後半から終末にかかる壺295と壺296である。

SE315 (Fig. 43・54, PL. 19, Tab. 9)

SE230の西側にほぼ接している。SC231を切っている。平面形は円形で、掘方は円筒状である。西側壁上部に幅20cmほどの平坦面を作り出している。埋土は大きく7層に分かれる。第

1層は暗褐色粘質土、第2～4層は暗褐色～黒褐色粘質土で黄白色および黄褐色粘土塊を多く含む土層である。弥生土器片を多く含み軟質である。第5層と第6層は中位から下部にかけて堆積している黒褐色～黒灰色粘質土で第6層がやや砂礫を多く含む。第7層は最下部に層厚約50cmで堆積している黒色粘質土で灰白色粘土塊、植物遺体を含む。廃絶時期は弥生時代後期半ばと考えられる。

出土土器 弥生時代後期前半～半ばの土器が第7層でまとまって出土している。壺297、壺298～301がある。298以外は底部がわずかに丸みがある平底である。

SE378 (Fig. 43・54、PL. 19、Tab. 9)

調査区南側に位置する。SC366の床面下で検出した。平面形は不整な円形で掘方は円筒状である。深さは1.52mを測る。埋土は4層に分かれ。第1層は暗褐色～暗灰褐色粘質土。第2層は黒灰色粘質土。第3層は黒灰色粘質土で黄白色粘土塊を多く含む。最下層の第4層は黒色粘質土である。約60cm厚で底部に堆積している。底面に弥生時代後期後半～終末の土器が出土上。

出土土器 第4層の出土遺物を図示した。丸底をなす壺304以外はわずかに丸みのある平底の壺302・303である。

SE448 (Fig. 43・54・55、PL. 19・23、Tab. 9)

調査区東南部に位置する。平面形は楕円形で掘方は円筒状である。西壁中位が一部崩落している。埋土は大きく5層に分かれ。第1層は暗褐色粘質土で木炭片、弥生土器小片を多く含む。第2～4層はいずれも暗褐色～黒褐色粘質土で黄褐色粘土・黄白色粘土塊を含む。第5層は底面から30～45cm厚で堆積している黒灰色粘土層で黄白色粘土塊を多く含んでいる。第1層～第5層からは弥生時代中期末～後期後半の土器片が出土している。

出土遺物 最下層の第5層の遺物を図示した。いずれも弥生時代後期後半から終末にかかる壺305・306、高杯307、壺308である。305・306の表面は丁寧なヘラミガキが施され、穿孔が肩部にみられる。

SE449 (Fig. 43・55、PL. 19・23、Tab. 9)

調査区東南部に位置する。平面形は円形である。上部を削平されている。壁面中位が崩落し断面形は袋状をなしているが掘方は円筒状である。埋土は3層に分かれ。第1層と第2層は暗褐色～黒褐色粘質土で木炭片・植物遺体を含む。第3層は黒灰色粘土層で黄白色粘土塊を多く混入している。

出土遺物 弥生時代終末の完形の壺309が底面から20cm浮いた状態で1点出土している。底部はやや厚手の丸底である。口縁部は端部がわずかに外反している。

SE489 (Fig. 44・55・58、PL. 20、Tab. 9)

調査区西南壁東側に一部かかって検出した。検出されたなかで最も規模が大きく深さ2.80mを測る。平面形は円形で、掘方は円筒状である。壁面中位が一部崩落している。埋土は8層に分かれ。第1層は暗褐色粘質土でよくしまっている。第2～4層は暗褐色～暗灰褐色粘質土

で、上部から中位にかけて堆積しており、砂礫、弥生土器小片を多く含んでいる。第5層は黄白色粘土層で壁の崩落土である。第6層は黒褐色粘質土、第7層は黒灰色粘質土で黄白色粘土小塊を多く含む。第8層は黒色粘土層で植物遺体を含む。湧水面は標高4.3m前後の面である。廃絶時期は弥生時代後期前半から半ば頃と思われる。

出土遺物 図示したものは第6～7層にかけて出土したものである。弥生時代後期初頭から前半にかかる甕311・313～315、壺318が出土。壺底部片312は318と比べてやや新しいと思われる。その他投弾355がある。

SE500 (Fig. 44・56、PL. 19・24、Tab. 9)

調査区南側に位置している。SE489とSE506に隣接している。平面形は円形で、掘方は壁面中位がやや膨らんだ円筒形をなす。深さは2.23mを測る。埋土は大きく4層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土。第2～3層は暗灰褐色粘質土で黄褐色粘土小塊を多く含む。上部から中位にかけて堆積している。第4層は黒色粘質土で弥生時代後期後半～終末の土器が投棄された状況で出土している。

出土遺物 図示したものは第4層黒色粘質土から出土した一括遺物である。弥生時代後期後半から終末に位置づけられるもので、鉢319、短頸壺320、壺321・322・324・325がある。320と321の底部はほぼ丸底となっているが、他は丸みのある小さな平底である。324の胴部下半には内面からの加圧による穿孔がある。323は器台脚部片と思われる。下端には弱い三角突帯を貼付け、掃描による三角文を端部に巡らしている。特定は難しいが外來系と思われる。

SE506 (Fig. 44・57、PL. 20・24、Tab. 9)

調査区南側で検出した。SE500の北側に位置する。平面形はやや不整な円形で、掘方は西側壁に平坦な面を作り出した二段掘となっており、井筒には板材もしくはくり貫き材を用いている。井筒の遺存状況は非常に悪く、ほとんど表皮を残すのみである。井筒は長径0.88m、矩径0.50m、高さは現存約0.20mを測る。井筒内から弥生時代終末から古墳時代前期の完形土器および土器片が出土している。

出土土器 弥生時代後期後半～終末の手捏土器326、壺327・328、333～335と古墳時代前期の甕329、高杯330、壺331、広口壺332が出土している。壺329と壺331は外來系のものである。

SE625 (Fig. 44・57、Tab. 9)

調査区南側、SE506の北側に位置する。SC366の床面下で検出した。平面形は円形で掘方は円筒形をなす。深さは2.1mである。埋土は大きく6層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土で木炭片や砂礫を含みよくしまっている。第2層から第4層は井戸掘方内中位にレンズ状に堆積している。黒褐色粘質土で黄褐色粘土塊、白色粘土塊、木炭片、弥生土器片を多く含んでいる。第5層は白色粘土と黒褐色粘質土の混合土である。第6層は黒褐色～黒灰色粘質土で樹木片を含んでいる。

出土遺物 遺物は弥生時代の小片と、弥生時代後期後半の甕339が出土している。

Tab. 9 第42次調査 井戸一覧表

a ; 長軸、b ; 短軸、c ; 深さ *深さは検出面からの計測値

Fig.	PL	遺構 (SE)	平面形	断面形	計測値 (m)			底面標高 (m)	先後関係 (先→後)	出土遺物概要
					a	b	c			
42	18	15	円形	円筒形	1.22	1.03	2.10	3.45	SE74→SE15	232~236
42	18	16	*	*	1.07	0.98	1.84	4.45	—	237~239
42	—	30	*	*	1.23	1.15	2.72	3.88	SB01→SE30	240~250
42	18	47	*	*	1.00	0.94	2.52	4.10	—	251~256
42	18	74	*	*	1.35	1.31	2.73	3.50	SE74→SE15	257~281・370~373
42	18	123	*	*	0.93	0.89	2.08	3.10	SB16→SE123 SX84—	282~285
42	18	162	*	*	1.11	1.23	2.40	4.20	SB05→SE162	286~287
42	—	168	*	*	1.09	0.90	2.21	4.20	—	—
43	19	202	*	*	0.81	0.79	1.37	4.83	SC207→SE202	288~291
43	19	230	*	*	1.50	1.14	2.26	3.79	SB21・SC231→SE230	292~294・354
43	—	260	*	*	1.75	1.63	1.34	5.00	SE260→SC259	295~296
43	19	315	*	*	1.48	1.36	2.16	4.03	SC231→SE315	297~301
43	19	378	*	*	0.97	0.86	1.52	4.61	SE378→SC366	302~304
43	19	448	*	*	1.07	0.88	2.12	3.91	SE448→SB18	305~308
43	19	449	*	*	0.83	0.83	1.66	4.03	—	309
44	20	489	*	*	1.19	1.17	3.12	3.44	—	311~318・355
44	19	500	*	*	0.93	0.83	2.23	3.86	—	319~325
44	20	506	*	*	1.80	1.16	0.80	5.45	—	326~335
44	—	625	*	*	1.10	1.07	2.01	3.98	SE625→SC366	339
39	—	651	*	*	1.17	0.95	1.27	5.12	SE651→SC366	—

SE651 (Fig. 39, Tab. 9)

調査区南側、SE378の南に位置する。SC366の床面下で検出した。平面形は円形で掘方は円筒形をなす。深さは1.27mで浅い。埋土は黒灰褐色粘質土で、ほぼ单一層である。

出土遺物 遺物は弥生土器小片のみで図示できるものはない。弥生時代終末から古墳時代前期にかかるものか。

(6) 土壙 (SX)

調査区全体に平面形が不整な円形または不定形の掘方を持つ土壙が点在しており、総数で37基を数える。断面形は浅皿状のもの、舟底状のもの、逆台形のもの等があり、平面規模は50~110cm、深さは15~80cmを測る。特徴的なSX629について述べる。

SX629 (Fig. 44, PL. 20)

広形銅矛鋳型が出上した古墳時代住居跡SC324の南側に位置している。平面形は長楕円形で北側半分がやや幅が広い。長さ1.67m、最大幅0.78mを測る。横断面は舟底状をなしており、深さは0.46mである。東西両側壁の北側半分および北壁はかなり強い火を受けたと思われ、地山の黄褐色粘質土が赤橙色に変色している。埋土は暗褐色土で下部には木炭層が厚さ2cm前後の層をなして分布している。土壤周辺および土壤を覆っていた暗灰褐色土中にも焼土および木炭粒の分布が認められたことから、SX629は、鋳造に関係した何らかの土壤だったと考えられる。また鋳型の出土と合わせて考えると、SX629の周辺は鋳造に関する工房の一画だった可能性がある。

出土遺物 小片のため図示できないが、弥生時代中期後半から後期半ば前後の細片が出土している。

(7) 小結

本調査区では、弥生時代中期末から古墳時代前期、後期の遺構が非常に高い密度で重複して遺存していることがわかった。特に弥生時代後期後半の遺構の数および出土遺物の量はその前後の時期を圧倒しており、周辺の調査例も含めて考えると弥生時代後期における質的な変換を物語っている。これに連続して、本調査区で特筆すべき遺物は、SC224から出土した広形銅矛鋳型である。第40次調査で出土した取瓶とともに弥生時代後期後半~末における比恵遺跡の青銅器生産の実態を知る上で重要な資料といえる。この鋳型は古墳時代住居跡SC324からの出土であるが、本来はその下層において認められた弥生期の堅穴に含まれていた可能性が高い。また、周辺で確かめられた弥生時代後期後半~終末期の小堅穴(SC453)、土壙SX629も併せて考えると、当該調査区周辺に青銅製品の製作工房があった可能性がある。

Tab.10 第42次調査揭露土器所見一覧

：法量の口径は外径、器台は台上部径、（）は復元値

Fig.	PL	揭露 遺物 番号	登録 番号	器種	法量(cm)				形態的特徴				出土遺構
					口径	器高	底径	側部径	成形上の手法	色調	胎土	焼成	
45	-	196	329	壺	19.4	-	-	-	口縁部。外側はテナハケ、内側から口 部はヨコナギ。口縁部は柱上端を内側させ粘付。	褐褐色	やや粗い	やや不良	SB01(SP36)
45	-	197	330	壺	-	-	-	-	口縁部。口は上円口。口部下部には三角窓 跡有り。表面は擦耗し質感度は不明。	褐褐色	良	不良	SP94
45	-	198	331	壺	17.1	-	-	-	腹部～口縁部。外側はテナハケ、内面～口縁 部はヨコナギ。口縁部は肥厚気味で、内側。	褐褐色	やや粗い	不良	SP119
45	-	199	334	器台	-	9.0	10.0	-	底部片。内外面に擦痕有。ナデ仕上げ。	褐褐色	極端粗い	不良	SP294
45	21	200	335	器台	6.5	13.1	9.0	-	完形品。内外面に擦痕有。ナデ仕上げ。	褐褐色	極端粗い	不良	SP294
45	21	201	332	器台	9.2	15.7	10.4	-	完形品。内外面に擦痕有。ナデ仕上げ。	褐褐色～ 淡褐色	極端粗い	やや不良	SP294
45	21	202	335	小型体	11.6	7.9	5.1	-	完形品。内外面ともハナゲ装飾後ナギ。底部の 尖に三角突起有。	褐色	粗い	やや良好	SP323
45	-	203	336	鉢	16.7	8.7	5.7	-	完形品。側面下部に擦痕有。外面ハナ。	褐褐色	やや不良	不良	SP323
45	-	204	341	壺	9.0	-	-	-	底部片。外側は赤褐色有者後ヘミガキ。	赤褐色	良好	やや不良	SP376
45	-	205	337	壺	(24.0)	-	-	-	口縁部破片。調節部内側に口縁は「く」字形に 外反。内面ヨコナギ。	赤褐色	細かい	やや不良	SP308
45	-	206	343	壺	-	-	-	-	口縁部片。「く」字形に屈曲。	褐褐色	やや粗い	不良	SP400
45	-	207	342	器台	-	-	7.8	-	底部片。	黄～褐褐色	やや粗い	不良	SB07(SP402)
45	-	208	338	高杯	-	-	-	-	脚部片。外側は赤褐色有者後ヘミガキ。	赤褐色	細かい	やや良	SP308
45	21	209	339	壺	16.0	20.2	-	19.6	法は完形品。外腹腰部には凹と有。内面はヘ ミガキ。調節下半はナギ。口縁部をわざか に引き出す。	褐褐色	粗い	やや良好	SB10(SP361)
45	-	210	340	壺	-	-	7.8	-	底部片。	褐褐色	細かい	良	SB07(SP402)
45	-	211	344	壺	-	-	6.8	-	底部片。内外面ともナギ。	褐色	やや粗い	やや不良	SB07(SP402)
45	-	212	345	壺	-	-	6.8	-	底部～脚部片。底部はわざかに丸み有り。	褐褐色	やや粗い	良	SB13(SP451)
46	-	213	310	壺	20.4	-	-	-	腹部～口縁部片。内外面ヨコナギ。	褐色	やや粗い	不良	SC231
46	-	214	311	壺	32.0	-	-	-	口縁部片。側面は若干内凹。ヨコナギ。	褐色	やや粗い	不良	SC231
46	-	215	312	高杯	25.8	-	-	-	脚部片。内外面赤褐色有者後ヘミガキ。	赤褐色	良	不良	SC231
46	-	216	313	壺	36.1	-	-	-	口縁部片。内外面ナギ。	褐色	粗い	不良	SC231
46	-	217	316	壺	21.0	-	-	-	口縁部片。調節は若干内凹。	褐褐色	やや粗い	不良	SC324
46	-	218	315	壺	26.8	-	-	-	口縁部片。	褐褐色	やや粗い	やや不良	SC324

：法量の口径は外径、器台は右上部径、（ ）は復元値

Fig.	PL	指標	登録番号	器種	法量(cm)				形態的特徴				出土遺物
					口径	器高	底径	測定番	成形上の手法	色調	胎土	焼成	
46	-	219	314	甕	18.0	-	-	-	口縁薄片。内面はヘラケツリ。	青褐色	やや粗い	不良	SC324
46	-	220	317	甕	32.0	-	-	-	口縁薄片。口縁部下端に三角突起付。	青褐色	粗い	不良	SC324
46	21	221	322	鉢	6.9	4.5	2.4	-	下溝土器。底部は丸み有り。	淡赤褐色	粗い	やや良好	SC366
46	-	222	323	甕	26.8	-	-	-	口縁薄片。	淡赤褐色	粗て粗い	不良	SC366
46	-	223	324	壺	22.0	-	-	-	口縁薄片。	淡褐色	やや粗い	やや不良	SC366
46	-	224	321	高杯	11.2	-	-	-	脚-新試片。外周はハケ目後ナデ。	青褐色	良好	やや不良	SC366
46	-	225	318	器台	-	12.6	-	-	底部欠損品。口縁孔有り、一部焼成。	青褐色	やや粗い	不良	SC366
46	-	226	320	甕	(28.0)	-	-	-	口縁薄片。口縁は「く」字形に外反。	褐色	やや良	不良	SC366
46	-	227	319	甕	(32.0)	-	-	-	口縁薄片。口縁は強く外反。内面ナデ。	淡褐色	やや粗い	やや不良	SC366
46	-	228	328	甕	22.0	-	-	-	口縁薄片。口縁は「く」字形に外反。	褐色	粗い	不良	SC419
46	-	229	327	甕	30.8	-	-	-	口縁薄片。内外面丁寧なヨコナデ。	青褐色	良	良	SC419
46	-	230	326	甕	30.0	-	-	-	口縁薄片。口縁は「し」字形に外反。	青褐色	粗い	不良	SC453
46	-	231	325	鉢	-	-	8.9	-	先端片。表面は毛刷状溝状不明瞭。	褐色	やや粗い	不良	SC453
47	21	232	201	長颈瓶	6.8	11.5	4.7	13.4	厚底内面から外傾。底部下端はハケ目調整後ナコナデ。底部はタテハケ。底部はわざかに丸み有り。	青褐色	良好	良好	SE15
47	-	233	203	甕	14.0	-	-	-	器壁は内外面とも丸み調整点不明。	青褐色	やや粗い	不良	SE15
47	-	234	205	甕	-	-	-	-	断面欠損品。底部はハケ目後ナデ。	灰褐色	やや粗い	やや不良	SE15
47	21	235	204	長颈瓶	9.7	18.45	6.7	15.4	断面内面から外傾。底部下端はハケ目調整後ナコナデ。底部はタテハケ。底部はわざかに丸み有り。	青~灰褐色	やや良	やや良	SE15
47	-	236	202	甕	15.0	17.8	5.7	17.9	口縁薄片/欠損品。口縁部の裏面はやや粗い。内外面ともタテハケ。底部はわざかに丸み有り。	褐~黑褐色	やや粗い	やや不良	SE15
47	21	237	206	小形壺	5.9	8.2	5.1	9.2	完形品。内面はヨコナデ。外面はヘラミガキ。口縁部を内側へわざかに引出さず。割部裏面は下半より下傾。	淡灰褐色	やや粗い	不良	SE16
47	-	238	208	甕	15.9	30.0	6.65	22.5	口縁欠損品。底部はやや丸み有り。下部に穿孔。内底部はカットノド削りナデ跡。	灰~墨褐色	やや粗い	良好	SE16
47	21	239	207	壺	25.7	39.0	9.3	27.5	先端品。内面はハケ目で残す。外周はハケ目調整後ナコナデ。底部はタテハケ。底部はわざかに丸み有り。	灰褐色	やや粗い	不良	SE16
48	21	240	217	長颈瓶	5.8	10.1	2.6	11.2	口縁定形。頭部は直方的。底部は橢円のヘラミガキ。下部はナデ。	灰~灰褐色	やや粗い	良	SE30

：法量の口径は外径、器台は台上部径、（ ）は復元値

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	器種	法量 (cm)	形態的特徴				出土遺構		
						口径	部高	底径	側面形			
48	-	241	218	壺	17.2	-	-	-	底部一口横切片。口縁部外周部にへうにあらぬ目有り。	褐～灰褐色 やや粗い 良	SE30	
48	-	242	209	壺	15.6	-	-	-	口縁部内。口縁部は直立。	灰白褐色 やや粗い 良好	SE30	
48	-	243	213	壺	20.6	-	-	-	底部一口横切片。口縁部はヨコナデ、内外面ともヨコハケ、テナハケ目調査。	褐褐色 粗い 不良	SE30	
48	-	244	215	壺	25.0	-	-	-	底部一口横切片。口縁部はヨコナデ、内外面ともヨコハケ、テナハケ目調査。	褐色 やや粗い 良	SE30	
48	-	245	214	壺	28.4	-	-	-	底部一口横切片。口縁部はヨコナデ、内外面ともヨコハケ、テナハケ目調査。	褐色 やや粗い 良	SE30	
48	-	246	219	壺	27.8	-	-	-	底部一口横切片。口縁部はヨコナデ、内外面ともヨコハケ、テナハケ目調査。口縁部は直角的、内面、底部を引き出さ。	褐褐色～灰褐色 やや粗い 良	SE30	
48	-	247	210	壺	-	-	9.0	-	底部。わずかに丸み有り。底面にはハケ目残す。	褐～灰褐色 やや粗い やや不良	SE30	
48	21	248	216	壺	17.8	22.3	6.5	17.5	完形品。口縁部は「く」形に外反。内外面ハケ目調査。底部縫合部が特に張り出る。外面に灰化・黒褐色等有り。	褐色	良 良	SE30下層
48	-	249	211	壺	-	-	8.4	-	底部。内外面ともハケ目調査。底部はわずかに丸み有り。	灰褐色 粗い 不良	SE30	
48	-	250	212	鉢	26.5	10.0	6.9	-	欠損品(1/4)。内面はヘラナデ。底部は丸み有り。ハケ目調査後ナダケン。	褐色 やや粗い 良	SE30	
48	21	251	221	小型鉢	9.4	6.6	4.6	7.6	完形品。外縁はタナハケ調査。内面は施釉痕を残す。口縁は外反。	褐褐色 黒色 粗い 良	SE47	
48	-	252	222	壺	12.0	-	-	-	底部から口縁部分。内面ナデ。外縁は褐色色有り。表面ヘラミガキ。	褐褐色 やや粗い 不良	SE47	
48	21	253	220	壺	10.0	14.0	5.2	13.8	ほぼ完形品。内外面とも半生無釉有り。外縁は「掌」形なヘラミガキ。底部に位に施釉起痕が残る。	褐色	良好 やや不良	SE47
48	-	254	223	壺	-	-	8.1	21.0	底端部。内面タナハケ。外縁は褐色色有り。内面はハラミガキ。内面は直角的ヘラミガキ。底部はわずかに丸み有り。	褐褐色 粗い 良	SE47	
48	21	255	225	壺	16.8	17.8	8.9	21.0	完形品。底部内面から外縁には、赤色斑点を含む。底部中位に2カ所穿孔。孔口はタナハケ。	内：褐色 外：赤褐色 やや粗い 良	SE47	
49	-	256	224	大型壺	58.0	-	-	-	口縁端部。底部は内側傾し、「し」形の内側部。口縁下に企形突唇を有する。内外面ともナダ仕上げ。	褐褐色 明褐色 良 良	SE47	
49	21	257	242	壺	17.1	26.2	6.1	28.0	完形品。作りが上質。底部の腹壁から「く」字形に口縁部が取れ。底部はわずかに丸み有り。	赤褐色～黒褐色 やや粗い やや良	SE47	

：法量の口径は外径、器台は台上部径、() は復元値

Fig.	PL 掲載 遺物 番号	登録 番号	器種	法量(cm)				形態的特徴				出土遺構	
				口径	高さ	底径	測定值	成形上の手法	色調	胎土	焼成		
49	21	258	233	甕	16.2	34.6	8.6	28.6	ほぼ完形品。全周的に作りが丁寧。内外面ともハケ目調査、口縁部ヨコナギ。口唇部をわずかに捲み出す。	青褐色～ 明褐色	やや粗い	良	SE74
49	-	259	229	小型甕	13.0	-	-	17.6	丸脚欠損品。表面が剥落し、調査痕不明。	明褐色白色	良	SE74	
49	-	260	234	甕	13.3	15.6	7.5	-	1/2欠損品。表面はむき出し、調査痕不明。 内外面、外底ともハケ目調査。底面はわずかに丸み有り。	褐色	粗い	不良	SE74
49	-	261	231	甕	12.1	22.0	1.9	15.5	口縁部1/4欠損。外縁はタテハケ。内面はヨコナギ。内面はヨコハケの後軽くナデナシ。	灰褐色	やや粗い	不良	SE74
50	22	262	249	甕	10.5	19.9	6.5	15.1	ほぼ完形品。頂面内面、底面内外底はナダケ。外縁はタテハケ。底部に割離の跡は不明確。縫合は張りは無い。	明褐色白色	やや粗い	やや不良	SE74
50	22	263	226	甕	12.5	21.5	8.2	23.0	完形品。器形に多い割離。底辺はわずかに丸み有り。内面・底面・底辺はハケ目調査。割離内底は丁寧なハセ上げ。	淡灰褐色～ 暗褐色	やや良	良	SE74
50	22	264	235	甕	15.5	28.5	9.5	24.9	ほぼ完形品。内外面ともハケ目調査。割離下部はナデナシ。底部は底形の調査から外済しながら立ち上がる。	褐色	やや粗い	やや良	SE74
50	22	265	247	甕	15.4	28.5	9.5	17.4	完形品。頂面内面ともハケ目調査。底面はヨコハケ形で、やや縮みのある底盤。外縁はハケ目調査後はナデナシ。	灰～黒褐色	やや粗い	良	SE74
50	22	266	246	甕	18.4	33.7	9.1	27.4	完形品。口材部は多く外死。腹部内外面はハケ目。底辺はわずかに丸み有り。	淡黃白～ 淡赤褐色	粗い	良好	SE74
51	23	267	248	甕	-	-	9.8	26.9	口縁部欠損品。外縁はタテハケ後部分的にナデナシ。内面は折小口によるヨカリ。底辺はわずかに丸み有り。	褐色	やや粗い	やや不良	SE74
51	22	268	243	甕	22.0	37.0	7.2	26.6	完形品。器身の中央部、腹部下部に三尖突起を観察。内外面ともハケ目調査。腹部下口下はナデナシ。底辺は丸みあり。	灰～褐色	やや粗い	良	SE74
51	-	269	244	甕	22.0	37.0	8.4	29.7	完形品。調査中位。腹部下部に三尖突起を観察。外縁はハケ目調査後はナデナシ。底辺は丸みあり。	褐色	良	やや不良	SE74
51	22	270	245	甕	26.3	39.0	8.9	29.2	完形品。器身の中央部、腹部下部に三尖突起を観察。口縁部等はわずかに外死。底辺は丸みあり。	灰～灰褐色	良	やや不良	SE74
52	22	271	232	鉢	4.0	3.6	2.2	-	手捏土器定新品。鉢形で、全面に底板板を残す。(ミニチュア土器)	淡褐色白色	やや粗い	良好	SE74
52	22	272	227	小型鉢	10.0	9.6	6.2	10.7	完形品。外縁はタテハケ。内面はユビナギ。口縁部は内側に丸くおさめる。	褐色	粗い	やや不良	SE74
52	-	273	230	甕	-	-	6.5	-	底座片。底座下端はヘラ状のものによるヨカリ。外縁はタテハケ。内面はヘラナシ。	淡灰褐色	やや粗い	やや不良	SE74

：法量の口径は外径、器台は台上部径、() は復元値

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	器種	法量(cm)			形態的特徴				出土遺物	
					口径	器高	底径	側部径	成形上の手法	色調	胎上		
52	23	274	236	壺	-	-	6.8	19.0	口縁部欠損品。器台口座でなく、底部の可塑性もある。底部はわずかに丸み有り。	表面白色	粗い	不良	SE74
52	23	275	250	壺	18.0	31.1	9.6	25.2	複合口縁部欠損品。内外面ともハケ目調査。内面はカキトリ。底部はわずかに丸み有り。底部下部に三角突起有り。	内: 黄褐色 外: 青褐色	やや粗い	不良	SE74
52	23	276	241	長頸壺	9.7	18.8	6.0	16.9	ほぼ完形品。内面にはハケ目調査後端丈がヘラにより削除。内面はハケ目を残すナゲテク。底部はわずかに丸み有り。	表面褐色	粗い	やや良	SE74
52	23	277	239	長頸壺	7.8	15.0	5.3	14.7	口縁部欠損品。内面～口部基部、底部中央はナゲテク。他はハケ目。肩部は強めにハケ目をいれられた。底部はやや丸い。	表面白色	粗い	良好	SE74
52	23	278	240	壺	-	18.4	5.8	17.7	山根部欠損品。肩から底部はカタハケ。底部中央から底部はハケ目洗ナゲ。底部はわずかに丸み有り。	表面～ 底部 青褐色	やや粗い	やや良好	SE74
52	-	279	228	高杯	肩高	13.9	18.6	-	圓錐片。外面は金土削痕と有孔打痕のハミザキ。内面はハケ目調査。三方に直径1.5cmの穿孔有り。	表面褐色	粗い	良	SE74
52	23	280	237	器台	10.0	9.3	11.0	-	ほぼ完形品。内外面ナゲテク上げ。底部内面はカキトリ。	内: 淡褐色 外: 青褐色	粗い	良好	SE74
52	23	281	238	器台	11.1	13.6	12.7	-	完形品。全面に輪状裏打ち。内面中央はナゲテク上げ。	表面褐色	粗い	良好	SE74
53	-	282	255	壺	26.4	-	-	-	口縁部欠損。「く」字形に唇曲。	褐色	粗い	良好	SE123(下層)
53	-	283	253	壺	24.8	-	-	-	口縁部欠損。内面はハケ目の洗ナゲ。	褐色	粗い	やや良	SE123(下層)
53	-	284	254	壺	25.2	-	-	-	口縁部欠損。口縁部は直線的に内傾。	褐色	粗い	良	SE123(下層)
53	-	285	252	壺	-	-	4.0	-	底部部。内面は施塗装有る。	褐色	やや粗い	やや良	SE123
53	23	286	257	壺	17.0	19.5	7.2	17.1	完形品。口縁部は直線的に外反。底部はわずかに丸みある平底。内面はカキトリ洗ナゲ。	褐色	やや粗い	良好	SE162
53	23	287	256	壺	11.3	23.7	7.5	19.0	やや長軸の側面はわずかに付着する痕跡がつく。底部は丸みのある平底。内面はカタハケ。内面はカキトリ洗ナゲ。	褐色	粗い	良好	SE162
53	-	288	260	壺	-	-	6.6	-	底部分。わずかに丸み有り。	表面褐色	やや粗い	不良	SE202
53	-	289	259	壺	-	-	9.3	-	底部分。外側ナゲテクの後ナゲ。	表面褐色	粗い	良	SE202
53	-	290	258	壺	20.6	-	-	-	受狀口縁片。口縁部はヨコナゲ。外側はナゲテク。	表面褐色	粗い	不良	SE202
53	-	291	261	壺	10.3	-	-	14.7	肩部～受狀口縁部片。器部に施剥有り。	褐色	やや粗い	不良	SE202
53	-	292	263	器台	15.0	18.0	15.6	-	ほぼ完形品。内外面とともに丁寧なハケ目調査。底部は中位でやや聞く。	表面褐色	粗い	やや不良	SE230

：法量の口径は外径、器台は台上部径、（ ）は復元値

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	器種	法量 (cm)			形態的特徴				出土遺構	
					口径	等高	底径	側部径	成形上の手法	色調	胎土		
53	23	293	262	壺	-	-	7.5	15.3	口部欠損品。底部下端に三角突起有り。側部はハケ目洗粗くナ。底部はやや丸み有り。	灰褐色	黒て粗い	良好	SE230
53	23	294	264	壺	-	16.8	5.8	-	口部欠損品。底部下端に丸み有り。	黄褐色	細い	良	SE230
53	-	295	265	壺	20.6	-	-	23.0	口部～肩部付。叩き調査の側面部をハケ目洗粗くナ。内部は斜位のハケ目調査。	黒褐色	やや粗い	やや良	SE260
53	-	296	266	壺	-	-	-	27.8	肩部付。調査痕は無。	明褐色	細い	良	SE260
54	-	297	270	壺	24.0	-	-	22.7	口端～脚部付。外縁は目の悪いテナハケ。	褐色	やや粗い	不良	SE315
54	-	298	269	壺	-	-	6.8	19.5	底部～脚部付。底部は若干張り出す。外縁はハケ目調査後ナ仕上げ。底部はやや丸み有り。	灰～灰黒色	細い	不良	SE315
54	-	299	271	壺	-	-	5.4	-	底部付。	明褐色	やや粗い	不良	SE315
54	-	300	267	壺	-	-	7.1	18.7	肩部付。ハケ目調査後ヘラミガキ。底部下端に三角突起有り。底部はねじれ丸み有り。	赤褐色	細い	やや不良	SE315
54	-	301	268	壺	18.5	(26.5)	7.0	18.4	袋足口様部付。肩部付。底部下端に三角突起有り。底部はねじれ丸み有り。外縁にナハケ目洗粗くナ。	明褐色～白色	細い	良	SE315
54	-	302	273	壺	-	-	5.4	-	底部付。外縁はヘラナナ。或は丸み有り。	褐色	やや粗い	良好	SE378
54	-	303	274	壺？	-	-	3.7	-	底部付。	淡黃褐色	黒て粗い	不良	SE378
54	-	304	272	壺	14.0	16.2	-	16.8	口端～脚部付。内外面ともハケ目調査。外縁は口端部から底部に向かって底部は丸底。	淡赤褐色	黒て粗い	良好	SE378
54	-	305	276	壺	-	-	5.3	19.4	肩部～底部付。内外部ハケ目調査。外はそのままの状態で内はハラミガキ。安秋山調査。	暗褐色	やや不良	良	SE448
54	23	306	275	壺	12.3	14.3	5.0	16.6	完形品。全周的に導手縫接品。側部はヘラミガキ。肩部に金花有り。	黄褐色～茶褐色	やや粗い	良好	SE448
55	-	307	277	高杯	34.8	10.5	-	-	杯縁部。基部は丸く調査痕は不明瞭。	内：黄褐色	やや不良	良	SE448
55	-	308	278	壺	27.2	-	-	-	口縁部。	内：淡褐色	やや不良	良	SE448
55	23	309	279	壺	13.3	30.5	-	23.3	完形品。ハケ目調査底部から肩部中位にかけてハラミガキ。内底は側面のハケ目調査後ナラカキナリ。	赤褐色	やや粗い	良好	SE449
55	-	310	280	器台	10.0	12.8	10.1	-	底部欠損。上部部に導手縫有り。喉状に引き込まれている。内外面ともハケ目調査後ナラン。	明褐色	細い	不良	SP470
55	-	311	287	壺	-	-	5.6	-	底部付。	淡灰褐色	やや粗い	良	SE489
55	-	312	288	壺	-	-	5.2	-	底部付。丸みのある平底。外縁ナナ。	灰色	やや粗い	良	SE489
55	-	313	286	壺	-	-	6.6	-	底部付。	淡黃褐色	やや粗い	良	SE489

：法量の口係は外径、器合は台上部径、() は復元値

Fig.	PL	指標 遺物 番号	登録 番号	器種	法量(cm)				形態的特徴				出土遺構
					口径	器高	底径	柄部径	成形上の手法		色調	胎土	
55	-	314	284	壺	15.6	-	-	15.2	口縁部～肩部外。口縁部は「く」字に強く外反。 外面はハケ目。	青褐色	粗い	良	SE489
55	-	315	283	壺	14.4	-	-	-	口縁部～肩部内。口縁部は「く」字に強く外反。 全面テナ仕上げ。	淡褐色	粗い	不良	SE489
55	-	316	282	壺	17.8	-	-	16.5	口縁部。口縁部は「く」字形に強く屈曲。外 面肩部のハケ目。内面テナ。	褐色	やや粗い	良	SE489
55	-	317	285	壺	23.0	-	-	20.1	口縁部～肩部外。口縁部は「し」字形に外反。 内面テナ。	青褐色	やや粗い	良	SE489
55	-	318	281	壺	20.0	-	-	-	頂部～収口部最高部。鋸歯下端に二条の三角突 起點付。	灰白色	粗い	良	SE489
56	24	319	290	鉢	9.0	10.2	1.9	10.2	完形品。底盤の基部。底盤はわずかに上昇度。 口縁部内面。外縁は丁寧な腰向かへラミガキ。	青褐色	良	良	SE500
56	24	320	289	短腹壺	9.0	11.4	-	13.0	完形品。外縁近方向からラミガキ。加藤は内溝 しながみ立する。底部は丸底だが腰あ1cmと、周面色 の平手面があり。	褐色	良	良	SE500
56	-	321	291	壺	-	-	-	15.6	腹部欠損品。外面は腹方向へのヘラミガキ。 内面は内輪のハケ目調査。	内：青褐色 外：灰～ 黒灰色	良	良	SE500
56	24	322	293	壺	-	-	5.5	21.0	口縁部外輪部。内外面ともハケ目調査。底部は やや丸み有り。底部下にはハケ目後に堆積灰、 の子跡模を有している。	青褐色～ 褐色	やや粗い	良好	SE500
56	-	323	292	高杯	-	-	26.8	-	脚部分。表面は変形し溝痕等は不明瞭。背面に は2段の串孔有り。下部に三尖支撑を點付し二 角比較文を有する。	青褐色	やや粗い	不良	SE500
56	24	324	294	壺	14.2	26.9	-	19.6	完形品。橢形の腹部下端には内側からの穿孔が あり。肩部と腹部には内側穿孔文が並ぶ。内 外面ともハケ目調査。底部下部はヘラミガキ。周面 底盤はわずかに丸み有り。	青褐色	やや粗い	良	SE500
56	24	325	295	壺	25.9	25.3	5.3	25.0	完形品。底部下端と脚部下半に台形切妻を有す。 内外面ともハケ目調査。脚部下部はヘラミガキ。周面 底盤は丸み有り。	青褐色	やや粗い	良	SE500
57	-	326	296	鉢	5.5 (4.3)	2.5	-	-	手造り器。全面テナ。	褐色	やや粗い	やや不良	SE506
57	-	327	299	壺	13.0	-	-	-	口縁部。内面はヨコハケ。	褐色	粗い	良	SE506
57	-	328	308	壺	14.2	-	-	-	口縁部片。	褐色	やや粗い	良好	SE506
57	-	329	298	壺	17.0	-	-	-	口縁部破片。内面ヘラケメソ調査。	青褐色	やや粗い	不良	SE506
57	-	330	301	高杯	10.7 4.0cm	-	-	-	杯部片。	黑～灰褐色	やや粗い	不良	SE506
57	-	331	309	壺	(18.0)	-	-	-	口縁部片。外面には多色調査を生む。表面はテ ナ方向のヘラミガキ。	青褐色	やや粗い	不良	SE506
57	-	332	300	壺	13.5	-	-	-	口縁部片。実質的に口端は広がる。	淡褐色	良好	やや不良	SE506

：法器の口径は外径、器台は台上部径、() は復元値

Fig.	PL 掲載 遺物 番号	登録 番号	器種	法 器 (cm)				形 态 的 特 徴				出土 連 構	
				口 径	器 高	底 径	側 高	成 形 上 の 手 法	色 調	胎 土	燒 成		
57	24	333	306	壺	7.5	9.0	3.6	8.1	完形品。側部はハケ目が施されている。内面から口部等にかけては丁寧なナデ。底部はわずかに丸みある平底。	赤褐色	良	良	SE506
57	24	334	307	壺	14.8	20.9	2.4	18.0	完形品。瓶形の腹部分に丸みのある小さな平底があり。外面はハケ目ナデ等。底部下半には粗粒の素面。	褐~赤褐色	やや粗い	やや不良	SE506
57	24	335	297	壺	-	-	5.0	24.5	肩部・口縁部欠損品。側部はハケ目調変後へ？ミガキ。底部は凸線状。内面に粘土被着合。底が残る。	褐~灰褐色	やや粗い	やや不良	SE506
57	-	336	304	壺	16.4	4.6	-	-	約1/2欠損品。径3mmの穿孔有り。	赤褐色	良	やや不良	SX618
57	-	337	302	壺	19.1	16.0	-	17.2	肩部欠損品。口縁部に「L」字形。	褐褐色	やや粗い	やや不良	SX618
57	-	338	303	壺	20.0	-	-	-	口縁部片。側部は内削する。	赤褐色	粗い	不良	SX618
57	-	339	305	壺	24.0	-	-	-	口縁部片。口縁部は「く」字形に拘る。	灰褐色	粗い	やや不良	SE625
58	-	340	346	壺	(29.0)	-	-	29.4	肩部・口縁部片。外面はハケ目ナデナシ。	褐褐色	やや粗い	やや不良	SX480
58	-	341	353	壺	-	-	-	-	口縁部片。	褐色	粗い	やや不良	SX441
58	-	342	354	壺	-	-	-	-	口縁部片。	褐褐色	粗い	不良	SX441
58	-	343	349	器台	-	-	11.0	-	底部片。内面コナデ。	褐色	粗い	やや良	SX420
58	-	344	348	壺	(22.0)	-	-	-	口縁部片。内外面ともナデ。	灰褐色	やや粗い	不良	SX420
58	-	345	347	壺	(25.0)	-	-	-	口縁部片。	褐褐色	粗い	不良	SX420
58	24	346	352	鉢	4.5	4.9	2.9	-	手平土器。底盤は上げ底。	灰~褐褐色	やや良	不良	SX424
58	24	347	351	鉢	7.6	5.3	4.5	7.6	ミニチュア土器。底盤はチテハナ。	褐褐色	やや粗い	やや良	SX424
58	-	348	350	壺	-	-	4.6	-	底部片。外面叩き痕。内面ハケ後ナデナシ。	褐褐色	やや粗い	やや不良	SX424
58	-	349	356	壺	32.2	-	-	-	口縁部片。	褐褐色	粗い	不良	SX652
58	-	350	355	壺	32.5	-	-	-	口縁部片。	褐褐色	粗い	良好	SX652
58	-	351	357	器台	7.3	14.4	8.2	-	完形品。内外面ナデ。	褐褐色	やや粗い	やや不良	SX652

Tab. 11 第42次調査掲載石器、土製品、その他遺物観察所見一覧

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	名 称	素 材	法 量				形態的または製作技術的特徴	出土遺構
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
58	-	352	070	筋縫車	土製	径 3.8cm	0.8	-	29.0	土器板片を転用。周縁を打ち欠いた後研磨し丸く仕上げている。	SP156
58	-	353	058	投弾	土製	3.5	1.9	1.9	17.0	全面磨ナメ仕上げ。	SP451
58	-	354	068	投弾	土製	3.8	2.0	1.8	19.0	全面磨ナメ仕上げ。	SE230
58	-	355	069	投弾	土製	3.3	2.0	2.0	14.5	全面磨ナメ仕上げ。	SE489
58	-	356	059	投弾	土製	3.8	2.1	2.2	19.5	全面磨ナメ仕上げ。	SX659
58	-	357	001	石鉗	滑石	3.9	1.7	1.2	12.8	裏面に斜面「V」字形の溝を刻り込み。背面にも留め込みをいれている。	SC63
58	-	358	004	磨製石鎚	頁岩	2.2	1.7	0.3	-	先端部欠損品。	SC231
58	-	359	005	砾石	粘板岩	5.8	1.3	1.1	-	一部欠損品。	SC366
58	-	360	006	石包丁	頁岩	7.7	4.5	0.6	-	半欠品。刀頭、柄は青白から。	SP370
58	-	361	007	石包丁	泥質頁岩	13.9	5.4	0.8	孔 間 2.15cm	完形品。刃部は背面からの研磨。	SP377
58	-	362	060	玉	ガラス	径 0.5cm	0.35	孔 径 0.075cm	青色		SP084
58	-	363	061	玉	ガラス	径 0.4cm	0.30	孔 径 0.09cm	青色		SP105
58	-	364	062	玉	ガラス	径 0.35cm	0.30	孔 径 0.09cm	青色		SP105
58	-	365	065	玉	ガラス	径 0.4cm	0.45	孔 径 0.09cm	青色		SC324
58	-	366	067	玉	ガラス	径 0.6cm	0.35	孔 径 0.15cm	青色		SC366
58	-	367	063	管玉	硬玉	1.2	0.5cm	孔 径 0.018cm	透明白		SP135
58	-	368	064	玉	ガラス	径 1.1cm	孔 径 0.04cm	青色			SP316
59	24	369	072	鑿型	石英 長石斑岩	32.65	17.4	9.9 2.5cm	溝 帯 幅 2.5cm	一部欠損品。砾石として転用。4側面はすべて削り凹凸として利用されている。上端から鋸歯状にかけてわずかに削形青色に青色。	SC324
60	-	370	073	杵	芯持ち材	81.2	径 8.8cm	柄 径 3.7cm	-	一部欠損品。表面には整形痕が幅2~3cmある。	SE74
60	-	371	075	容器	板目材	21.8	21.3	10.2	-	半球品。内面には整形痕残す。	SE74
60	-	372	074	槌	芯持ち材	43.0	径 4.7cm	柄 径 2.3cm	-	きの一部のみ削り加工。半分以上表皮を残す。	SE74
60	-	373	076	部材	板目材	52.7	23.5	2.3	-	半球品。ネズミ返しき。長方形窓穴が中央にあく。	SE74

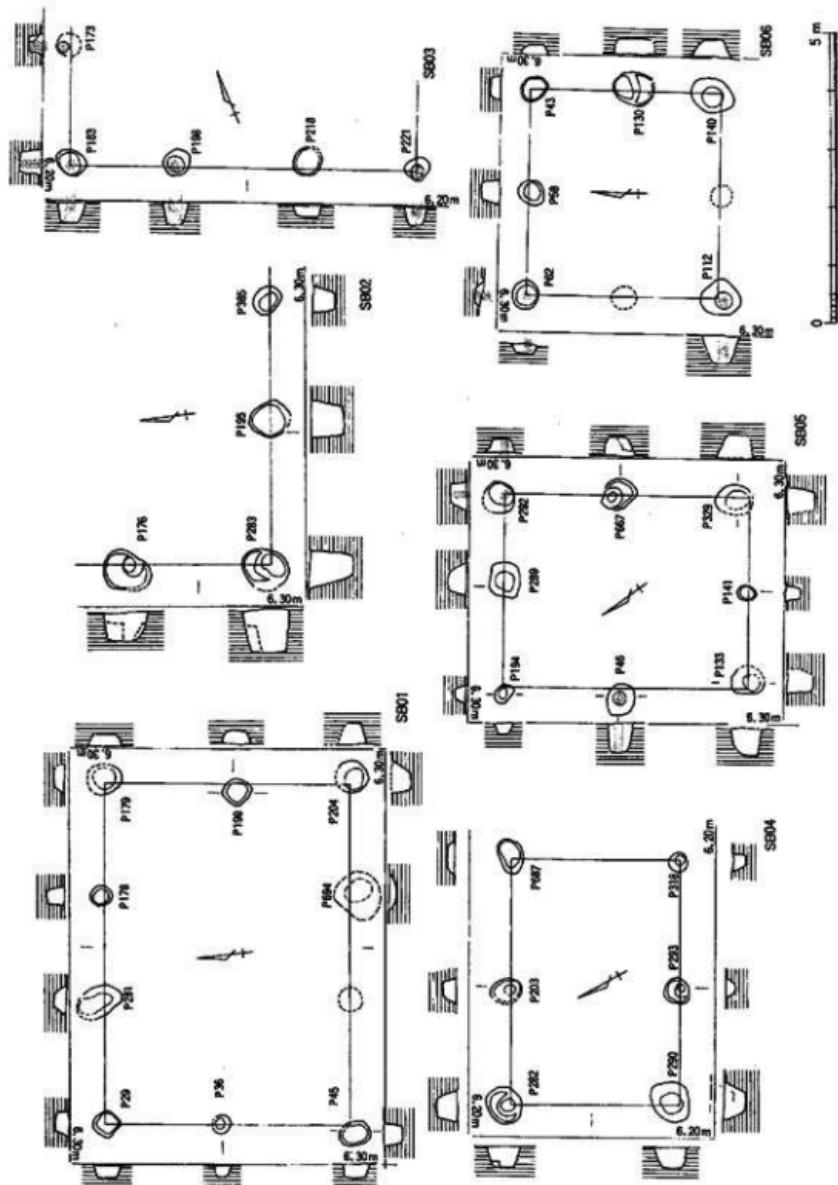


Fig. 31 捩立柱建物SB01～06平面および断面図 (1/100)

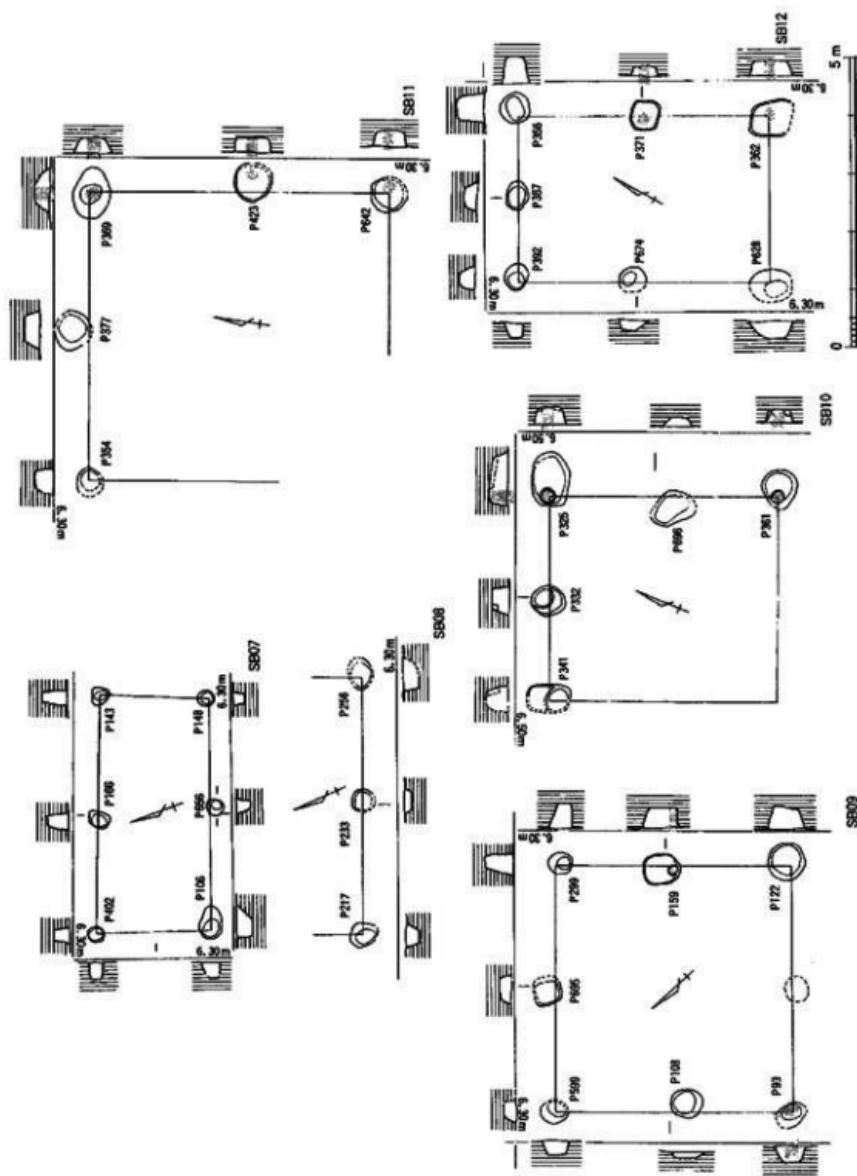


Fig. 32 据立柱建物SB07~12平面および断面図 (1 / 100)

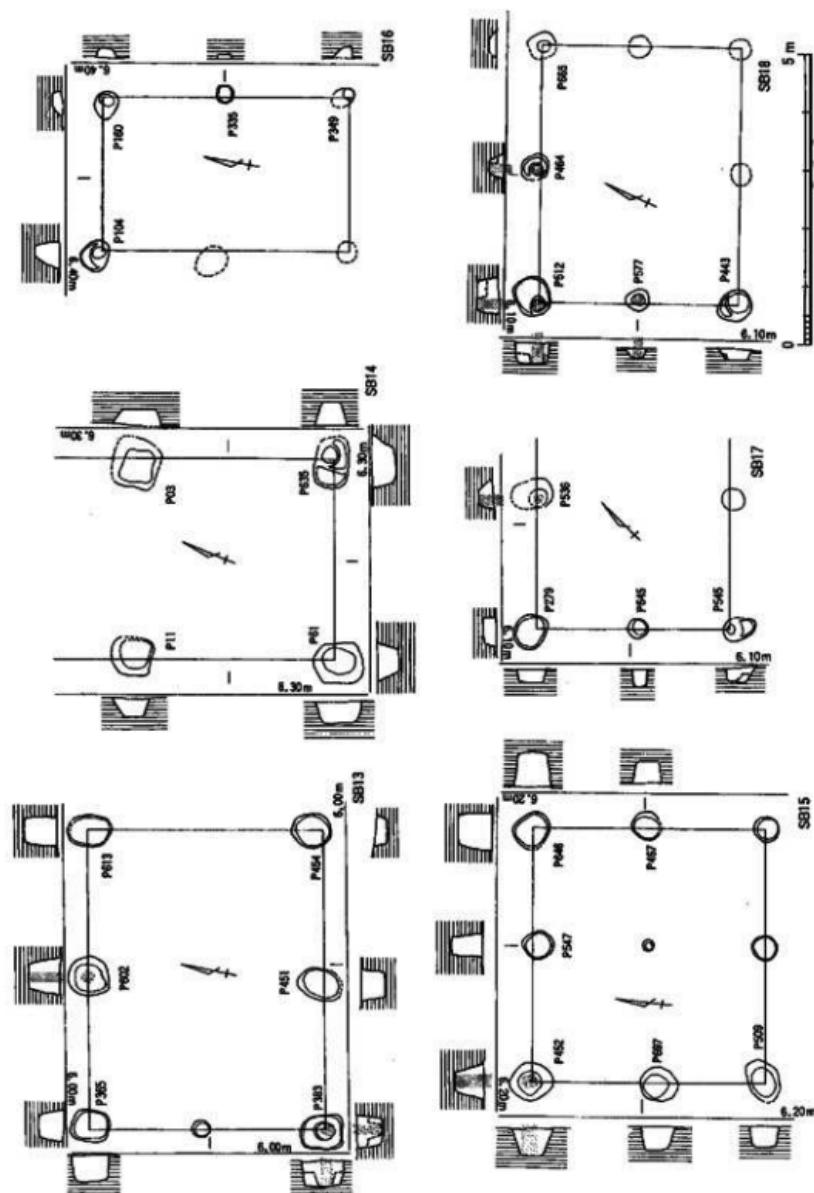


Fig. 33 振立柱建物SB13～18平面および断面図 (1/100)

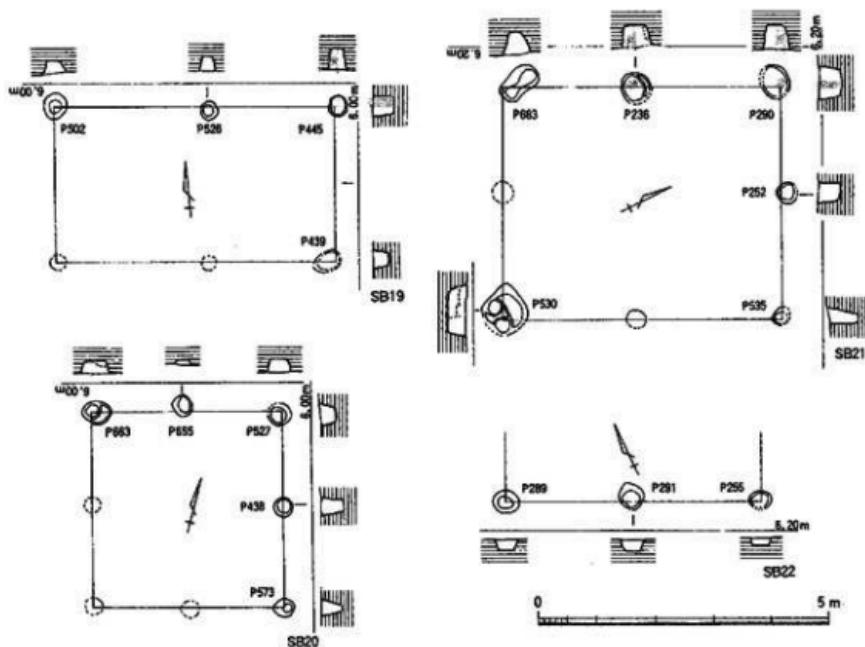


Fig. 34 掘立柱建物SB19~22平面および断面図 (1/100)

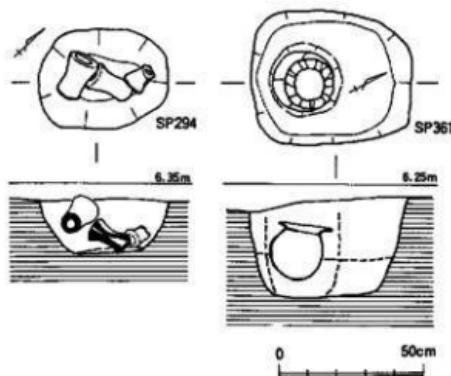


Fig. 35 柱穴SP294・361内遺物出土状況実測図 (1/20)

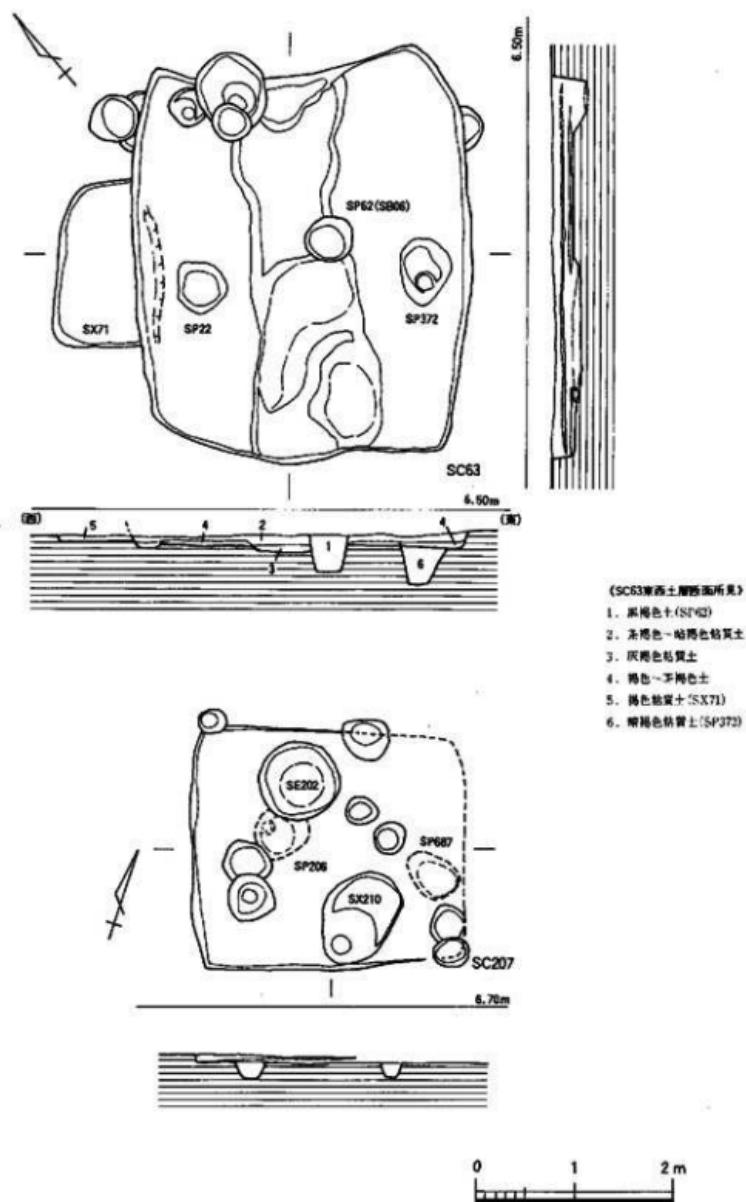


Fig. 36 敷穴住居跡SC63・207平面および断面図 (1/50)

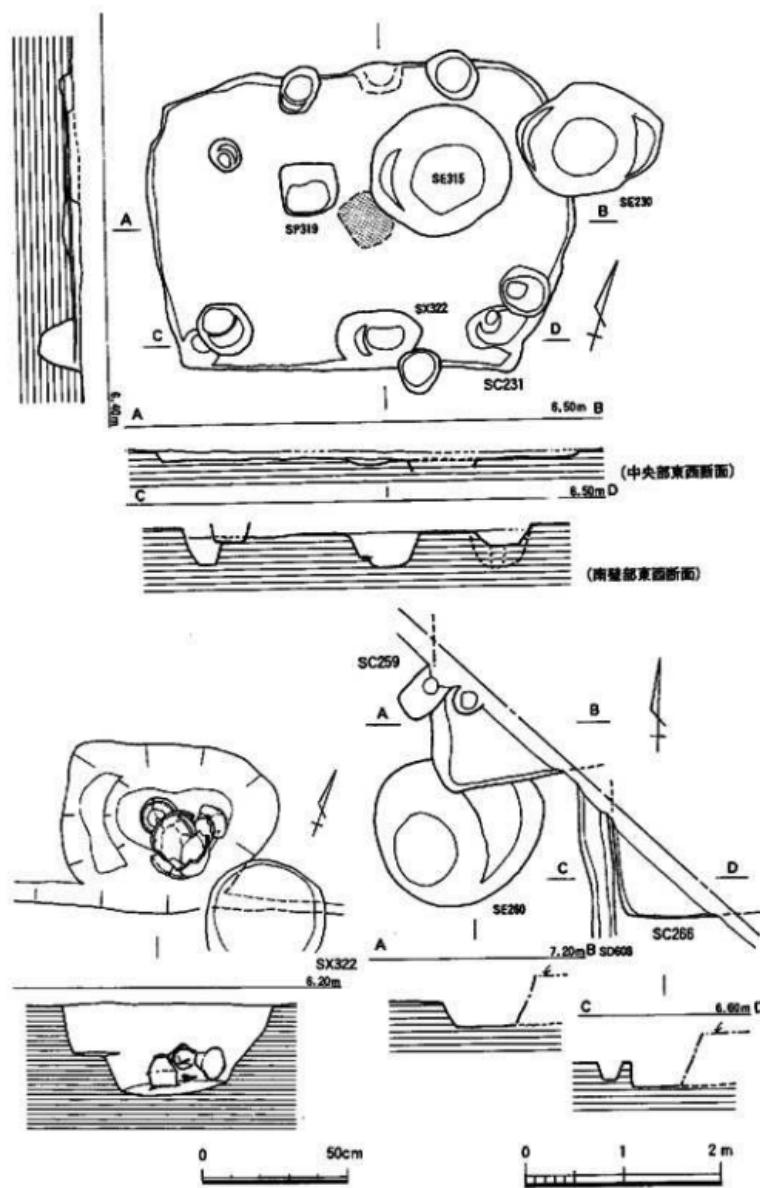


Fig. 37 穂穴住居跡SC231・259・266およびSC231内土壌SX322平面および断面図(1/20・1/60)
(アミカケ部分は灰土・木炭片の分布)

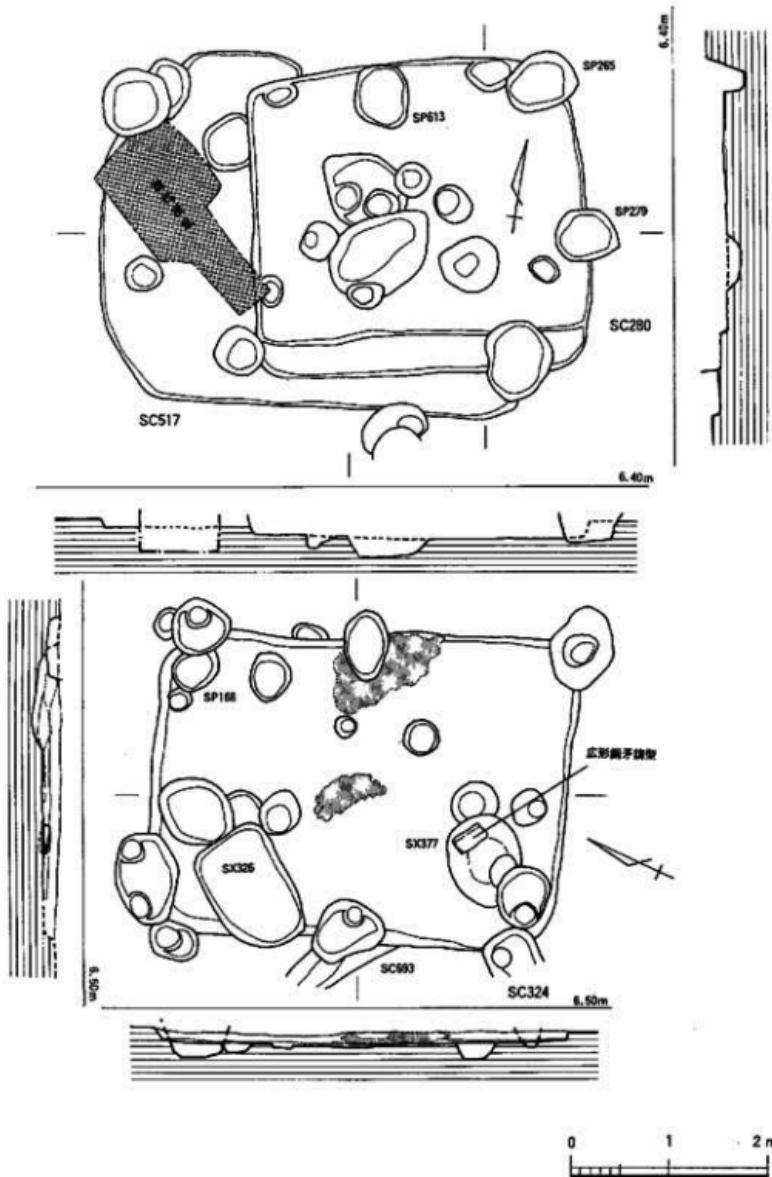


Fig.38 壁穴住居跡SC280・517・324平面および断面図 (1/60) (アミカケ部分は灰白色粘土・焼土の分布)

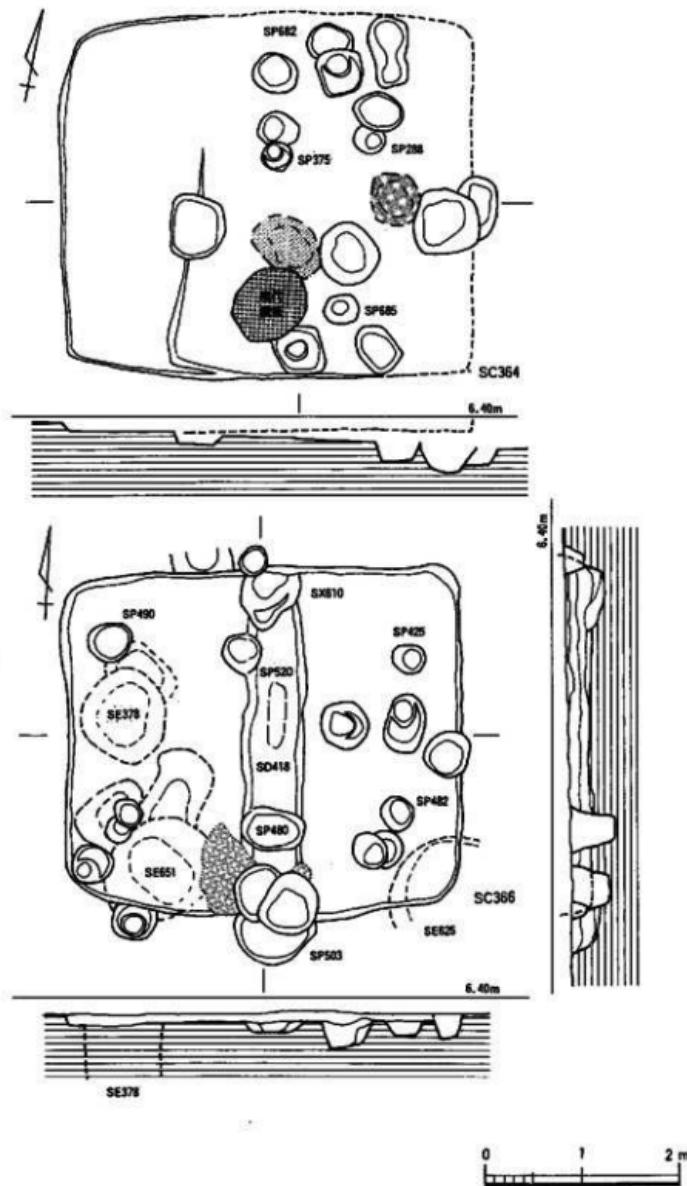


Fig. 39 壁穴住居跡SC364・366平面および断面図 (1/60) (アミカケ部分は焼土・木炭片の分布)

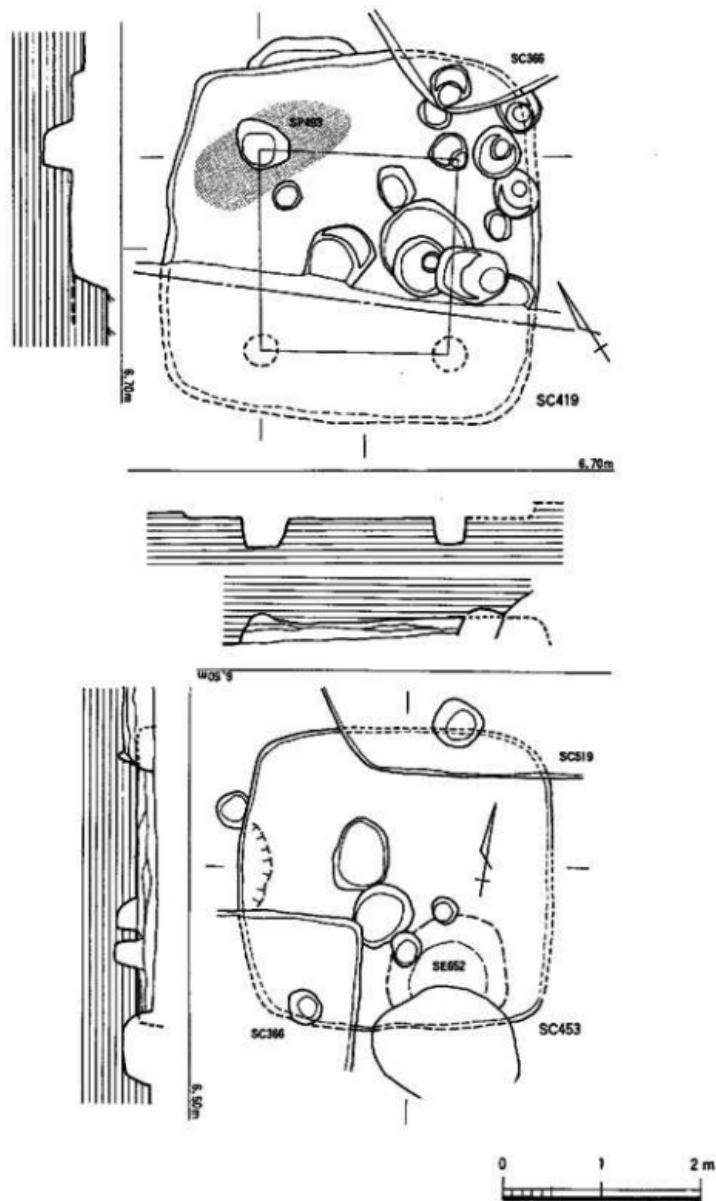
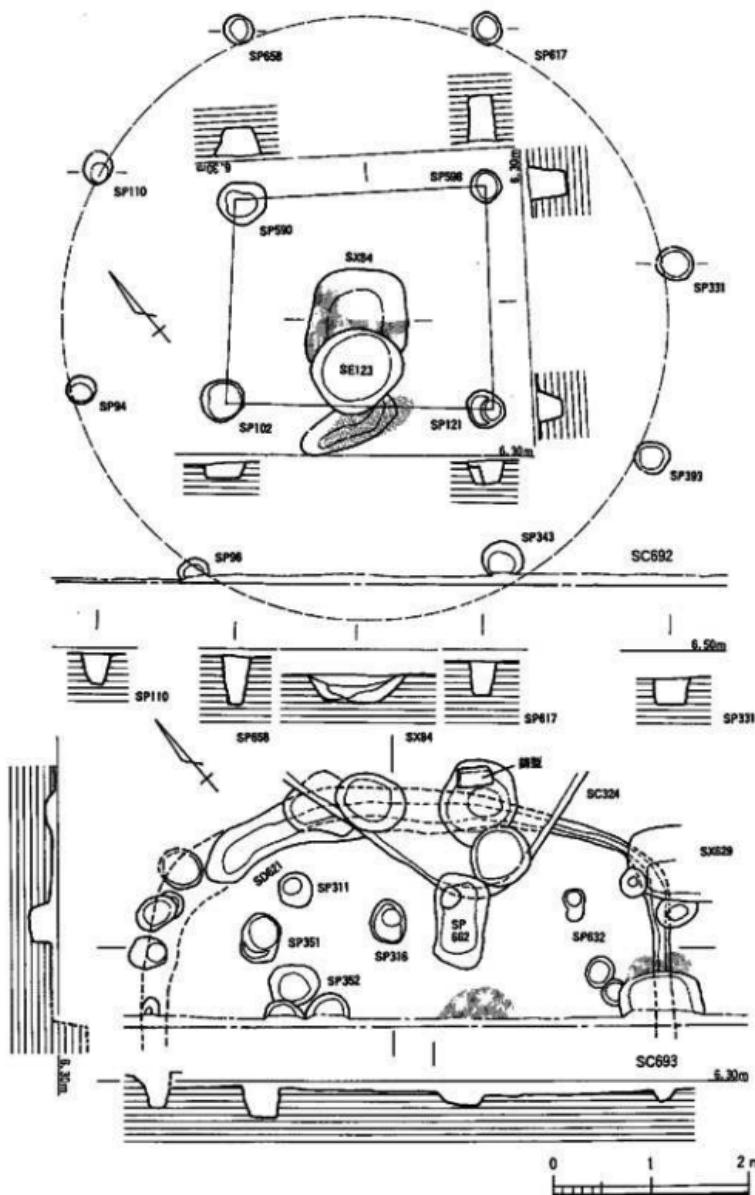


Fig. 40 壁穴住居SC419・453平面および断面図 (1/60) (アミカケ部分は堆土の分布)



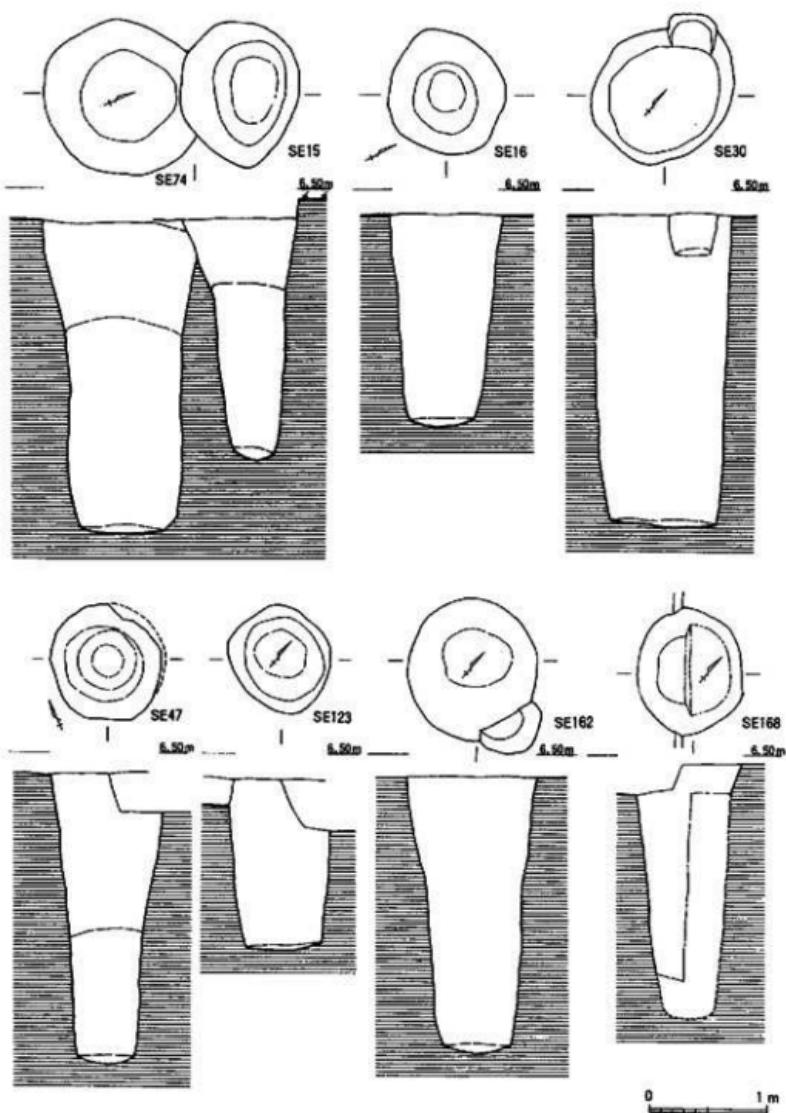


Fig. 42 井戸SE15・16・30・47・74・123・162・168平面および断面図 (1/50)

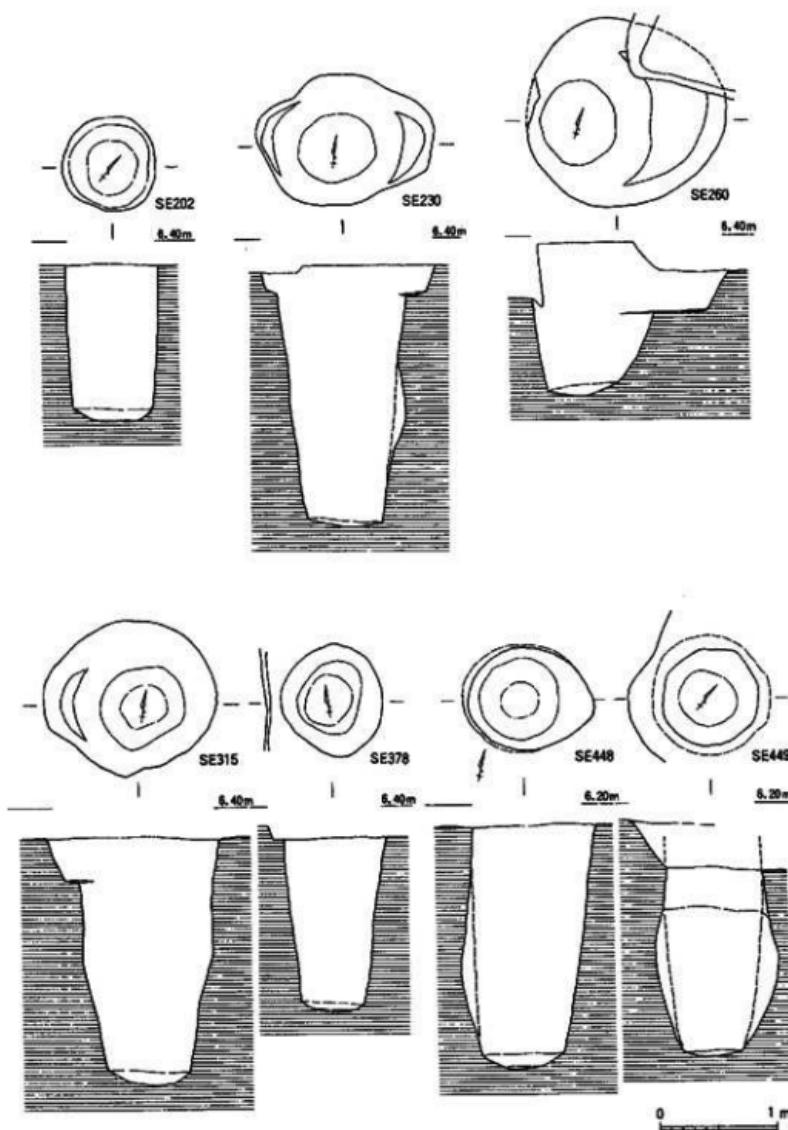


Fig.43 井戸SE202・230・260・315・378・448・449平面および断面図 (1/50)

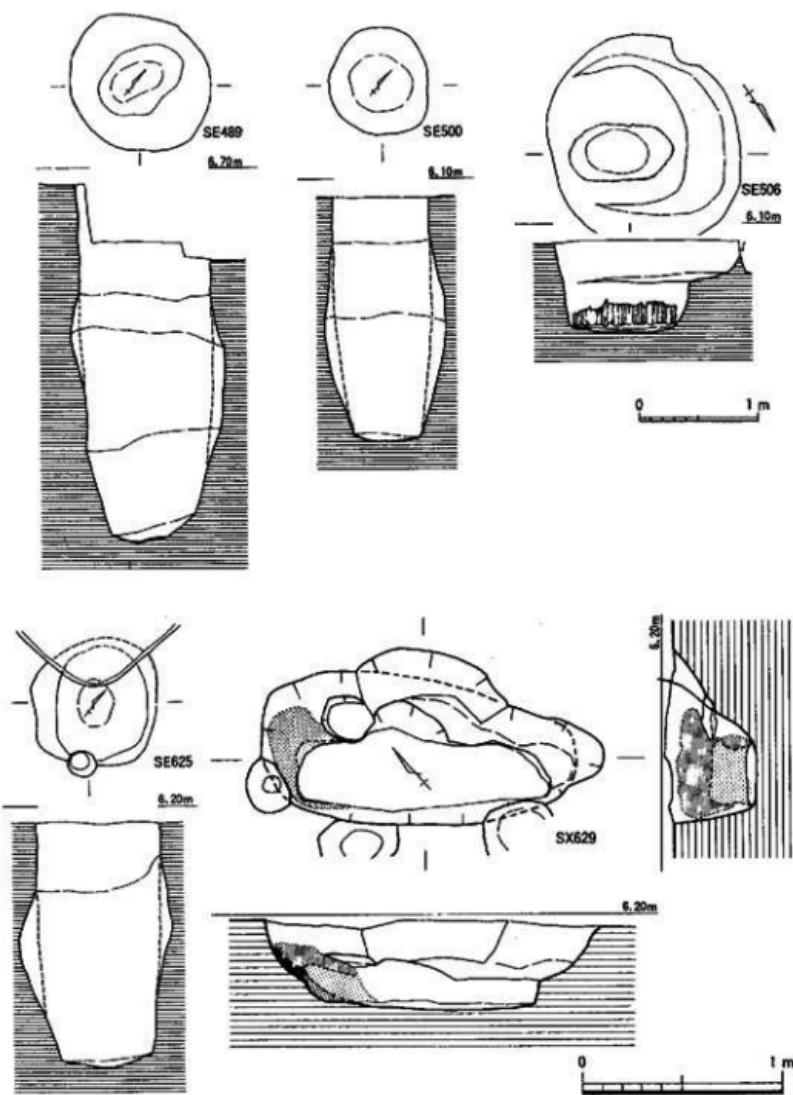


Fig. 44 井戸SE489・500・506・625、土壤SX629平面および断面図 (1/50・1/30)

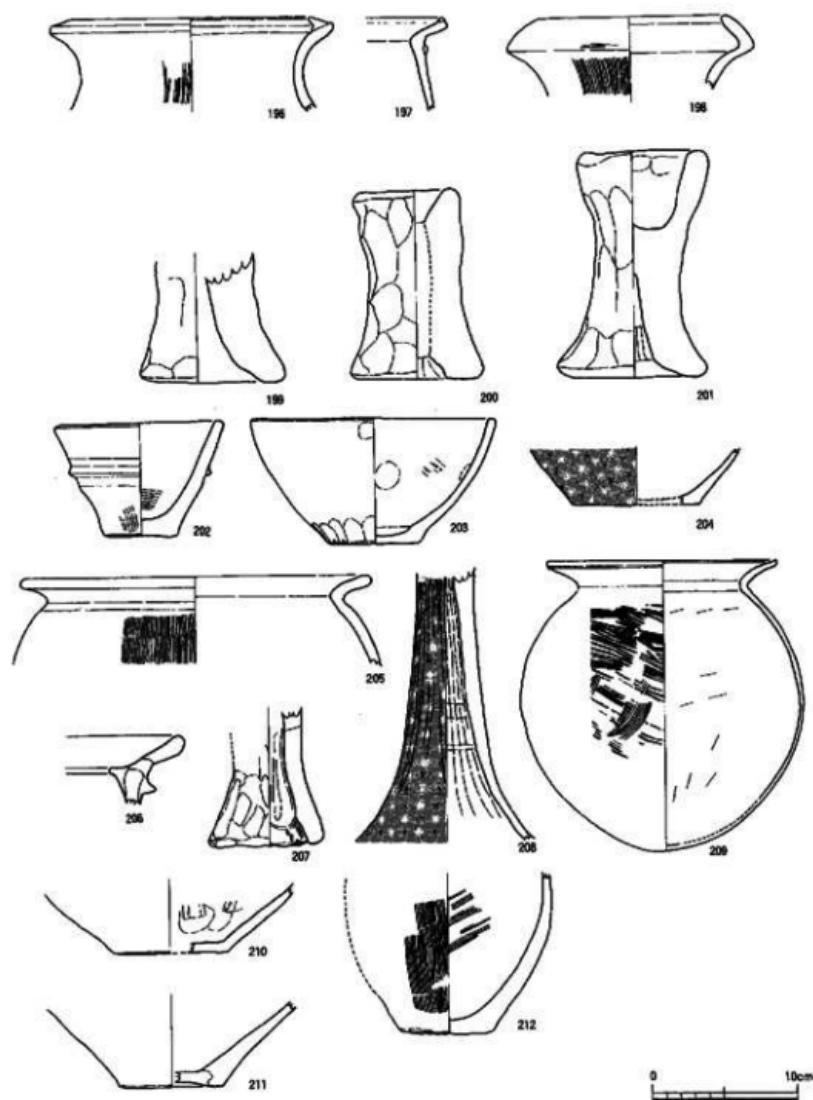


Fig. 45 柱穴出土遺物実測図 (1/4)
 (196: SP79, 197: SP96, 198: SP146, 199-201: SP204, 205-208: SP208, 209: SP264,
 202-205: SP202, 206: SP206, 206: SP460, 207-211: SP402, 212: SP451)

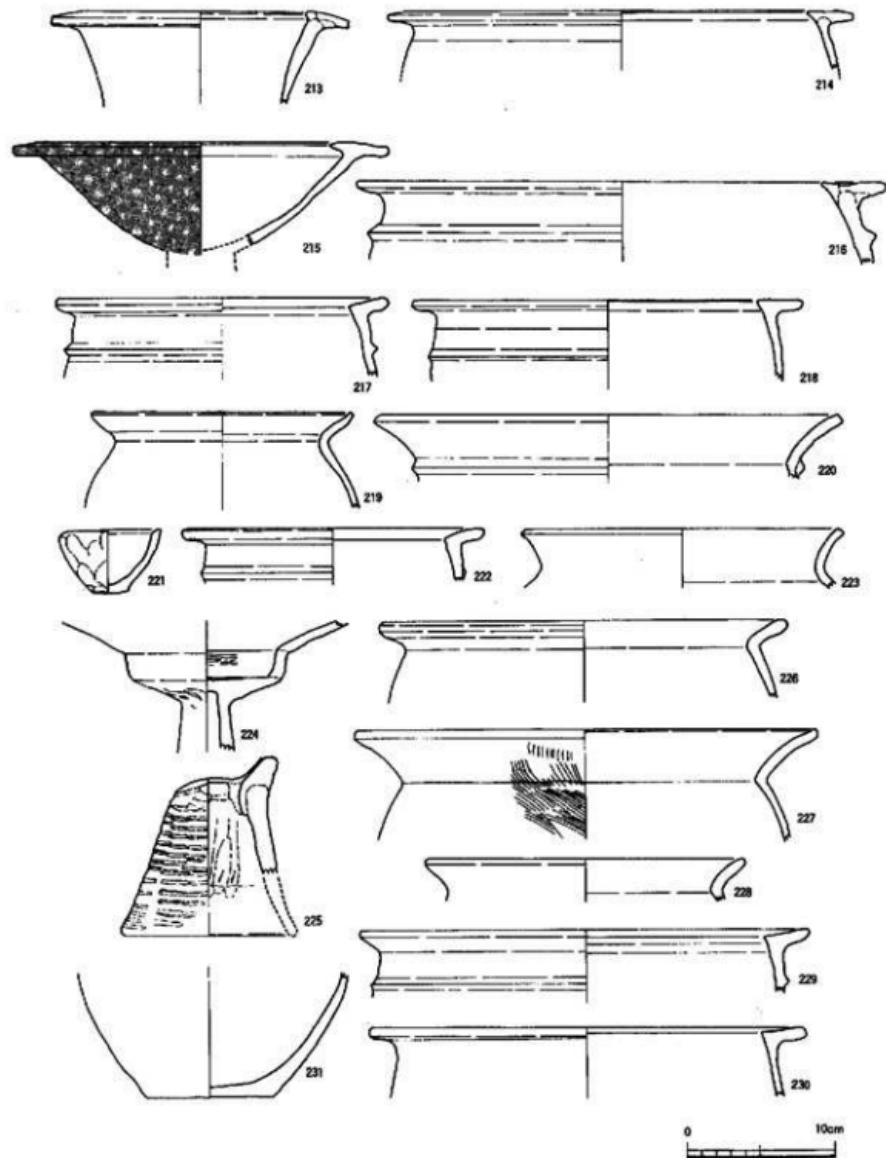


Fig. 46 穴住居跡SC231・324・366・419・453出土遺物実測図 (1 / 4)

(213~216 : SC231, 217~220 : SC324, 221~227 : SC366, 228~229 : SC419, 230~233 : SC453)

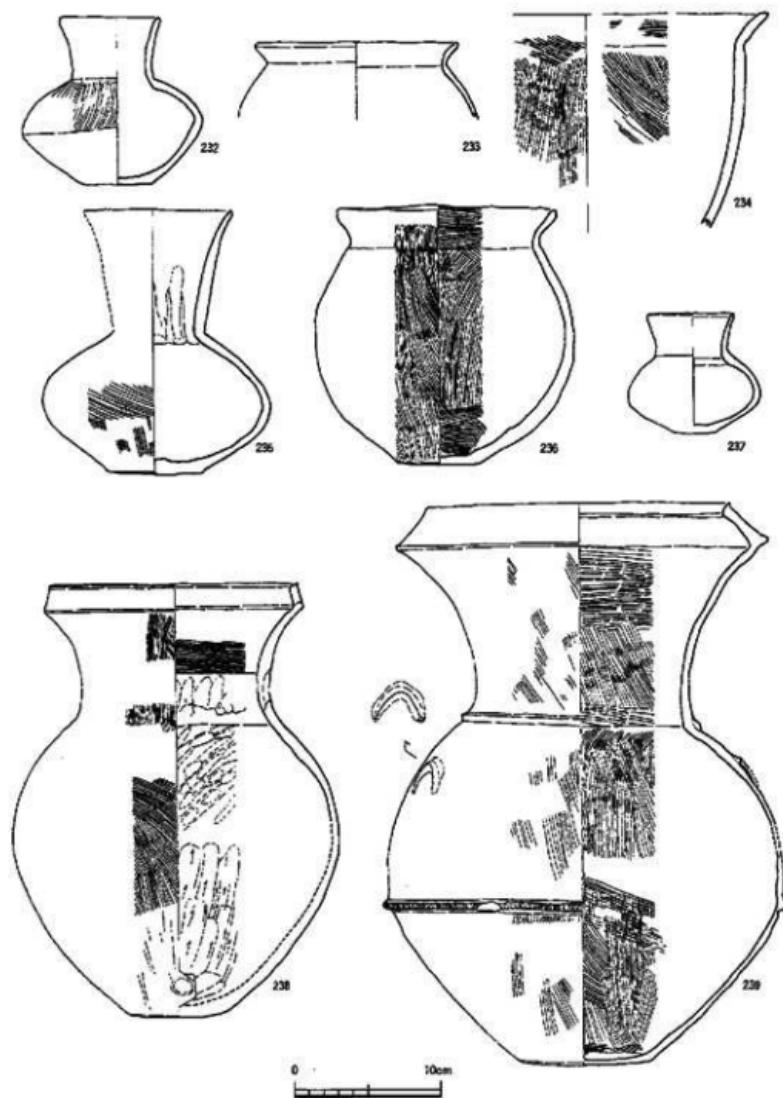


Fig.47 井戸SE15・16出土遺物実測図 (1/4)

(232-236 : SE15, 237-239 : SKM)

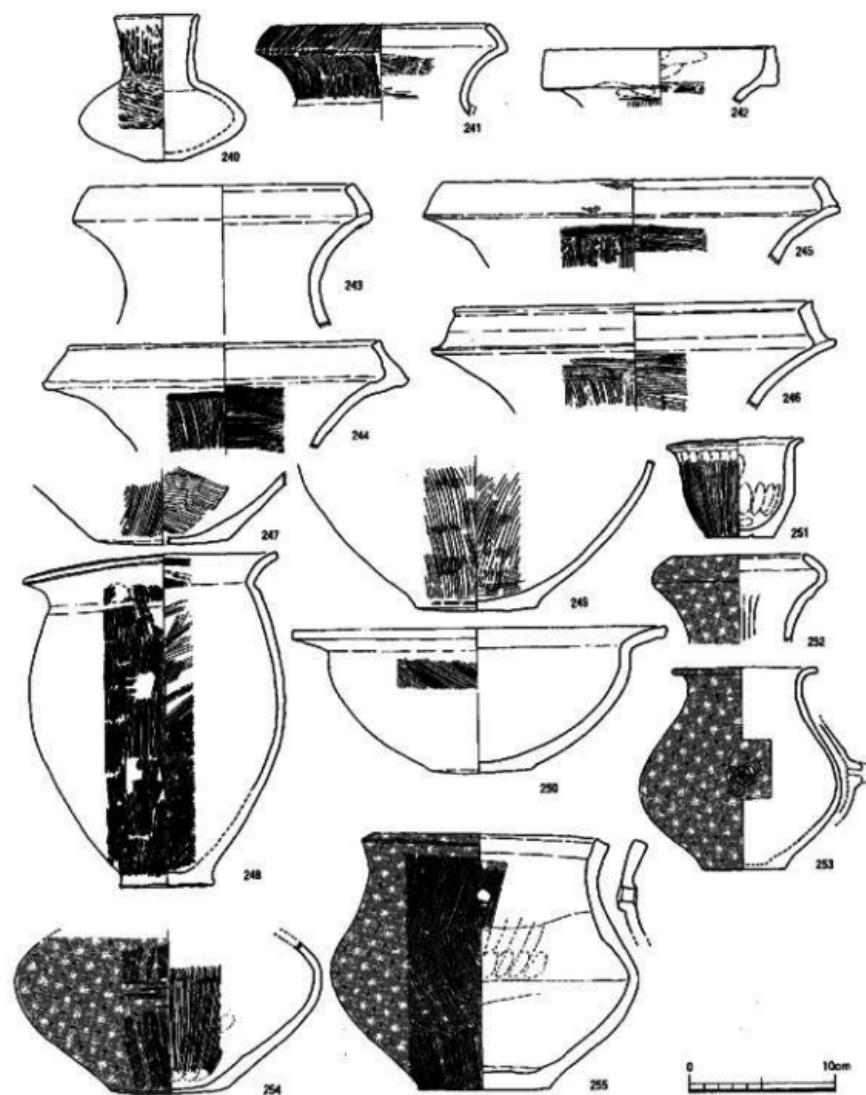


Fig. 48 井戸SE30・47出土遺物実測図 (1/4)

(240-250: SE30, 251-255: SE47)

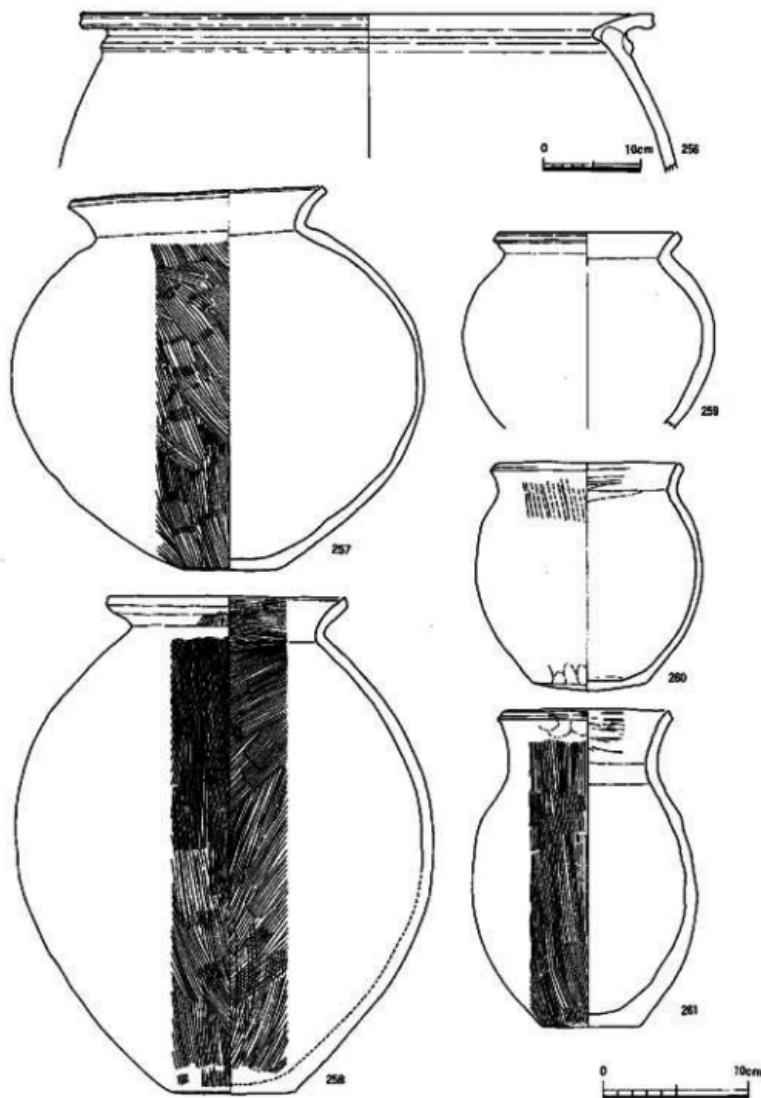


Fig. 49 井戸SE47・74出土遺物実測図 (1/4・1/6)

(256: SE47, 257~29; SE74)

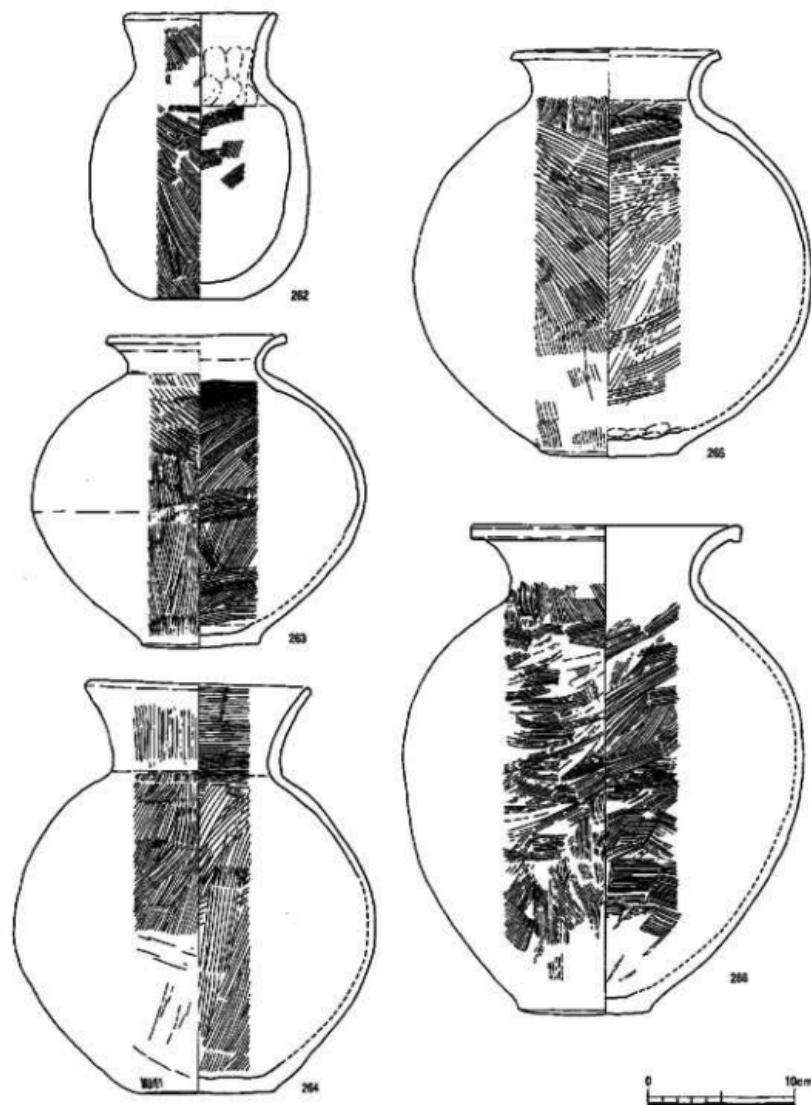


Fig.50 井戸SE74出土遺物実測図 (1／4)

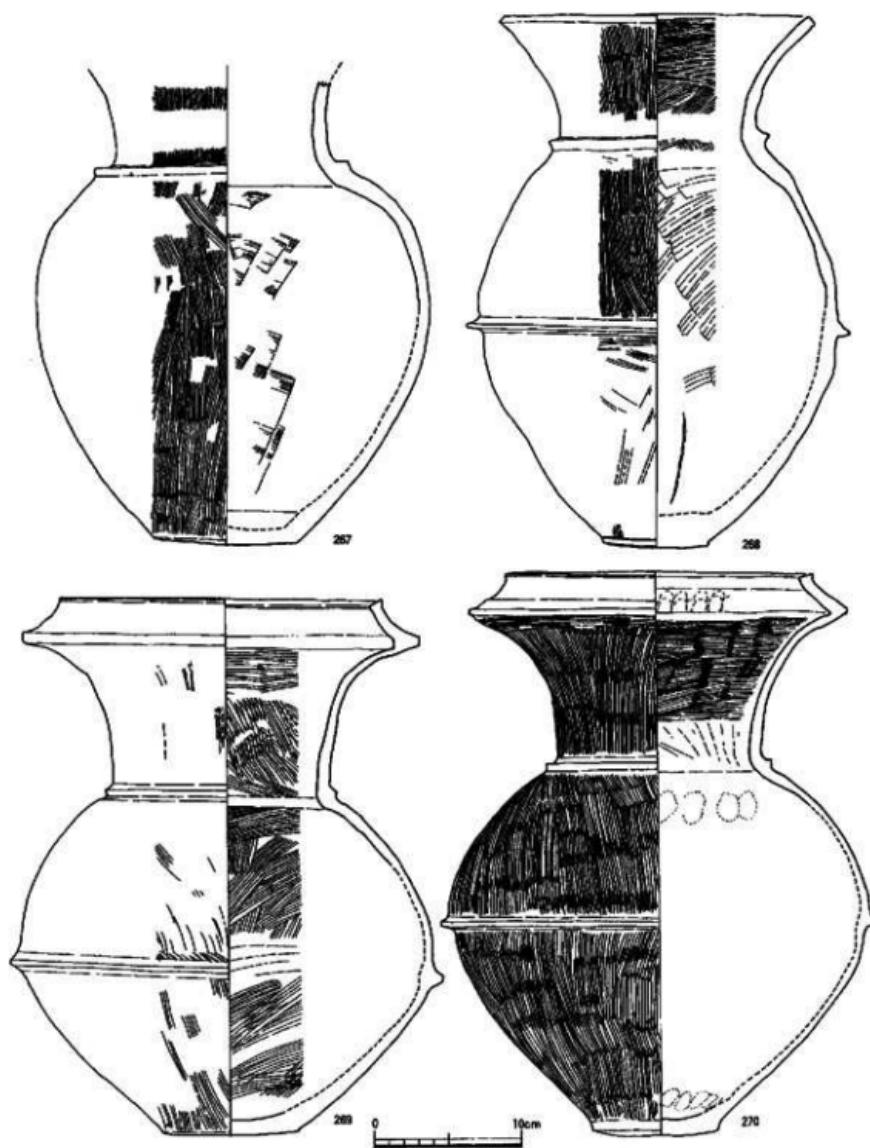


Fig. 51 井戸SE74出土遺物実測図 (1/4)



Fig. 52 井戸SE74出土遺物実測図 (1/4)

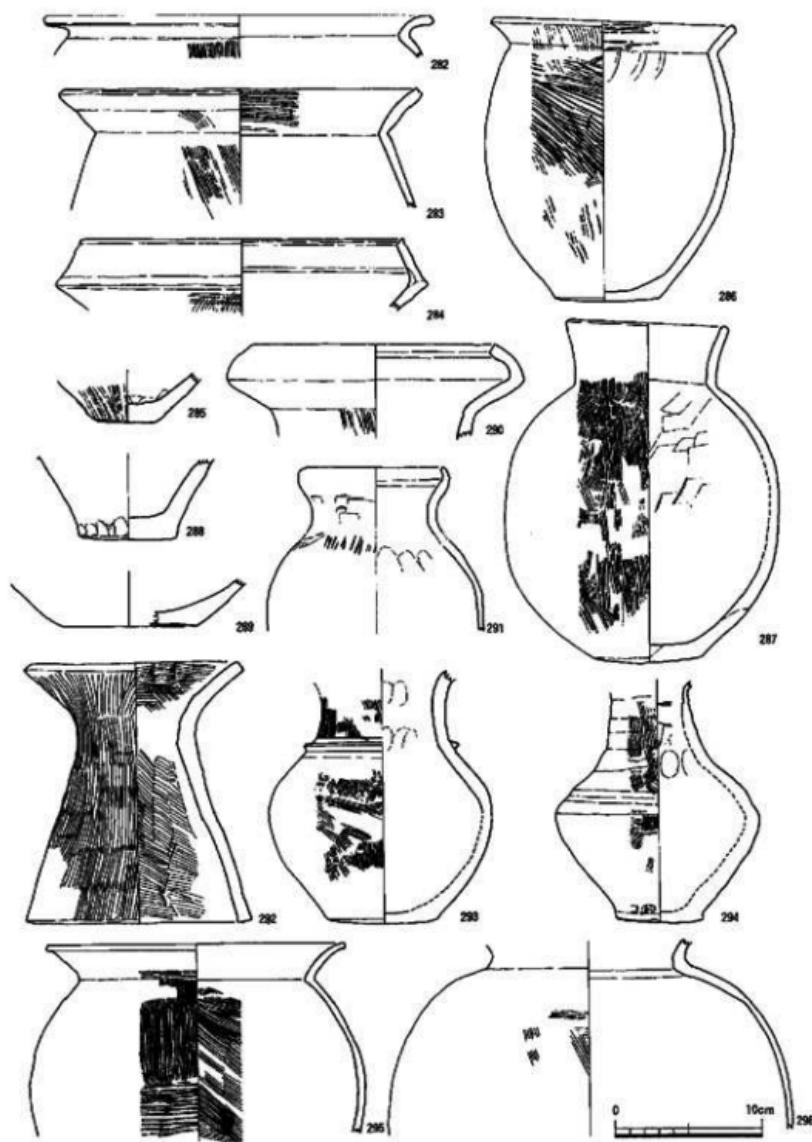


Fig.53 井戸SE123・162・202・230・260出土遺物実測図(1/4)

(282-285: SE123, 286-297: SE162, 288-294: SE230, 292-294: SE260, 295-296: SE260)

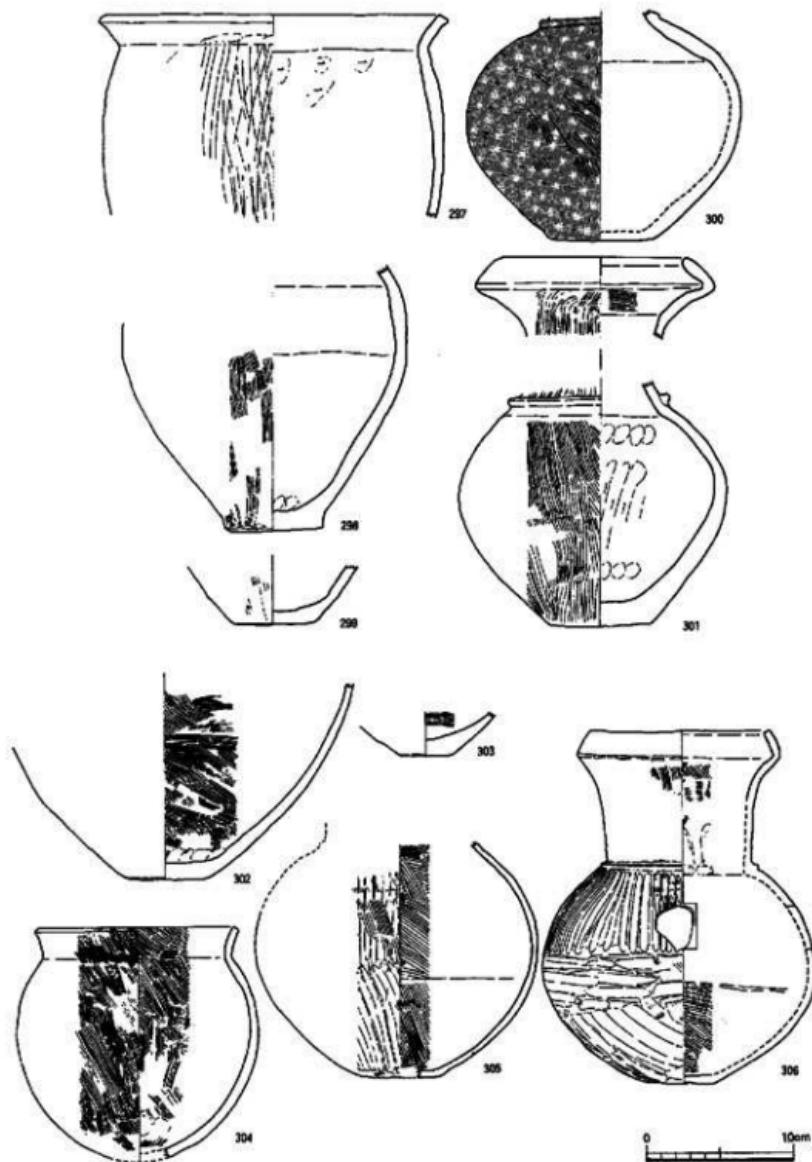


Fig.54 井戸SE315・378・448出土遺物実測図 (1/4)

297-301 : SE315、302-304 : SE378、305-306 : SE448

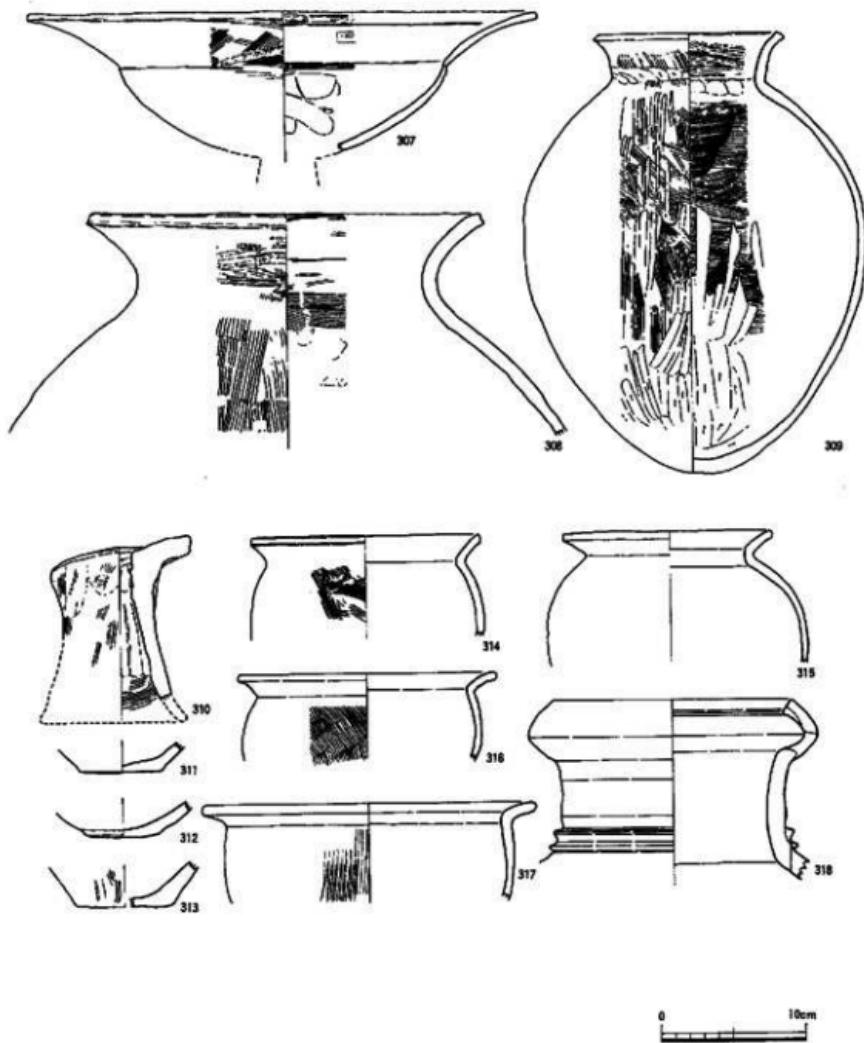


Fig.55 井戸SE448・449・489、柱穴SP470出土遺物実測図（1／4）

(307~309: SE448, 309: SE449, 310: SP470, 313~318: SE489)

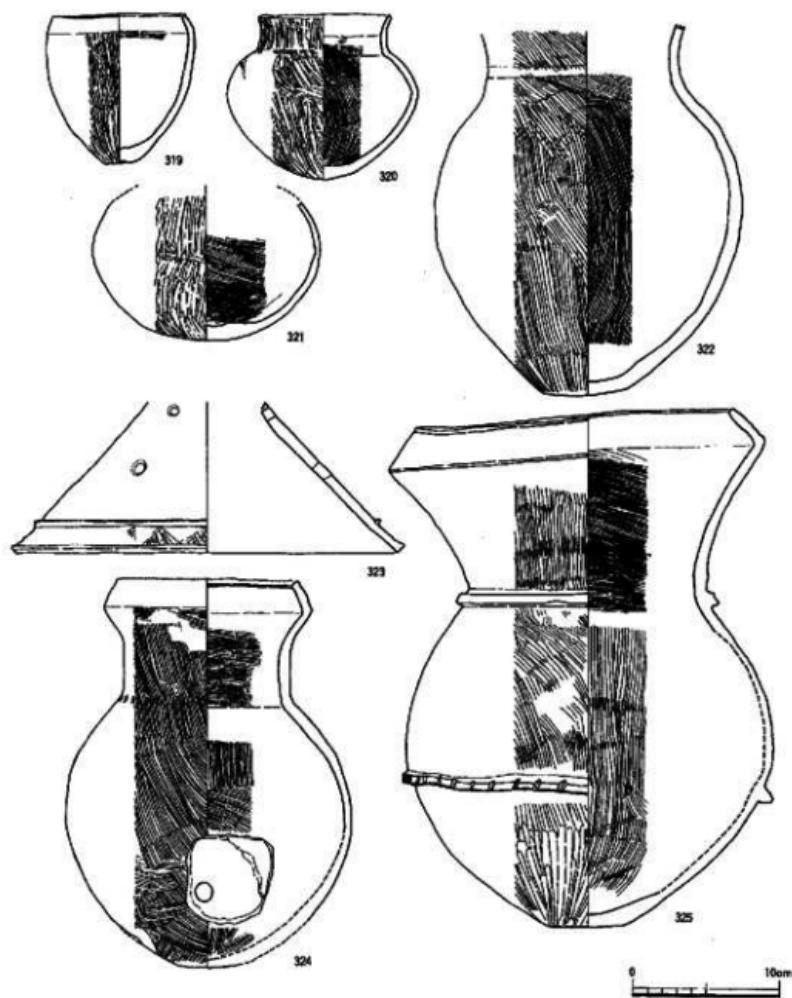


Fig. 56 井戸SE500出土遺物実測図 (1/4)

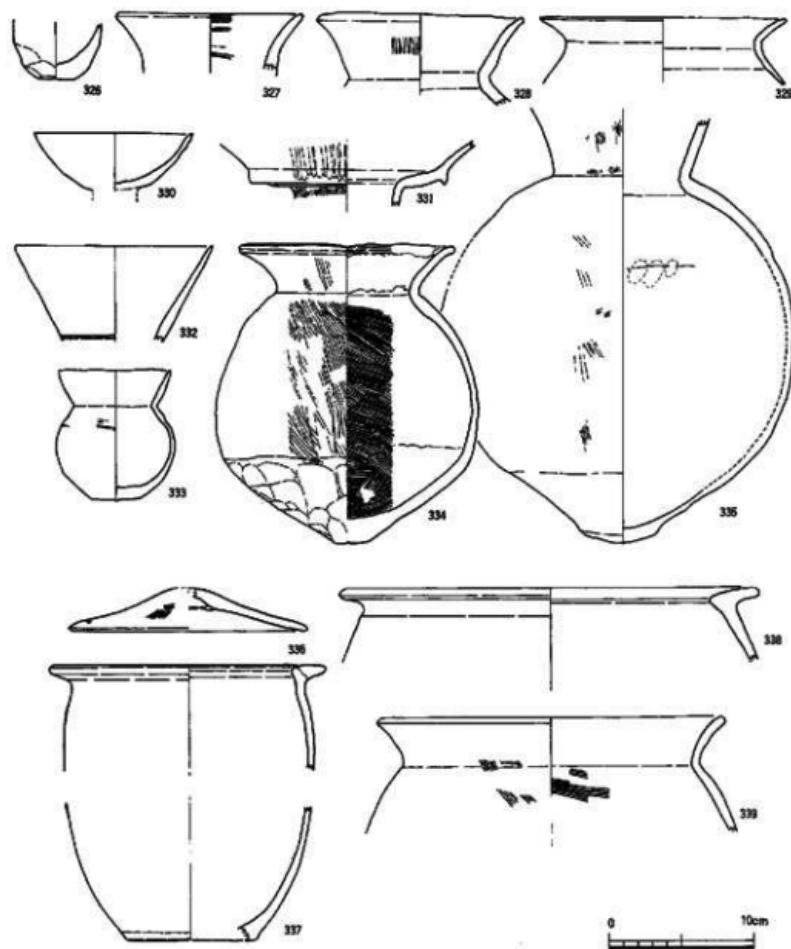


Fig. 57 井戸SE506・625、土壤SX618出土遺物実測図 (1/4)

(325-326: SE506, 326-328: SX618, 339: SE625)

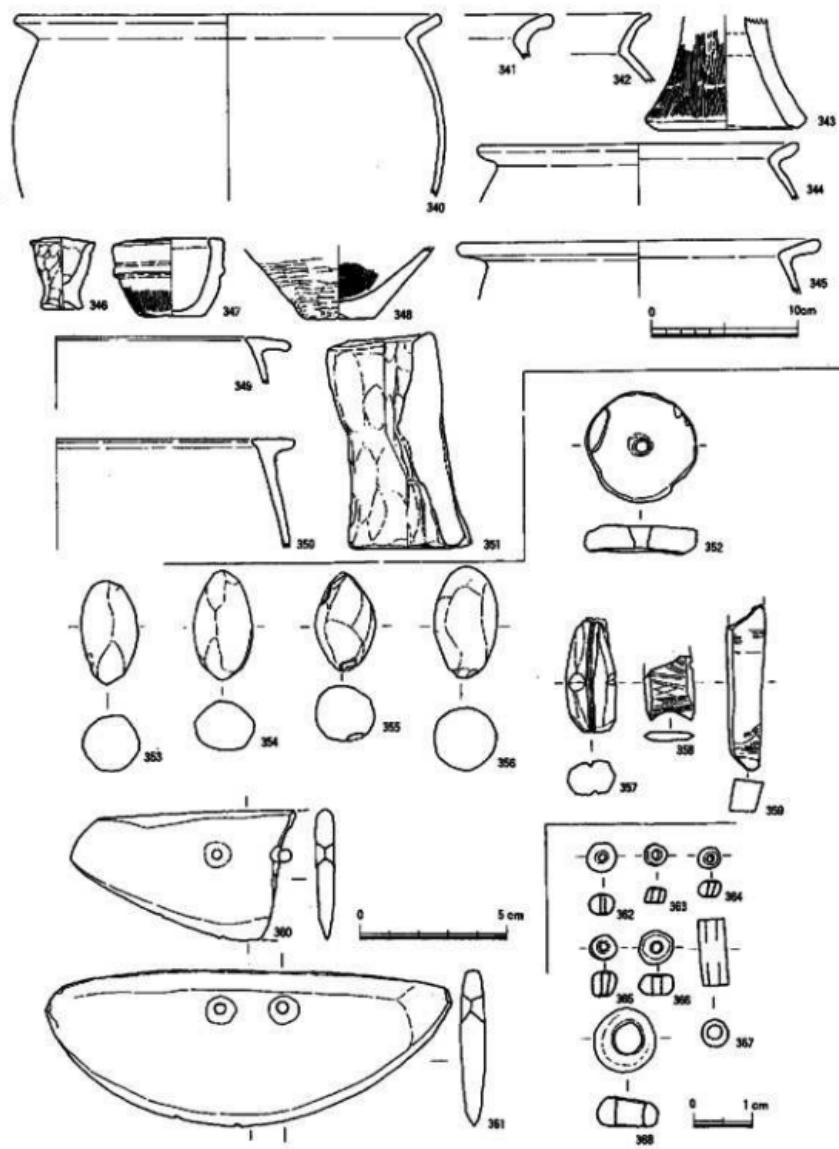


Fig. 58 柱穴・井戸・土壤・包含層出土遺物実測図 (1/1・1/2・1/4)
 340: SX180, 341・342: SX41, 343-348: SX420, 349-351: SX421, 352: SP196, 353: SP195, 354: SX230, 355: SB499, 356: SX699,
 357: SC63, 358: SC201, 359-360: SC206, 361: SP270, 362: SP277, 363: SP46, 364: SP195, 365: SC324, 367: SF335, 368: SF316

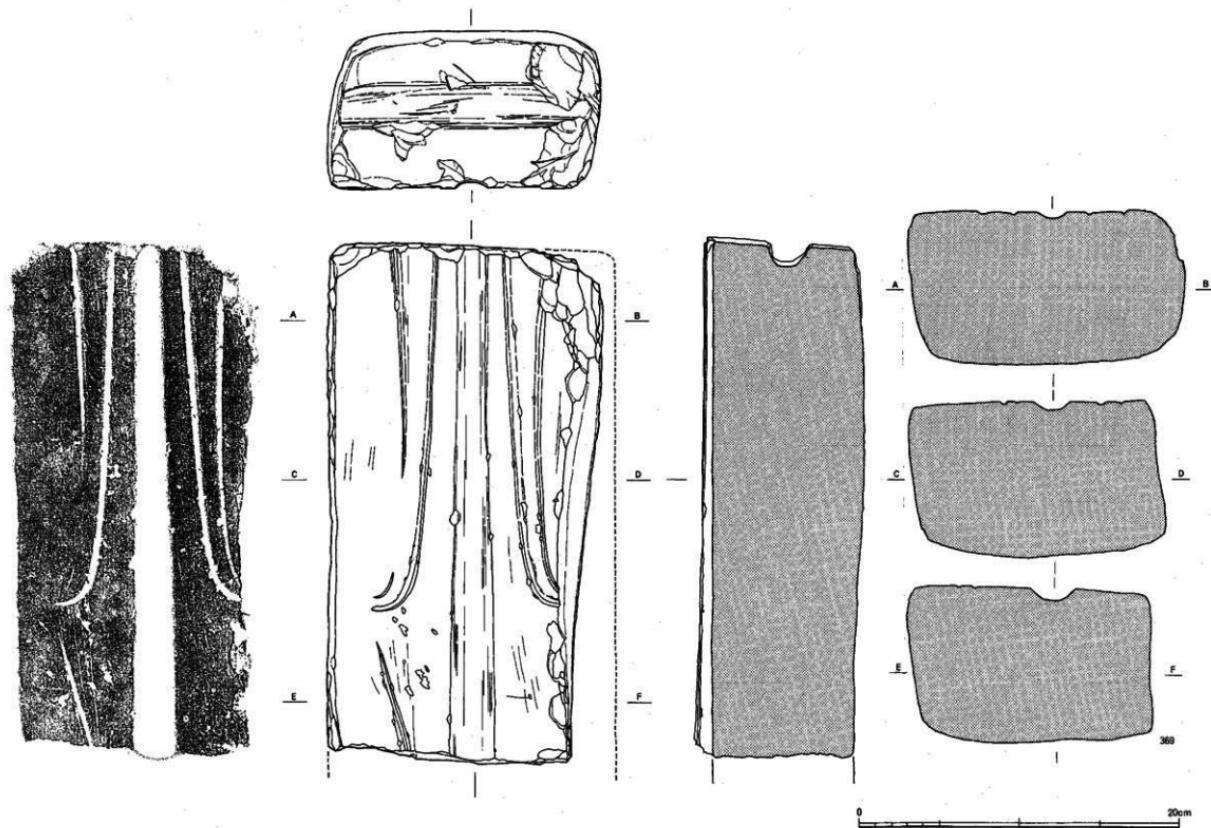


Fig. 59 整穴住居跡SC324出土
石製広形銅牙鉄型実測図(1/2.5)

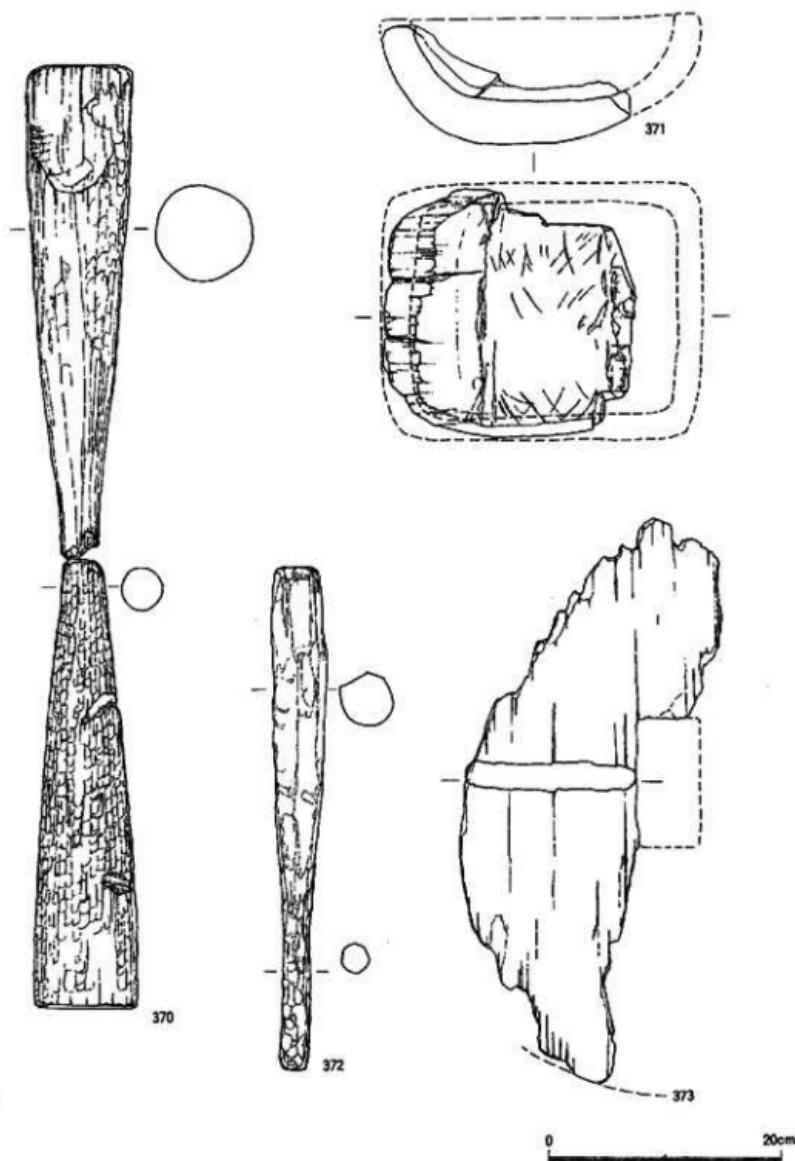


Fig.60 井戸SE74出土遺物実測図 (1 / 5)

4、第44次調査

(1)概要

調査地点は第40次調査区の南西部に隣接している。調査面積が狭いために遺構、遺物とともに少ない。弥生時代後期の井戸1基、古墳時代前期の井戸2基、南北方向に延びる弱い段落ちSX152を検出した。

(2)井戸 (SE)

SE134 (Fig. 63・64、PL. 25、Tab. 12)

調査区北側に位置する。平面形は不整な梢円形で、掘方は円筒形状である。深さは1.24mを測る。埋土は3層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土で黄白色粘土小塊を含む。弥生土器小片が混入している。第2層は黒灰色粘質土で黄白色粘土小塊、木炭、砂礫を含む。第3層は黒色粘質土で樹木片、木炭片を含む。廃絶時期は、弥生時代後期前半頃と思われる。

出土遺物 弥生時代中期の壺375、後期の壺374・376が出土している。

SE138 (Fig. 63・64、PL. 25・35、Tab. 12)

SE134の南側に隣接している。平面形は不整な梢円形で、掘方は円筒形状である。深さは1.25mを測る。埋土は4層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土で弥生土器小片を含む土器壺が完形品で出土している。第2層は暗褐色～黒褐色粘質土で黄白色粘土小塊、砂礫を含む。第3層は黒色粘質土で樹木片、木炭片を含む。第4層は黒色粘質土である。出土遺物からみて古墳時代初頭から前期に廃絶されたと思われる。

出土遺物 弥生時代後期後半から終末の壺377・382・386、古墳時代初頭～前期の器台380、壺379・381、高杯384、壺385が出土している。手握土器378は時期は不明。382の肩部にはヘラによる三角幾何文を施している。

SE143 (Fig. 63、PL. 25、Tab. 12)

SE138の南側に位置している。平面形は円形で、掘方は円筒形状である。深さは1.33mを測る。埋土は3層に分かれる。第1・2層は暗褐色～黒褐色粘質土である。第3層は黒色～黒灰色粘質土である。遺物は各層から弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が出でている。廃絶時期は古墳時代前期と思われる。

出土遺物 図示し得るものはない。

(3)柱穴 (SP)

柱穴はおそらく掘立柱建物のものと思われるが、本調査区では復元することはできなかった。埋土からの出土遺物からみて弥生時代後期および古墳時代以降のものと思われる。

SP153 (Fig. 62・64、PL. 25・35、Tab. 13)

南壁に一部かかっている。直径は約25cmで、深さ23cmの円形の柱穴である。柱抜き跡に弥

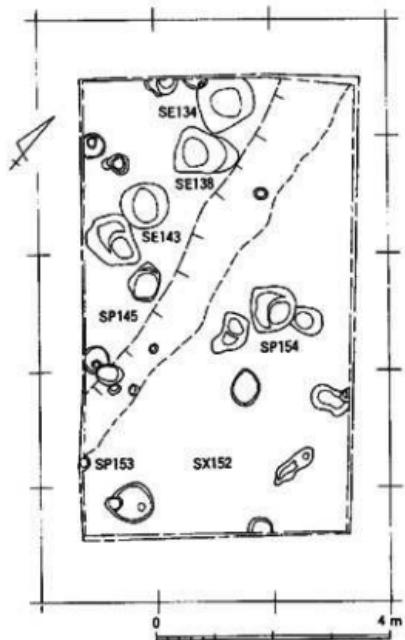


Fig. 61 第44次調査区遺構分布全体図 (1/100)

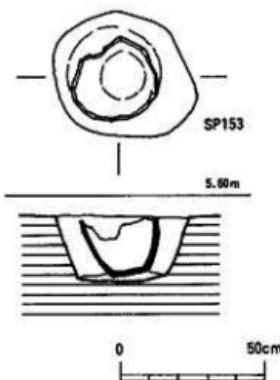


Fig. 62 柱穴SP153内遺物出土状況実測図 (1/20)

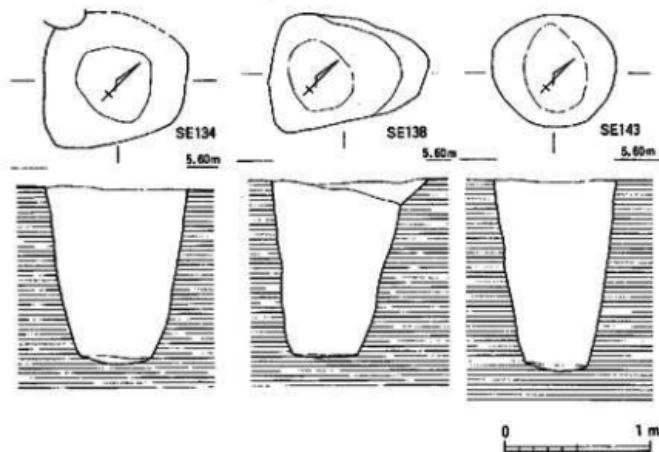


Fig. 63 井戸SE134・138・143平面および断面図 (1/40)

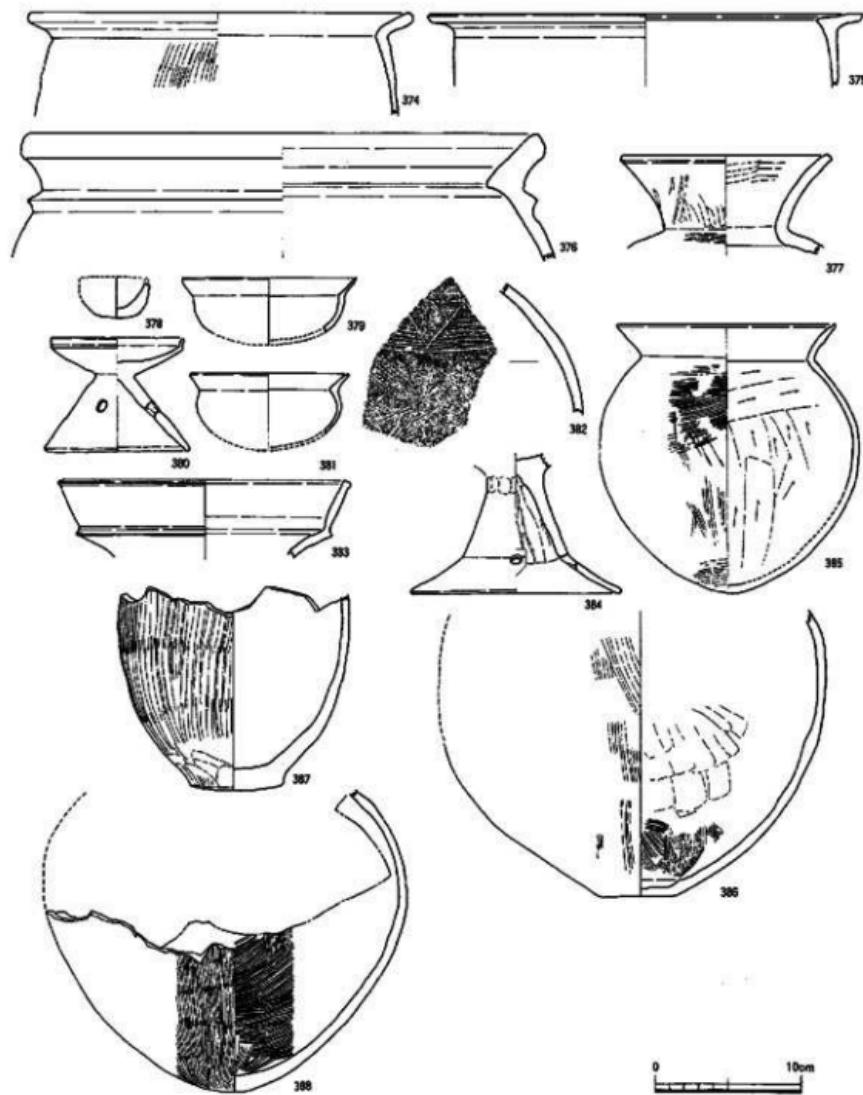


Fig. 64 井戸SE134・138、柱穴SP153・155出土遺物実測図 (1/4)

(374~376: SE134, 377~386: SP153, 387: SP155, 388: SP158)

生時代後期半ば～後半の壺形土器387が出土している。

SP155出土遺物 弥生時代終末の壺下部388が出土している。

(4) その他の遺構

ほぼ南北に延びる段落ちSX152を検出した。弥生時代の遺物を多く含む暗褐色～黒褐色粘質土が堆積している。段落ちの線は第40次調査SD01に平行している。その東側の範囲はSD01と平行して延びるSD48の西縁までである。幅は約20mあり、帯状に南北に延びているが、本来の分布範囲はさらに広かったものと思われる。第40次調査ではその範囲を遺物包含層としたが、SD01が完全に埋没した弥生時代終末後に形成された古墳時代以降の水田跡の可能性が考えられた。

Tab.12 第44次調査 井戸一覧表

* 深さは検出面からのマイナス値

Fig.	PL	建構 (SE)	平面形	断面形	計測値(m) a : b : c	床面標高 (m)	先後関係	出土物概要
63	25	134	円形	円筒形	1.00 : 0.95 : 1.24	4.23	SX152より古い	374～376
63	25	136	*	*	1.10 : 0.82 : 1.25	4.27	*	377～386
63	25	143	*	*	0.84 : 0.78 : 1.33	4.16	*	弥生中～後期・土器小片

Tab.13 第44次調査掲載土器所見一覧

: 法量の口径は外径、器台は台上面径、() は復元値

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	器種	法量(cm)		形態的特徴				出土遺構		
					口径	器高	底径	脚径	成形上の手法	色			
64	-	374	205	壺	26.3	-	-	-	口縁部片。口縁は「く」字形。	灰褐色	やや緑い、やや不良	SE134	
64	-	375	204	壺	29.5	-	-	-	口縁部片。口縁は「L」字形。	灰褐色	緑い	やや不良	SE134
64	-	376	203	壺	(36.0)	-	-	-	口縁部片。断面は強く内傾。内外面ヨコナギ。	青褐色	緑い	良	SE134
64	-	377	207	壺	14.5	-	-	-	口縁部片。外面部ハラミガキ。	青褐色	緑かい	良	SE138
64	-	378	209	鉢	(4.9) : (2.9) : 1.8	-	-	-	口縁部欠損品。手括土器。	青褐色	緑かい	やや秋	SE138
64	-	379	210	壺	12.0 : 4.8	-	10.4	-	底部欠損品。内外面とも丁寧なナダ。	青褐色	緑かい	良	SE138
64	35	380	206	器台	9.1 : 7.9 : 10.0	-	-	-	脚部一部欠損品。赤褐色表面後ヘタリガキ。表面に直径1.5cmの空孔あり。	青褐色	緑かい	やや不良	SE138
64	-	381	208	壺	11.0 : 5.4	-	10.0	-	口縁部片。器壁が荒れ調整痕不明。	黄褐色	緑かい	良	SE138
64	-	382	212	壺	-	-	-	-	断面部。鏡面幾何文を施す。	青色	やや緑い	良	SE138
64	-	383	211	壺	20.2	-	-	-	口縁部片。内外面ともヨコナギ。	灰褐色	やや緑い	良	SE138
64	-	384	213	高杯	-	-	14.4	-	素面片。径1.5cmの空孔あり。	青褐色	緑かい	やや不良	SE138
64	35	385	214	壺	15.0 : 18.7	-	17.8	-	完形品。断面は均等のこれまでの壺形。肩の張りは弱く、内面はハラミガキ。腹壁には押き痕がある。	青褐色	緑かい	やや不良	SE138
64	-	386	215	壺	-	-	5.3 : 26.3	-	底～脚部片。内面はカキトリ。外面はナダ。	青～墨灰色	やや緑い	やや不良	SE138
64	35	387	201	壺	-	-	6.5 : 16.0	-	底～脚部片。内面はハケ目凹凸ナダ。底部はやや丸みあり。	灰褐色	やや緑い	やや不良	SP153
64	-	388	202	壺	-	-	-	25.0	脚部片。内外面丁寧なハケ目。	青褐色	やや緑い	やや不良	SP155

5、第48次調査

(1) 概要

第48次調査区は、第40次調査区の北東部に隣接する地点である。第40次調査SD01の延長部が検出された第35次調査区は本調査区の北東部に近接している。調査区においては、弥生時代後期から占墳時代前期にかかる遺構と遺物、また江戸期から近代まで利用されていた灌漑用水路を検出した。検出した遺構は、井戸29基、溝3条、土壙47基、柱穴198である。また掘立柱建物を28棟推定復元した。昭和20年代の区画整理およびその後の工場建設による削平・搅乱を大きく受けおり全般的にみて遺構の遺存状況は悪く、南側が分布密度が低くなっている。遺構検出面の高さは標高4.8~5.1mである。北東方向に低くなっている。

出土した遺物は、弥生土器、須恵器、陶質土器、土師器、陶器、石器(石包丁、石鎌、砥石、石鍤、紡錘車、磨石、石鎌、黒曜石片)、土製品(紡錘車、投弾)、木製品(樋、板材)、銅鏡がある。遺物の出土量からみると、弥生時代後期のものがこの地点でも主体を占めるが、丘陵尾根の中央部に位置する第42次調査区と比べ古墳時代前期以降の遺構と遺物がやや目立ち、遺構の時期がやや新しい傾向が窺える。

(2) 掘立柱建物 (SB)

SB01 (Fig.66、PL.26、Tab.14)

調査区の南側に位置する。梁行1間または2間、桁行3間の東西棟である。規模はSB20とともに本調査区では最も大きい。柱穴は、一辺約80~100cmの不整な隅丸の方形または円形で、いずれも基底面に礎板を置いている。現存壁高は20~35cmほどである。現存する礎板は厚さ3~5cmほどで長さは約30cmである。埋土は黒灰色粘質土である。柱痕跡はSP35以外の柱穴で認められた。柱径は20~25cmほどと推定できる。東側妻の中柱は検出していない。切合い関係はSB02・05を切り、SD03から切られている。弥生時代後期後半~末期頃と思われる。

SB02 (Fig.66、PL.27、Tab.14)

調査区の南側、SB01と重複する位置にある。梁行1間、桁行2間の南北棟である。規模はやや大きい。柱穴の遺存状況は悪く、壁高は6~13cmほどである。埋土は黒灰色粘質土である。切合い関係はSB01に切られている。弥生時代後期前半から半ば頃と思われる。

SB03 (Fig.66、PL.28、Tab.14)

調査区の南西部に位置する。SB09と重複している。梁行1間、桁行2間の東西棟である。規模はやや大きい。柱穴の遺存状況はよく、壁高は15~45cmほどが残っている。埋土は暗褐色~黒褐色粘質土でよくしまっている。いずれの柱穴も底面に礎板を残している。切合い関係はSD04から切られている。弥生時代後期半ば頃のものと思われる。

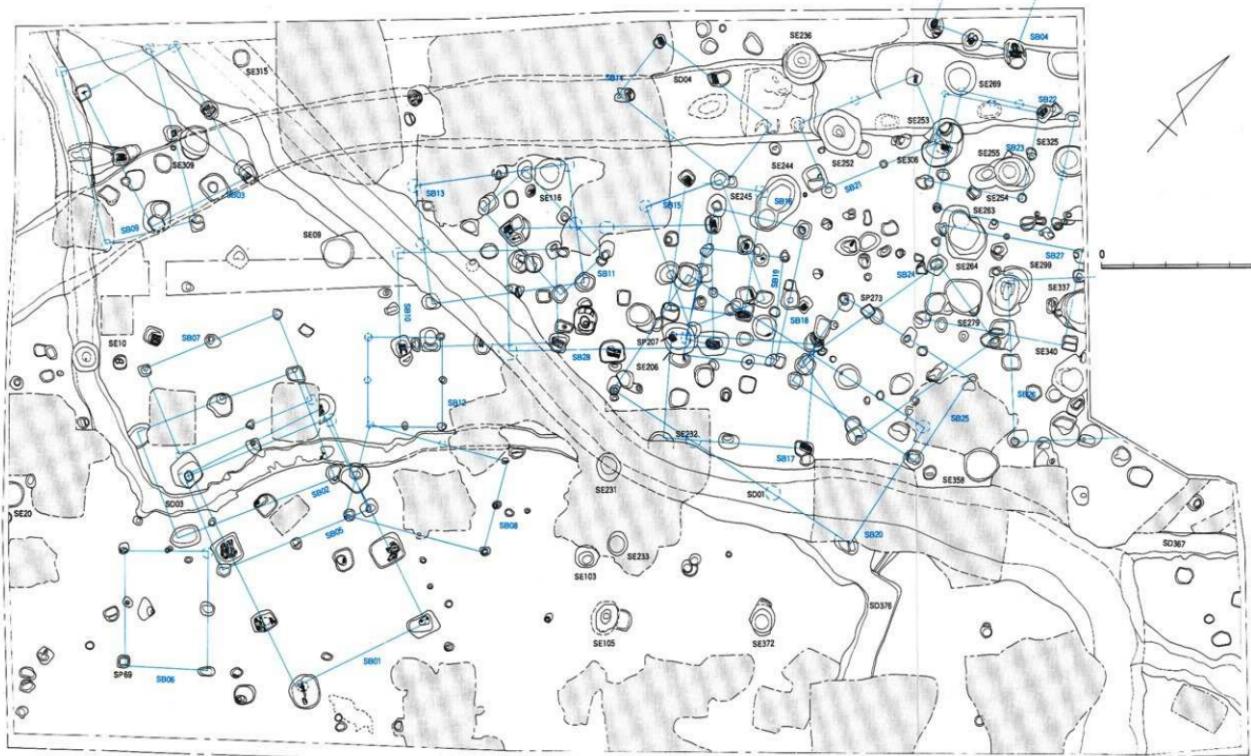


Fig.65
第48次調査区遺構分布全体図（1／125）
※アミ部分は、現代搅乱

SB04 (Fig. 66, PL. 28, Tab. 14)

調査区北側に位置する。2間×2間規模の掘立柱建物と思われる。柱穴の可能性がある。規模はやや小さい。柱穴は壁高が25~40cmほどで残っている。埋土は黒灰色粘質土で、いずれも礎板を有する。礎板は幅が15~20cm、厚さ4cmほどで残っており、直交させて二重に重ねて柱穴底面に設置している。SD04を切っており、古墳時代のものと思われる。

SB05 (Fig. 66, Tab. 14)

調査区の南側、SB01と重複している。梁行1間、桁行2間の東西棟である。規模はやや小さい。柱穴の遺存状況は悪く、壁高は10cmほどしか残っていない。埋土は黒褐色粘質土である。切合い関係はSD03を切り、SB01から切られている。弥生時代後期のものと思われる。

SB06 (Fig. 67, Tab. 14)

調査区の南側、SB01に近接している。梁行2間、桁行2間の南北棟である。柱穴の遺存状況は良く、壁高は28~40cmほどで残っている。埋土は暗褐色~黒褐色粘質土である。時期は不明確であるが、弥生時代後期のものと思われる。

SB07 (Fig. 67, Tab. 14)

調査区の南側、SB01の西側に位置している。梁行1間、桁行2間の南北棟である。柱穴の遺存状況は良く、壁高は14~20cmほどである。埋土は暗褐色土で、柱痕跡が残っている。柱径は15cm前後である。弥生時代後期のものと思われる。

SB08 (Fig. 67, Tab. 14)

調査区の南側に位置する。梁行2間、桁行2間の東西棟である。柱穴の遺存状況は悪く、壁高は10cmほどである。埋土は黒褐色粘質土である。西側妻の中柱SP36は南西隅柱側にやや寄っている。弥生時代後期のものと思われる。

SB09 (Fig. 67, Tab. 14)

調査区南西側に位置する。梁行1間、桁行2間の東西棟である。柱穴の遺存状況は良く、壁高は40~50cmほどで残っている。SP308の底部には礎板が残る。埋土はいずれも暗褐色~黒褐色粘質土。SD04から切られている。弥生時代後期のものと思われる。

SB10 (Fig. 67, Tab. 14)

調査区の中央に位置する。梁行1間もしくは2間、桁行2間の東西棟と考えられる。柱穴の遺存状況は南側柱は比較的良好である。南側柱SP78・84・133に礎板がわずかに残っている。埋土は黒褐色粘質土である。弥生時代後期か。

SB11 (Fig. 67, Tab. 14)

調査区の西側に位置する。梁行1間もしくは2間、桁行2間の東西棟である。SD01によつて南側柱が削平されている。2×2間規模の可能性が高い。柱穴の遺存状況は良好で、壁高は30~38cmほどである。埋土は黒褐色粘質土。古墳時代のものと思われる。

SB12 (Fig. 68, Tab. 14)

調査区中央南側に位置する。梁行2間、桁行2間の東西棟と考えられる。規模は小さい。柱穴の遺存状況はやや悪く、壁高は10~15cmほどが残っている。埋土は暗褐色~黒褐色粘質土である。柱穴の配列は整然としている。南側柱は確認できていない。時期は不明確であるが古墳時代のものか。

SB13 (Fig. 68, Tab. 14)

調査区中央の南側に位置する。梁行2間、桁行2間の南北棟と考えられる。規模は比較的大きい。柱穴の遺存状況は良く、壁高は20~27cmほどが残っている。埋土は暗褐色~黒褐色粘質土で、SP128・132・114には柱痕跡が残る。柱径は16~20cmほどの大きさが想定できる。時期は明確ではないが古墳時代のものか。

SB14 (Fig. 68, Tab. 14)

調査区西北部に位置する。梁行1間、桁行2間の東西棟である。柱穴の遺存状況は比較的良好であるが、一部SD04によって削平されている。埋土は黒褐色粘質土で、SP165・166・237には礎板がわずかに残っている。時期は明確ではないが弥生時代後期のものと思われる。

SB15 (Fig. 68, Tab. 14)

調査区西北部に位置する。梁行1間、桁行2間の南北棟である。規模はやや小さい。柱穴の遺存状況は良好である。40~50cmほどの深さで残っている。埋土は黒褐色粘質土。SP199・222には礎板がわずかに残っている。弥生時代後期のものと思われる。

SB16 (Fig. 68, Tab. 14)

調査区西北部、SB15と主軸をやや違えて重複している。梁行1間、桁行2間の東西棟である。柱穴は比較的残りがよいが、北隅柱が弥生時代後半~終末時期のSE244によって削平されている。埋土は黒褐色粘質土である。SP220・238には礎板が残っている。弥生時代後期前半頃のものと思われる。

SB17 (Fig. 68, Tab. 14)

調査区の中央に位置する。梁行1間、桁行2間の南北棟である。梁行の柱間がやや広いが、中柱は検出されていない。柱穴の遺存状況は良好である。壁高は30~38cmほどで残っている。埋土は暗褐色~黒褐色粘質土で、良くしまっている。SP208・382・290には礎板が残っている。SP290に残った礎板は厚さが5cmほどあったことが想定できる。切合い関係はSE206・232を切っている。弥生時代後期後半から終末と思われる。

SB18 (Fig. 69, Tab. 14)

調査区中央に位置する。梁行1間、桁行2間の東西棟である。柱配列は整然としている。梁行がやや広い。柱穴の遺存状況は良好である。壁高は40~50cmほどの深さで残っている。埋土は黒褐色粘質土である。SP249・376・242には柱痕跡が残っている。柱径は20~26cmほどの大きさが推定できる。弥生時代後期のものと思われる。

SB19 (Fig. 69, Tab. 14)

調査区の中央に位置する。SB15・16・18とはほぼ同じ位置で重複している。梁行1間、桁行2間の南北棟である。南隅部の柱は未確認である。その他の柱穴の遺存状況は良好である。壁高は35~45cmほどで残っている。SP205・256には柱痕跡が残っている。柱径は12~15cmほどと推定できる。弥生時代後期後半から終末にかけてのものと思われる。

SB20 (Fig. 69, Tab. 14)

調査区中央東側に位置する。梁行1間、桁行3間の大型の掘立柱建物である。SB01と比べて梁行、桁行ともにSB20のほうが長く、平面面積は6.2m²広い。柱穴は直径が60~80cmで、深さは50~60cmほどであり規模が大きい。礎板はその痕跡がSP244でわずかに確認されていることから、本来はSB01と同様に柱穴全部に用いられていたことが考えられる。時期は明確でないが弥生時代後期後半ころと考えられる。

SB21 (Fig. 69, Tab. 14)

調査区北側に位置する。梁行1間、桁行2間の南北棟である。柱穴の遺存状況は良いが、SD04によって一部が削平されている。SE306から切られている。埋土は黒褐色粘質土である。SP268には礎板がわずかに残っている。弥生時代後期のものと思われる。

SB22 (Fig. 69, Tab. 14)

調査区北側に位置する。梁行2間、桁行2間の規模が想定でき、総柱の可能性がある。柱穴は径30cm前後でやや小さい。SD04、SE253・306・325を切っている。SE269との切合の関係は不明である。弥生時代後期終末から古墳時代前期のものと思われる。

SB23 (Fig. 70, Tab. 14)

SB22とほぼ重複している。梁行2間、桁行2間の南北棟である。柱穴はやや残りが悪く、SE306から切られている。柱穴の遺存状況はあまり良くないが、SP323・400には礎板がわずかに残っている。埋土は黒褐色~黒灰色粘質土である。弥生時代後期後半~終末のものと思われる。

SB24 (Fig. 70, Tab. 14)

調査区北側中央に位置する。梁行1間、桁行2間のやや長大な南北棟である。柱穴の遺存状況は良く、壁高は30~48cmほどで残っている。埋土は黒褐色粘質土で、SP281・404には礎板の痕跡がわずかに残っている。弥生時代後期後半のものと思われる。

SB25 (Fig. 70, Tab. 14)

調査区の北側中央に位置する。梁行1間、桁行2間の東西棟である。柱の配列は整然としている。柱穴の遺存状況は良好で、壁高は40~47cmほどで残っている。埋土は黒褐色粘質土。SP277・377・351には礎板痕跡がわずかに残っている。弥生時代後期のものと思われる。

Tab.14 第48次調査 据立柱建物一覧表

Fig.	PL	造構 (SB)	規模(間) 桁行	規模(m) 梁行	棟方向	床面積 (m ²)	柱穴番号 (SP)	礎板 有無	先後関係 (先→後)
66	26	01	2×3	7.50	4.44	N-111'-E	33.30	35, 36, 41, 42 50, 51, 54, 55	○ SB02→SB01 SB01→SD03
66	27	02	1×2	5.30	3.58	N-29'-E	19.00	44, 47, 49, 73 191, 419	？ SB02→SB01
66	28	03	1×2	4.72	3.25	N-112'50"-E	15.38	06, 305, 310 311, 429	○ SB03→SD04 SP02→SP312, SB03→SD03
66	28	04	2×?	2.72	-	N-160'-E	-	300, 322, 414	○ SD04→SB04
66	27	05	1×2	4.96	3.14	N-49'-E	15.60	37, 39, 40, 46	？ SB05→SB01·SD03
67	-	06	2×2	3.69	2.60	N-140'50"-E	9.59	63, 66, 69 70, 417, 418	× —————
67	26	07	1×2	4.52	2.90	N-27'50"-E	13.19	32, 33, 34, 45	× SB07→SD01
67	26	08	2×2	4.48	2.96	N-64'-E	13.26	36, 38, 90, 91 96, 99	× —————
67	26	09	1×2	5.58	2.93	N-125'-E	16.51	07, 308, 430	○ SB09→SB03·SD03 SB09→SP309·SD04
67	26	10	1×2	4.98	2.95	N-47'50"-E	14.79	78, 84, 120 126, 133	× SP79→SB10·SD01 SP177→SB10·SP127
67	26	11	2×2	3.65	1.85	N-97'-E	6.75	113, 115, 123 121, 120	× SP172→SB11
68	26	12	2×2	2.82	2.33	N-139'-E	6.57	82, 85, 86, 87	× SP81→SB12
68	26	13	2×2	4.85	3.76	N-41'50"-E	18.23	77, 114, 128 132	× SD01→SB13
68	27	14	1×2	4.40	2.20	N-87'15"-E	9.68	165, 167, 237 240	○ SB14→SP239
68	27	15	1×2	4.03	2.52	N-119'50"-E	10.15	192, 200, 218 229, 436	○ SB15→SP435→SB15 SB14, SB16, SB20→SB15 SB15→SP222
68	27	16	1×2	3.95	2.44	N-148'-E	9.66	168, 191, 201, 221, 238	○ SP216→SB16→SP222 SB16→SB15
68	27	17	1×2	4.54	3.29	N-54'-E	14.93	207, 223, 290 379, 382	○ SP208→SB17, SP289→SB17 SE206→232→SB17
69	27	18	1×2	4.21	2.92	N-157'-E	12.32	196, 206, 241 249, 269, 376	× SB18→SB19, SP270→SB18 SB28→SB18·SB20
69	26	19	1×2	3.42	2.41	N-146'-E	8.16	188, 205, 219, 256, 280	× SB18→SB19
69	27	20	1×3	8.89	4.33	N-82'-E	38.58	184, 194, 225 233, 392	○ SP195→SB20, SP183→SB20 SB20→SP182
69	27	21	1×2	3.92	2.21	N-27'-E	8.70	248, 268, 400 422, 425	○ SB21→SP246·SD04 SE306→SB21
69	27	22	2×2	3.76	3.67	N-152'50"-E	13.79	331, 410, 413 431	× SD01→SB22
70	26	23	2×2	3.03	2.78	N-61'-E	8.42	256, 266, 323 411, 412	○ SP324→SB23 SB23→SE255
70	26	24	1×2	5.30	3.00	N-14'50"-E	15.90	281, 296, 349 404	○ SB25→SB24
70	26	25	1×2	4.63	3.10	N-82'-E	14.47	272, 275, 347 351, 357, 377	○ SB25→SB24
70	27	26	2×?	5.06	-	N-47'50"-E	-	298, 339, 346 359, 432	× SE340→SB26→SE299
70	27	27	1×2	4.44	3.00	N-60'50"-E	13.32	276, 296, 338 409, 433, 434	○ SB27→SE263 SB27→SX278·SP295
70	27	28	1×2	6.45	3.84	N-48'50"-E	24.89	163, 180, 210 243	○ SB28→SP435→SB15 SB28→SP242

* 級板の有無は調査によって確認されたもの

SB26 (Fig. 70、Tab. 14)

調査区の北縁に位置する。梁行2間、桁行2間の掘立柱建物で、総柱になると思われる。柱穴の遺存状況は比較的良好である。SE340を切り、SE299から切られている。古墳時代前期のものと思われる。

SB27 (Fig. 70、Tab. 14)

調査区北側に位置する。梁行1間、桁行2間の南北棟である。柱穴の配列は整然としている。遺存状況は比較的良好である。埋土は黒褐色粘質土で、SP296・338には礎板の痕跡が残る。SE263から切られている。弥生時代後期のものと思われる。

SB28 (Fig. 70、Tab. 14)

調査区の中央に位置する。梁行1間、桁行2間の南北棟である。規模は比較的大型のものである。柱穴の遺存状況は良好である。SP180・163・210には礎板がわずかに残る。壁高は35~48cmほどが残っている。埋土は黒灰褐色、柱痕跡がSP179に残っており、柱径は約20cmである。SB15から切られており、弥生時代後期半ば~後半のものと思われる。

出土遺物 柱穴から出土した土器はいずれも細片で図示できるものは少ない。SP69からは弥生時代後期の壺389が、SB17(SP207)からはおそらく弥生後期と思われる壺底部390が、またSP273からは弥生時代後期後半の壺391と小型鉢392・393が出土している。

(3)溝 (SD)

SD01・371 (Fig. 65・75、PL. 26、Tab. 16)

調査区西隅から東隅にかけて東西に延びる近代~現代の灌漑用水路である。比恵第6次調査においては西側延長部が検出されている。北東部では向きを大きく南東方向に変えて延びている。東隅のSD371はこの溝の一支流である。幅は1.5~2.3m、深さは0.7~0.9mを測る。埋土は茶褐色砂質土が全体を覆っており、最下層は暗青灰色粘質土である。近世陶磁器の破片、下駄や流木、ガラス、器台396、壺405が出土している。

SD03・367・376 (Fig. 65、PL. 26・29)

これらの溝は中世以降の畦溝と思われるもので第40次調査SD117とは一連のものである。幅は50~70cmで深さは30~45cmを測る。断面形は「U」字形をなす。緩く蛇行しながら、調査区南側と東側で大きく屈曲している。埋土は褐色~暗褐色粘質土で弥生土器をはじめとして龍泉窯系青磁片等がわずかに出土している。

SD04 (Fig. 71・75、PL. 28・29、Tab. 16)

調査区の西南部から西壁に沿って検出された弥生時代後期後半から終末の溝である。第40次調査のSD48の北側延長部にあたる。南側はSD01とSD03により寸断され、また調査区中央部では現代の擾乱により大きく削平を受け消滅している。幅は2.3~2.8m、深さは30~45cmを測り、底面のレベルは北へ向かってわずかずつ低くなっている。おそらく台地の縁辺に沿う溝であり、溝の東側の平坦部分と西側の緩斜面とを画する溝であった可能性がある。

埋土は暗褐色～黒褐色粘質土できめ細かな泥土である。二次堆積した弥生時代中期から後期終末、および古墳時代前期の土器片が多く出土しているが、第40次調査のSD01にみられたような完形土器がまとまって投棄された状況はみられない。

出土遺物 弥生時代後期後半の壺402、高杯397、終末の壺391・398・399、器台395・400・401、大型の壺403・404・406・407の他、古墳時代初頭にかかる壺片が出土している。

(4) 井戸 (SE)

本調査区においても井戸が多数検出された。総数で29基ある。井戸は弥生時代後期半ば～古墳時代前期のものである。規模は直径が80cm前後で、深さが約1mのものと、直径が1mを越し、深さが2.5～3mのものとがある。前者は弥生時代終末から古墳時代にかけてのものが多く、後者は弥生時代後期半ば前後のものが多い傾向がある。なお現在の湧水面は標高3.6m前後の面である。ちなみに尾根頂部近くに位置する第42次調査区においては湧水面は、4.3～4.5mの面であるので約1mほどの差があることになる。

SE09 (Fig. 72・77, PL. 32・35, Tab. 15・16)

調査区の南側に位置する。SD01から北側上部を切られている。平面形は円形で掘方は円筒形状をなす。深さは1.03mを測る。埋土は3層に分かれる。第1層は暗褐色粘質土で黄白色粘土小塊を若干含む。第2層は暗灰褐色粘質土で木炭片・小礫を含む。この層からまとめて弥生時代終末の土器群が出土している。第3層は黒褐色粘質土である。床面から+20～35cm厚で堆積している。

出土遺物 弥生時代後期後半～末の鉢414、器台408・412、支脚409～411・413、高杯415・416、壺417・420、大型の壺418、中型の壺419が出土している。いずれも第2層からの一括遺物である。

SE10 (Fig. 72・77, PL. 32・35, Tab. 15・16)

調査区の南側に位置する。SD03から上部を切られている。平面形は円形で掘方は円筒状である。深さは1.18mである。埋土は4層に分かれる。第1層は暗褐色粘質土で灰白色粘土小塊を若干含む。第2層は黒褐色粘質土である。木炭片を多く含む。第3層は黒灰色粘質土である。第4層は黒褐色粘質土で小礫や土器片を比較的多く含んでいる。出土した土器は弥生時代終末の時期である。

出土遺物 壺421・422が出土している。いずれも第4層から出土したものである。

SE20 (Fig. 72・77, PL. 32, Tab. 15・16)

調査区南壁に半分かかっている。北側半分のみ掘り下げた。平面形は円形である。深さは底面まで掘り下げていないので不明確であるがSE10程度と思われる。掘方は円筒形状をなす。埋土は2層まで確認した。第1層は暗灰褐色粘質土である。黄白色粘土小塊を含み軟質である。第2層は黒褐色粘質土で弥生時代中期から後期後半の土器片を比較的多く含んでいる。

出土遺物 壺胴部424が出土している。底部は丸みのある平底である。

SE103 (Fig. 72・77, PL. 32, Tab. 15・16)

調査区中央の東側に位置する。現代擾乱によって上部は削平を受けている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは0.78mを測る。埋土は2層に分かれるが、一括して埋め戻された状況である。底面に弥生時代後期後半の口頭部を打ち欠いた壺が1点出土している。

出土遺物 壺胴部423が出土している。

SE105 (Fig. 72, PL. 32, Tab. 15)

SE103の東側に位置する。平面形は不整な楕円形で、掘方は袋状をなしている。本来は円筒形状をなしていたものが壁面の崩落により袋状となつたと思われる。底部は平坦ではなく中央部をさらに一段掘り下げている。深さは1.68mを測る。埋土は5層に分かれる。第1層は茶褐色粘質土である。第2～4層は上部から中位にレンズ状に堆積している暗褐色～黒褐色粘質土で、弥生土器の小片や木炭片、木片を含んでいる。第5層は黒灰褐色粘質土と黄白色粘土の混合土層である。時期は不明確であるが弥生時代後期後半頃と思われる。

SE116 (Fig. 72・77, PL. 32・35, Tab. 15・16)

調査区中央の西側に位置する。平面形はやや不整な円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは2mを測る。埋土は大きく7層に分かれる。第1層は暗褐色粘質土。第2～4層は上部から中位に堆積する暗灰褐色粘質土で黄白色粘土小塊や灰白色粘土小塊が混入する土層である。一度に埋め戻されたものと思われる。第5層は黒灰色粘質土で弥生時代中期～後期の土器片を含む。第6層は黒灰褐色粘質土で砂礫がやや目立つ。第7層は黒褐色～黒灰褐色粘質土で、弥生時代後期後半から終末の壺や甕が投棄された状況で出土している。

出土遺物 長頸壺425、壺426・428、大型の甕が出土している。これらは第7層からの出土で、いずれも弥生時代終末期のものである。

SE206 (Fig. 72・78, Tab. 15)

調査区中央に位置する。SB18から切られている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは0.88mを測り浅い。埋土は4層に分かれる。第1層は暗灰褐色～黒褐色粘質土である。第2層は暗褐色粘質土である。第1・2層は一時に埋め戻されたものと思われる。第3層と4層は底面上にレンズ状に堆積している黒灰褐色粘質土である。黄白色粘土小塊を若干含んでいる。

出土遺物 弥生時代後期後半の壺429、終末期の甕430～432が出土している。これらは第4層からの出土である。

SE231 (Fig. 72・78, PL. 35, Tab. 15・16)

調査区中央に位置する。現代の擾乱で上半部が削平されている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは1.81mを測る。埋土は4層確認した。第1層は暗褐色～黒褐色粘質土である。第2層は暗褐色粘質土でほとんど底面まで堆積している。第3層と第4層は黒灰色粘質土で黄白色粘土小塊や弥生土器片を含む。底面からは弥生土器後期後半～終末の甕が出土している。

出土遺物 第4層から弥生時代後期後半～終末の壺435が完形で出土している。

SE232 (Fig. 72・78、Tab. 15)

調査区中央、SE231の北側に位置する。現代の擾乱で上半部が削平されており原状をほとんど留めていない。平面形は円形で、掘方は円筒形状だったと思われる。埋土は黒褐色粘質土である。弥生時代後期半ば頃の土器片が出土している。

出土遺物 小型の壺口縁部片433・434が出土している他は細片である。

SE233 (Fig. 73・78、Tab. 15)

調査区中央部東側、SE108の北側に位置する。底部がかろうじて残っている。平面形は円形である。埋土は黒褐色～黒色粘質土である。底部からSE231とほぼ同じ時期の弥生土器の壺436が完形で出土している。

SE236 (Fig. 73・78・79、PL. 33・35・36、Tab. 15・16)

調査区北西部に位置する。SD04から東側半分を切られている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。底面の中央はさらに一段深く掘り下げている。深さは2.10mを測る。埋土は大きく3層に分かれる。第1層は黒褐色～黒灰褐色粘質土で灰白色粘土小塊を含む。層厚は0.90mで、この層の下部に弥生時代後期半ば前後の壺を主体とした上器群がまとまって出土している。

出土遺物 弥生時代後期半ばの壺437以外はすべて後半のものである。壺445、大型の壺438、中型の壺447～451、小型の壺439・441・442・446、長頸壺443・444、鉢440がある。

SE244 (Fig. 73・80、PL. 33・36、Tab. 15・16)

調査区北西部に位置する。SE245を切っている。平面形は円形である。掘方は円筒形状をなす。深さは1.76mを測る。埋土は大きく4層に分かれる。第1層は黒灰色粘質土である。第2～3層は上部から下部にかけてブロック状に堆積した黒灰色～黒灰褐色粘質土である。弥生時代中期から後期の土器片を含んでいる。第4層は底部直上に約40cm厚で堆積している黒灰褐色～黒色粘質土である。底面からやや浮いた面に弥生時代後期後半～終末の土器片が出土している。

出土遺物 支脚452以外はすべて壺453～458である。455・458は弥生時代後期半ば頃と思われるが、他は終末期のものである。

SE245 (Fig. 73・80、PL. 33・36、Tab. 15・16)

SE244によって北側上部から壁面中位が削平されている。平面形は円形である。掘方は円筒形状をなす。深さは1.73mを測る。埋土は9層に分かれる。第1層は黒灰色～黒灰褐色粘質土である。第2～5層は上部から中位に堆積する黒灰色～黒褐色粘質土である。第6～8層は中位から底部近くに堆積する層で黄白色粘土小塊を多く含む黒色粘質土である。第9層は底部に厚さ35～45cmで堆積する黒灰色～黒色粘質土である。この層から弥生時代後期後半～終末の土器が出土している。

出土遺物 壺459は第9層から出土した。胴部はやや扁平な球形で丸底である。弥生時代終末期のものと思われる。

SE252 (Fig. 73, Tab. 15)

調査区の北側に位置する。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは2.76mを測る。本調査区では最も規模の大きな井戸である。埋土は大きく4層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土である。第2～3層は上部から下部に堆積する黒灰褐色粘質土で黄白色粘土小塊や木片、弥生土器小片を含む。第4層は黒灰色～黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器等の小片ばかりで時期比定の目安となるものはないが、SD01から切られていることから弥生時代後期半ばから後半の頃のものと思われる。

SE253 (Fig. 73, PL. 33, Tab. 15)

調査区北側に位置する。SE306を切り、SD04に切られている。平面形は不整な円形で、掘方は円筒状である。深さは2.38mを測る。埋土は大きく8層に分かれる。第1～3層は暗褐色～黒褐色粘質土で、掘方上位から中位にかけて堆積している。第4～6層は中位から底面近くに堆積している黒灰色～黒褐色粘質土で、黄白色粘土小塊、弥生土器片や木炭片を多く含む。第7・8層は底面に堆積している層で灰白色粘土小塊を多く混入する黒色粘土層である。弥生時代後半のものと思われる。

SE254 (Fig. 73・80, PL. 36, Tab. 15)

調査区北側に位置する。SE255を切っている。平面形はやや不整な橢円形で、掘方は円筒形状をなす。上部東壁と西壁は広がっているが、壁の崩落によるものである。深さは1.61mを測る。埋土は5層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土である。第2～4層は中位～底部にかけて堆積する黒灰色～黒色粘質土で黄白色粘土と灰白色粘土小塊を多く含んでいる。第5層は黒褐色～黒色粘質土で底部に堆積する。第4層から5層にかけて弥生時代後期後半の壺が完形でまとめて出土している。

出土遺物 図示した460～463は第9層から出土した弥生時代終末期のものである。いずれも壺で、461以外は完形品である。長頸壺460は古墳時代初頭か。

SE255 (Fig. 73・81, PL. 33, Tab. 15・16)

SE254と重複する位置にありSE254から切られている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは1.02mを測る。埋土は3層に分かれる。第1層は暗褐色～黒褐色粘質土である。弥生土器片や小砾を含む。第2層は暗灰褐色粘質土で底部近くにレンズ状に堆積している。第3層は黒褐色粘質土で黄白色粘土小塊をわずかに含む。

出土遺物 底面から弥生時代終末期の壺464が完形で1点出土している。開き気味の口部は小さく脇部は良く整った卵形である。底部はわずかに痕跡をとどめる程度である。

SE263 (Fig. 74・81, PL. 37, Tab. 15・16)

調査区北側に位置する。SE264から切られている。平面形はやや不整な円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは0.85mを測る。埋土は5層に分かれる。第1層は暗褐色～黒褐色粘質土である。第2～4層は黒灰色～黒褐色粘質土で黄白色粘土小塊を多く含み軟質である。第5層は底部に厚さ30cmほどで堆積している黒灰色粘質土である。

出土遺物 第5層からは弥生時代後期終末期の壺465が1点完形で出土している。開き気味の口頸部径は小さく肩部がやや張っている。

SE264 (Fig. 74・81, PL. 37, Tab. 15・16)

SE263と重複する位置にあり、SE263を切っている。平面形は不整な椭円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは0.81mを測る。埋土は3層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土である。第2層は黒褐色～黒灰褐色粘質土である。第3層は底面に堆積している黒褐色粘質土で厚さが約30cmあり、弥生土器片を多く含む。底面には弥生時代後期半ばから古墳時代前期の土器が出土している。

出土遺物 弥生時代後期半ば～後半の高杯470、壺472、古墳時代前期の高杯467以外は弥生時代終末期のものである。鉢466、壺468・469・473がある。いずれも第3層からの出土である。

SE269 (Fig. 74・82, PL. 33・37, Tab. 15・16)

調査区北端に位置する。SD04から切られている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは1.01mを測る。埋土は4層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土である。第2～3層は黒灰褐色粘質土で灰白色粘土小塊が混入している。第4層は厚さ25cm前後で底面に堆積しており弥生土器片、弥生時代後半～終末の完形土器を含んでいる。

出土遺物 壺477・478・480、壺474・475・476・479がある。いずれも最下層からの出土遺物であるが壺以外は二次的な混入品であろう。

SE279 (Fig. 74, Tab. 15)

調査区北側に位置する。平面形は不整な円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは0.83mを測る。埋土は5層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土、第2～4層は黒灰褐色～黒褐色粘質土である。第5層は黒灰褐色粘質土で底面に約20cm厚で堆積している。各層から弥生土器片等が出土しているが時期の比定につながるものはない。弥生時代後期末～古墳時代前期のものと思われる。

SE299 (Fig. 74・83, PL. 37, Tab. 15・16)

調査区北側に位置する。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなすが、底面に向かって掘方はすぼまっている。深さは1.43mを測る。埋土は大きく4層に分かれる。第1層は黒褐色粘質土で上面から中位にかけて堆積している。この層中に弥生時代後期～古墳時代前期の遺物がまとまって出土している。第2層は黒灰色～黒褐色粘質土である。第3層は黒灰褐色粘質土である。黄白色粘土小塊を多く含んでいる。

出土遺物 弥生時代後期半ばの鉢481、終末期壺494、高杯484以外はいずれも古墳時代前期のものである。壺482・483・493、高杯487～490、壺485・491・492は古墳時代前期初頭よりもやや新しい時期、布留式古段階のものと考えられる。

SE306 (Fig. 73, Tab. 15)

調査区北側に位置し、SE253に切られている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは1.67mを測る。埋土は大きく6層に分かれる。第1層は黒褐色～黒灰色粘質土である。第2・3層は黄白色粘土および灰白色粘土の混合層で掘方上部から下部にかけて厚く堆積しており、若干黒褐色粘質土を含む。第4・5層は黒灰色～黒褐色粘質土でレンズ状に堆積しており弥生土器片を比較的多く含む。第6層は黒灰色粘質土で底面に堆積している。弥生時代後期半ば～後半にかけてのものと思われる。

SE309 (Fig. 74, Tab. 15)

調査区南側に位置する。SD04から切られている。平面形はやや不整な円形で、掘方は浅い円筒形状をなす。深さは0.59mを測る。埋土は灰白色粘土小塊を含む黒灰色粘質土である。弥生土器小片が二次的な堆積の状況で出土している。時期は明確ではないが弥生時代後半から終末のものと思われる。

SE325 (Fig. 74・83, PL. 33, Tab. 15・16)

調査区の北端に位置し、北壁に一部かかっている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは1.74mを測る。埋土は大きく3層に分かれる。第1層は黒灰色粘質土で上部から中位にかけて堆積している。黄白色粘土小塊を若干含む。第2層は黒灰褐色粘質土で黄白色粘土を多く含んでいる。第3層は黒灰色粘質土で弥生土器片を含んでいる。弥生時代後期後半以降のものである。

出土遺物 弥生時代後期半ばの高杯496、後半の高杯497以外は細片である。

SE337 (Fig. 74・83, PL. 34, Tab. 15・16)

調査区の北端に位置し、北壁に一部かかっている。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは1.06mを測る。埋土は2層に分かれる。第1層は暗灰褐色粘質土で灰白色粘土小塊や黄白色粘土小塊を多く含んでいる。第2層は底部に堆積する黒灰色粘質土で弥生土器片や古墳時代前期の土師器片を含んでいる。古墳時代前期の井戸である。

出土遺物 古墳時代前期、布留式古段階の壺口縁片498が出土している。

SE340 (Fig. 74・83, PL. 34・37, Tab. 15・16)

調査区の北端に位置し、北壁に一部かかっている。平面形は円形で、掘方断面は浅い逆台形であるが本来は円筒状をなしていたと思われる。深さは0.63mで浅い。埋土は黒灰色粘質土である。底部から古墳時代前期の土師器完形品が出土している。

出土遺物 いずれも井戸底部から一括出土した古墳時代前期、布留式古段階の壺495・500、と高杯499と新段階の壺501である。501は在地折衷のものであろう。

SE358 (Fig. 74, Tab. 15)

調査区の北東側に位置する。平面形は円形で、掘方は円筒形状をなす。深さは0.76mを測る。埋土は2層に分かれる。第1層は茶褐色～暗褐色粘質土で黄白色粘土小塊を多く含む。第2層は黒灰褐色粘質土である。土器片が若干出土しているのみで時期の比定につながるものはない。古墳時代のものか。

SE372 (Fig. 74, Tab. 15)

調査区の東側に位置する。平面形は現状は梢円形であるが、本來は円形である。掘方は円筒形状をなす。深さは1.09mを測る。埋土は3層に分かれる。第1層は褐色粘質土で上位から下部まで一時に埋まつた状況である。第2層は黒灰色粘質土で灰白色粘土小塊を多く含む。第3層は黒褐色粘質土である。第2層中には土器片等が含まれているが時期の比定につながるものはない。弥生時代後期後半頃のものか。

(5) 小結

本調査区では、弥生時代後期後半～終末期と思われる掘立柱建物SB01を中心とする建物群の他に、尾根筋に分布する井戸群よりやや新しい時期、古墳時代前期の井戸群が存在することが確認でき、弥生時代後期後半以降に集落の広がりが東側へ拡大したことが確認できた。堅穴住居跡は検出できなかったが、土層堆積の状況、遺構の遺存状況および後世の搅乱の状況からみると、本来この地点(SD01東側)には掘立柱建物および井戸群しかなかった可能性が高いと考えられる。当該地における弥生時代後期後半以降の集落構成については、本調査区の東側および西側部分の将来の調査結果をみて検討すべき課題と思われる。

掘立柱建物はSB01のように大型のものや、SB12やSB11などの小型のものなど規模のばらつきが大きい。堅穴住居跡とは異なり、機能的にかなり多様性を持たせたものであったかもしれない。構造的には 1×2 、 2×2 、 1 または 2×3 間の間取りで、礎板を持つものと持たないものとに分かれ、持つものは柱穴掘方がやや不整な方形をなすものが多いのに対して、持たないものは不整な円形で規模が小さいという共通性がある。基礎の工法の違いが時期差を表出している可能性があるが、調査では明確にできなかった。

建物の長軸の方向性は大きく4群に分かれる傾向がうかがわれるが、基本的にはその当時の地形上の制約と、第40次調査のSD01、本調査区のSD01等の溝の方向に少なからず影響された配置であろうと思われ、当時、各建物の方向性を律する何らかの規制が存在したかどうかについては明確でない。

Tab. 15 第48次調査 井戸一覧表

a : 長軸、b : 短軸、c : 深さ *深さは検出面からのマイナス値

Fig.	PL	遺構 (SE)	平面形	断面形	計測値 (m)			底面標高 (m)	先後関係 (先・後)	出土遺物概要
					a	b	c			
72	32	09	円形	円筒形	1.03	1.02	0.93	4.14	—	408~420
72	32	10	*	*	0.95	0.86	1.18	3.99	SD03→SE10	421~422
72	32	20	*	*	0.80	0.73	0.90	4.48	—	424
72	32	103	*	*	0.77	0.74	0.78	4.30	—	423
72	32	105	*	*	0.86	0.69	1.68	3.40	—	—
72	32	116	*	*	0.99	0.98	1.95	2.96	—	425~428
72	—	206	*	*	1.03	1.00	0.93	4.03	—	429~432
72	—	231	*	*	0.97	0.94	1.60	3.48	—	435
72	—	232	*	*	0.80	0.78	0.88	3.98	SE232→SD01	433~434
73	33	233	*	*	0.76	0.64	1.09	4.01	—	436
73	33	236	*	*	1.37	1.33	2.10	2.62	SD04→SE236	437~451
73	33	244	*	*	1.30	1.21	1.76	3.35	SB16→SE244	452~458
73	33	245	*	*	1.08	0.88	1.73	3.19	—	459
73	—	252	*	*	1.46	1.41	2.76	1.63	SE252→SD04	—
73	33	253	*	*	1.15	1.12	2.38	3.90	SD04→SE253	—
73	—	254	*	*	1.58	1.18	1.61	3.29	—	460~463
73	33	255	*	*	0.83	0.80	1.02	3.90	SB23→SE255	464
74	—	263	*	*	0.95	0.88	0.88	4.08	SB27→SE263	465
74	—	264	*	*	1.43	1.33	0.84	4.21	SB27→SE264	466~473
74	33	269	*	*	1.07	0.99	1.01	3.65	SD04→SE269	474~480
74	—	279	*	*	1.18	1.03	0.83	4.25	—	—
74	—	299	*	*	1.67	1.26	1.43	4.67	SB26→SE299	481~494
73	—	306	*	*	1.11	1.06	1.67	3.29	SE306→SE253・SE21	—
74	—	309	*	*	1.12	0.88	0.59	4.63	SE309→SD04	—
74	33	325	*	*	1.08	1.00	1.74	3.47	SB22→SE325	496~497
74	34	337	*	*	1.36	0.77	1.06	3.96	—	498
74	34	340	*	*	1.40	1.35	0.63	4.51	—	495~499~501
74	—	358	*	*	1.12	1.05	0.76	4.30	—	—
74	—	372	*	*	1.03	0.81	1.09	3.88	—	—

Tab.16 第48次調査 掘出土器所見一覧

凡例：口径の口徑は外径、器台は台上部径。（）は復元値

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	器種	法 量(cm)			形態的特徴				出土遺構			
				口径	器高	底径	断面径	成形上の手法	色調	胎土				
75	-	369	296	壺	(13.4)	-	-	口縁部片。内側は強く塑りし、端部を丸く肥厚させる。	褐色	悪い	良	SP69		
75	-	390	297	壺	-	-	5.8	-	底部片。わずかに丸みあり。	褐色	良	良	SP207	
75	-	392	299	小形鉢	11.0	6.3	4.7	-	完形品。内外面ハケ目後ナデテシ。	灰白色	悪い	やや不良	SP273	
75	-	393	298	小鉢	(11.6)	7.3	(4.6)	-	完形品。内外面ハケ目後ナデテシ。	淡黄褐色	悪い	不良	SP273	
75	-	391	300	壺	(16.6)	-	-	17.5	底部欠損品。内面ハケ目後。外面ハケ目。	褐~褐色	極て粗	不良	SP273	
75	-	394	301	壺	-	-	5.4	-	底部片。外側ビニピア。内面ハケ目。	黄褐色	やや粗い	不良	SD04	
75	-	395	316	器台	4.6	6.8	10.2	-	ほぼ完形。外面にはタキキ痕。	褐~灰褐色	悪い	良好	SD04	
75	-	396	313	壺	23.0	-	-	-	口縁部片。口縁下端に押付痕目を残す。	灰褐色	やや粗い	やや不良	SD04	
75	-	396	303	器台	10.4	-	-	-	上台部片。杯面ハケ目後ナデ上げ。	黄褐色	やや不良	やや不良	SD04	
75	-	397	306	高杯	-	-	9.4	-	内面ナデ。外面ハラミガキ。	淡褐色	悪い	不良	SD04	
75	-	399	312	壺	22.8	-	-	-	底部・口縁部欠片。口縁下端に押付痕目を残す。下端にヘラによる削み目あり。	褐色	悪い	不良	SD04	
75	-	400	311	器台	-	-	13.0	-	内面ナデ。外面はタキキ痕新しいナデ。	淡黄褐色	悪い	やや良好	SD04	
75	-	401	310	器台	-	-	13.9	-	内面ナデ。外面にはタキキ痕残る。	明褐色	悪い	やや良好	SD04	
75	-	402	317	壺	22.4	-	-	-	部分口縁部片。肩部に三角突起跡付。	淡赤褐色	やや不良	良	SD04	
75	-	403	309	壺	-	-	-	-	加刷部。底部上端に骨質印文を施した痕跡付。内面はタキキ痕。	赤褐色	極て粗い	不良	SD04	
75	-	404	307	壺	-	-	-	-	口縁部片。内外面ともハケ目調査。	淡褐色	~淡白色	極て粗い	不良	SD04
75	-	405	304	壺	31.0	-	-	-	口縁部片。外側はタキキ後ハケ目。	黄褐色	~淡褐色	やや不良	やや不良	SD04
75	-	406	308	壺	-	-	-	-	口縁部片。内面ともハケ目。肩部上端に幅3.7cmの突起付。	淡褐色	極て粗い	不良	SD04	
75	-	407	318	壺	28.2	-	-	-	口縁部片。腰部下端に押付痕目後施塗丸。	灰褐色	やや粗い	不良	SD04	
76	-	408	202	器台	-	-	9.55	-	底部片。内面ともナデ。脚部痕残る。	暗茶褐色	やや不良	良	SE09	
76	-	409	203	器台	-	-	13.8	-	1/2次焼品。外面タキキ後ナデテシ。	淡茶褐色	やや不良	不良	SE09	
76	35	410	211	器台	-	-	13.4	-	ほぼ完形。上部部は丸みあり。内外面ハケ目後ナデテシ。噴射に引き出す。	若茶褐色	やや不良	不良	SE09	
76	35	411	213	器台	-	-	13.0	-	充形品。上部部に丸みあり。部部は痕跡に半ば残す。各部外表面にタキキ痕。	黄褐色	やや不良	良	SE09	
76	35	412	210	器台	17.4	20.2	19.8	-	ほぼ完形品。内外面ともハケ目調査。強烈施塗する合漆塗付。	淡黄褐色	やや不良	やや不良	SE09	
76	35	413	212	器台	-	-	14.7	-	ほぼ完形。上部部には丸みあり。内外面ハケ目後ナデテシ。齊付に引き残れる。	暗茶褐色	やや不良	不良	SE09	
76	35	414	209	鉢	16.7	10.7	-	-	ほぼ完形品。内外面ともハケ目後。軽くナデタキ。底部はやや厚みあり。	淡赤褐色	やや不良	不良	SE09	
76	-	415	204	高杯	脚高 13.8cm	15.0	-	-	脚・新基点。外側はハケ目後。丁寧なナデ。脚部には2カ所の丸みある。	黄褐色	やや不良	良	SE09	
76	-	416	201	高杯	35.0	-	-	-	脚部欠損品。全面ハケ目後ナデテシ。裏には2カ所の丸みあり。	暗褐色	良	良	SE09	
76	-	417	208	壺	14.7	-	-	21.0	周口跡部片。口縁は内面に直立。	灰白色	悪い	不良	SE09	
76	-	418	205	壺	54.4	-	-	-	口縁部片。底部上端に子目北緯を施した痕跡1.5cmの突起付。	若茶褐色	~淡褐色	やや不良	良好	SE09
77	-	419	206	壺	22.5	31.9	-	21.5	底部欠損品。内外面ともハケ目。	暗褐色	やや粗い	やや不良	SE09	

凡例：法量の口徑は外径、器台は台上面径、（ ）は復元値

Fig.	PL	採取場所番号	登録番号	器種	法量(cm)			成形上の手法	形態的特徴			出土遺物	
					口径	器高	底径		色調	胎土	焼成		
77	-	420	207	壺	17.0	30	-	22.0	表面欠損品。内外面ハケ目後ナデケシ。口縁部と器底の裏の施釉は無い。	青褐色	粗い	不良	SE09
77	-	421	215	壺	13.8	-	-	-	口径以下欠損品。口縁部はほぼ直立。器底は下方に削除する。	青褐色	やや良	やや不良	SE10
77	35	422	214	壺	10.2	14.8	3.05	16.2	口縁部。断面下半はタキナ。内外面ハケ目。	青褐色	やや不良	良	SE10
77	-	423	217	壺	-	-	6.0	26.0	口径欠損品。外表面はタキナハケ目。内面はカットから底面まで。底面はわかに丸みあり。	青褐色	やや粗い	不良	SE103
77	-	424	216	壺	-	-	8.0	21.1	第一口縁部欠損品。断面下半はハテケメリ。肩部には生けタキナ。量大部は削除下半にあり。	淡灰黒色	極て粗い	やや良好	SE20
77	-	425	218	壺	-	-	-	17.9	器底欠損品。別部は平手な状態。肩部にはハタキと後方で2箇所。内面はナマ。内面には径1.5cmの穿孔があり。	灰褐色	粗い	良	SE116
77	35	426	219	壺	13.7	18.9	-	17.7	口縁部一部欠損品。断面内部はハケ目後ナヘタギ。底部下部に削除した箇所を始めて底部は各方向にレンズ状に剥離している。	青褐色	やや粗い	良	SE116
77	-	427	221	壺	47.4	-	-	-	口縁部。内外面ハケ目。口縁部は直線方に「く」字形の彫曲。側面には若干剥離を有する。	灰褐色	粗い	不良	SE116
77	-	428	230	壺	19.6	-	-	-	口縁部。内外面ともハケ目後ナデケシ。	灰褐色	粗い	不良	SE116
78	-	429	225	壺	14.8	-	-	13.2	口縁部。口縁部は「く」字に瘤状。	黑褐色	やや粗い	良	SE206
78	-	430	224	小型壺	-	-	-	9.2	口縁部欠損品。断面外周はハケ目後ナデケシ。	淡灰褐色	粗い	良	SE206
78	-	431	223	壺	-	-	5.2	-	底部。底部は少しあみあり。	青褐色	粗い	やや良	SE206
78	-	432	222	壺	12.0	14.1	3.7	17.7	皮膜部。内外面ともハケ目後ナデケシ。底部は凸レモン状。	青褐色	粗い	やや不良	SE206
78	-	433	228	壺	13.2	-	-	-	口縁部。全面ナデ仕上げ。	灰褐色	やや粗い	不良	SE232
78	-	434	227	壺	13.0	-	-	-	口縁部。内面ヨコハケ。外面ナデ仕上げ。	青褐色	やや粗い	不良	SE232
78	35	435	226	壺	21.8	30.9	5.5	24.6	完形品。良品である。内外面ハケ目後ナケ目。底部は丸みあり。	暗褐色	やや粗い	不良	SE231
78	-	436	229	壺	13.9	31.3	4.7	25.9	狂跡部欠損品。外表面ナハケ。口縁下部、口縁部、内面はナデケシ。底部は丸みある。	青褐色	やや粗い	やや良	SE233
79	-	439	239	小型壺	(7.1)	8.0	-	9.8	口縁部一部欠損品。肩部がやや瘤状の崩れで、丸底となる。底部には径1.5cmの穿孔がある。	青褐色	やや粗い	不良	SE236
79	-	440	236	鉢	13.3	7.1	4.8	-	口縁部破損品。内外面ハケ目後ナデケシ。	灰褐色	やや粗い	良	SE236
79	-	441	235	小型壺	8.2	13.3	4.3	10.8	完形品。全体に原手の作り。外表面は目の細かいハケ。内面は吹抜成型ナハケ。口縁部は底面から後へ削除する。肩はやや折り、底部ココロナ底溝。	灰褐色	やや粗い	良	SE236
79	35	442	238	壺	8.0	14.0	4.9	12.5	口縁部一部欠損品。肩部やや瘤状の崩れで、丸底となる。底部は丸みある。	青褐色	やや粗い	良	SE236
79	35	443	240	壺	-	-	4.8	16.6	口縁部欠損品。肩部は直立上立。外表面ナハケ目後ナデケシ。	青褐色	やや粗い	良	SE236
79	35	444	243	壺	8.1	15.8	4.8	14.8	完形品。外表面ハケ目後ナデケシ。口縁部ははね付で丸底となる。底部は平底。	青褐色	やや粗い	やや不良	SE236
79	-	445	241	壺	17.6	-	-	16.6	漏斗部・口縁部片。内面ナハケ。外表面ナハケ。	淡灰褐色	やや粗い	良	SE236
79	35	446	237	小型壺	13.3	14.2	4.9	14.9	完形品。全体に原手の作り。外表面はハケ目後ナデケシ。肩部下部ははね付ナデケシ。底部は丸みある。	青褐色	粗い	良	SE236
79	35	447	233	壺	10.4	21.2	6.7	16.6	完形品。全体に原手の作り。外表面はハケ目後ナデケシ。肩部下部ははね付ナデケシ。底部は丸みある。	青褐色	やや粗い	良	SE236

凡例：法量の口径は外径、器台は台下部径。（）は復元値

Fig.	PL	掲載番号	登録番号	器種	法量(cm)			形態的特徴				出土遺構
					口径	底径	高さ	成形上の手法	色調	胎土	焼成	
79	35	448	234	壺	11.5	24.3	5.8	17.8 半切品。全体に口付の作り。外面はハケ日付ナ デ仕上げ。器底下には焼成テラフタ。口縁は 削ぎ落しからも残してある。	灰褐色	やや粗い	良	SE236
79	36	449	232	壺	12.0	22.8	6.4	16.0 はハケ日付ナデ仕上げ。底部は手打。袋狀口縁 等をひきこむようにしてある。	灰褐色	やや粗い	良	SE236
79	36	450	231	壺	11.8	23.6	10.4	18.5 半切品。全体に口付の作り。外面はナゲ仕 上げ。口縁は外削。底部はわざかに手打みあり。	灰褐色	やや粗い	良	SE236
79	36	451	230	壺	13.4	26.1	5.5	19.7 丸みがあり。口縁は削ぎ落し。削ぎ落し部分 はナゲ仕上げ。底部はナゲ仕上げ。底部はナ ゲ仕上げ。	灰褐色	やや粗い	良	SE236
78	36	438	244	壺	-	-	9.3	29.6 口一日付の半切品。底部下には切妻口縁に三 脚状脚付。内面は内削も手打を施す。底部はナ ゲ仕上げ。	灰褐色	極端に	やや良好	SE236
78	36	437	245	壺	-	-	8.8	30.0 第一回発掘の半切品。底部下と脚部の間に三脚 状脚付がある。内面は内削とハケ底調。底部はナ ゲ仕上げ。底部はナゲ仕上げで手打いたたか りえみあり。底部は底部に打もいたたか。	灰褐色	粗い	やや良好	SE236
80	-	452	251	器台	(6.4)	7.5	10.6	- 上台部一層次の品。内側はハケ日付ナ	褐色	細い	良好	SE244
80	-	453	248	壺	-	-	6.5	- 底部付。内面はさきとり。	灰褐色	細い	良好	SE244
80	-	454	247	壺	-	-	9.0	- 底部付。底部付にはハケ落しによる「X」印 がある。内外面ナ。	灰褐色	極端に	やや良好	SE244
80	-	455	250	壺	15.0	-	-	- 脚～口部削落。背面裏丸調底板不明。	灰褐色	やや粗い	良好	SE244
80	36	456	252	壺	15.2	15.2	-	20.8 口縁部一層次の品。外表面にナゲ目。口縁部ヨ ナ。口内部は若干削り減る。	灰褐色	極端に	やや良好	SE244
80	-	457	246	壺	-	-	7.5	30.6 脚～口部削落。内面はさきとり。内面ハケ目 調底。底部はナゲ仕上げでやわらみあり。	褐色～ 灰褐色	極端に	やや良好	SE244
80	-	458	249	壺	23.0	-	-	- 脚～口部削落。背面裏丸調底板不明。	灰褐色	極端に	やや良好	SE244
80	36	459	253	壺	14.1	16.1	-	19.6 口縁部一層次の品。内面下部は整個が口付によるナ ゲ仕上げ。口内部はナゲ仕上げ。削ぎ落し大底は 中位からやわらかである。	灰褐色 藍色	細い	良好	SE244
80	36	462	254	壺	9.0	11.0	4.5	12.0 半切品。全周ハケ日付ナゲ仕上げ。底部はナ ゲ仕上げ。手打。若手削り。	灰白色	細い	不良	SE254
80	36	460	255	広口壺	10.2	12.6	-	12.1 半切品。外側はハラミギザ。内面は丁寧なナ ゲ仕上げ。削ぎ落し。底部はナゲ仕上げ。	灰褐色	細い	良	SE254上
80	36	461	256	壺	-	-	7.1	21.6 削ぎ落し。内外面ともナゲ仕上げ。	灰褐色～ 灰褐色	やや粗い	良	SE254
80	36	463	257	壺	28.1	-	7.7	26.4 先端部。内外面ともナゲ仕上げ。	灰褐色	やや粗い	やや良	SE254
81	-	464	258	壺	12.8	-	5.0	26.9 先端部。内外面ともナゲ仕上げ。	灰褐色	やや粗い	良	SE255
81	37	465	259	壺	11.5	-	5.1	22.3 先端部。口縁部はハケ日付調底板ヨナ。内面 はナゲ仕上げ。	灰褐色～ 灰褐色	やや粗い	やや良	SE263
81	-	466	267	鉢	14.8	-	-	- 1/2層品。底部はわざかに手打。	灰白色	やや粗い	不良	SE264
81	-	467	266	高杯	-	-	11.8	- 脚削り。外側ハラミギザ。花2カ所あり。	明褐色	やや粗い	不良	SE264
81	37	468	260	壺	10.4	13.7	4.9	16.3 先端部。口縁部はナゲ仕上げ。底部はナ ゲ仕上げ。削ぎ落し。底部はナゲ仕上げ。	灰褐色	細い	やや良	SE264
81	-	469	264	壺	17.5	-	-	- 脚～口縁削り。内外面ともハケ目。	灰褐色	極端に	不良	SE264
81	-	470	261	高杯	25.1	-	-	- 口縁削り。内外面ともハラミギザ。	明褐色	細い	不良	SE264上
81	-	471	263	高杯	33.0	-	-	- 杯底片。唇部は感度差し調底板は不明。	明褐色	やや粗い	不良	SE264
81	-	472	265	壺	33.0	-	-	- 口縁削り。唇部は2～3mmで手打。調底板は不 明。削ぎ落しに三角形等跡付。	黑褐色	細い	不良	SE264

凡例：法量の□印は外径、□内は台上面径、() は復元値

Fig.	PL	掲載 遺物 番号	登録 番号	器種	法量(cm)			形態的特徴				出土遺構	
					口径	器高	底径	側面径	成形上の手法	色調	胎土		
81	37	473	262	壺	17.5	27.6	6.1	23.1	全形品。口部に横手凹り。内面はカキトリ模様。底部は丸みある底。	褐褐色	やや難い	やや不良	SE264
82	-	474	271	壺	-	-	5.7	18.0	肩～口部膨大部品。内面はナデナダ。底部下半はハケ目後ナデナダ。底部は丸みある底。	青褐色	難い	やや不良	SE269
82	-	475	270	壺	(11.4)(20.3)	-	18.2	-	口部、底面欠損品。全体に丸みある。ハケ目後ナデナダ。底部内面にはカキトリ模様が残る。	褐褐色	難い	やや不良	SE269
82	37	476	268	壺	12.5	22.3	3.2	19.1	全形品。内面に丸みある。底部は丸みある。	褐褐色	やや良	やや良	SE269
82	-	477	273	壺	29.0	-	-	28.0	U字縫部品。内外面コロハ。底部は丸みある平底。	褐褐色	やや難い	やや不良	SE269
82	-	478	272	壺	(27.2)	-	-	30.0	唇から口縫部片。肩上縫部と腹部中央に突起部有。内外面ともハケ目後ナデナダ。	褐褐色	極めて難い	やや良好	SE269
82	37	479	269	壺	16.0	23.5	(2.8)	19.7	口部欠損品。内面は丸みある。底部は丸みある。	褐褐色	やや難い	良	SE269
82	-	480	274	壺	40.6	-	-	-	肩～口縫部片。颈部上縫部に三角突起。	灰白色	難い	不良	SE269
83	37	481	275	小型甕	7.8	5.4	3.6	-	完形品。全周ナデ。口縫部は先端む。	褐褐色	難い	やや不良	SE299
83	37	482	276	広口壺	9.7	5.7	-	-	内外面ともヘラミザキ。底部にタキ痕跡。	褐褐色	良	やや良	SE299
83	-	483	287	広口壺	7.4	7.3	-	8.6	完形品。作りは再共。調査表は不明。	褐褐色	難い	不良	SE299
83	-	484	281	高杯	13.0	杯高5.4cm	-	-	肩部片。脚との結合部は長い小口を押す。内外面を作っている。	赤褐色	難い	不良	SE299
83	-	485	285	壺	(13.1)	-	-	-	肩～口縫部片。脚部内面はヘラケズリ。(土葬器)	灰白色	やや不良	やや不良	SE299
83	-	486	282	高杯	(10.4)	-	-	-	口縫部片。唇則は変化調整窓は不明。	淡褐色	難い	不良	SE299
83	-	487	278	高杯	-	-	11.2	-	舞葉片。内面はナデ。外縁はコロナデ。	褐褐色	良好	やや不良	SE299
83	-	489	288	高杯	21.2	杯高7.3cm	-	-	杯部片。内外面ともヘラミザキ。	灰白色	難い	やや不良	SE299
83	-	491	283	壺	(14.4)	-	-	-	肩～口縫部片。脚部内面はヘラケズリ。	淡褐色	難い	やや良好	SE299
83	-	488	280	高杯	-	-	12.6	-	脚部片。乳孔がカクセ有。	赤褐色	難い	不良	SE299
83	-	490	279	高杯	22.4	杯高7.4cm	-	-	杯部片。唇面は丸み調整窓不明。	赤褐色	難い	やや不良	SE299
83	-	492	284	壺	(17.3)	-	-	-	肩～口縫部片。脚部内面はヘラケズリ。	褐褐色	極めて難い	やや不良	SE299
83	-	493	277	広口壺	11.2	11.4	-	14.5	ほぼ完形品。ハケ目後ナデナデナ。	明褐色	難い	不良	SE299
83	-	494	286	壺	-	-	4.9	25.5	底～脚部片。内面はハケ目後ナデナデナ。	褐色	やや難い	やや不良	SE299
83	-	496	290	高杯	34.0	-	-	-	杯部片。内外面ともハケ目後ヘラミザキ。	褐褐色	難い	良	SE325
83	-	497	289	高杯	-	-	-	-	新鋭片。内外面ともハケ目後ヘラミザキ。	褐褐色	やや難い	やや不良	SE325
83	-	498	291	壺	22.4	-	-	-	肩～口縫部片。内面はヘラケズリ。外縁はハケ目後ナデナデナ。	灰褐色	やや難い	やや不良	SE337
83	-	499	293	高杯	15.6	杯高5.1cm	-	-	杯部片。口縫部は丸くおさめる。杯底部分には凸凹がある。	褐褐色	難い	良	SE340
83	37	495	294	壺	13.4	14.7	-	15.1	完形品。脚部はやや弱い筋状跡。口縫部はハケ目後ナデナデナ。	淡褐色	やや良	やや良	SE340
83	-	500	292	壺	15.8	21.4	-	20.2	完形品。脚部は丸くやや深く均整のとれた脚。口縫部は丸くやや深く均整のとれた脚。内面はラグマジック。直径約3.5cm。	褐褐色	難い	やや不良	SE340
83	-	501	295	壺	14.7	23.6	-	18.7	口縫部は丸くやや深く均整のとれた脚。内面はラグマジック。直径約4.5cm。	淡褐色	極めて難い	やや良好	SE340

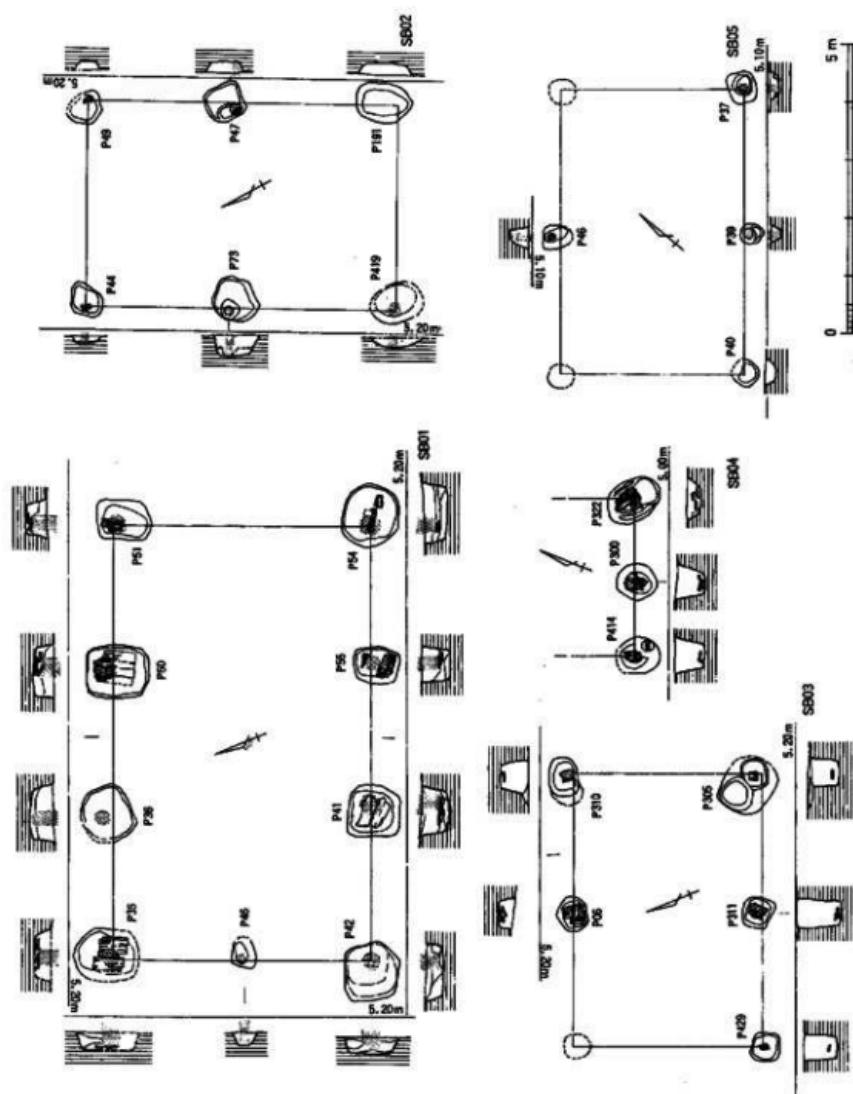


Fig. 66 据立柱建物SB01～05平面および断面図 (1/100)

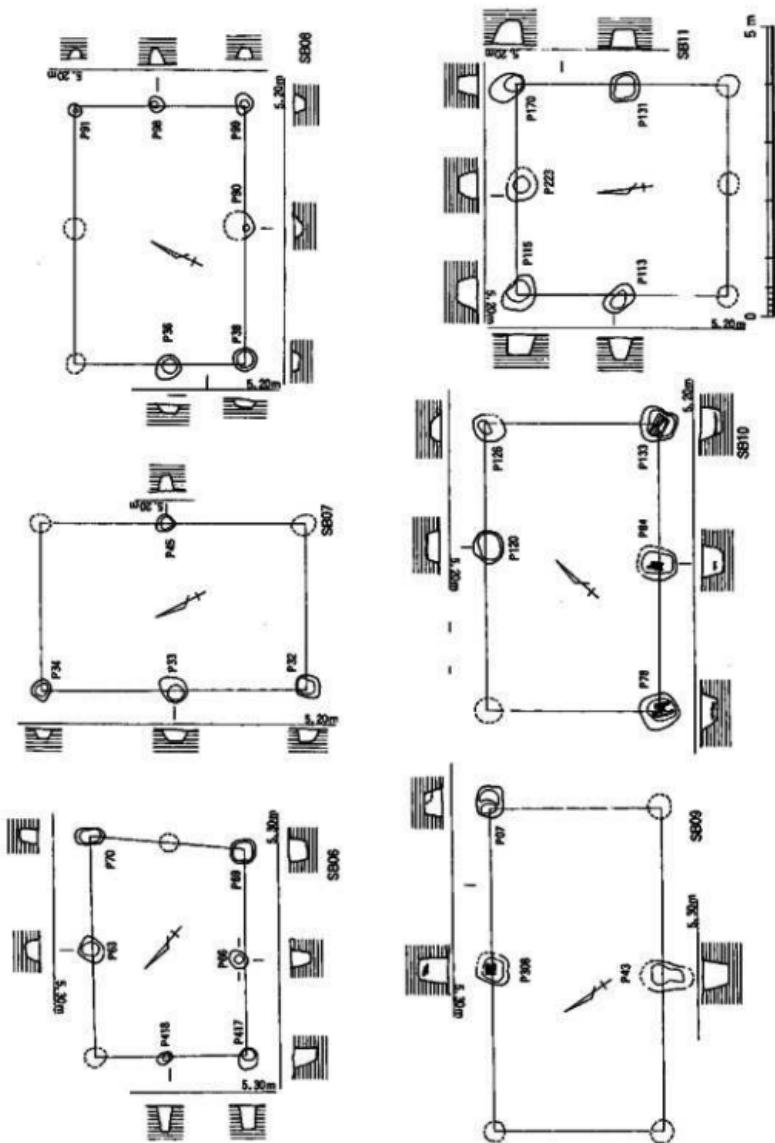


Fig. 67 提立柱建物SB06~11平面および断面図 (1/100)

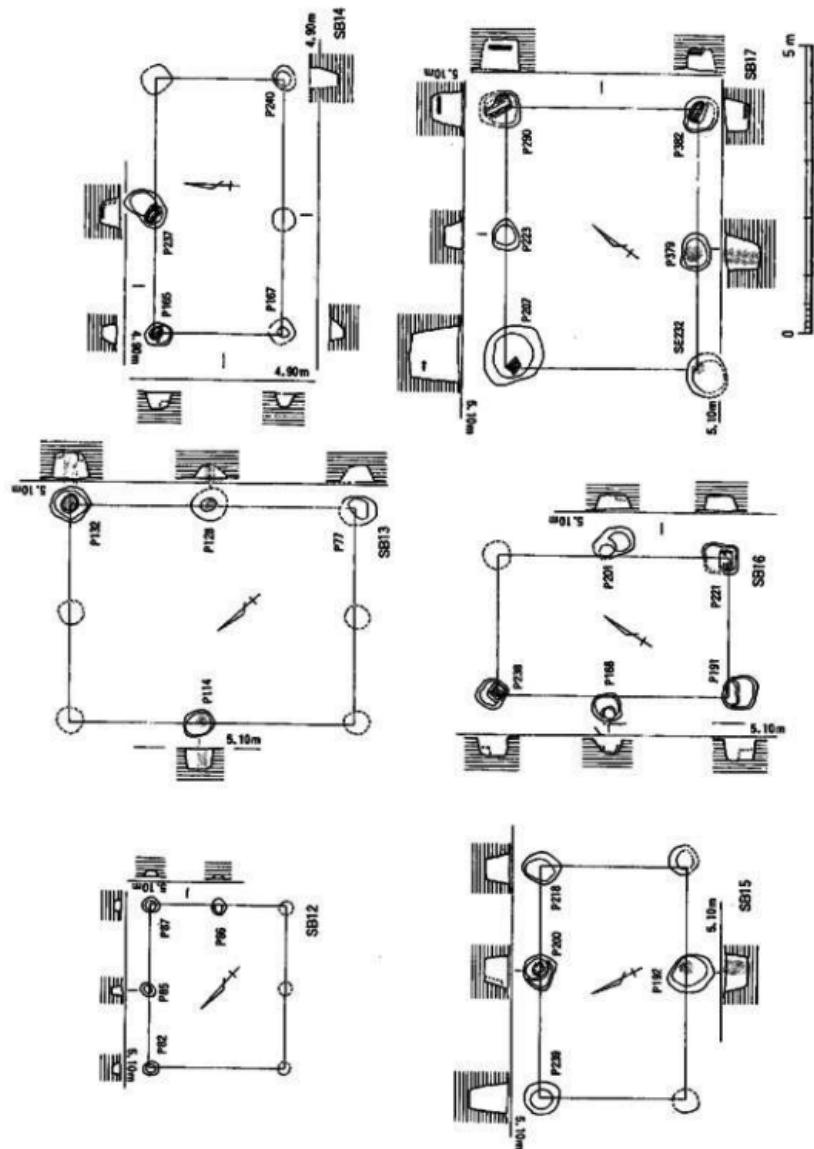


Fig. 68 指立柱建物SB12~17平面および断面図 (1/100)

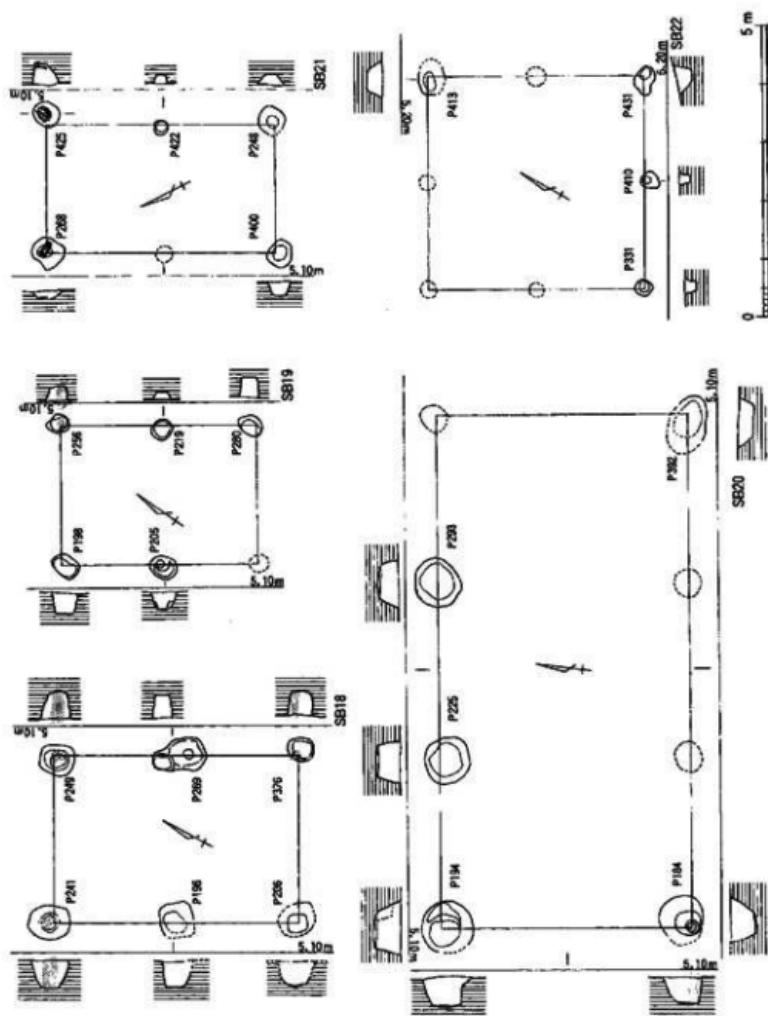


Fig.69 挿立柱建物SB18~22平面および断面図 (1/100)

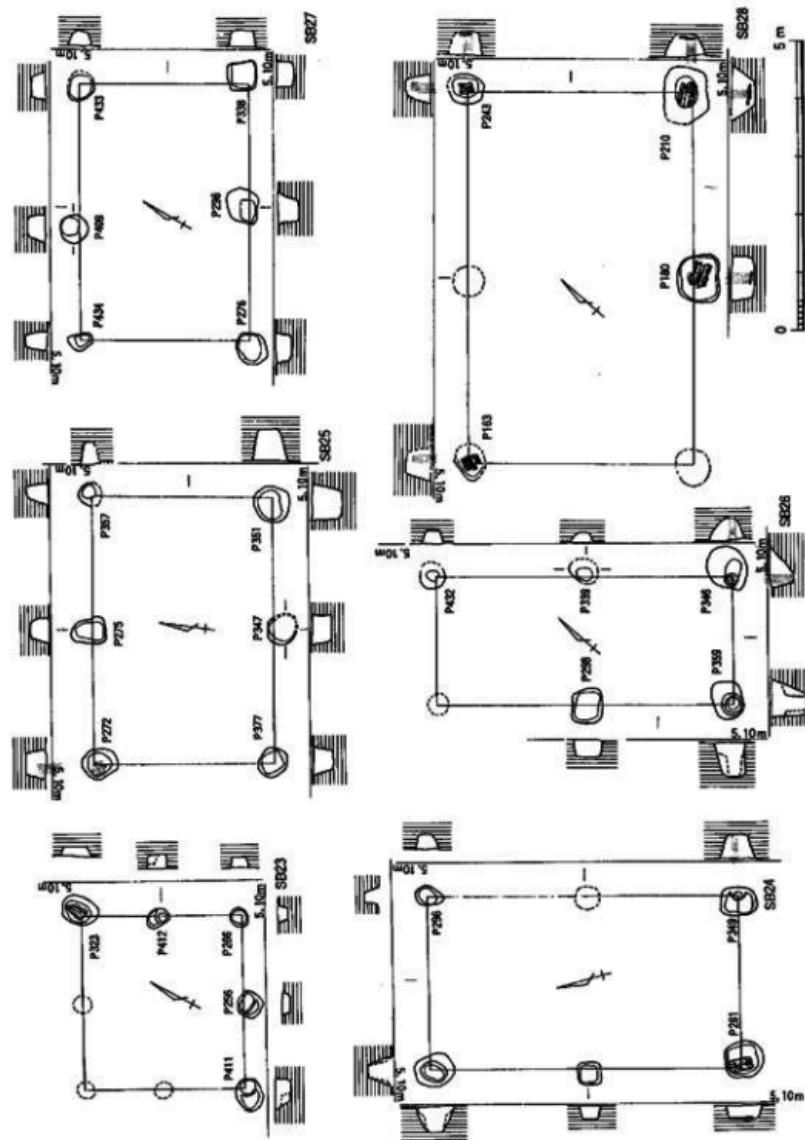


Fig. 70 掘立柱建物SB23~28平面および断面図 (1/100)

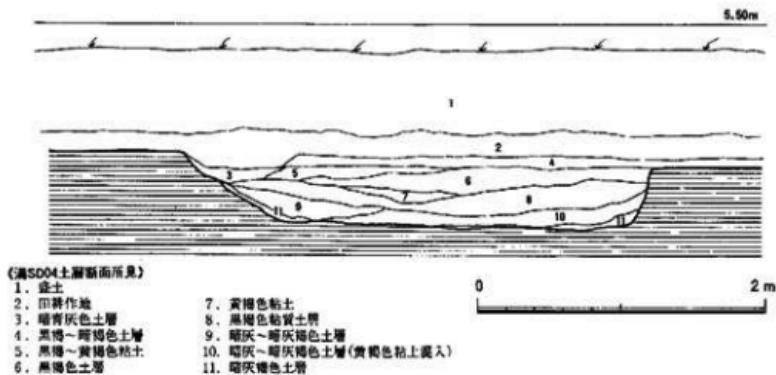


Fig. 71 溝SD04土層断面図 (1/40)

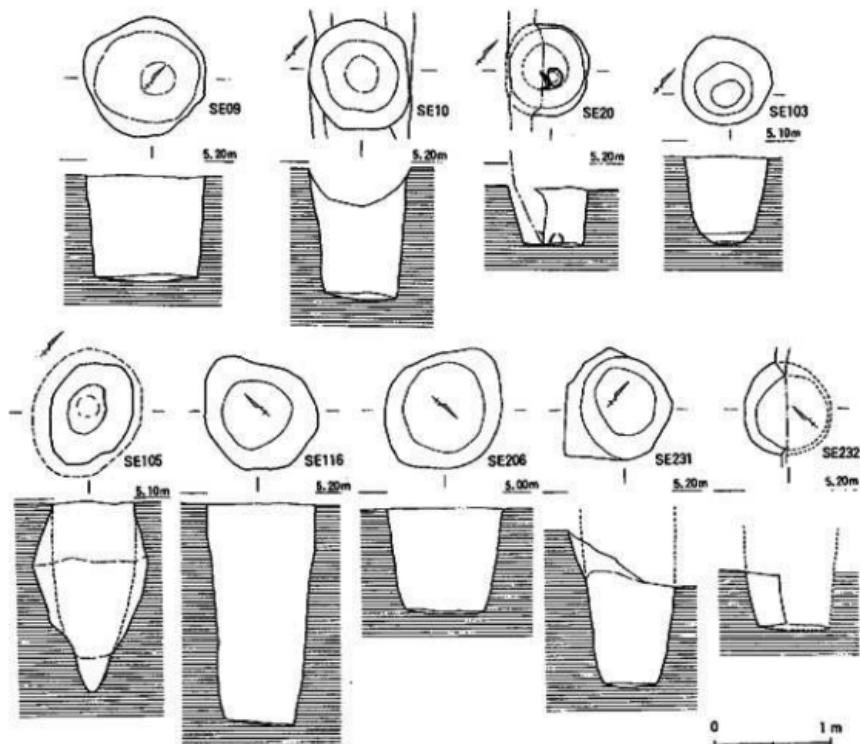


Fig. 72 井戸SE09・10・20・103・105・116・206・231・232平面および断面図 (1/50)

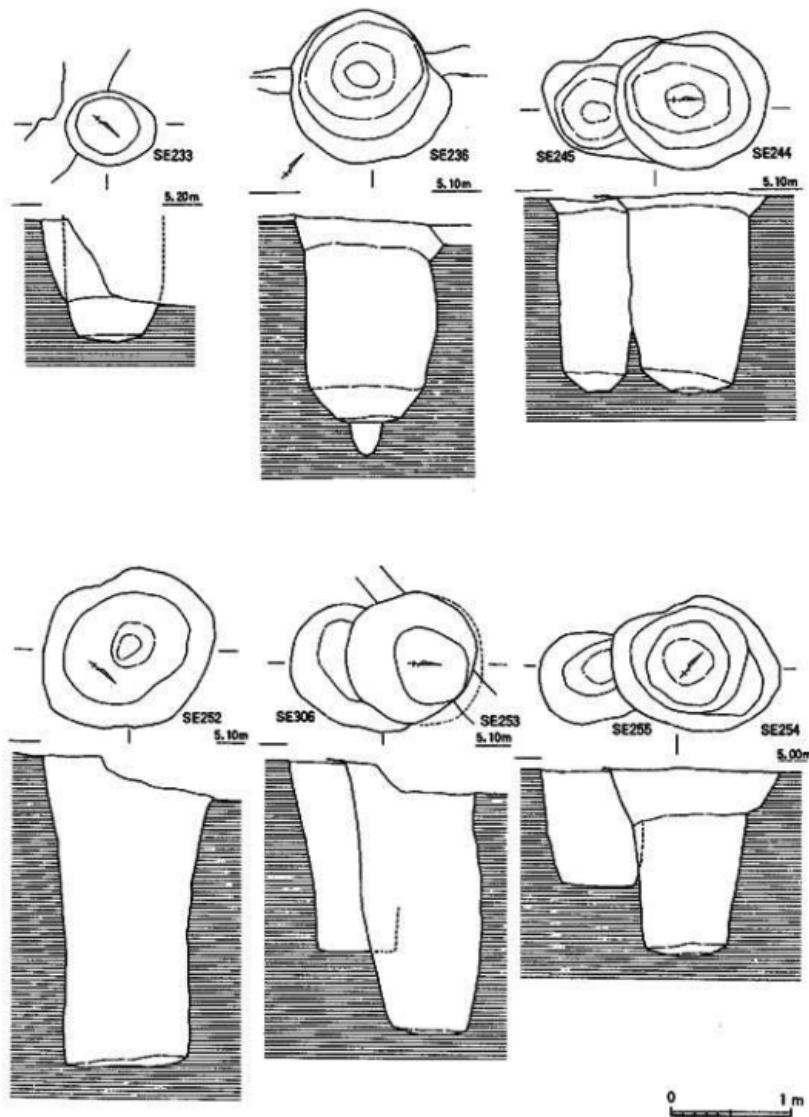


Fig. 73 井戸SE233・236・244・245・252・253・254・255・306平面および断面図 (1/50)

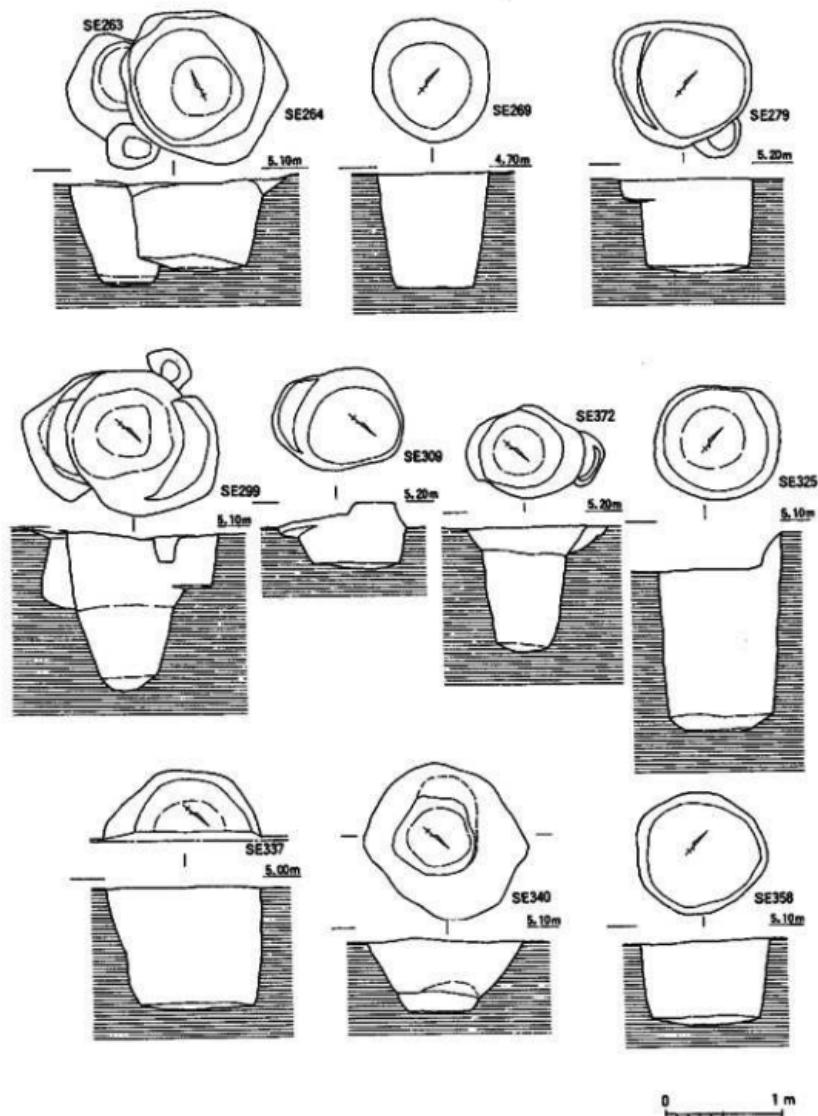


Fig. 74 井戸SE263・264・269・279・299・309・325・337・340・358・372平面および断面図 (1/50)

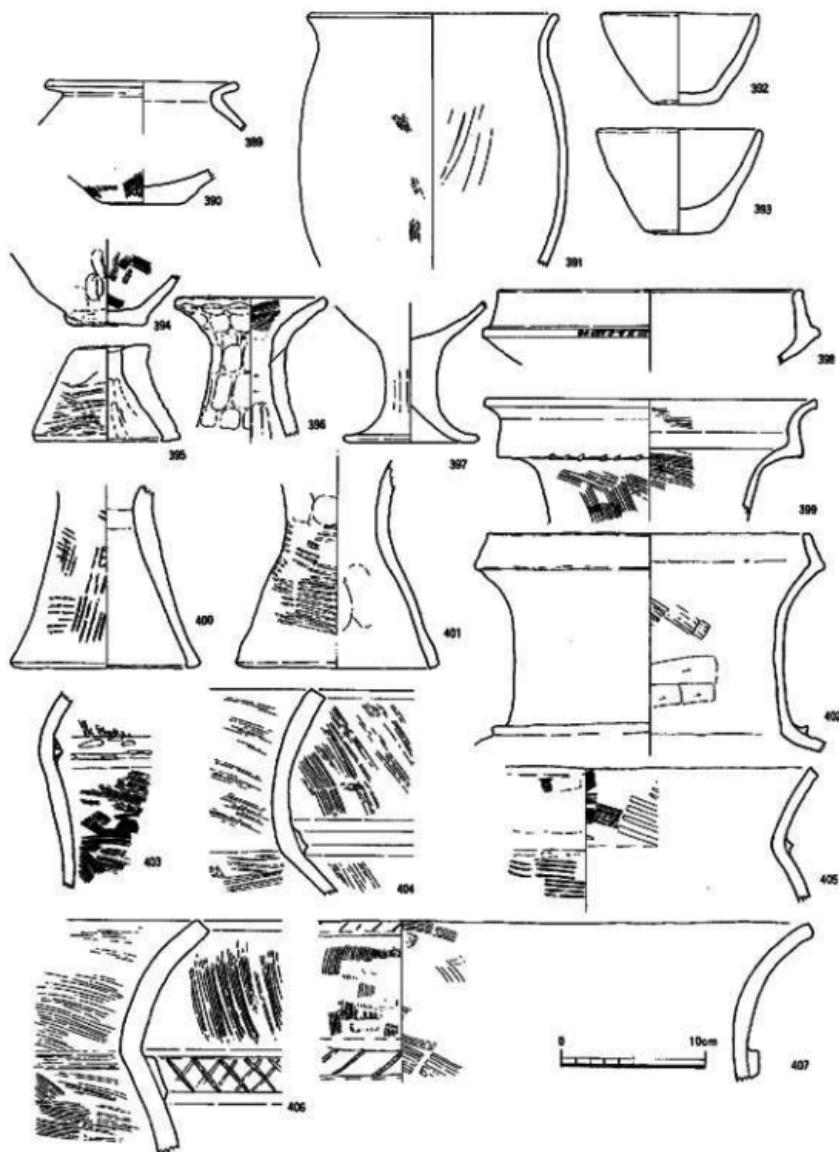


Fig. 75 柱穴SP69・207・273、溝SD01・SD04出土遺物実測図（1／4）

(386: SP69, 389: SP207, 391-398: SP273, 396-405: SD04, 394-395-397-401-406-407: SD04)

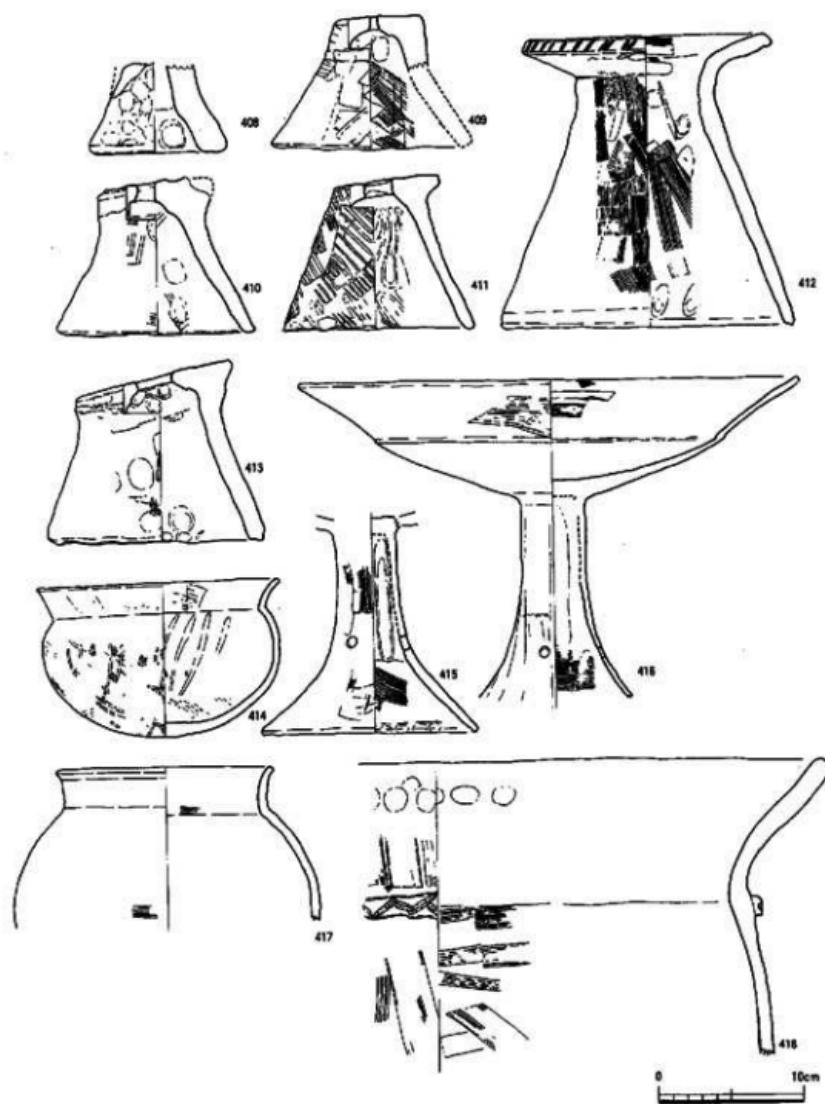


Fig. 76 井戸SE09出土遺物実測図 (1/4)

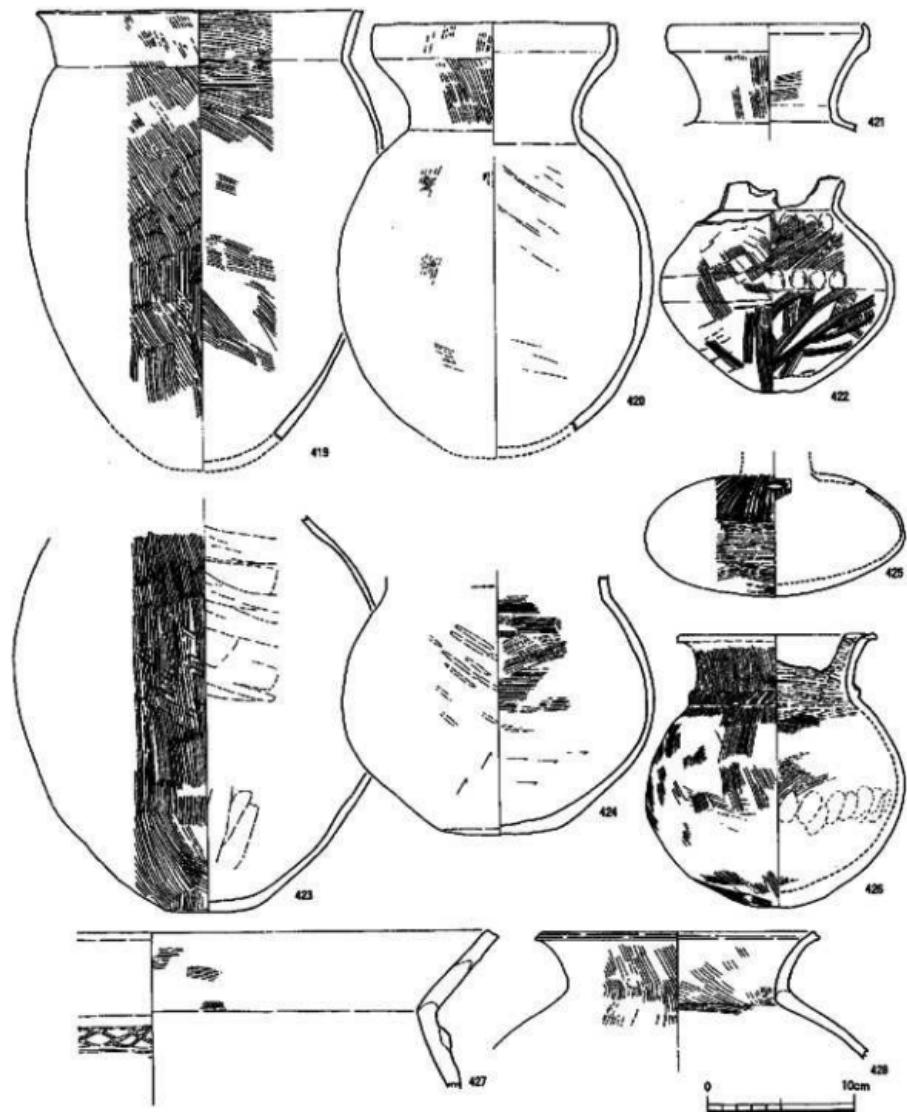


Fig. 77 井戸SE09・10・20・103・116出土遺物実測図 (1/4)

(419-420: SE09, 421-422: SE10, 423: SE103, 424: SE20, 425-428: SE116)

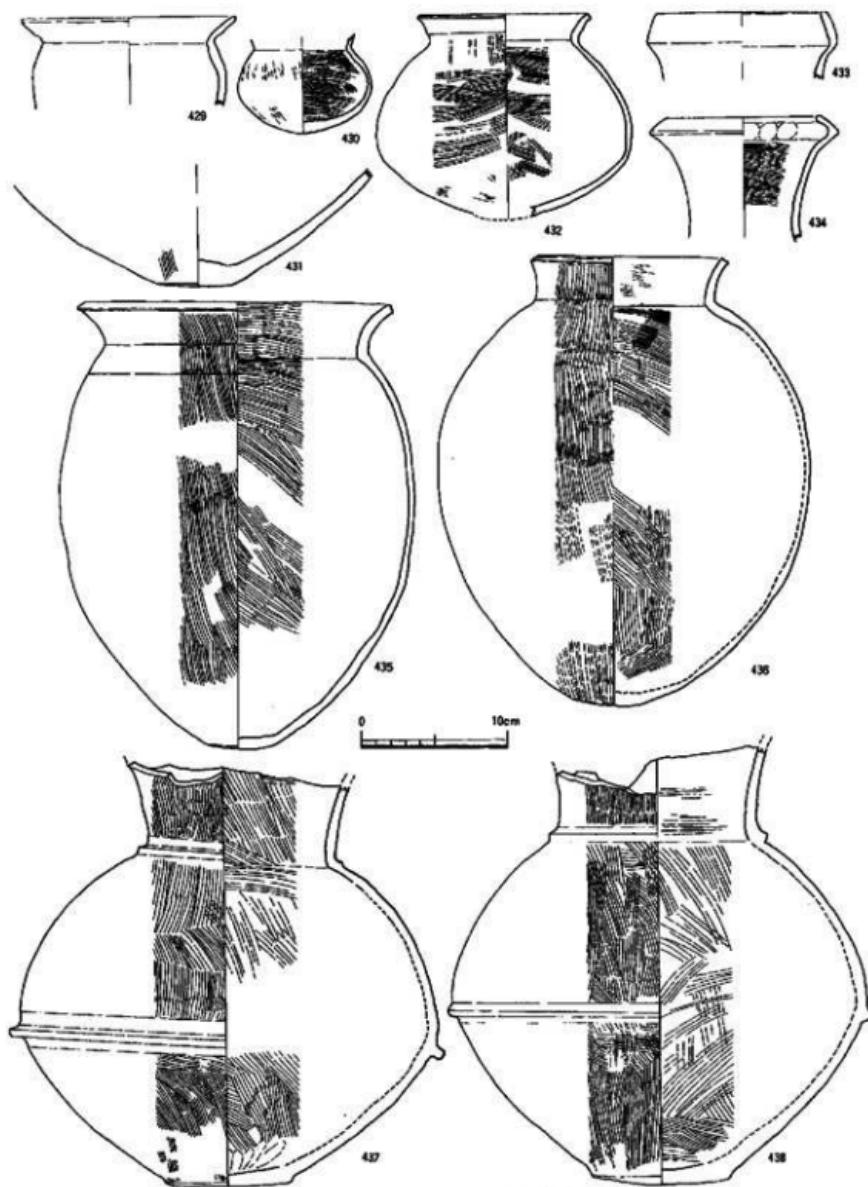


Fig. 78 井戸SE206・231・232・233・236出土遺物実測図(1/4)

(429-432 : SE206, 433-434 : SE232, 435 : SE231, 436 : SE233, 437-438 : SE236)



Fig. 79 井戸SE236出土遺物実測図 (1/4)

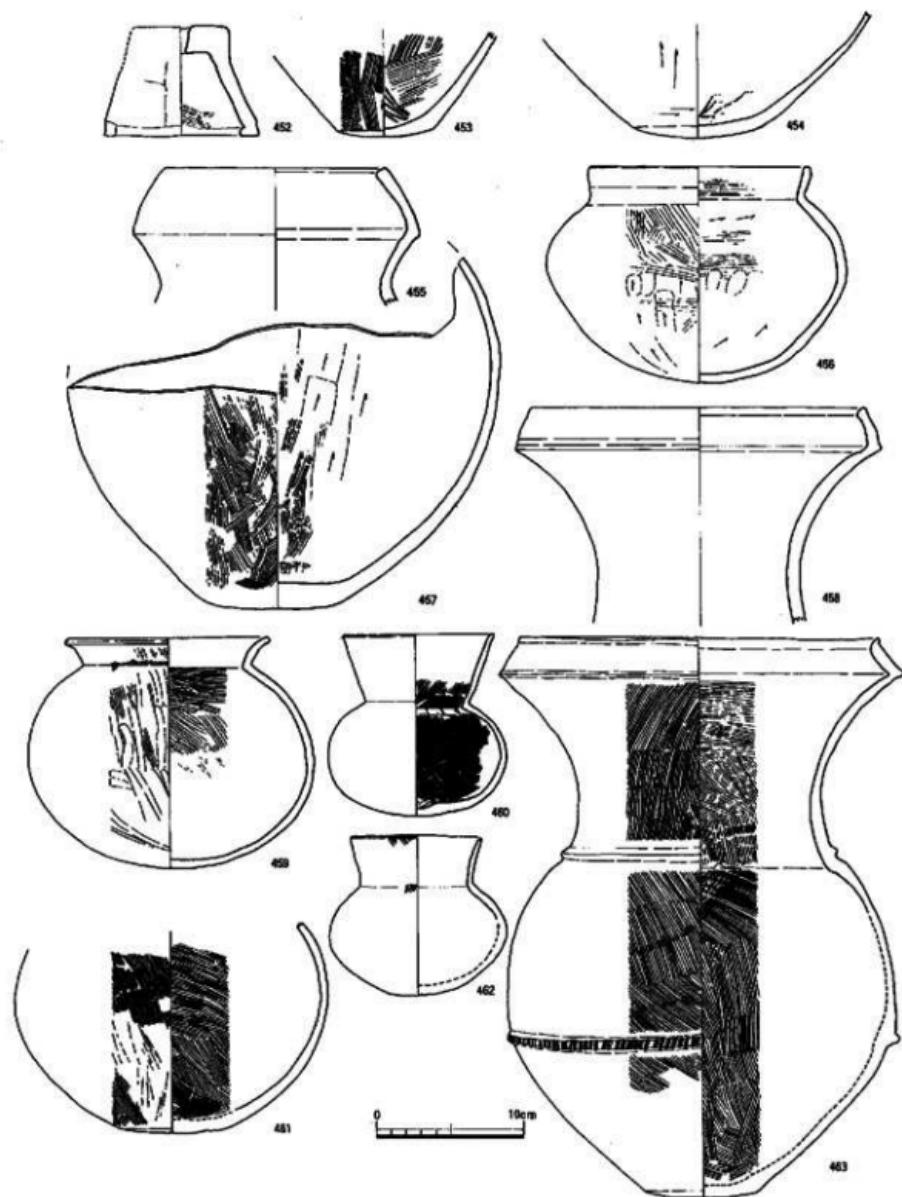


Fig. 80 井戸SE244・245・254出土遺物実測図 (1/4)

(452~456 : SE244, 459 : SE245, 460~463 : SE254)

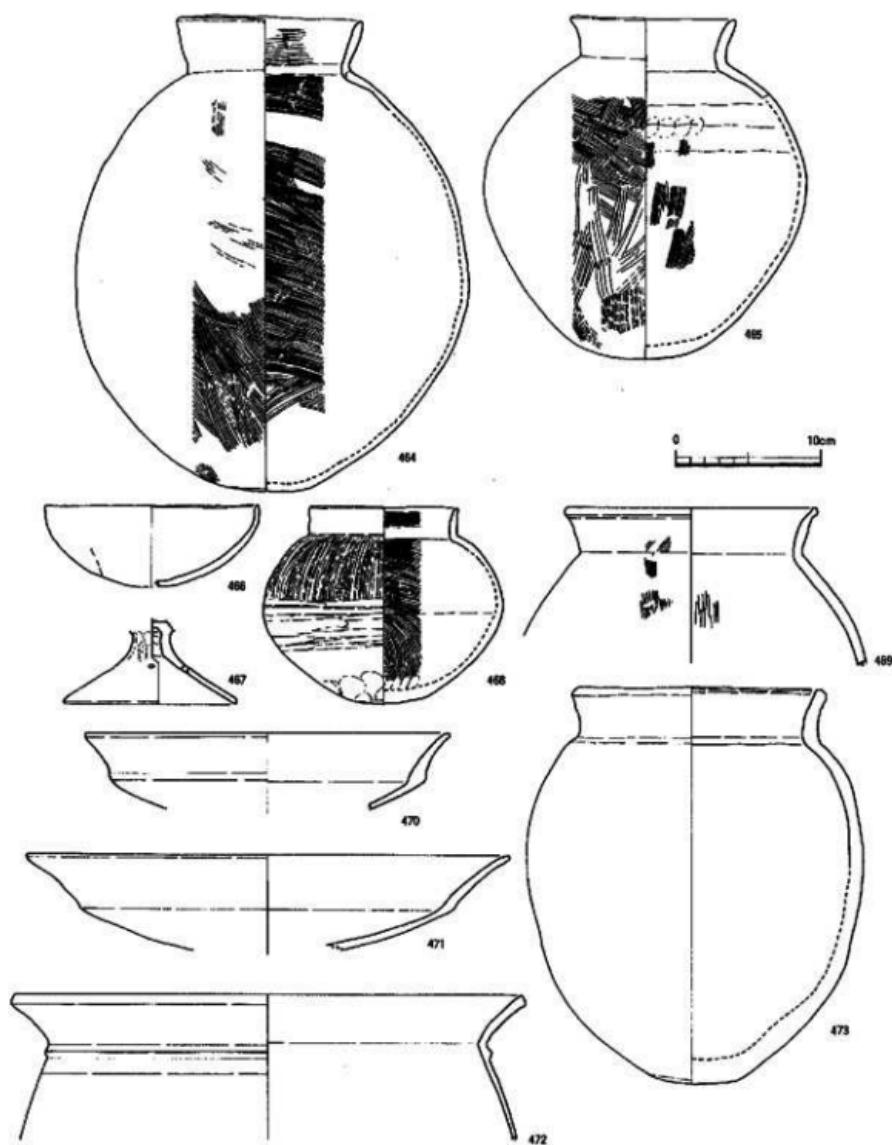


Fig. 81 井戸SE255・263・264出土遺物実測図 (1/4)

(464: SE255, 465: SE263, 466~473: SE264)

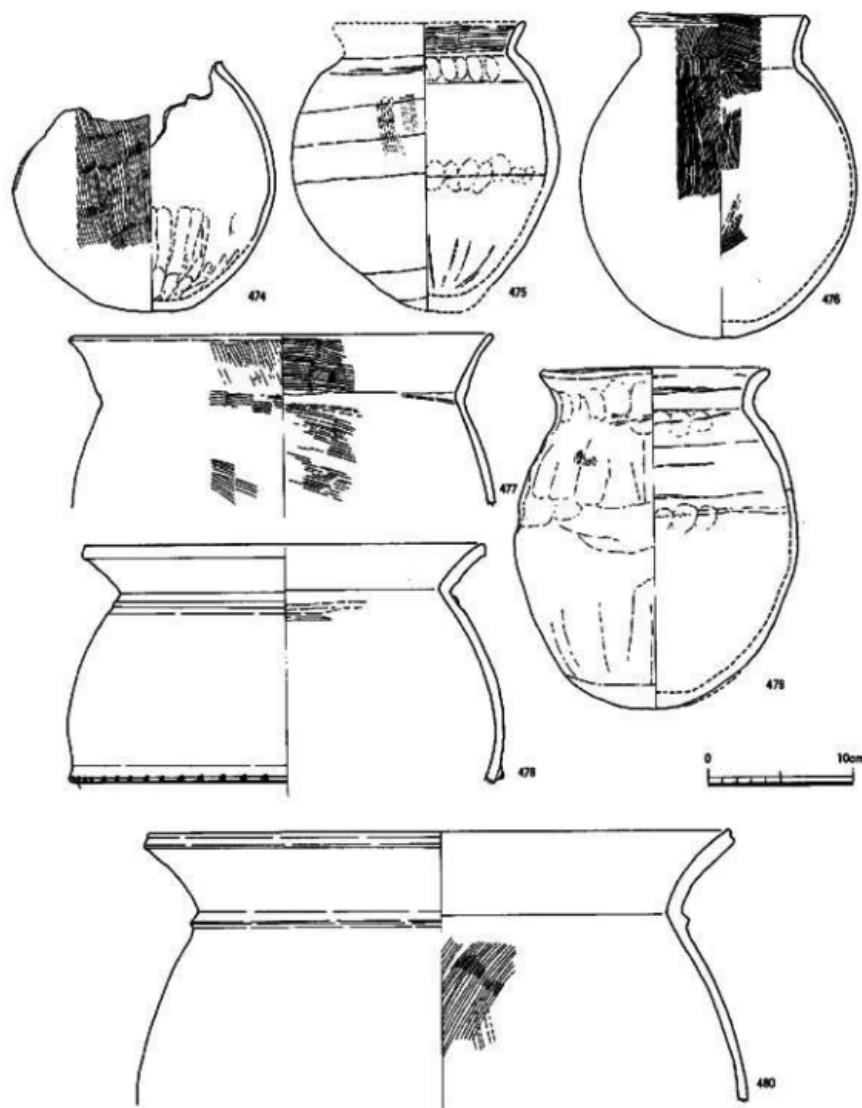


Fig. 82 井戸SE269出土遺物実測図 (1 / 4)

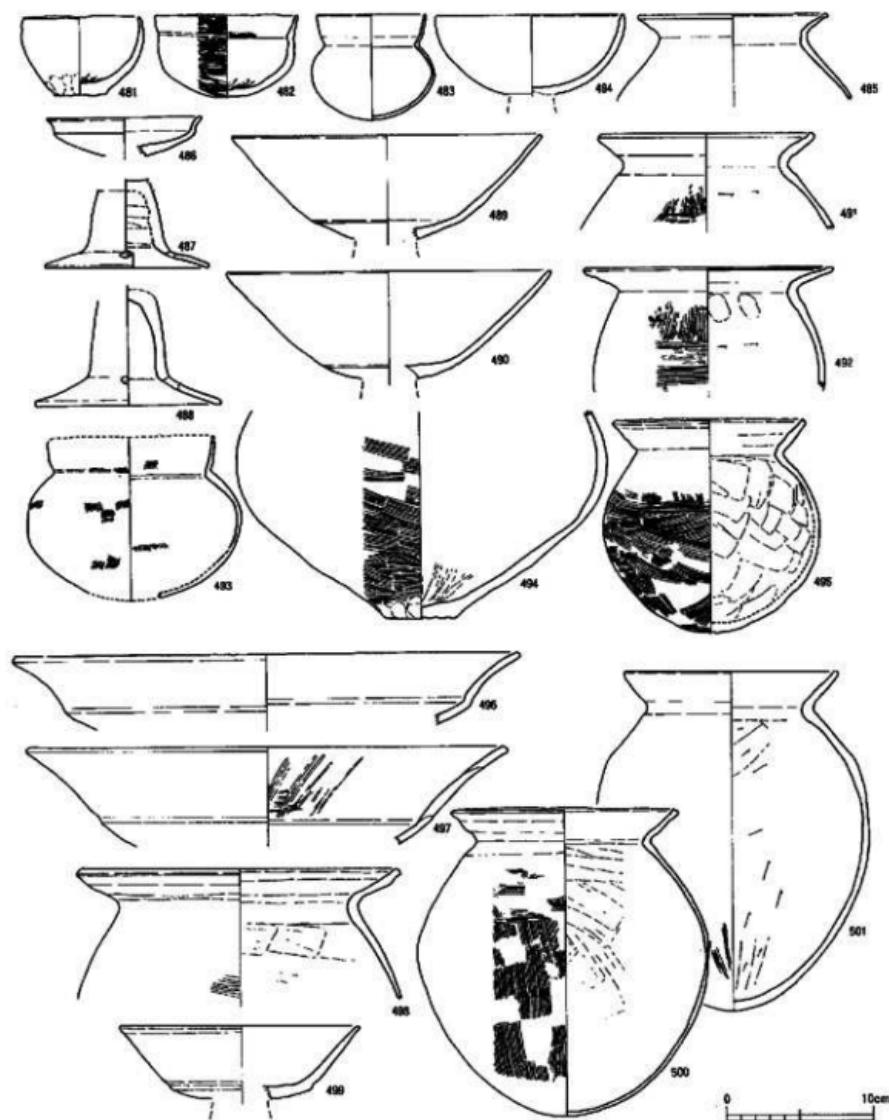


Fig. 83 井戸SE299・325・337・340出土遺物実測図 (1/4)

(481-484: SE299, 485-490-501: SE340, 496-497: SE325, 498: SE337)

第4章 結語

ここでは、第40次・42次・44次・48次の各調査区における調査結果を踏まえながら、集落の関係遺構の推移、第40次調査で出土した土製取瓶、第42次調査で出土した石製広型銅矛鋲型について述べ、調査のまとめとしたい。

1. 集落の推移（付図）

今回調査した4地点は、比恵遺跡群のほぼ中央部に位置する低丘陵の北東部緩斜面上に位置している。最も西側に位置している第42次調査区と東側の第48次調査区とは中央部間で108m離れ、検出面の比高差は1.2m前後を測る。尾根筋にあたる第42次調査区周辺は削平が特に顕著であるので本來の比高差は2m前後はあったものと考えられる。第42～48次調査区で検出された遺構群は山王神社が立地する孤立丘との間に形成された細い小谷部に面した緩斜面に分布していたといえる。

各調査区で検出した遺構は弥生時代中期末から古墳時代初頭にかかる集落関係の堅穴住居跡、掘立柱建物、井戸、溝、土壙などである。これらの遺構の推移を時期別に周辺の調査成果と合わせて概観すると以下のようになる。

弥生時代中期後半～末期の堅穴住居跡、掘立柱建物、井戸の分布は、第40次および第35次調査で認められた溝SD01を東限域としながら、第6次調査で確認された壺棺墓群を含んで広範囲に展開している。分布の中心は中期円形堅穴住居跡が濃厚に分布する第5次～17次調査区周辺で、第40次調査区もその分布域に含まれていることがSC692などから考えられる。すなわち、低丘陵の尾根筋とその西側から南側にかけての平坦部に当該期集落は展開していた。なお第6次調査地点から約150m北側に位置する第43次調査では中期後半の円形堅穴住居跡が検出されており、集落関係遺構は北側の尾根筋まで広がることが予想される。ただし、谷地形もしくは斜面などの微妙に変化する自然地形の単位でまとまりながら分布していたことも考えられ、旧地形の復元も併せて今後検討する必要がある。壺棺墓群は弥生時代中期初頭（6次SK01他）から後期初頭（6次SK27他）を通じて共同墓地として営まれ、当該時期が最も数的に増加する時期である。これまでのところ、副葬品を多量に持つ墓は確認されてはいない。素掘りの井戸がみられるようになるのは中期末からである。6次SE04・17他、42次SE47・202などが壺棺墓域の周囲を囲うように点在している。

後期前半の時期は一般的に遺跡・遺構の密度が減少する傾向があるが、当該各地点も同様に遺構の分布は少なくなる。分布域は第17次調査区周辺に偏っている。ただし第42次調査区においては堅穴住居跡SC231・280、第44次調査区ではSE138がみられ、継続的な集落の営みの痕跡を残している。

後期半ば以降になると遺構が増加する。堅穴住居跡は第6次調査で8棟、第42次ではSC366

他2棟が分布している。ただし第42次調査区では規模の小さなもののが密集して尾根筋を中心とした範囲に分布している点が特徴的である。また壺棺墓域の周囲に小グループを形成しながら井戸が利用されている。現在までに6次で21基、40次で2基、42次で10基、44次で1基、48次で6基検出されており、約8~10群ほどにまとまって尾根筋東側傾斜地に分布している。なお東側を画していた溝SD01は徐々に埋没し始めるようになり、防御および水路としての本来の機能が失われていくかのようである。

後期後半~終末期は、竪穴住居跡が引き続いて尾根筋部にみられるとともに掘立柱建物が東側緩斜面から旧谷部だった低地に向かって拡大している。当該時期の特徴は、東側低地部分(第40次・48次調査区)では掘立柱建物と井戸の組み合わせで、また尾根筋部分では竪穴住居と掘立柱建物、井戸との組み合わせをとる集落構成がうかがえる点である。溝SD01はこの時期には埋没した状況を示している。SD01の埋上の遺物をみると、後期前半代の壺棺片も含まれていることから、壺棺墓域周辺の土取りと削平が行われ、溝の埋め戻しが大々的に行われたと考えられる。第40・48次調査区溝SD18は集落規模の拡大に伴いSD01埋没後に設定され、区画割りを考慮された溝であった可能性がある。掘立柱建物は第48次調査区において大型の高床式もしくは平地式の建物が想定できるSB01・20や、倉庫と考えられるSB13・18・28などのように、規模や間取りで個体差のあるものが多数検出されている。そのほとんどが礎板を持っている。建物の方向性は自然地形の条件に合致させたと考えられるものがほとんどである。溝SD01に規制を受けたと考えられるもの(48次SB10・28)があるが、建物の配列には規格性もしくは計画性はないといえる。なお大量の土器群とともに出土した取瓶片は本来丘陵尾根筋側に存在したものが二次混入したと考えられ、鋳造工房は壺棺墓域の南側周辺の尾根筋上(第42次調査区周辺)に存在した可能性がある。

古墳時代初頭の遺構として確定できる遺構は、軒々と散在する井戸と掘立柱建物である。この時期に含まれる掘立柱建物には42次SB20、48次SB22がある。遺物の出土量も減少する傾向にある。なおこの時期にはすでに48次溝SD04は埋没している。

古墳時代後期になると、弥生時代壺棺墓域の北西側に古墳(比恵1号墳)が築造され、また竪穴住居跡が点在するようになる。当該期の集落の広がりはこれまでのところ明確ではないが第42次調査区周辺から西側に展開していたと思われる。第42次調査区SC324から出土した石製広形銅矛鋒型はおそらく、その近辺から持ち込まれ、砥石に転用されたものと思われる。

今回調査した地点においては、弥生時代後期前半から半ば頃をターニングポイントとして弥生後期後半から末の段階で大がかりな造成および集落の再構成が行われていることは注意される。この状況は、福岡平野の他の遺跡、特に須玖岡本遺跡を中心とした地域での集落の動態と軌を一にした状況が見て取れる。

2、第40次調査溝SD01出土の取瓶(Fig. 25・26, PL. 10・11, Tab. 5)

比恵遺跡群における鋳造関係の遺物は、これまでの39次におよぶ調査において、第30次調査でわずか1点の銅劍鋒型破片が出上しているのみである。今回の調査で出土した取瓶は、第12

次調査で出土した広型銅矛鋲型とともに、本遺跡群における鋳造関係遺物の欠を補うものであり、また当該期の青銅製品の鋳造技術の解明にあたって貴重な出土例となったといえる。

鋳造関係遺物の出土例は、比較的出土例が多い鋳型を除くと、北部九州では佐賀県鳥栖市安永田遺跡、福岡県春日市大谷遺跡、須玖尾花町遺跡、須玖唐梨遺跡、福岡市博多区那珂遺跡群8次調査地点、また工房跡も確認された遺跡としては佐賀県三田川町吉野ヶ里遺跡、須玖坂本遺跡、須玖岡本遺跡地点、須玖永田遺跡、黒田遺跡などが挙げられる。近畿地方およびその周辺では、兵庫県北山遺跡、今宿丁田遺跡、平方遺跡、東奈良遺跡、鬼虎川遺跡、瓜生堂遺跡、唐古鍵遺跡等で報告されている。しかしこれらのうち、堀場や取瓶の出土例はきわめて少ない。堀場については可能性が指摘されている例として唐古鍵遺跡があるのみである。また、取瓶とされる遺物は須玖永田遺跡例が代表的な資料で、その他数例しか知られていないのが現状である。こうした点を踏まえて、ここでは当該地点で出土した取瓶の分類を行い、若干の問題点について述べたい。なお個別説明はTab. 5を参照されたい。

(1) 出土取瓶の廃棄時期

SD01から出土した取瓶147~152・153(Fig. 25・26, PL. 10・11)は破片数にして15点出土した。口縁部が7点、体部が4点、脚台部が4点である。胎土、成形手法の違いからみて3~4個体分の破片と思われる。出土状況は、いずれも溝の埋土上層から多数の土器片とともに二次的な堆積状況で出土した。意識的に破碎され廃棄された可能性がある。これらの破片の廃棄時期は共伴する土器から見て、弥生時代後期後半から末期の時期と考えられる。製作および使用時期は遅っても弥生時代後期半ば頃と思われる。

(2) 分類

口縁部・体部・脚部の形態、胎土、焼成からみて2類に大きく分けられる。

第1類は、胎土がきめ細かな泥質の粘土を素材とし、焼成が良好で堅く焼き締まり重量感があるので、器壁は厚手で、口縁上端がほぼ水平な平坦面を持つものである。この第1類についてはその全体形を推定できる資料が得られた。

153は、破片のうち同一個体とみなされる5点と脚台部151を参考に全体の器形を推定復元したものである。器形は杯部と円筒形の脚台部で構成される。復元値は、器高16cm、杯部口径(外径: 24.7cm、内径17.0cm)、杯部高(外法: 10.2cm、内法5cm)、脚台部は径15cm、高14.5cmである。杯部容量は約280ccを測る。復元重量は2,650gほどである。全体に内厚で、重心が低く安定した作りである。胎土は精良できめの細かい泥質土を用いており、肉眼では微細な石英砂、角閃石が含まれている。焼成は良く、堅く焼き締まっている。色調は全体的に明灰白色を基調とするが、内面は黒灰色、外面は部分的に暗灰色~黒灰色になる部位がある。

杯部は浅い鉢形である。体部器壁は4cm前後で厚手である。口縁部は幅3.5~4.0cmの平坦面を形成しながら注口部へと続いている。平坦面はわずかに内側に向かって傾斜している。注

口部には湯斗状の張り出しが付く。おそらく鋳型湯口に注ぐ際のオーバーフローの防止と、溶解した金属材料表面の湯漬を除去するためのものと思われる。杯部内面は全面に非常にきめの細かい真土が約0.5~0.8mmの厚さで塗られている。なお口縁部平坦面にも同様に真土が塗布されている点は注意される。内面は焼けており、表面が黒灰色に変色するとともに細かなヒビ割れが生じている。黒灰色にやけた表層の厚さは約1.5~2mmで、その下層は赤褐色に約2~3mmほどの厚さで変色しており、高熱を受けたことがわかる。また内面には溶解した金属素材残滓が融着している部分があるが、内面底部から注口部にわずかであるがまとまって残っている。外面には植物繊維質の縫状の圧痕がみられる。紐状圧痕は口縁部に沿いながら、注口部では「棒掛け」状にみられる。これは乾燥前の自重による型くずれを防ぐため棒掛けし補強した跡と思われる。151の底部平面形はほぼ円形であるが、同じ脚台である150は完全な円形ではなく、不整な多角形もしくは一部分が直線的である。

なお、内面に残った金属残滓物については、平尾良光氏の分析結果が得られている(142頁)。

第2類は、胎土はきめが粗く軟質で脆い。口縁部は器壁が2~3cmほどでやや薄く、端部を丸くおさめるもの(148)である。全体に軽い仕上がりで、後述する第2類と比較すると小型である。全体の器形については判然としないが、口縁部の形状等からみて基本的には鉢形をなし、口縁部上端片口状の注口部を設けるか、または口縁上端部からやや下に穴を穿ち注口部を作りつける永田遺跡例に近い形状のものが想定できる。器壁は内面のみが焼けていることも特徴である。また図示しなかったが、底部片の出上例からみて上げ底気味の低い脚台を持つ例もあると考えられる。

類例である唐古縫遺跡出土例は、永田出土例と近似しており鉢形が考えられるが、堆積とする根拠は明確でない。また須玖永田出土の取瓶は鉢形で、体部器壁が薄く、スサ等を混入している点と、注口部内面に湯漬の除去を助ける「棲」様のものを造りつけている点が大きな特徴であり、本遺跡例とは形態的な違いが指摘できる。

(3) 第1類と第2類の使用法

一般的に鋳造作業は、溶解炉(坩堝)における銅合金の溶解後に、溶解した銅合金を直接か又は取瓶で受けた後、鋳型へ流し込み、一連の工程を経て製品化される。当該遺跡出土例を分類整理する過程で考えられた鋳造過程について幾つかの点についてまとめておく。

先述したように、第1類と第2類の大きく異なる点は、形態的に口縁部の形状と、脚台部の有無または大小の差、および胎土の質的な異なりと重量の軽重に集約される。また二次的に加熱されたと考えられる器壁面の焼け方が、第1類が内外面におよんでいるのに対し、第2類は内面のみである点は注意される。これは鋳造作業上における用途の違い、または作業工程上の異なりを表していると考えられる。すなわち、第1類とした取瓶はその形態的な特徴と第2類に具有していない諸特徴から、銅合金の溶解に深く関わる可能性がある。例えば口縁部の平坦面は、合金素材を混入し木炭等の燃焼材をその上に覆う際の余剰分の受け部、もしくは遊びの部分の可能性が高い。また高温度で溶解するとともに器全体、特に杯部が同時に熱せられるよ

うな所作が行われたことが内外面の二次焼成の状況から考えられる。すなわち堀として利用され、合金溶解後は取瓶として鋳型湯口に直接注いだか、もしくは専用の取瓶に湯を小分けしたものと考える。これに対して、第2類は堀から高温で溶解した湯を受けるいわゆる取瓶としての機能の面が強く感じられる。ただし、第2類においても合金溶解が行われた可能性も考えられ、第1類と第2類は形態的には明確な違いがあるものの、いずれも堀と取瓶としての機能が兼用された可能性があること、あるいは明確な使い分けがなされていなかったと現段階では考えておき、今後の資料の増加を待って検討すべき課題としておきたい。

3、第42次調査竪穴住居SC324出土の広形銅矛鋳型

広形銅矛・戈は、弥生時代後期終末期における北部九州の地域性を象徴する代表的な武器形祭器である。その生産地は須玖岡本遺跡を核として福岡平野部を中心があったことはすでによく知られているところである。しかしながら北恵遺跡群においてはこれまで鋳造関係遺物の出土例は第30次出土例の1例のみで、その生産の実態については明確でなかったといえる。ここでは出土鋳型について観察所見を述べ、編年的な位置づけについて述べる。なお鋳型の説明にあたっては、製品原型を彫り込んだ範囲を表にし、鋒側を上に向けた状態で上下および左右側面、裏面と呼ぶ。また製品原型が彫られた範囲を特に鋳型面と呼ぶ。計測値は現存長であるが、()内の数値は推定値である。

(1) 出土状況

鋳型369(Fig. 59)は、古墳時代住居跡SC324の床面で検出された(Fig. 38)。この住居跡は北東壁に灰白色の粘土による甌を持ち、おそらく4本柱の主柱を持つ6世紀後半頃の竪穴住居である。住居跡の中央からやや南側に住居跡に付設すると思われる長径約60cmの不整な楕円形土壙SX377があり、本例の出土位置はその上面にあたる。鋳型は範囲を下に伏せて、ほぼ水平に寝かせた状態で出土した。古墳時代において住居内で使用され、遺棄されたものと思われる。

(2) 出土鋳型の特徴

鋳型素材の石質は、唐木田芳文氏による肉眼観察所見では石英長石斑岩と推定された。色調はかすかに褐色がかった明灰白色を基調とする。新たに欠けている部分はわずかに灰色がかった明白色である。鋳造作業の結果、黒灰色に変色した部分が、鋳型面の上半分(身)および、左右側面から裏面にかけてみられる。特に刃縁部と、鋳型の連接部にあたる上側面縁は黒色に変色しており、いわゆるバリが生じた範囲がわかる。範囲以外の各面では範囲に沿って帯状に黒ずんでいる部分や縞状にみられる箇所があるが、本来は器面全体がうすい黒灰色を呈していたと思われる。これらの諸点から本例は鋳型として供されたものと判断される。

鋳型は袋部から肩部および身の一部にかかる範囲のものであるが、袋部は失われている。現存値で最大長32.5cm、最大幅17.1cm、最大厚10.2cmを測る。砾石として転用された結果、

範面中央から左下半部、左右両側面・背面の一部が本来の形状を失い、製品原型は留めていない。上側面の四隅はわずかに欠けている。断面形は浦鉢形である。裏面および側面は成形のためのケズリ痕がみられる。

左側面には範面平坦面から4cm、鋳型面から3.8cm下に、幅2.4cm、深さ1.4cm、長さ15.5cmの溝が彫られている。溝断面は「U」字形で、表面にはケズリ痕が残っている。面の仕上げはやや雑である。この溝については鋳型を連結するためのものとされるがその方法については正確には不明である。本例の連結部分(鋳型面上縁)には黒色に変色した部分が観察できる。若干の隙間から湯が流れその結果バリが生じた結果であろうと思われる。

左右側面に合印があったかどうかは不明である。現状では観察できない。

範面は、砥石として使われた中央左側と右側下半部がかなり磨耗しており、特に左側の関部から下部は消滅している。

範面の現存長は32.4cm、最大幅15.2cmである。型は関から上端までが22.5cm、下端部までが9.9cmである。関幅は現存長が11.9cmで、推定復原で13.4~13.7cmほどである。身幅は上端部で推定10.1cm。下部は不明。また最小幅は、関から9.1cmの部位で8.8cmを測る。脊は断面形が半円形をなす。鎬は彫り込まれていない。なお彫り込み面の仕上げはやや粗く、上下方向の擦痕を多く残している。柄との接線は磨耗しやや不明瞭である。幅・深さは下端部で2.9cm・0.75(1.0)cm、上端部で1.5cm・0.4(0.6)cmを測る。柄は左右ともに縁を1~1.5mmの深さで断面形「V」字状に彫りこんでいる。上端部はいずれも1.4cmが推定される。葉部は柄側が深く、刃部縁側が浅く彫られている。刃部縁は断面形「V」字状に彫られているが、稜線は丸みがあり鈍い。

(3)出土鋳型の編年的位置づけ

これまで知られている広形銅矛鋳型は本例も含めて24点があげられる(Tab. 17)。これらのうち、佐賀県唐津市大深田遺跡と飯倉D遺跡出土例が両面鋳型で、ほとんどが片面鋳型である。大深田遺跡例は両面に矛型を、また飯倉D遺跡例は内行花文鏡型と矛型を彫り込んでいる。また伝世品以外で出土状況の比較的明かなものは8~9例であるが、いずれも投棄、または二次的な混入で、鋳型の使用時期については出土遺構および共伴関係からは明らかにできない。

観察所見で述べたように本資料の脊には鎬は彫られていない。他例では鎬を彫り込むもの(皇后峯)と彫り込まないもの(高宮2号・3号等)がある。製品には鎬を有するものと無いものがあることから鋳造後に鎬を研ぎ出す場合も考えられ、鋳型においては一概に鎬の有無が製品型式の推定に直接結びつけられないことも考慮に入れておく必要があるので即断はできないが、関幅についてみると推定で13.4~13.7cmが考えられ、本例は津古東台遺跡出土例よりやや狭いものの、広形銅矛製品例と比較すると関幅が広い範疇に含まれるようである。また身幅の最小値を測る部位の形状等も考慮すると、本例は岩永省三氏による広形銅矛b式に対応する鋳型と考えられ、先述した第40次調査出土の取瓶とはほぼ同時期の、弥生時代後期半ば~終末にかかる時期の所産と考えておきたい。

Tab. 17 広形銅矛頭型(出土地)一覧表

NO	遺跡名	所在地	出土遺構または出土状態	部位および所見	文献
型式が確定し現存するもの					
1	伝高宮八幡宮付近	福岡市南区高宮	不明(2号)	袋部～肩・身下部(袋部は欠損、連接部・側面には溝有り)	① ②
2	伝高宮八幡宮付近	福岡市南区高宮	不明(3号)	身中央部(連接部に溝有り)	① ②
3	伝高宮八幡宮付近	福岡市南区高宮	不明(4号)	身上半部(矛先は欠損・側面に溝有り)	① ②
4	伝高宮八幡宮付近	福岡市南区高宮	不明(5号)	身上半部(矛先は欠損・側面に段または溝有り)	① ②
5	伝五十川付近	福岡市南区五十川	不明	縫口～袋部(側面に段有り)	③ ④
6	祇舎D遺跡	福岡市城南区七瀬3丁目	弥生時代後期半以降堅穴住居SC324床	袋部(両面鋸歯、表面は内行花文鏡純型面を残す)	⑤
7	板付遺跡6次	福岡市博多区板付	G-26トレンチ包含層	開付近の身下部	⑥
8	比恵遺跡群42次	福岡市博多区	古墳時代堅穴住居SC324床	四部～身下部(縫口部は欠損、連接部に溝有り)	⑦
9	伝元岡	福岡市西区元岡	不明	矛先～身下半部(連接部に溝有り)	—
10	大野城市瓦田	調査区表土	身	未著	未著
11	伝皇后峰	春日市向本町	不明(1号)	矛先～身中央部(連接部に溝有り)	③ ④ ⑤
12	伝皇后峰	春日市向本町	不明(2号)	縫口～身中央部(連接部と側面に溝有り)	③ ④ ⑤
13	熊野神社墓バンジャク	春日市向本3丁目	不明(漆器開造或時に出土)	袋部	⑥
14	熊野神社吉村氏宅	春日市向本3丁目	不明	身中央部	⑥
15	熊野神社吉村氏宅	春日市向本3丁目	不明	身中央部(矛先連接部付近)	⑥
16	津古東台遺跡	小郡市津古	弥生時代後期土器塗まり	縫口～身下部(連接部に溝、縫口裏に段有り)	⑦ ⑧
17	三雲	前原市三雲	不明	身中央部	⑨
18	三島川端	前原市三島川端	不明	縫口～袋部(側面に溝有り)	⑩ ⑪
19	石崎	福岡県二丈町石崎			
20	柏崎大深田	佐賀県唐津市柏崎大深田	矛先と袋部の両面鋸歯	⑫	
型式が未確定のもので広型の可能性があるもの					
21	春井手	春日市跡生1・4・7丁目	A-5区遺構検出時	矛または戈、矛先端部	⑬
22	春井手	春日市跡生1・4・7丁目	A-14区遺構検出時	矛または戈、刃部	⑭
出土が知られているが現存しないもの					
23	熊野推現	福岡市南区井尻	塚の際から掘り出す	完形で2枚・籠となる。	⑮ ⑯
24	熊野推現	福岡市南区井尻	塚の際から掘り出す		⑮ ⑯

〔参考文献〕

- 青柳種信「筑前国風土記拾遺」
- 淡庄「銅鋒型ノ開ル江藤氏ノ報告」東京人類学会雑誌3巻24号 1888
- 高橋健自「銅鉢劍剣の研究」1925
- 中山平次郎「井尻の弥生式遺産」考古学雑誌第14巻第12号 1924
- 中山平次郎「須玖岡本の遺物」考古学雑誌第17巻第8号 1927
- 中山平次郎「銅鋒削范の新資料」史前学雑誌1巻3号 1929
- 森木六輔「失はれた青銅器鋸范」考古学第4巻第10号 1933
- 東亜考古学会「対馬」1953
- 後藤直・沢臣臣「板付」福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 福岡市教育委員会 1976
- 丸山康晴「赤井手遺跡」春日市文化財文化財調査報告書第6集 春日市教育委員会 1980
- 櫛川義美「大深田遺跡」「東麻園」唐津湾周辺歴史調査委員会 1982
- 後藤直「青柳種信の考古資料(三)」福岡市立歴史資料館研究報告 第7集 福岡市教育委員会 1983
- 後藤直「第3錐形范残欠」伝福岡市南区五十川出土「福岡市の文化財一考古資料」福岡市教育委員会 1987
- 後藤直「福岡市高宮八幡宮所蔵銅鋒型の調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第218集 福岡市教育委員会 1990
- 片岡宏二「福岡県小郡市津古遺跡出土の銅鋒頭型」日本考古学会第58回総会研究発表会要旨 1992
- 片岡宏二「津古遺跡群I」小郡市文化財調査報告書第84集 1993
- 田中壽夫「比恵遺跡群13」福岡市埋蔵文化財調査報告書第368集 福岡市教育委員会 1994
- 山口清治「祇舎D遺跡群第1次調査」福岡市埋蔵文化財年報VOL. 7 福岡市教育委員会 1995

福岡市比恵遺跡から出土した 土製取瓶付着物の自然科学的研究

東京国立文化財研究所保存科学部
平尾良光・榎本淳子・小林直子

1、はじめに

福岡市教育委員会の田中壽夫氏から、同市比恵遺跡の第40次調査で出土した土器片の内側に付着した物質について自然科学的手法による調査の依頼があった。土器片は取瓶と推定されるという。依頼された資料は土器に付着した金属の鉛と推測され、土器の用途が铸造に関連したかどうかを明らかにすることであった。この調査は当研究室における「弥生時代青銅器の研究」の一環として十分に協力する価値があったので、自然科学的な測定を次のように行った。

2、資料

金属溶解用のルツボあるいは铸造用の取瓶と推定される土器片の2点が提供された(写真1~4)。考古学的な判断から、これら土器片は同一個体であり、一方は脚部分(写真1・2)、他方は口縁注口部(写真3・4)と考えられ、復元すると口径25cm、器高20~24cmの「取瓶」になるという(写真5)。それぞれの土器片の金属酸化物と思われる付着物を試料として採取し(写真6・7)、蛍光X線分析および鉛同位体比の測定に供した。なおこの報告の中で便宜上、脚部分の試料をS-1(写真8)、口縁注口部から採取した試料をS-2(写真9)とした。

土器が出土したのは、福岡市の比恵遺跡で写真10で示される。出土した遺構の年代は弥生時代後期半ば頃と推定されている。さらに、この遺跡の第42次調査では広形銅矛の鋳型が発見されている。^[1]

3、調査法

本調査において、試料の化学組成の測定は非破壊で測定できる蛍光X線分析法^{[2][3]}を利用した。また産地推定には鉛同位体比法^{[4][5]}を利用した。2種の試料(S-1・S-2)を採取し、化学組成の測定を行い、その後鉛同位体比を測定した。

3-1) 化学組成

資料の化学組成は材質を判断する上で最も基礎的な要素である。例えばそれが金でできているのか、真鍮なのか、あるいは有機物なのかによって資料の歴史的価値や意義、修理方針、保存方法等が異なる。また青銅と称する一群の合金は古代においてよく利用されたが、その銅と

スズの量比の違いで利用する場合の性質は著しく異なる。それ故、どのような資料であれ、材料の化学組成を明らかにすることは文化財をより正確に理解する第一歩である。

化学組成の測定方法として、資料の一部を採取し、機器に導入して測定する方法にはICP分析法^[*4] 原子吸光分析法、放射化学分析法^[*5]などがある。また試料を採取しないでX線を照射するだけで測定する方法には蛍光X線分析法がある。化学組成を結晶化学的に調査する場合にはX線回析分析法が有効である。

今回の調査では、試料が金属酸化物であるかどうかを明らかにすること、そして金属であればその産地に関する情報を得ることを目的とした。

3-1-1] 蛍光X線分析法による化学組成の測定

本調査において化学組成の測定には非破壊で分析できる蛍光X線分析法を用いた^[*2] 蛍光X線法による化学組成の測定はフィリップ社製波長分散型蛍光X線分析装置PW1401LSで行った。本機器の試料測定室は間口80cm、奥行60cm、高さ60cmあり、かなり大きな文化財資料でもそのまま測定できるように設計されている。

機器の使用条件はモリブデン管球を用い、60kV、30mAで一次X線を発生させて、試料に照射した。試料から発生する二次X線は元素毎に波長が異なるため、フッ化リチウムの結晶でX線を角度毎に分散させ、シンチレーションカウンターおよびガスフローカウンターで分散角度におけるX線強度を測定した。

3-2) 産地推定

3-2-1] 鉛同位体比法による産地推定法の原理

産地推定のために鉛同位体比法を利用した^[*3] 一般的には鉛は4種類の安定な同位体で構成されている。この鉛は地球ができたときに他の元素と一緒に岩石中に含まれており、その同位体比は地球上どこでも一定であったとされている。鉛の同位体のいくつかはこの岩石の中でウランおよびトリウムという元素の天然放射変化で後から付加される。それ故、鉛の同位体比は岩石の年齢、および岩石中のウラン・トリウムと鉛の濃度比によって変化する。このような岩石から地質学的な変化で鉛鉱山が形成されたとすると、鉛鉱山を形成する岩体の組成や年齢が違えば、それぞれの鉱山毎に異なった鉛同位体比を持つこととなる。それ故産地によってそれぞれ異なる値を示すことが期待される。例えば古い年代を示す大陸地殻である中国本土と、大陸周辺部地域の朝鮮半島、大陸から離れ、わりあい新しく形成された島嶼地域の日本は異なった鉛同位体比を示すと期待される。そこで鉛の産地の違いが同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代日本の青銅製品に関する鉛同位体比の測定は今までに当研究室でかなり行われており、幾つかの報告にまとめられ^[*6・7・8・9・10] 文化財の原料産地の推定に大きな役割を果たしている。

古代の青銅には鉛が微量元素として0.01~1%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれているので、鉛同位体比の測定をほぼすべての青銅製品に応用できる。

鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器(質量分析計)の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また資料は青銅の金属部分でも錫部分でも、同位体比は変わらないことが実験的に確かめられているので、資料からは錫を微量採取だけで十分である。

そこで、化学組成の調査後、この方法を本資料の原料産地の推定に利用することを試みた。鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した。^[*11]

3-2-2] 鉛同位体比の測定

資料から錫の微量を(1mg以下)を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。錫試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加え加熱、溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流電圧2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、鉛濃度を求めた。0.4μgの鉛をリン酸シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、VG社製の全自動表面電離型質量分析計 Sector-J に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200°Cに設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

今回の試料は化学組成の測定から明らかのように鉛が多量に検出されており、青銅中の鉛山鉛の同位体比を測定したこととなる。これは金属鋳造過程で意図的に鉛が加えられたとみなすことができるからである。

銅に関していえば、例えば純銅製品であっても僅かながらの鉛が存在しており、それが銅鉛山の歴史、即ち固有の同位体比を示す。^[*12]しかし一方、青銅の中に鉛が5%以上含まれていた場合、鉛を意図的に加えた可能性が極めて高く、鉛量は銅鉛石に不純物として含まれる鉛量と比べると約100倍以上となる。従って、鉛同位体比の測定結果は鉛原料の値を示し、銅に含まれる鉛の与える影響はほとんどないと考えられる。

4. 測定結果

4-1) 蛍光X線分析

4-1-1] 萤光X線分析の所見

試料が微細な錫であったためホルダーにマイラーフィルムで固定して測定した。この場合マイラーフィルムによる測定感度への影響はないことが実験的に確かめられている。試料S-1(写真6)の測定部の拡大写真を写真8で示した。試料S-2(写真7)の測定部写真を写真9で示した。

蛍光X線分析法では測定部表面から約10マイクロメートルまでの深さの化学元素組成に関する情報を得られる。それ故、分析しようとする金属製品の表面に錫などがあれば錫の化学組成に大きく影響を受けやすく、化学組成は必ずしも本体金属部分を反映しない場合がある。今回の試料は微量の付着物なので、金属製品本体とは状態がかなり違っていると推測される。それ

故、得られた結果を定性的な値として次にまとめた。

測定された蛍光X線スペクトル図を試料S-1に関して図1、試料S-2に関して図2で示した。図の横軸は試料から発生したX線の分散された角度である。X線は元素毎に異なる角度に分散されるので、特定の波長は特定の元素を意味する。縦軸はX線の強度、即ち元素の量である。図中の●印のついたピークはX線発生装置に用いた管球のモリブデンのピークであり、試料とは関係ない。

銅(角度45°)のX線強度を100としたときの各元素の相対強度を表1で示した。試料S-1には銅・スズ・鉛・鉄がみられた。またアンチモンのピークがわずかに見える。試料S-2はS-1と比べて鉛のピークが大きく、スズのピークが小さかったが、検出された元素の種類は同一であった。この結果からこれら付着物が青銅の錯であることが明かである。鉄は埋蔵環境の岩石や粘土から流入してくる元素なので、当初からこの程度の量が青銅金属内に存在していたかどうかはわからない。

従って、本資料を付着した土器は当初の指摘どおり、ルツボあるいは取瓶などの青銅の溶解あるいは鋳造に関わる作業に用いられたと考えられる。特に試料S-2では銅よりも鉛のピークが大きいので、銅鉱石に付随した鉛というよりも、主成分として加えられた鉛であると推測できる。ただし青銅とはいって、試料は微細である上に、残滓として酸化された部分を測定していることになり、酸化時に元素の移動が激しく起こった後の状態なので、この組成がもとの化学組成ではない。少なくともこの試料は銅・スズ・鉛の合金であったと推定され、弥生時代に通常用いられていた青銅と理解できる。土器の考古学的な形態判断、および本資料の付着状況からこの土器が「取瓶」で、青銅を取扱った後、その残りの金属が残ったと推定される。

青銅の問題とは別にいくつか分かりにくい蛍光X線のピークが見られた。それらを挙げる所と、

11.03° 小さいピークであるが、バリウム(Ba)かも知れない。

18.96° バリウム(Ba)かも知れない。

21.10° モリブデンのピークの右、ランタン(La)かストロンチウム(Sr)である。

22.42° LaかSrのピーク

25.06° Srのピークらしい

26.63° Bi?

27.26° Bi?

33.27° BaかBi?

48.76° Ni?

この結果から、測定した試料の中にはバリウム・ストロンチウム・ランタン・ビスマスが含まれている可能性がある。これらの元素の中で、ビスマス以外は青銅資料を採取した際に混入した土器の胎土に含まれる元素であって、青銅の化学組成と関連があるわけではない。

4-2) 鉛同位体比の測定の結果

測定された鉛同位体比を表2で示した。得られた値を今まで測定された値と比較してみると、図3と4のようになつた。^[6-7-8-9-10]この図の中に、本測定値を「●」で示した。

図3は縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値である。この図を仮にA式図と呼ぶこととする。この図では鉛同位体比に関して古代東アジアの青銅器および現代の鉛・銅鉱石から今までに得られた結果を模式的にA・B・C・Dで表している。つまり鉛同位体比の地域別分布の概念図である。Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が入る領域、Dは朝鮮半島産の多種細文鏡と細形銅劍が分布するラインとして示されることが判っている。さらに領域“a”は、弥生時代の青銅製品の中でも特に近畿・三連式銅鐸が分布する特殊な領域である。この図からすると、本資料はひとつが“a”の中に含まれ、もうひとつの値は“a”から少し離れた所に位置した。

図4は縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値で、A'・B'・C'・D'はいずれもA式図と対応するのでB式図と呼んでいる。B式図に“a”領域に対応する領域を示していないのは、 $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ 、 $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値の誤差がA式図のデータ要素の誤差に比してやや大きいため、狭い領域に分析値が集中しにくいことによる。B式図はA式図に対応して値を検証するという位置づけであると考えている。これらの図の中に本測定値を「●」で示した。両資料はA領域に含まれ、華北産の鉛であることが示されている。

4-3) 鉛同位体比測定の所見

試料S-1は“a”領域に含まれた。この領域は前述のとおり後期銅鐸が集中する特殊な領域で、最近では韓那文銅鐸の同位体比がこの領域およびその周辺に位置していることが明らかになった。またこれまでに北九州出土の中広形銅矛、銅鎌先などもこの領域に含まれることを確認している。^[11] 弥生時代後期のある一時期に九州・近畿・関東にまで行き渡った青銅材料がここでも利用されていることを示す。

試料S-2は“a”領域に含まれないまでも、S-1と近い位置関係である。同一材料であって、埋蔵環境において何らかの別の資料の影響を受けている可能性を示唆している。

5. 考 察

今まで報告された土器付着銅、あるいは銅塊・銅滓などと称せられる資料の一群を表3にまとめ、これらの値を本測定値と共に図5、図6で示した。これら資料には福岡県春日市の須恵永田、須玖坂本、五反田などや岡山県の籠野市から出土した資料も含まれている。まず、図5で示されることはほとんどの資料がA領域の“a”付近に集まっているのに、五反田遺跡の2資料が大きくかけ離れた値を示していることである。五反田遺跡は弥生時代中期前葉から開かれた遺跡とされており、このルッポ付着銅は中期前葉以後の資料と理解できる。それ故、五反

田遺跡の資料がA領域近くのかなり広い領域にバラツイていると判断すれば、製造した時代の違いか、青銅製作集団の違いを示唆するとも考えられる。その他銅滓などの資料は図6で示されるように“a”領域の中あるいはその近くに分布することから、弥生時代後期の資料であるとすれば、同位体比の結果と考古学的な考え方には矛盾はない。それ故、本資料はこれら一群の資料の一つとして理解でき、後期銅鐸あるいは広形銅戈、銅矛などを製作していた材料と似ていると推定される。

〈参考資料の概要〉

1、春日市須玖坂本遺跡および五反田遺跡出土試料^(*)13)

a. 須玖坂本遺跡

銅塊；工房跡と思われる所から出土

銅滓；4点。NO.7. 13. 41. 42。

ルツボ付着物；溝川区出土ルツボNO.2付着物

土器付着銅；土器NO.2付着銅鑄

時期は弥生時代後期と推定される。

b. 五反田遺跡

ルツボ表面の銅鑄；1号住居出土ルツボ付着銅結

ルツボ裏面の銅鑄；2号土塙墓出土ルツボ付着銅鑄

弥生時代中期前半以後の遺跡で、時代をはっきり特定できない。

2、春日市須玖須玖永田遺跡^(*)14)

出土状況については「須玖永田遺跡」春日市文化財調査報告書18 1987に詳しい。

3、龍野市北山遺跡出土試料^(*)15)

銅が付着した土器は龍野市揖西町の北山遺跡から出土した。遺構の中心年代は土器の型式から弥生時代中期後半と推定された。ただしこの土器片は包含層から発見されたため、この土器そのものの年代をはっきり特定できない。

試料となった銅はルツボと思われる土器片に付着していた銅鑄である。従って出土遺跡が青銅鋳造工房であった証拠として重要であるとされた。依頼された試料は微量であったため当研究室では化学組成の測定は行っていない。

《注および引用文献》

- * 1 私信：田中壽夫氏からの伝
- * 2 平尾良光・三浦定俊「法隆寺献納宝物 竜首水瓶の科学的調査」MUSEUM NO.457(p27~p34)1989
- * 3 平尾良光「古代日本の青銅器」M.A.C.サイエンス4(p22~p33)1990
- * 4 馬淵久夫・江本義理・門倉武夫・平尾良光・青木繁夫・二輪嘉六「島根県荒神谷遺跡出土銅劍・銅鋒・銅矛の化学的調査—非破壊分析と鉛同位体比測定—」保存科学30(p1~p19)1991
- * 5 内田哲男・平尾良光「ICP分析法による銅製考古学的資料分析の基礎的研究」保存科学30(p43~p50)1990
- * 6 鈴木章吾・平井昭司・平尾良光「機器中性子放射化分析による銅及び青銅器遺物中の多元素定量」考古学と自然科学24(p37~p45)1991
- * 7 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究」MUSEUM NO.370(p4~p10)1982a
- * 8 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比からみた銅鋒の原料」考古学雑誌68(p42~p62)1982b
- * 9 馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)」MUSEUM NO.382(p16~p26)1983
- * 10 馬淵久夫・平尾良光「東アジア鉄鉱石の同位体比—青銅器との関連を中心に—」考古学雑誌73(p199~p210)1987
- * 11 平尾良光・馬淵久夫「表面電離型固体質量分析計VG-Sectorの規格化について」保存科学28(p17~p24)1989
- * 12 平尾良光・榎本淳子「銅製品の科学的研究」「斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書」「分析と技術編」奈良県立橿原考古学研究所編(p27~p39)1995
- * 13 平尾良光・佐々木美喜・竹中みゆき「鉛同位体比法による春日市出土青銅器の研究」「春日市史(上)」春日市編(p860~p901)1995
- * 14 馬淵久夫・平尾良光「福岡県出土青銅器の鉛同位体比」考古学雑誌75-4(p385~p498)1990
- * 15 平尾良光・榎本淳子「龍野市で出土した土器付着銅および銅鋒の鉛同位体比」近日出版予定(春成秀爾氏への報告)

表1 土製取付蓋物の蛍光X線分析法で測定された元素のX線強度比

角 度 ^a	Yttrium II 鋼 鉛 ヒ素 水銀 金 亜鉛 銅 ニッケル 鉄 鋼強度 (13.5)(14.0)(16.0)(28.3)(34.0)(35.9)(36.9)(41.8)(45.0)(48.7)(57.5)										
	+	56	+	41	-	-	-	100	+	56	220
1.S-1付蓋物 (FLM044)	+	56	+	41	-	-	-	100	+	56	220
2.S-2付蓋物 (FLM045)	-	+	-	250	-	-	-	100	+	290	30

^a 1) 強度は角度45.0度におけるX線強度を100としたときの各元素の強度比^b 2) 2 #で表わされた各元素の極端X線の位置^c 3) FLMは当研究室の蛍光X線測定番号

表2 土製取付蓋物の測定された鉛同位体比値

	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{205}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{203}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$
	1. S-1・脚部付蓋物 (CP687)	17.770	15.581	38.484	0.8768
2. S-2・口縁部付蓋物 (CP688)	17.726	15.537	38.324	0.8765	2.1620
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

表3 萩野市北山遺跡および春日市須玖板本遺跡・五反田遺跡・須玖永田遺跡から出土した土器付蓋などの鉛同位体比

	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{205}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{203}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	文献
1) 萩野市資料 (AO2416)	17.743	15.562	38.437	0.8771	2.1663	15
2) 須玖板本調塊 (K-112)	17.718	15.526	38.358	0.8763	2.1649	13
3) 須玖板本no.13 (K-113)	17.747	15.553	38.440	0.8764	2.1660	13
4) 須玖板本no.7 (K-114)	17.737	15.541	38.399	0.8762	2.1649	13
5) 須玖板本no.41 (K-115)	17.730	15.540	38.391	0.8765	2.1653	13
6) 須玖板本no.42 (K-116)	17.704	15.530	38.334	0.8772	2.1653	13
7) 須玖板本溝III区 (K-120)	17.774	15.558	38.463	0.8753	2.1640	14
8) 須玖板本No.2 (K-121)	17.741	15.545	38.409	0.8762	2.1650	14
9) 五反田-1号住 (K-118)	17.527	15.508	38.342	0.8848	2.1876	13
10) 五反田-2号墓 (K-119)	17.915	15.563	38.691	0.8687	2.1597	13
11) 須玖永田 6-no.1 (F-118)	17.740	15.551	38.437	0.8766	2.1667	14
12) 須玖永田 7-no.2 (F-119)	17.754	15.558	38.482	0.8763	2.1675	14
13) 須玖永田 7号土壤 (F-120)	17.739	15.545	38.451	0.8763	2.1676	14
14) 須玖P-140 (F-121)	17.754	15.560	38.464	0.8764	2.1665	14
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006	

K・FおよびAO番号は研究室における測定番号

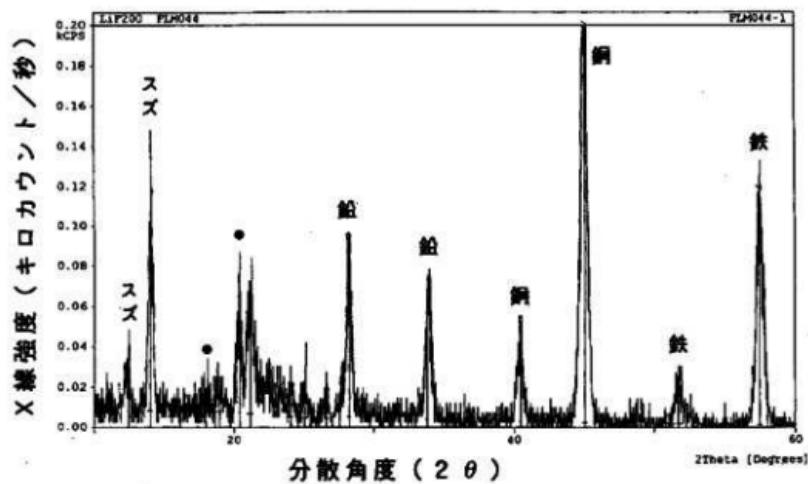


図1 土製取瓶S-1（脚部分）付着物の蛍光X線スペクトル図

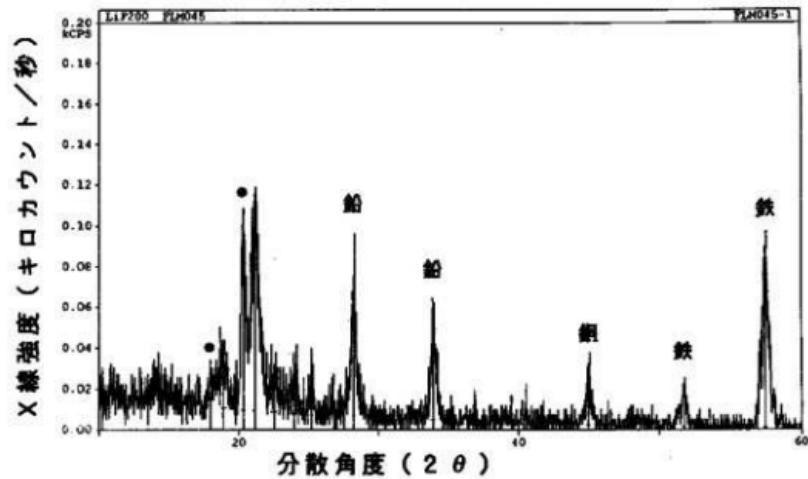


図2 土製取瓶S-2（口縁注口部片）付着物の蛍光X線スペクトル図

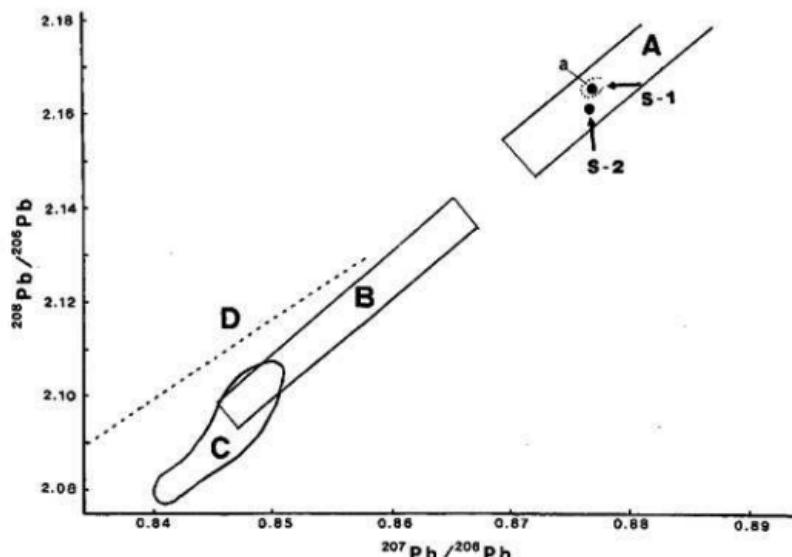


図3 土製取瓶付着物が示す鉛同位体比（A式図）

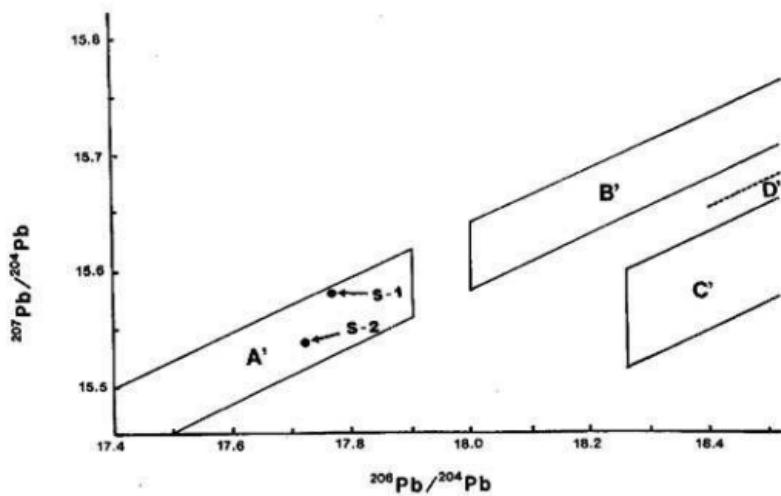


図4 土製取瓶付着物が示す鉛同位体比（B式図）

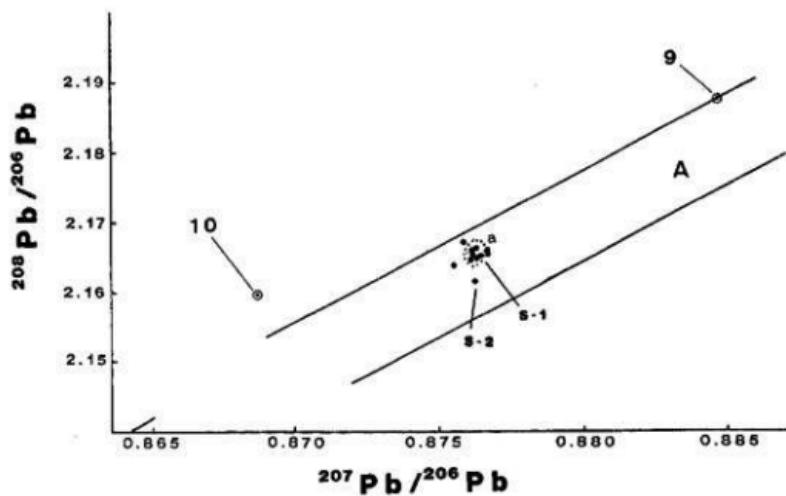


図5 土器付董銅などの鉛同位体比（その1全体図）

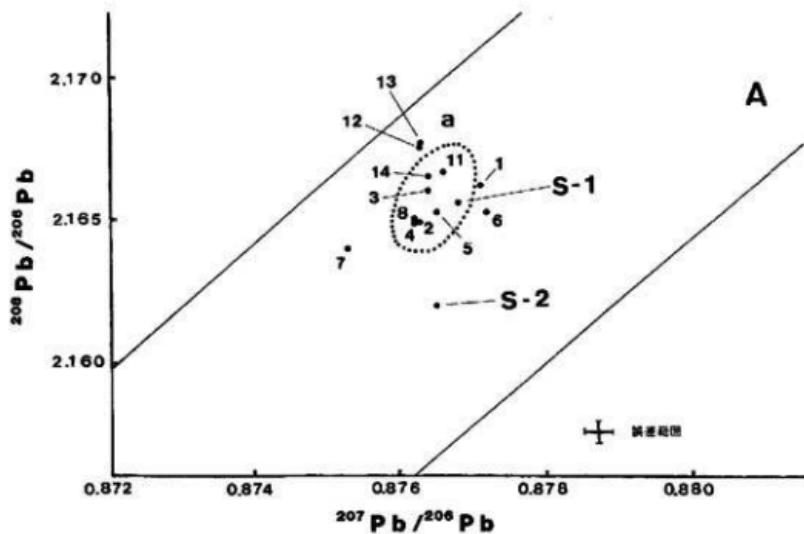


図6 土器付董銅などの鉛同位体比（その2拡大図）



写真 1

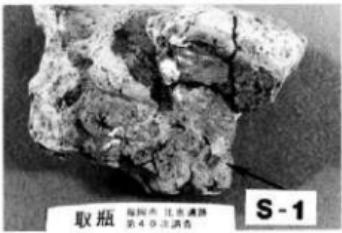


写真 6



写真 2

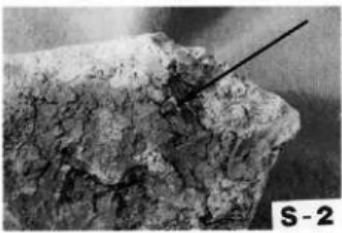


写真 7



写真 3



写真 8



写真 4

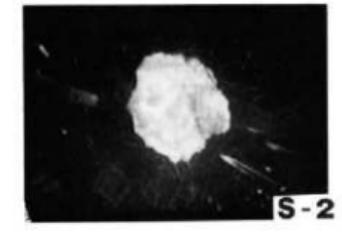


写真 9



写真 5

図版

PLATES



第40・42次調査出土鋳造関係遺物一括



(1) 第40次調査区
調査終了全景(北西から)



(2) 調査区北東部遺構分布状況(北西から)



(3) 調査区南西部包含層および溝SD01上部遺物出土状況(北から)



(1) 溝SD01検出状況
(北から)



(2) 溝SD01上部掘り下げ作業風景 (北から)



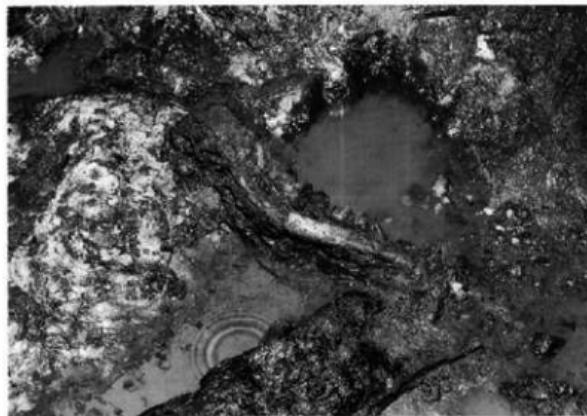
(3) 溝SD01南端部上層遺物出土状況 (西から)



(1) 溝SD01北側中層（黒色粘質土）遺物出土状況
(南から)



(2) 溝SD01土層断面
(北から)



(3) 溝SD01中層（黒色粘質土）歯骨（下顎骨）出土
状況（西から）



(1) 溝SD01中層（黒色粘質土）遺物出土状況
(西から)



(2) 溝SD01下部掘り下げ作業風景 (北から)



(3) 溝SD01黒色粘質土除去後床面状況 (北から)



(1) 溝SD48完掘状況
(北から)



(2) 溝SD48中央部土層断面
(北から)



(3) 調査区北東部井戸群およ
び溝分布状況 (北から)



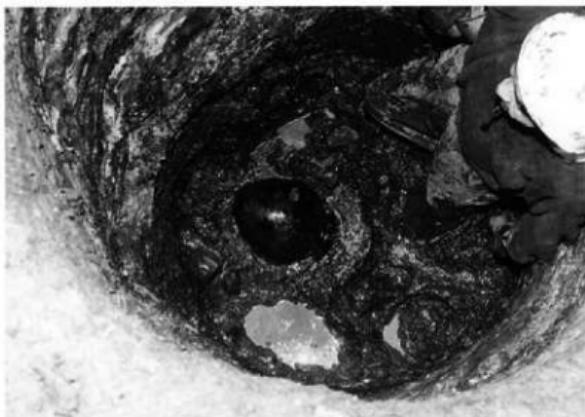
(1) 土壌SX31実掘状況
(南東から)



(2) 井戸SE23遺物出土状況
(西から)



(3) 井戸SE23実掘状況
(西から)



(1) 井戸SE118遺物出土状況
(北東から)



(2) 井戸SE118・112・113完
掘状況 (北東から)



(3) 井戸SE111完掘状況
(南東から)



(1) 井戸SE120完掘状況
(北東から)



(2) 柱穴SP32礎板出土状況（東から）



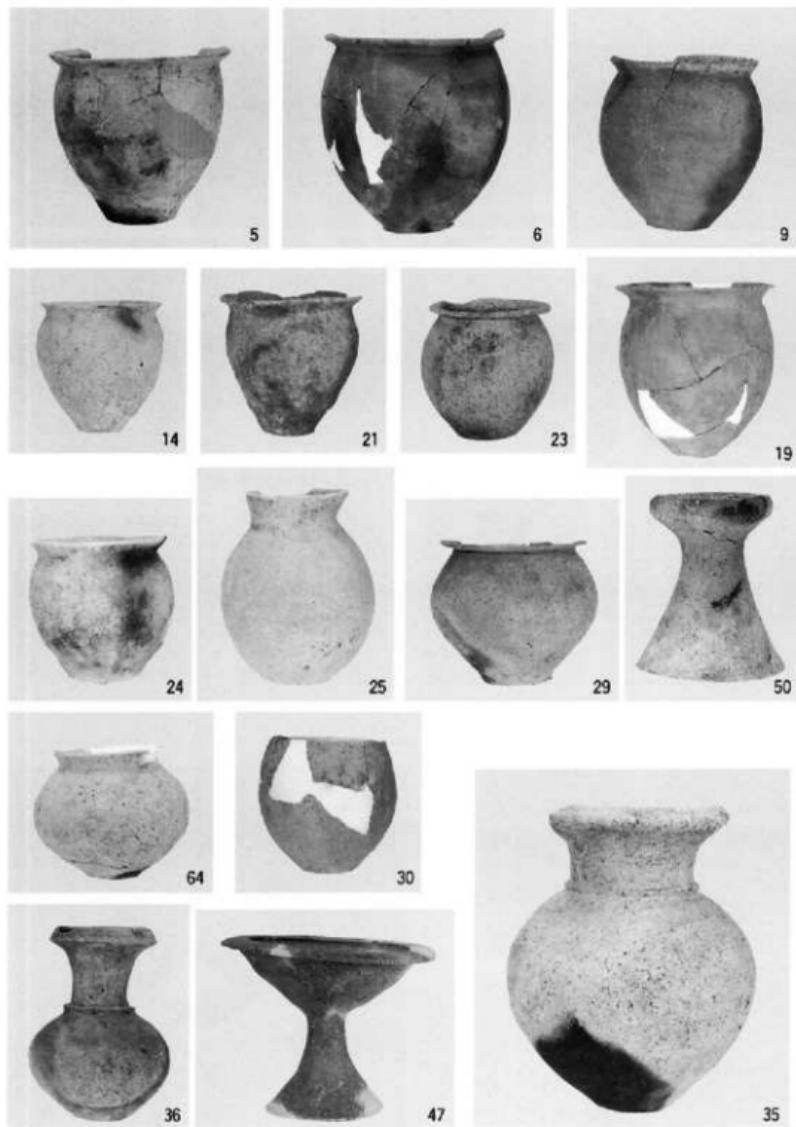
(3) 柱穴SP102礎板出土状況（東から）



(4) 柱穴SP101礎板出土状況（南から）



(5) 柱穴SP124礎板出土状況（東から）



第40次調査出土遺物 (1 / 6)



20



51



53



54



58



61



62



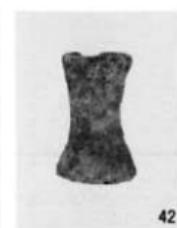
44



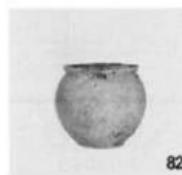
43



40



42



82



69



72



79



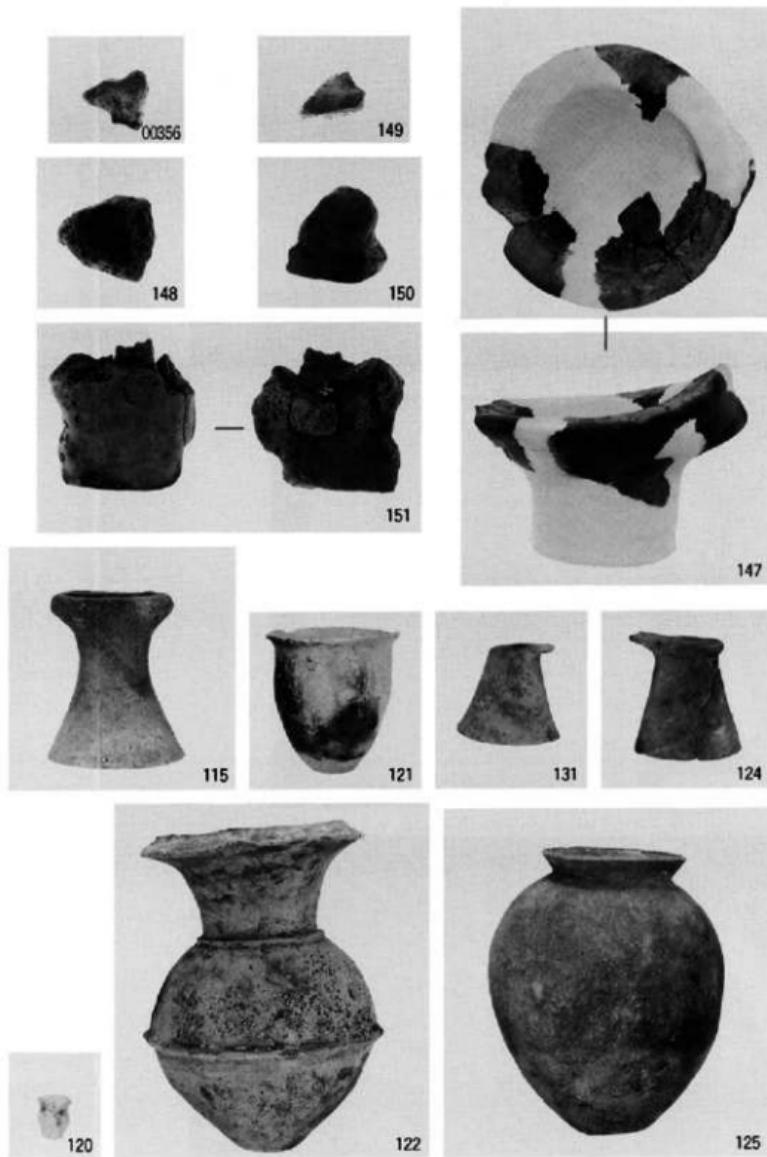
80



84



147



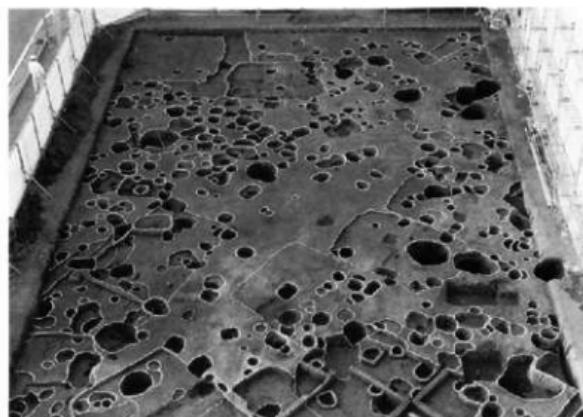
第40次調査出土遺物 (1 / 6)



(1) 第42次調査区調査前現況
遠景（北から）



(2) 調査終了全景(南東から)



(3) 調査区北側遭損分布状況
(南東から)



(1) 調査区中央部遺構分布状況
(南東から)



(2) 調査区南側遺構分布状況
(北から)



(3) 調査区中央部～東側遺構
分布状況 (南から)



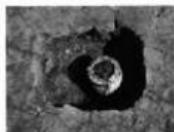
(1) 調査区中央部～西側遺構
分布状況（東から）



(2) 半穴住居跡SC63および
周辺遺構分布状況
(北東から)



(3) 半穴住居跡SC324掘り下
げ状況（北から）



(1) 柱穴SP361遺物出土状況（北西から）



(2)



(2) 壁穴住居跡SC231付設土
壙SX322遺物出土状況
(北東から)

(3) 壁穴住居跡SC324床面出
土広形銅矛鋲型出土状況
(西から)



(4) 壁穴住居跡SC169・207・
231完掘状況(西から)



(5) 壁穴住居跡SC169完掘状
況(南西から)



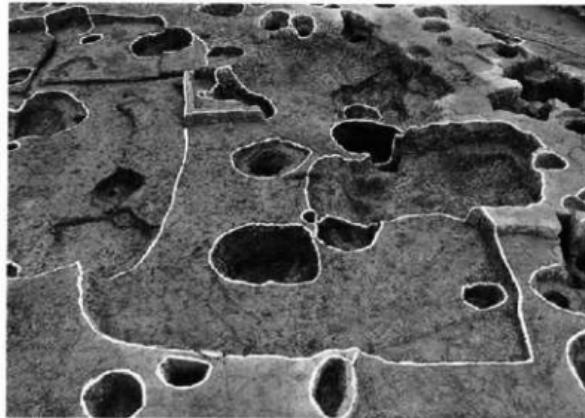
(1) 穂穴住居跡SC364・231・
324完掘状況（東から）

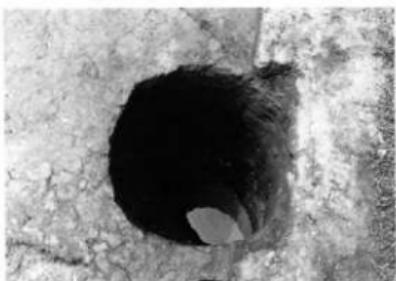


(2) 穂穴住居跡SC280・453、
土壤SX487・617検出状
況（西から）

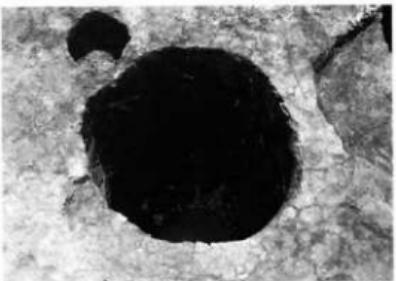


(3) 穂穴住居跡SC280完掘状
況（西から）

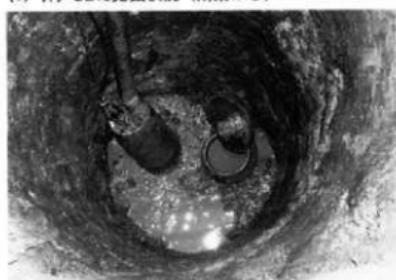




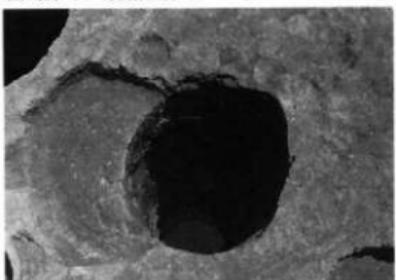
(1) 井戸SE15穴掘り状況 (南東から)



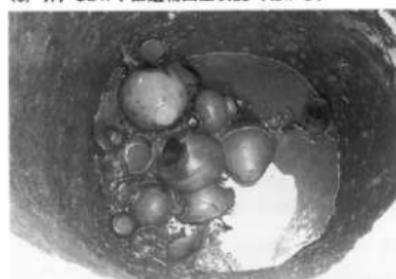
(2) 井戸SE16穴掘り状況 (北から)



(3) 井戸SE47下部遺物出土状況 (北から)



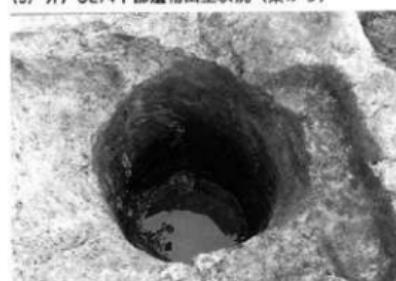
(4) 井戸SE47穴掘り状況 (西から)



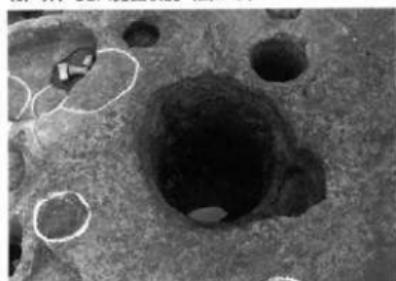
(5) 井戸SE74下部遺物出土状況 (東から)



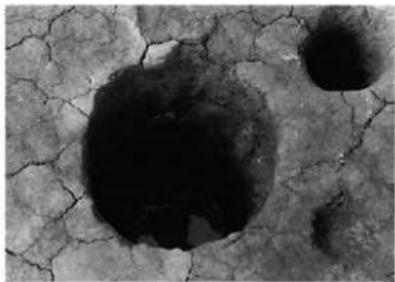
(6) 井戸SE74穴掘り状況 (西から)



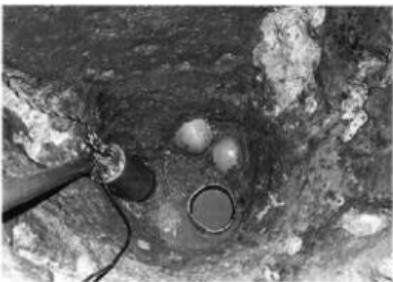
(7) 井戸SE123穴掘り状況 (西から)



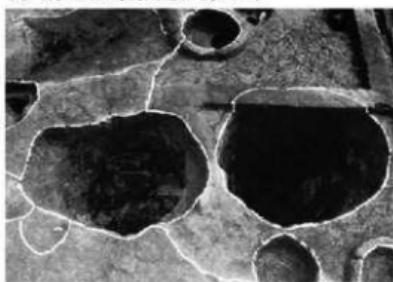
(8) 井戸SE162穴掘り状況、柱穴SP294遺物出土状況 (南から)



(1) 井戸SE202完掘状況 (東から)



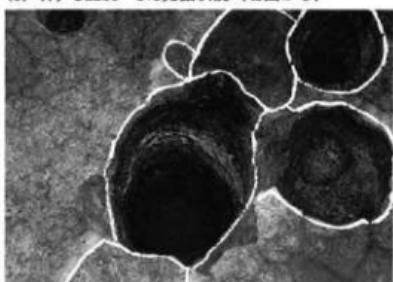
(2) 井戸SE315下部遺物出土状況 (北から)



(3) 井戸SE230・315完掘状況 (北西から)



(4) 井戸SE378完掘状況 (北から)



(5) 井戸SE448完掘状況 (東から)



(6) 井戸SE449完掘状況 (東から)



(7) 井戸SE500下部遺物出土状況 (南西から)



(8) 井戸SE500完掘状況 (西から)



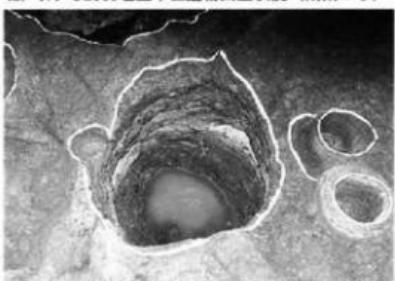
(1) 井戸SE489完掘状況（北から）



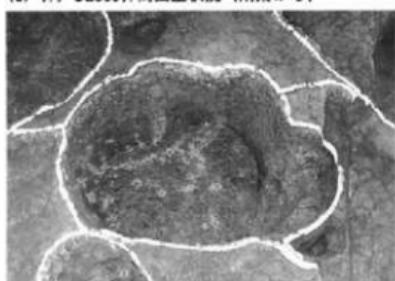
(2) 井戸SE506埋土中位遺物出土状況（南東から）



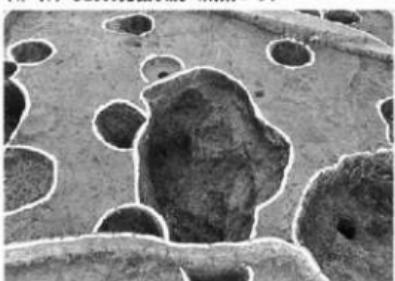
(3) 井戸SE506井筒出土状況（南東から）



(4) 井戸SE506完掘状況（南東から）



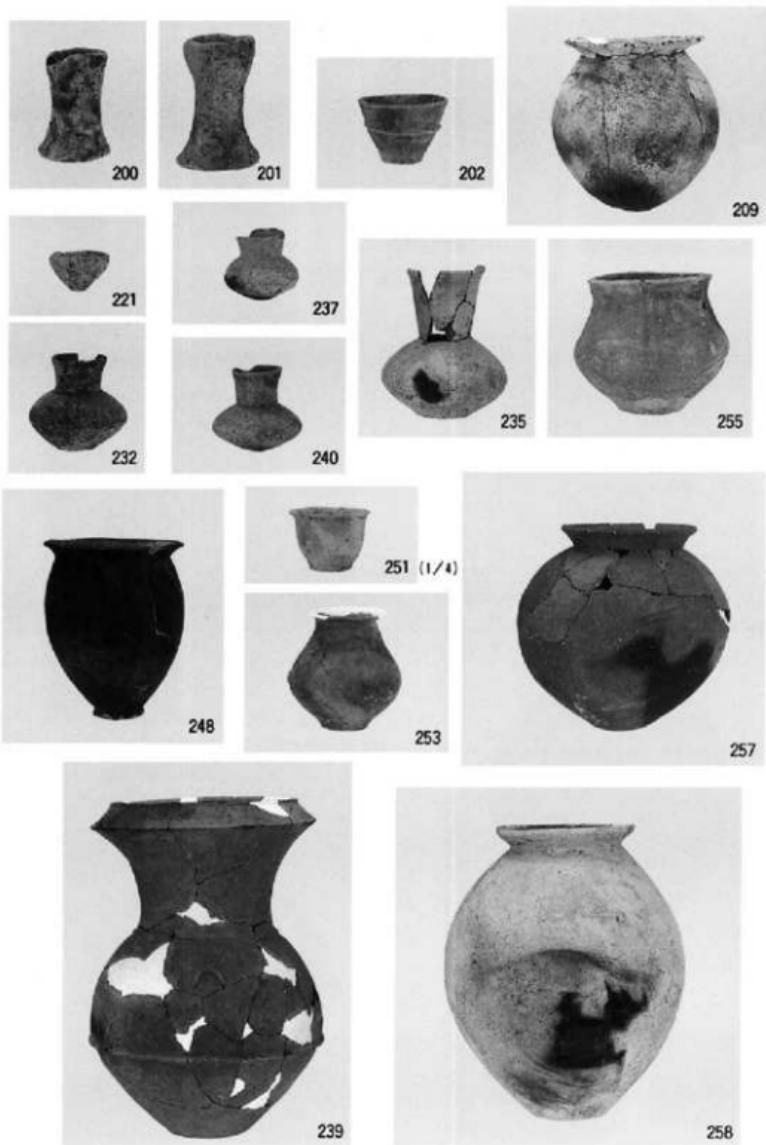
(5) 土壠SX420完掘状況（西南から）



(6) 土壠SX629完掘状況（南から）



(7) 溝SD441完掘状況（西から）





262



263



264



265



268



266



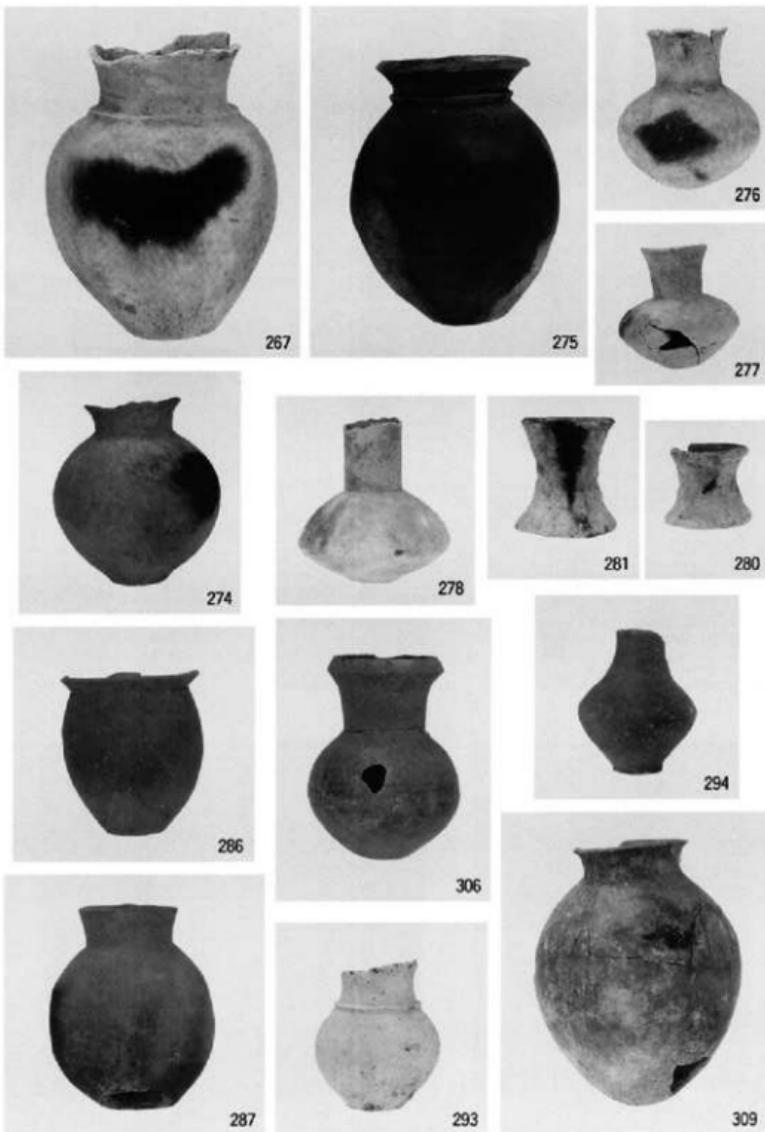
270



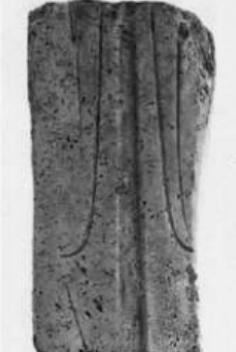
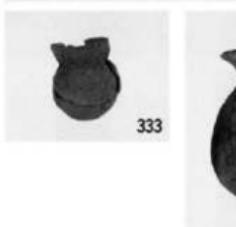
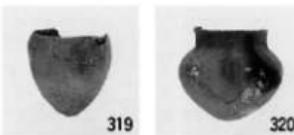
271



272



第42次調査出土遺物 (1 / 6)





(1) 第44次調査区
調査終了全景(南東から)



(2) 井戸SE134発掘状況(南から)



(3) 井戸SE138発掘状況(西から)



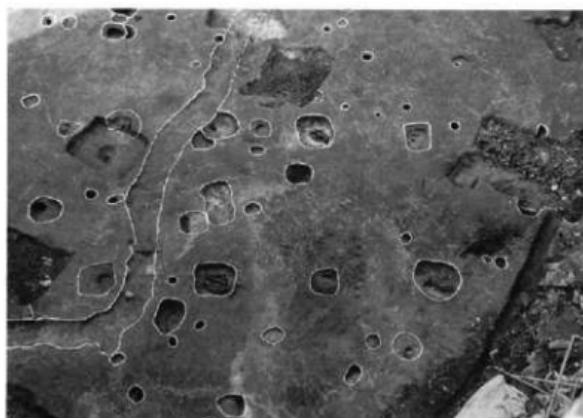
(4) 井戸SE143発掘状況(東から)



(5) 柱穴SP153発掘状況(東から)



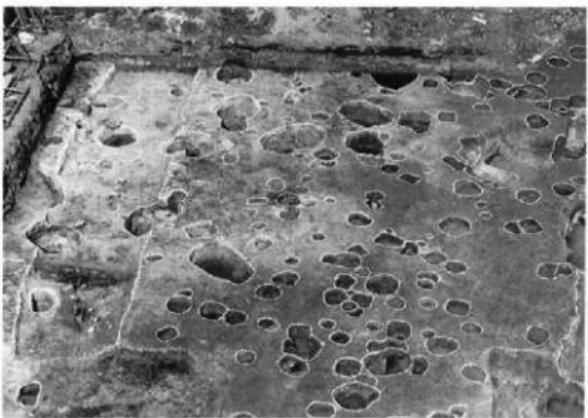
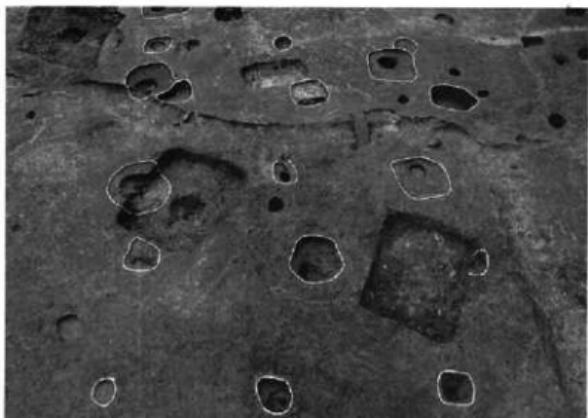
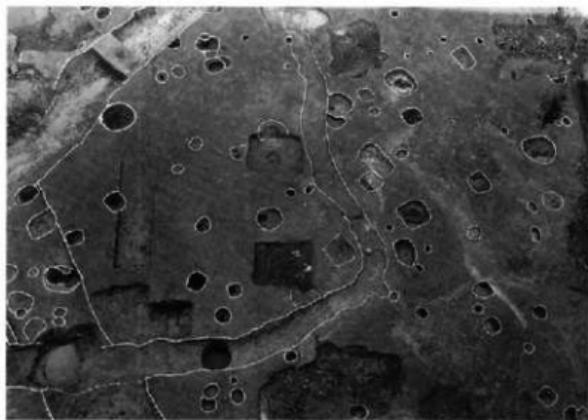
(1) 第48次調査区調査終了全
景（南東から）



(2) 挖立柱建物SB01完掘状
況（南から）



(3) 挖立柱建物SB01柱底跡
掘り下げ状況（西から）





(1) 据立柱建物SB04、柱穴
SP414・300・321完掘
状況（南から）



(2) 溝SD04、据立柱建物
SB03完掘状況
(西から)



(3) 溝SD04遺物出土状況
(北から)



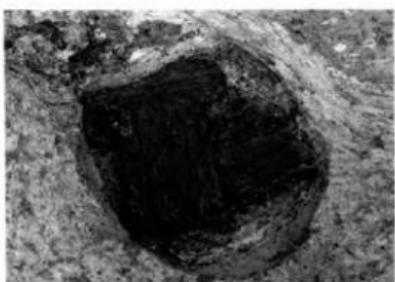
(1) 溝SD03西端部土層断面
(東から)



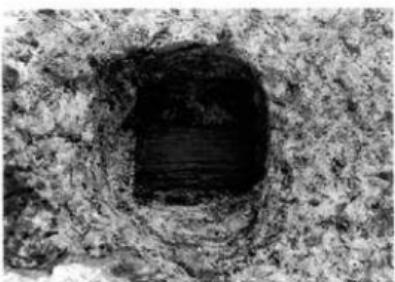
(2) 溝SD03南側中央部土層
断面 (西から。下部には
井戸SE10)



(3) 溝SD04完掘状況
(南西から)



(1) 柱穴SP06磁板出土状況（東から）



(2) 柱穴SP111磁板出土状況（西から）



(3) 柱穴SP133磁板出土状況（北西から）



(4) 柱穴SP145(55)柱根痕跡検出状況（南から）



(5) 柱穴SP147(54)柱根痕跡検出状況（南から）



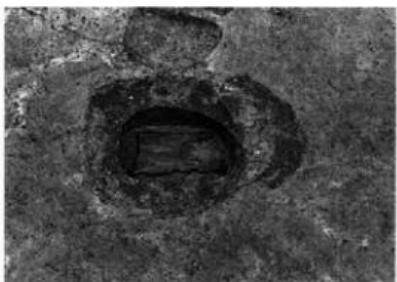
(6) 柱穴SP146(51)柱根痕跡検出状況（南西から）



(7) 柱穴SP134(27)磁板出土状況（北から）



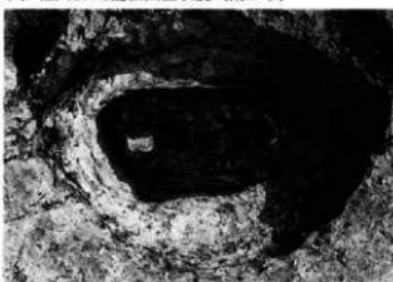
(8) 柱穴SP122(163)磁板出土状況（北から）



(1) 柱穴SP78磁板出土状況（南から）



(2) 柱穴SP144磁板出土状況（南から）



(3) 柱穴SP323磁板出土状況（北東から）



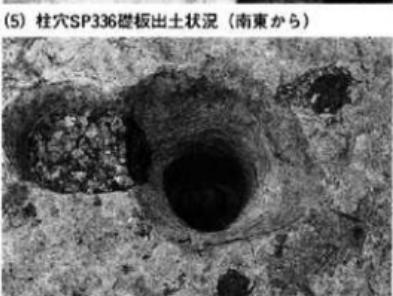
(4) 井戸SE309、柱穴SP308完掘状況（南東から）



(5) 柱穴SP336磁板出土状況（南東から）



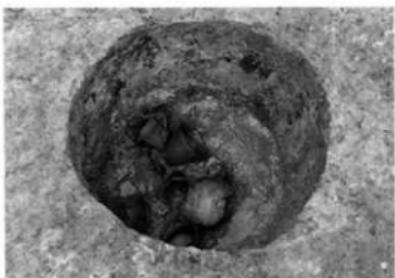
(6) 柱穴SP273・274遺物出土状況（南西から）



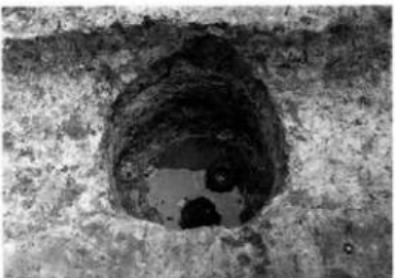
(7) 柱穴SP126(160)遺物出土状況（北から）



(8) 井戸SE103遺物出土状況（北西から）



(1) 井戸SE09底部遺物出土状況(南東から)



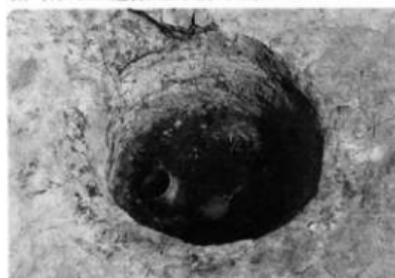
(2) 井戸SE10完掘状況(南から)



(3) 井戸SE20遺物出土状況(北東から)



(4) 井戸SE103底部遺物出土状況(南東から)



(5) 井戸SE105完掘状況(北東から)



(6) 井戸SE255・269遺物出土状況(西から)



(7) 井戸SE116上部遺物出土状況(南西から)



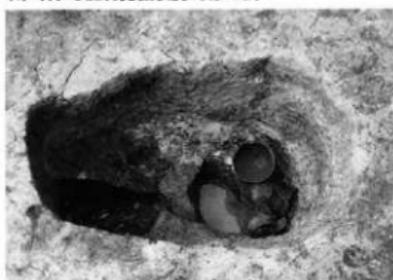
(8) 井戸SE116完掘状況(南東から)



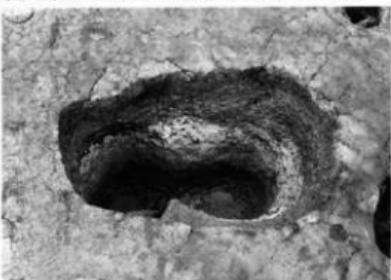
(1) 井戸SE233完掘状況（北から）



(2) 井戸SE236中～下部遺物出土状況（南から）



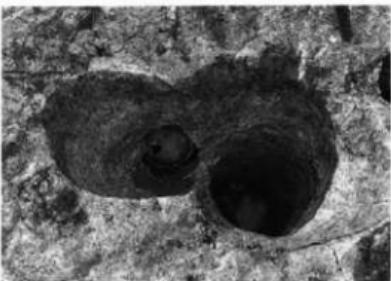
(3) 井戸SE244遺物出土状況（南西から）



(4) 井戸SE244・245完掘状況（東から）



(5) 井戸SE253完掘状況（北から）



(6) 井戸SE255・269完掘状況（東から）



(7) 井戸SE269周辺作業風景（北から）



(8) 井戸SE325完掘状況（南西から）



(1) 井戸SE337完掘状況（南西から）



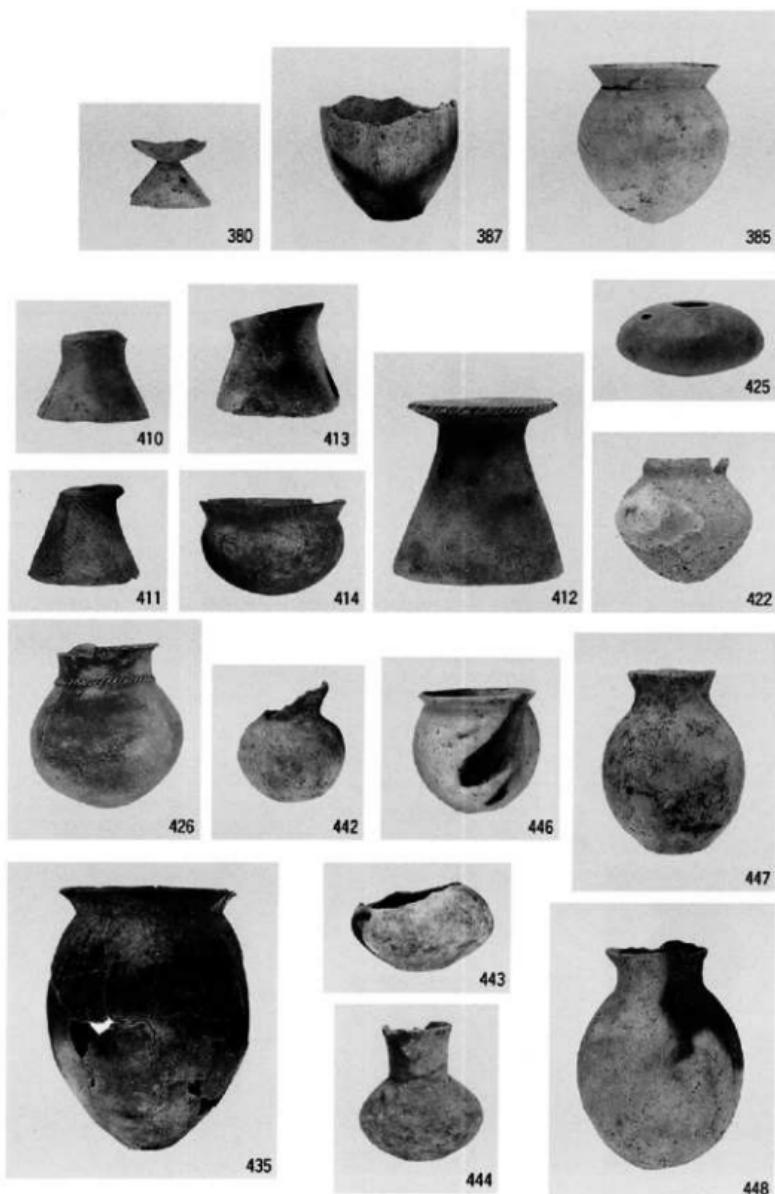
(2) 井戸SE340下部遺物出土状況(南西から)



(3) 井戸SE340完掘状況（南西から）



(4) 第48次調査作業風景（西から）



第44・48次調査出土遺物（1／6）（380・385・387は44次出土、他は48次）



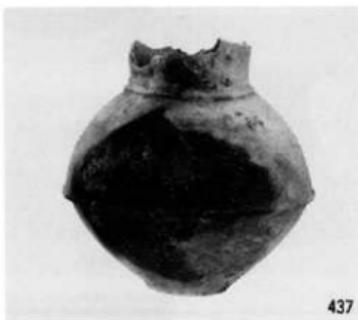
449



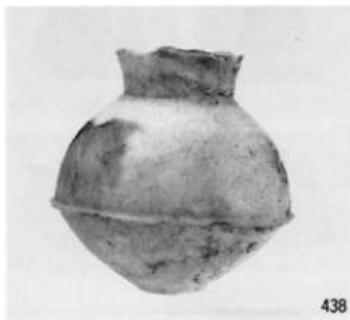
450



451



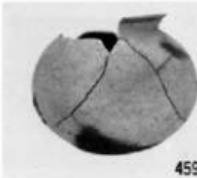
437



438



456



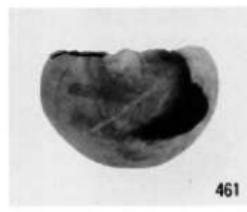
459



460



462



461



463



465



473



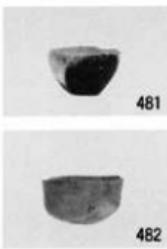
468



476



479



481



482



495



第48次調査作業風景

第48次調査出土遺物 (1 / 6)

比恵遺跡13

-比恵遺跡群第40・42・44・48次調査の報告-
福岡市埋蔵文化財調査報告書第368集

平成6年(1994) 3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社ミドリ印刷
福岡市博多区西月隈1丁目122-4